

教育関係共同利用拠点

「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発」

*Joint Educational Development Center "Excellence in University Learning and Teaching"*

# TOHOKU U. JUNIOR FACULTY PROGRAM PFFP/NFP

## 2016 年度報告書 東北大学ジュニアファカルティ・プログラム 大学教員準備プログラム / 新任教員プログラム

*Tohoku University Junior Faculty Program Annual Report 2016  
Preparing Future Faculty Program (PFFP) / New Faculty Program (NFP)*

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター  
Center for Professional Development (CPD)  
Institute for Excellence in Higher Education (IEHE)  
Tohoku University







## 第1部 本編目次

1. 東北大学ジュニアファカルティ・プログラムの概要.....	3
1.1. プログラム開発の背景と目的.....	3
1.2. プログラムのコンセプト.....	3
1.3. プログラムの達成目標.....	4
2. プログラムの開発と実施.....	4
2.1. 2016年度のプログラム.....	4
2.1.1. 2つのコースとプログラム内容.....	4
2.1.2. 前年度からの課題と本年度における対応.....	6
2.1.3. 前年度以前からの課題と本年度における対応.....	8
2.1.4. その他の開発事項.....	10
2.2. 参加者募集方法.....	12
2.3. 先達教員制度.....	12
2.4. 広報.....	12
2.5. プログラム運営体制.....	14
2.6. プログラム参加者.....	14
2.6.1. 2016年度の参加者.....	14
2.6.2. これまでの参加者に関するデータ.....	16
2.7. 各活動の内容と参加者の声.....	18
2.8. 全国プログラムユーザ会議の実施.....	18
2.8.1. ユーザ会議実施の経緯.....	18
2.8.2. 効果検証に向けての先行研究調査.....	18
2.8.3. プログラムユーザ会議の内容.....	20
3. プログラムの評価と考察.....	23
3.1. 評価方法.....	23
3.2. 先達教員による評価.....	23
3.3. PFFP/NFP ショートコース参加者による評価.....	24
3.4. PFFP/NFP フルコース参加者による評価.....	25
3.5. 考察.....	26
4. 今後の課題.....	27



## 本報告書の構成

本報告書では、東北大学 高度教養教育・学生支援機構による教育関係共同利用拠点事業「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」(以下、「拠点事業」)における「東北大学ジュニアファカルティ・プログラム」として、2016年度に実施したプログラム開発及び実施について報告する。本報告書は2部構成となっている。第1部は2016年度の成果報告とし、「2016年度東北大学 大学教員準備プログラム, Tohoku U. PFFP (Preparing Future Faculty Program)」および「2016年度東北大学 新任教員プログラム, Tohoku U. NFP (New Faculty Program)」に関する報告を行い、第2部は資料編とする。

## 第1部：2016年度 成果報告

### 1. 東北大学ジュニアファカルティ・プログラムの概要

#### 1.1. プログラム開発の背景と目的

東北大学 高度教養教育・学生支援機構は、2010年に文部科学省の教育関係共同利用拠点の認定を受け、「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」として、大学教員のライフ・ステージに対応した職能開発や、生涯にわたる専門性発達の解明、組織的な専門性開発の取り組みを重視し、各種職能開発プログラムを開発・提供してきた[1~12]。2015年度からは、第2期教育関係共同利用拠点事業「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発—」が認定され、継続してプログラム開発・提供を実施している。

本報告書では、それらの中から、ジュニアファカルティ向けのプログラムとして実施している、将来の大学教員を目指す大学院生、博士研究員向けの「東北大学 大学教員準備プログラム (Tohoku U. PFFP)」, および新任教員向けの「東北大学 新任教員プログラム (Tohoku U. NFP)」について報告する。これらふたつのプログラムでは、現在の大学院教育が研究能力の訓練を重視し、教育能力やその他大学教員に必要とされる能力を育成する機会を必ずしも有していない現状に対し、これから教員を目指そうとする大学院生や、初期キャリアにいる新任教員らが、大学教授職について理解し、研究能力とともに基礎的な教育能力を備えた大学教員としてスムーズにキャリアをスタートできる下地作りの場の提供を目的としている。このふたつのプログラム (PFFP/NFP) は、2015年度からの第2期拠点事業においては「ジュニアファカルティ・プログラム (JFP)」と位置付けられ、大学教員を目指す大学院生と新任教員とがともに学びあう環境が互いの教育観の醸成やロールモデルの獲得に効果的であることから、合同で実施している。

第1期では、諸外国の先行事例に学びつつ、日本型プログラムの設計・開発に取り組み、第2期(2015年度~)は、参加者の全国公募によるプログラムの公開、他大学との連携や協力関係の構築、および有効性評価の指標開発などに着手している。

#### 1.2. プログラムのコンセプト

ジュニアファカルティ・プログラムのコンセプトを図1に示す。当プログラムは、大学教員に求められる能力やスキルについて実践的に学ぶ機会を提供することで、参加者のスムーズかつ充実した初期キャリア遂行の実現を目指している。

本プログラムでは、大学教員の役割や仕事、実態について理解する「仕事を理解する」、授業運営やカリキュラム、シラバスについての基礎を理解する「基礎知識を得る」、マイクロティーチングや

模擬授業を通して「実践力を磨く」、他大学の事例や異分野の授業参観、異分野の参加者との対話を通して「比較の目を育てる」、他の参加者とのディスカッションやグループワークによって「同僚とつながる」、先輩教員との懇談やコンサルテーション、授業参観とそれに引き続く討議による「先達から学ぶ」、そして、プログラム期間中を通してリフレクションを行い、ジャーナル執筆によってそれを外化することで「自己省察力を養う」から構成される。

## 図 1 プログラムのコンセプト

### 1.3. プログラムの達成目標

ジュニアファカルティ・プログラムの達成目標は以下の通りである。

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができる
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語るができる
- 異分野の研究や教育文化を知る

## 2. プログラムの開発と実施

### 2.1. 2016 年度のプログラム

#### 2.1.1. 2つのコースとプログラム内容

昨年 2015 年度から引き続き、プログラムの内容すべてに参加するフルコースと、まずは教育実践に焦点をあてた内容のみを受講するショートコースの両コースを実施し、参加者を全国から募った。表 1 にプログラムの内容を示す。2015 年度からの大きな変更点としては、ショートコースにも「リフレクションとは (e-learning)」と「リフレクティブジャーナルの作成」を導入した点である。この経緯については 2.1.2 で詳述する。

表1 2016年度プログラムの内容

活動名	内容	時間/頻度	フル	ショート
事前学習 (e-learning)	プログラムの目的, 内容について事前に web 上で各自動画を視聴し理解を深める	約1時間	○	○
オリエンテーション	参加者顔合わせ, プログラムの目的, 大学教育の課題と教員の役割に関する講義, 比較教育学の視点を組み入れたワークショップ	約6時間	○	○
リフレクションとは (e-learning)	リフレクションの理論と実践方法について web 上で動画を視聴して理解を深める	約1時間	○	○*
授業デザインとシラバス作成	大学の授業における目標・活動・評価について, 事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える	4時間	○	○
教授=学習に関するセミナー	認知科学の側面から, 人間の情報処理や理解に関する理論やモデルを学び, 授業や学習のデザインに活かせる知見を得る	3時間×2回	○	○
授業参観	授業経験豊かな教員の授業を参観し, 授業後のディスカッションを通して, 教育活動について考えるヒントを得る	1人当たり最低3件	○	○
マイクロティーチング	一人7分間のティーチングの実践とファシリテーター, 他の参加者からのフィードバック, および授業リフレクションの実施	約4時間	○	
模擬授業	一人17分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック, および授業リフレクションの実施	約5時間	○	
研究指導法に関するセミナー	研究室運営や, 学生を対象とした研究指導に関する手法や留意点をコーチングの技法を通して学ぶ	約3時間	○	
諸外国の高等教育を知る	アメリカの高等教育について学び, 海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションを通して, 日本の高等教育との比較を行う	約3時間	オプション	
国内他大学訪問調査	国内の他大学 (主に私立大学) を訪問し, キャンパス見学や授業参観を行い, 学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	3日間	オプション	
東北大学図書館ツアー	東北大学の図書館について, その設計指針や利用状況の講義を受け, 施設見学を行う	2日間	オプション	
海外他大学訪問調査	海外の大学 (カリフォルニア大学バークレー校) にて, キャンパス見学や授業参観を行い, 学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	5日間	オプション	
先達教員による個人コンサルテーション	先達教員 (経験豊富な先輩教員) による個人コンサルテーションとグループディスカッション	半日	○	
リフレクティブ・ジャーナルの作成	各セミナー後に自身の学びをふり返り, これまでの自身の経験や価値観と結び付けながら教育観を言語化する	各セミナー後, 毎回	○	○*
課題論文	「学生にとって, 大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また, そういった学習経験を実現するために, 大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」というテーマで執筆する	4,000字	○	
成果発表	プログラムで学んだことを発表し, OB/OG や先達らとの質疑応答を行い, 総括する	3時間	○	
受講証明書				○
修了証			○	

「\*」は2016年度プログラムで新たに取り入れた内容を示す。

## 2.1.2. 前年度からの課題と本年度における対応

前年度（2015年度）の活動の評価より、下記の課題が明らかになっている[12]。

- (1) 各種ガイド、資料提供のタイミングと活用の呼びかけにおける工夫
- (2) ショートコースにおけるリフレクティブジャーナルの導入
- (3) 先達コンサルテーションの実施方法の改善
- (4) 授業参観の実施方法の改善
- (5) マイクロティーチング／模擬授業の実施方法の改善

これらの課題の詳細と、それぞれに対する2016年度における取り組みの内容を下記に示す。

### (1) 各種ガイド、資料提供のタイミングと活用の呼びかけにおける工夫

2015年度のプログラム評価では、以下の課題が指摘されていた[12]。

（これまでは）ガイドや資料の提供を7月のオリエンテーション時に一括して行っていたが、これらの資料が3月までのプログラム提供期間において有効に活用されていない実態が参加者アンケートの結果から明らかになっている。2016年度は、資料の一括提供を見直し、必要な時期に必要な情報提供を行うとともに、適時どの資料のどこを参照すべきかについてのアナウンスを意識的に行っていくことが必要であるといえる。また、毎年「こんなセミナーがあったらよい」「こんなことを教えてもらえれば良かった」という内容が増加の一途をたどっており、そのすべてを本プログラム内だけでカバーすることが難しくなっている。過年度からの継続的な検討事項であるが、単発のPDセミナーの案内や、ISTU上での動画による情報提供などを組み合わせて、効果的かつ効率的な支援を行っていく必要がある。

これに対し2016年度には、オリエンテーション時における各種ガイドと参考資料の一括配布を廃止し、ガイドが必要になる時期にそれぞれを配布することにした。これにより、オリエンテーション時の配布物は、①プログラム（資料編A-1）、②リフレクティブジャーナル・ガイド2016（資料編A-2）、③先輩の知恵（資料編A-3）、④IDE現代の高等教育、⑤歴史の中の東北大学、⑥PDブックレットVol.6としたうえで、そのほかの資料については、使用のタイミングに合わせて逐次参加者に配布した。したがって、マイクロティーチングの実施2か月前を目途に、マイクロティーチング・ガイド（資料編A-4）、海外他大学訪問調査前に東北大学概要、成果報告会時（ショートコースは最後の対面でのセミナー時）に推薦図書リスト（資料編A-5）をそれぞれ配布した。

また、より多様な専門性開発セミナーへの参加ニーズにこたえるため、当プログラム参加者にも有用であると思われるPDセミナーの開催広報時に、メールにて案内を行った。この結果、例えば、フルコースのみを対象としているコーチングのセミナーに、ショートコース参加者6名が出席するなどといった展開が観察された。

### (2) ショートコースにおけるリフレクティブジャーナルの導入

2015年度のプログラム評価では、以下のような課題が指摘されていた[12]。

（複数のショートコース参加者から、ショートコースにおけるリフレクティブジャーナルの導入について要望があった。）特に、「ショートコースでは基本的にリフレクティブジャーナルの提出が不要でしたが、セミナーに参加できずISTUでの受講をした際に一度書いてみて、書かないのと書くのでは大違いだと気づきました。ショートコースであっても、分量半分～4分の1（500字～1000字）等でよいので何か書くことを必須または強く推奨するのが良いと感じました」と

いう指摘にもあるように、実際に書いてみた参加者がその意義を強く感じていることから、ショートコースにリフレクティブジャーナルを導入する方向で検討を進めていく必要がある。

これに対し 2016 年度には、ショートコース参加者にもリフレクティブジャーナルの執筆を課すこととした。また、内容についてはこれまでのフルコースでの実践と同様に、字数の設定などはせずに、各参加者が十分だと思える分量を書くよう伝えるにとどめた。なお、ジャーナルの提出はメールに添付で行い、担当者が持ち回りで短いフィードバックのコメントを返信し、リフレクティブジャーナル執筆のモチベーションと、リフレクションの深まりを支援するよう努めた。

### (3) 先達コンサルテーションの実施方法の改善

2015 年度のプログラム評価では、以下の課題が指摘されていた[12]。

「先達コンサルテーションの実施方法の改善」については、先達教員、参加者の双方から時間の設定について要望が寄せられていることから、一人あたりにかける時間を延長するなどの方法を検討する必要がある。また、先達教員としては事前に参加者からの質問内容がわかった方がよいとの要望が挙げられていることから、この実現可能性についても検討したい。例年、先達コンサルテーションは海外他大学訪問調査からあまり日をおかずに実施していること、急な参加者や先達の欠席が生じると、面談相手を組み直さなくてはならないなどの理由から、質問の事前提出までは求めていなかった。どのように実現できるか考える必要がある。

これに対し 2016 年度には、これまで 20 分間としていた先達一人当たりとの面談の時間を延長し、30 分とした。また、2015 年度は参加者一人当たりにつき 5 名としていた面談数を 4 名とし、じっくり話ができるように設定した。

なお、質問項目の事前提出は、2016 年度も海外他大学訪問調査等のスケジュールの関係から、十分な余裕が持てずに実施することができなかった。先達に対しては、2015 年度に導入した「カルテ」（面談相手のプロフィールとリフレクティブジャーナルの抜粋をまとめたもの）を事前送付するとともに、参加者には予めどの先達との面談予定かについてスケジュールを送付し、各自の問題意識を明確にして、具体的な質問項目を準備したうえで臨むように繰り返しアナウンスした。

### (4) 授業参観の実施方法の改善

2015 年度のプログラム評価では、以下の課題が指摘されていた[12]。

「授業参観の実施方法の改善」については、先達教員から、授業手法だけではなくカリキュラム上の位置づけなども議論できるとよい、との提案があったことから、参観後のディスカッション時のファシリテーション時に工夫の余地があるといえる。ファシリテーターがこうした点についても議論が及ぶようにサポートすることを意識したい。また、授業参観の対象が他大学にも拡大できていることから、多忙な中、参観に協力いただいている教員への感謝を忘れずに、適切な態度で参観に臨むよう、参加者に周知を徹底する必要もあるといえる。

これに対し 2016 年度には、授業参観の引率担当者がディスカッションの冒頭でカリキュラム上の位置づけについても確認する時間をとった。また、ディスカッション中にも適時、議論のファシリテーションを実施した。

## (5) マイクロティーチング／模擬授業の実施方法の改善

2015年度のプログラム評価では、以下の課題が指摘されていた[12]。

「マイクロティーチング／模擬授業の実施方法の改善」については、主に先達教員から寄せられている提案内容を中心に検討を進めたい。具体的には、これまで想定していた「授業1回分(90分間)を設計した後、そのうちの一部をマイクロティーチング／模擬授業として実践する」という流れが実際には踏襲されていない場合もあったことを踏まえ、ティーチングプランの様式を90分間のものに変更し、授業全体の流れを先達教員と共有できるようにすることが考えられる。また、プログラムOB/OGなどの協力により、学習者役を別におき、先達教員にはコメントのフィードバックに集中してもらうという方法も検討したい。

これに対し2016年度には、マイクロティーチング・ガイド(資料編A-4)に90分の授業案の例を掲載し、これを参考に指定のフォーマットに90分全体の授業案を作成したうえで、そのうちのどの部分をマイクロティーチング／模擬授業で実施するのかをハイライトする形式に変更した。

また、先達にはフィードバックの提供に集中してもらうため、学習者役は参加者のみが担うこととし、質疑やワークは参加者のみが行うかたちをとった。

### 2.1.3. 前年度以前からの課題と本年度における対応

前年度以前からの課題について、2016年度には引き続き下記に示す対応、改善を実施した。

#### (1) 東北大学以外の授業参観の実現

2014年度のプログラム評価で指摘されていた、東北大学以外での授業参観の必要性については、2015年度時点で実現できた東北工業大学での授業参観に加えて、2016年度はプログラム修了生の協力を得て、東北医科薬科大学でも実現することができた。

また、引き続き東北工業大学 教職課程センターの中島夏子准教授のご協力のもと、東北工業大学での授業参観についても新たな協力教員を得ることができた。これに関連して、昨年度に引き続き、副学長とFD委員の先生方への表敬訪問を行った。訪問の詳細は表2に示すとおりである。

表2 東北工業大学への表敬訪問

日時	2016年6月17日(金) 13:00~14:00
場所	八木山キャンパス1号館4階第2会議室
訪問先	渡邊 浩文 副学長・FD委員長 石川 善美 副学長・FD委員
訪問者	羽田貴史 大学教育支援センター長 大森不二雄 大学教育支援センター副センター長 杉本和弘 大学教育支援センター 教授 岡田有司 大学教育支援センター 准教授 今野文子 大学教育支援センター 講師



表3 東北大学外での授業参観

	授業名	担当教員	参観日・講義会場
1	デジタル信号処理 (対象：情報通信工学科3年生)	木戸博 先生 東北工業大学	2016.10.12 (水) 2限 東北工業大学 八木山キャンパス 131 教室
2	日本語表現 (対象：知能エレクトロニクス学科)	高橋 秀太郎 先生 東北工業大学	2016.10.13 (木) 4限 東北工業大学 八木山キャンパス 121 教室
3	市民と政治 (対象：建築学科3年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.11.10 (木) 4限 東北工業大学 長町キャンパス R129
4	社会の仕組みⅡ (対象：薬学部)	佐俣 紀仁 先生 東北医科薬科大学	2016.11.25 (金) 11:40-12:50 東北医科薬科大学 小松島キャンパス 203
5	市民と政治 (対象：建築学科3年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.12.22 (木) 4限 東北工業大学 長町キャンパス R129

また、授業参観の対象とした東北大学外の授業を表3に示す。東北工業大学の授業4件に加えて、NFP2012 修了生の佐俣紀仁さんの協力により、東北医科薬科大学における授業参観1件を実施することができた。これら4件の授業をのべ15名（OB/OG：1名、先達：1名含む）が参観した。

## (2) OB/OG との継続的な関係作り

2014年度のプログラム評価で指摘された、プログラム修了生の継続的な参画の呼びかけを2016年度にも引き続き実施した。他大学調査訪問のファシリテーターについては、2016年度からプログラム担当教員が一名増員（岡田有司准教授）されたことから、プログラム修了生には依頼せず、教員2名が引率する形式をとった。

2014年度に始めたOB/OG通信（メールでの定期的なプログラム状況報告と関連セミナーの告知）の配信、各セミナー／授業参観等へのOB/OGへの参加呼びかけについては2016年度も引き続き実施した。2016年度のOB/OG通信は10通にわたり、通算で35号となった（資料編A-6）（2015年度は年間13通、通算で25号）。

各セミナー等へのOB/OGの参加の様子について表4に示す。オリエンテーション後の懇親会と、成果報告会後の懇親会は、OB/OGらにとっての「同窓会」としても位置付けた。このほかにも、PDセミナー（拠点事業で実施している単発の専門性開発セミナー）へもOB/OGの参加があり、継続的な専門性開発に取り組んでいる様子が見受けられた。

また2016年度には、これまでのプログラム修了生を追跡調査し、遅効性のプログラムの有効性評価（専門性開発プログラムの有効性評価指標の開発）を目的として、「全国プログラムユーズ会議」を実施した。これについては2.8.で詳述する。なお、この全国プログラムユーズ会議において修了年度を超えた参加者の交流の機会が生まれたことをきっかけに、PFFP2011年度修了生の森新之介さんを発起人として、関東圏に在住する参加者を中心とした「東京同門会」が発足し、Facebook上のグループにおいて17人のメンバーが集まった。うち5名により、2016年2月22日に東京での顔合わせの会が開かれた。

表4 OB/OGの参加状況

	セミナー名	日時		2011	2012	2013	2014	2015	合計
1	オリエンテーション後の懇親会	2016.7.18 (土) 19時～	PFFP			1	1		2
			NFP					1	1
2	授業参観	随時	PFFP				1		1
			NFP	2					2
3	院生指導法に関するセミナー	2016.12.9 (金) 13:00-16:10	PFFP					1	1
			NFP	1		1	2	1	5
4	東北大学図書館ツアー	2017.2.24 (木) 10:00-12:00	PFFP						0
			NFP				2		2
5	海外他大学訪問調査	2017.2.27(日)～3.5(日)	参加者としてPFFP2015:1名						
6	成果報告会	2016.3.23 (木) 13:00-16:00	PFFP					1	1
			NFP				2	1	3
7	成果報告会後の懇親会	2016.3.23 (木) 19:00～	PFFP	1				1	2
			NFP				1		1

#### 2.1.4. その他の開発事項

その他、2016年度の取り組みとしては、次の項目が挙げられる。

- ① 先達教員の増員
- ② 授業参観先の新規開拓
- ③ 推薦図書リストの改訂
- ④ 国内他大学訪問調査（オプション）の拡充
- ⑤ 東北大学の図書館ツアー（オプション）の開催
- ⑥ 授業参観に関するブックレットの刊行
- ⑦ これまでのプログラムのあゆみのまとめ

##### ① 先達教員の増員

2.3.において詳述するが、2016年度は新たに2名の先達教員に就任してもらうことができた。

##### ② 授業参観先の新規開拓

表5に示す11件の授業を新たに参観対象として公開してもらうことができた。

##### ③ 推薦図書リストの改訂

2014年度に作成した「大学教員のための推薦図書」について、新たに大学マネジメント力などのカテゴリを追加して拡充したうえで、「大学教職員のための推薦図書」として改訂版を刊行した（資料A-5）。

##### ④ 国内他大学訪問調査（オプション）の拡充

訪問先として新たに大阪大学を追加し、大規模授業の参観とラーニングcommons等の訪問を追加した。

表5 2016年度に新規開拓した参観対象授業

	授業名	担当教員	参観日・講義会場
1	解析学C 常微分方程式入門 (対象：工学部)	見村万佐人 先生 東北大学 理学研究科	2016.7.19 (火) 1限 東北大学 川内北 C101
2	機能形態学1 (対象：工学部)	平澤典保 先生 東北大学 薬学研究科	2016.7.26 (火) 2限 東北大学 川内北 C101
3	ハードウェアセキュリティ演習 (対象：情報科学研究科)	本間尚文 先生、林 優一 先生 東北大学 情報科学研究科	2016.8.30 (火) 3限 東北大学 電子情報研究所
4	Program for 2016 Food & Agricultural Immunology Joint Lecture, Overview of vaccine development based on mucosal immunity. (対象：農学研究科博士後期課程)	野地智法 先生 東北大学 農学研究科	2016.10.11 (火) 3限 東北大学 雨宮キャンパス 農学研究科講義棟10番教室
5	デジタル信号処理 (対象：情報通信工学科3年生)	木戸 博 先生 東北工業大学	2016.10.12 (水) 2限 東北工業大学 八木山キャンパス 131 教室
6	行動科学各論・特論 (対象：全, 特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.24 (月) 5限 東北大学 川内南 413
7	ゲーム理論入門 (対象：全, 特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.11.11 (金) 3限 東北大学 川内南 文学部第二講義室
8	学習理論入門 (対象：理保歯薬工)	佐藤 智子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.16 (水) 1限 東北大学 川内北 A204
9	社会の仕組みⅡ (対象：薬学部)	佐俣 紀仁 先生 東北医科薬科大学	2016.11.25 (金) 11:40-12:50 東北医科薬科大学 小松島キャンパス 203
10	データベース (対象：工)	三石 大 先生 東北大学 教育情報基盤センター	2016.12.29 (火) 2限 東北大学 青葉山
11	現代青年と心理 (対象：文系, 理農)	岡田 有司 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2017.1.12 (木) 3限 東北大学 川内北 C105

#### ⑤ 東北大学図書館ツアー（オプション）の開催

国内他大学訪問調査の参加者から、「他大学の事例はよくわかったので、ぜひ東北大学の図書館についてもレクチャーを受けてみたい」という要望が寄せられたことから、プログラムのスピンのオフ企画として、東北大学図書館本館の協力を得て、図書館ツアーを開催した。本企画は、プログラム修了生や東北大学 高度教養教育・学生支援機構の教員にも呼びかけ、2016年度プログラム参加者1名、プログラムOB/OG2名、機構等教員3名が参加した。

#### ⑥ 授業参観に関するブックレットの刊行

これまでの授業参観の取り組みの軌跡と、授業参観に協力いただいた教員へのインタビュー、参観者が執筆したリフレクティブジャーナルの抜粋をまとめてPDブックレットVol.8「授業参観のすすめ」として刊行した。本ブックレットは2017年度の東北大学新任教員研修の参加者、および、東北大学に所属する全教員、全博士課程後期学生に配布された。

#### ⑦ これまでのプログラムのあゆみのまとめ

2010年度～2016年度の7年間のプログラム開発の経緯をまとめ、簡便に把握できるよう年表(資料編A-30)を作成した。本年表は、全国プログラムユーズ会議や成果報告会で使用するとともに、他大学から当プログラムの設計・開発について説明を求められた際の資料として活用した。

## 2.2. 参加者募集方法

PFPP への応募資格は、大学教員志望の本学大学院博士課程後期の学生、日本学術振興会特別研究員、専門研究員などとし、東北大学川内北キャンパスで実施されるセミナーやワークショップに不都合なく参加できる者とした。また、高等教育機関（大学、短大、高専）の非常勤教員やティーチングアシスタントなどの教育経験を有する者が望ましいとした。なお、応募者の国籍は不問とした。提出書類は履歴書、業績、課題論文、指導教員の推薦書とし、書類選考を通過した応募者に対して面接を行った。

NFP については、全国の大学に勤務する平成 23 年 4 月以降採用の大学教員（概ね、40 歳以下）に応募資格があることとし、所属する部局の長の推薦書の提出を求めた。また、本務の傍ら、東北大学川内北キャンパスで実施されるセミナーやワークショップに不都合なく参加できる者とした。国籍は不問とした。

フルコースプログラムの参加者募集は、例年同様公募で行い、書類と面接審査による選考を実施した。ショートプログラム参加者の募集は、ウェブサイトからの申込によるエントリー制とし、特に書類審査や面接は行わず、応募資格の確認のみを行った。応募資格については、フルコースと同様に設定した。

## 2.3. 先達教員制度

先達教員とは、経験豊かな先輩教員のことを指し、本プログラムにおいて参加者に助言やアドバイスを提供する役目を担っている。

先達教員に対しては、例年同様、先達教員ガイド（資料編 A-7）を作成して配布するとともに、先達教員説明会（先達教員ランチ懇親会）を 2016 年 7 月 9 日に実施し、ジュニアファカルティ・プログラムにおける先達教員の役割や活動スケジュールについて説明を行った（資料編 A-8）。

先達教員の役割は、2013 年度に設定した内容を継続し、オリエンテーションへの参加、授業公開とディスカッションへの協力、模擬授業への参加とフィードバックの提供、先達コンサルテーション、成果報告会への参加とした。

なお、プログラム修了生からの情報提供をもとに、学内から 2 名の教員に先達教員への就任を依頼し、これを承諾いただくことができた。したがって、2016 年度は表 6 に示す 10 名の先達教員にプログラムへの協力をいただくことができた。

ただし、新たに就任を依頼した先達教員のうち 1 名が、2016 年いっぱいをもって他大学へ転出したため、プログラムの後半においては、先達教員は実質的に 9 名の体制となった。

## 2.4. 広報

2016 年度は、例年実施しているポスター（資料編 A-9, A-10）、およびプログラムの概要を周知するパンフレット（資料編 A-11, A-12）を作成し、これらを各部局、および国内の国公立大学の大学教育センター等へ配布した。パンフレットについては、2015 年度のポケットサイズ（A6）のデザインを継承し、一部掲載写真を更新した。

表6 先達教員一覧

	所属	氏名	着任年
1	イノベーション戦略推進本部, レジリエント社会構築イノベーションセンター	澤谷 邦男 特任教授	2014
2	薬学研究科	平澤 典保 教授	2014
3	災害科学国際研究所	邑本 俊亮 教授	2013
4	文学研究科	永吉 希久子 准教授	2014
5	医学系研究科	佐藤 一樹 助教	2016
6	高度教養教育・学生支援機構	関内 隆 特任教授	2014
7	高度教養教育・学生支援機構	佐藤 勢紀子 教授	2011
8	高度教養教育・学生支援機構	Todd Enslen 講師	2011
9	高度教養教育・学生支援機構	佐藤 智子 准教授	2016
10	高度教養教育・学生支援機構	羽田 貴史 教授	2012

加えて、ウェブサイトを更新し、プログラムの実施状況報告を写真入りで随時アップして情報の発信を継続的に実施した（資料編 A-13）。なお、2015年度から開始した、大学教育支援センターの Twitter, および Facebook アカウントにおいても随時情報を発信した。

また、2012年度から導入しているプログラム事前説明会については、東北大学 高度教養教育・学生支援機構 キャリア支援センターのの田中泰光講師らの協力のもと、ポリコム（テレビ会議システム）を用いた川内会場から青葉山会場への同時中継による一括実施を実現した。事前説明会は2016年4月28日（木）に実施し、プログラムの概要やスケジュール、応募・選考方法に関する説明を行った（図2）。

説明会では、羽田貴史大学教育支援センター長による挨拶の後、今野文子講師によるプログラム概要の解説（資料編 A-14）に引き続き、プログラム修了生による参加者体験談の披露、質疑応答を実施した。プログラム OB/OG としては、2015年度 PFFP 修了生から大橋由基さん（医学系研究科）、2015年度 NFP 修了生から児島征司さん（学際科学フロンティア研究所）の協力を得た（図3）



図2 プログラム事前説明会の様子（川内）



図3 プログラム修了生による体験談の披露

説明会の参加者は、2会場合わせて17名（博士課程前期2名、博士課程後期3名、ポスドク4名、助手1名、助教4名、准教授3名）であった。そのうち11名（すべてショートコース）が実際に応募し、プログラム参加者として採用された。説明会の様子は動画化し、大学教育支援センターのウェブサイト上で視聴できるようにした。

## 2.5. プログラム運営体制

高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター長 羽田貴史教授の指示のもと、プログラムの開発・実施は、同センターの岡田有司准教授と今野文子講師が行った。また、マイクロティーチングセミナーでは、同機構 学習支援センターの足立佳菜助手、海外他大学調査訪問事前研修では、東北工業大学の中島夏子准教授の協力を得た。加えて、運営上の諸手続きやセミナー会場のセットアップ等については、大学教育支援センター 稲田ゆき乃コーディネーター、齋藤ゆう事務補佐員が、セミナーの撮影やコンテンツ化、ISTU 上でのコンテンツ提供については、金子未来事務補佐員が担当した。

## 2.6. プログラム参加者

### 2.6.1. 2016 年度の参加者

2016年度のプログラムには、PFFP フルコースに3名、NFP フルコースに3名が参加した。また、PFFP ショートコースには4名、NFP ショートコースには18名が参加した。

#### 【フルコース参加者】

##### <PFFP 参加者>

1	石原 雅文	男	日本	東北大学 原子分子材料科学高等研究機構	PD
2	林 慎吾	男	日本	東北大学大学院 教育学研究科	D2
3	王 偉	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	専門研究員

##### <NFP 参加者>

1	田中 香津生	男	日本	東北大学 サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター	助教
2	Root Maia	女	エストニア	東北大学大学院 法学研究科	助教
3	吉田 沙蘭	女	日本	東北大学大学院 教育学研究科	准教授

【ショートコース参加者】

<PFFP 参加者>

1	周 振	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	GSIS フェロー
2	渡邊 竜太	男	日本	東北大学大学院 国際文化研究科	GSIS フェロー
3	成田 裕幸	男	日本	東北大学大学院 理学研究科	D1
4	中尾 教子	女	日本	株式会社内田洋行 教育総合研究所	研究員

<NFP 参加者>

1	新居 麻樹	女	日本	東北大学 歯学部附属歯科技工士学校	講師
2	袁 春紅	女	中国	岩手大学 農学部	助教
3	主濱 祐二	男	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
4	大野 美紗	男	日本	岩手大学 農学部応用生物化学科	助教
5	富永 陽子	女	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
6	田中 恭恵	女	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教
7	遠海 友紀	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
8	嶋田 みのり	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
9	鎌田 誠司	男	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教
10	鹿山 雅裕	男	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教
11	上岡 紀美	女	日本	仙台白百合女子大学 人間学部人間発達学科	講師
12	塩飽 由香利	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教
13	及川 麻理子	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教
14	坪谷 透	男	日本	東北大学 歯学研究科	助教
15	山内 保典	男	日本	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	准教授
16	菅原 明子	女	日本	東北大学病院看護部 東北大学大学院医学系研究科	助手
17	玉懸 元	男	日本	いわき明星大学 教養学部	准教授
18	西岡 貴志	男	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教

## 2.6.2. これまでの参加者に関するデータ

表7～10に、2010～2016年度のPFFPおよびNFPの参加者の構成について、表11には参加者の所属について示す。

表7 PFFP フルコース参加者の構成

	D1	D2	D3	OD	PD	合計
2010年度	2	3	7	1	0	13 (男7:女6) うち留学生8
2011年度	4	5	4	1	1	15 (男9:女6) うち留学生5
2012年度	-	4	2	0	0	6 (男2:女4) うち留学生3
2013年度	-	4	3	0	2	9 (男3:女6) うち留学生3
2014年度	0	1	4	0	0	5 (男3:女2) うち留学生0
2015年度フル	2	2	0	0	0	4 (男3:女1) うち留学生3
2016年度フル	1	0	0	0	2	3 (男3:女0) うち留学生1
合計	9	19	20	2	5	55 (男30:女25) うち留学生23

表8 PFFP ショートコース参加者の構成

	D1	D2	D3	OD	PD	合計
2015年度ショート	0	0	1	0	2	4 (男2:女2) うち留学生0
2016年度ショート	0	0	1	0	3	4 (男3:女1) うち留学生1
合計	0	0	2	0	5	8 (男5:女3) うち留学生1

表9 NFP フルコース参加者の構成

	助教 (助手)	講師	准教授	合計
2011年度	1	0	2	3 (男2:女1) うち外国人教員1
2012年度	4	1	1	6 (男5:女1) うち外国人教員0
2013年度	1	0	1	2 (男1:女1) うち外国人教員0
2014年度	3	0	0	3 (男2:女1) うち外国人教員1
2015年度フル	5	0	1	6 (男4:女2) うち外国人教員0
2016年度フル	2	0	1	3 (男1:女2) うち外国人教員1
合計	16	1	6	23 (男15:女8) うち外国人教員3

表10 NFP ショートコース参加者の構成

	助教 (助手)	講師	准教授	合計
2015年度ショート	4	1	1	6 (男5:女1) うち外国人教員0
2016年度ショート	11	2	5	18 (男7:女11) うち外国人教員1
合計	15	3	1	24 (男12:女12) うち外国人教員1



表 11 PFFP/NFP の参加者の所属

	2010	2011		2012		2013		2014		2015				2016				計
	PFFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP		NFP		PFFP		NFP		
										F	S	F	S	F	S	F	S	
<b>学内</b>																		
文学研究科		3	1	1		5				2	1	1	1					15
教育学研究科				1		1		1						1		1		5
法学研究科			1		1	1		1				1				1		6
経済学研究科	1			1		1					1							4
理学研究科			1					1						1				3
医学系研究科	6	2								1								9
歯学研究科																	6	6
薬学研究科		1																1
工学研究科		3			3					1								7
農学研究科				1			2											3
国際文化研究科	5	4		1				1						1	2			14
情報科学研究科		2		1								1						4
環境科学研究科	1							1	1				1					4
医工学研究科								1										1
学際科学フロンティア研究所									1			2					2	5
東北アジア研究センター						1												1
原子分子材料科学高等研究機構												1		1				2
サイクロロン・ラジオアイソトープセンター																1		1
大学院																	1	1
高度教養教育・学生支援機構					2												1	3
(学内合計)	13	15	3	6	6	9	2	5	3	4	2	5	3	3	3	3	10	95
<b>学外</b>																		
理化学研究所												1						1
東北工業大学												1						1
岩手大学													1				4	5
いわき明星大学												1					1	2
東日本国際大学													1					1
熊本大学													1					1
仙台白百合大学																	1	1
東北学院大学																	2	2
(株)内田洋行															1			1
(学外合計)										0	2	1	3	0	1	0	8	15
<b>合計</b>	<b>13</b>	<b>15</b>	<b>3</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>9</b>	<b>2</b>	<b>5</b>	<b>3</b>	<b>4</b>	<b>4</b>	<b>6</b>	<b>6</b>	<b>3</b>	<b>4</b>	<b>3</b>	<b>18</b>	<b>110</b>

Fはフルコース、Sはショートコースを示す

## 2.7. 各活動の内容と参加者の声

それぞれの活動の具体的な内容、スケジュール、および参加者の声を資料編の A-15 に示す。

## 2.8. 全国プログラムユーザ会議の実施

### 2.8.1. ユーザ会議実施の経緯

本プログラムは、教育関係共同利用拠点事業の一環として、開発・運営され、事業開始から 2016 年度で 7 年目をむかえた。この間、PFFP/NFP を修了した受講者が就職、昇進するなど、それぞれのキャリアステージにおいて活躍はじめており、長期的な視点によるプログラムの有効性評価が可能な時期に到達はじめています。

これまでに PFFP（フルコース）は 52 名、NFP（フルコース）は 20 名の計 72 名の修了生を輩出してきた。これら修了生（ユーザ）に対し、プログラムでの経験がどのように活かされているか、また現在の立場からふり返ってプログラムがどうあるべきかといった評価を行うことで、単なるプログラム終了直後のアンケートでは明らかにできないような、長期的視点でのプログラムの有効性評価を実現できると考えられる。これによりユーザの「満足度」「学習到達度」だけではなく、「行動変容度」や「組織変容度」を対象とした議論や分析が可能となり、今後のプログラム開発における成果指標の開発、それによる教職員能力開発の有効性向上に役立てられる。さらに、これらの成果を全国に発信し共有することで、日本全体の教職員能力開発プログラムの質向上に寄与することも期待できる。したがって、これまでのプログラム修了生を対象として「全国プログラムユーザ会議」を開催し、成果指標の開発のためのデータ収集を実施することとした。

本ユーザ会議の実施に当たっては、2016 年度の拠点事業費が概算要求額よりも大幅に減額され、かかる経費の計上が困難であることが予想されたため、平成 29 年度機能強化経費（部局ビジョン）事業「専門性開発プログラムの有効性に関するユーザベース評価指標の開発」として予算申請を行い、これにより先行研究調査および全国プログラムユーザ会議を開催した。

### 2.8.2. 効果検証に向けての先行研究調査

全国プログラムユーザ会議の実施にあたり、これまでに研修の効果検証としてどのような取り組みがなされてきたのかについて、国内外の事例の調査を行った。

例えば、Hanover Research (2015) の *Best Practices in Evaluating Teacher Professional Development* [13]には、今日の PD のトレンド、評価モデル、データ収集のためのアプローチやツール、組織的取り組みの事例が紹介されている。また、PD の効果測定については、表 11 に示す内容が指摘されている。なお、ここで取りあげられている Kirkpatrick, Guskey, Clarke-Hollingsworth のモデルを比較すると表 12 のようになる。Hanover Research (2015) [13]によると、Kirkpatrick のモデルは、1950 年代後半に教育と産業分野における研修を評価するためのモデルとして提唱されたものであり、前のレベルで収集されたデータをもとに積み上げ式で評価をしていくことが意図されている。また、Level 1 と 2 については一般化された測定手法が確立されているが、Level 3 は「受講生の職場の上司にインタビューを行う」、Level 4 は「組織（工場や会社）全体の生産性や事故率の変化分析」などの方法が提案されているのみで、一般化までには至っていないとの指摘がある。また、Guskey のモデルは、Kirkpatrick をベースに、より教育の分野における研修を対象として提

表 12 Hanover Research (2015) における指摘

- 1) PD への投資額は年々増えているものの、研修の効果と評価は未だ不明瞭である
- 2) PD の評価に用いられている手法は、それぞれ異なる理論に依拠している
- 3) 評価枠組みの理論的背景に関わらず、PD の評価は「参加者からのフィードバック」「参加者の学習」「組織的文脈」「学習成果の適用」「学生の成果」の5つのエリアを対象としている
- 4) 学生による学習成果 (Student Outcome) は研修の評価において最もクリティカルかつ厄介なデータソースである
- 5) 参加者の学習成果を測定することで、研修の教育的アプローチを評価可能である
- 6) 組織的文脈を検討することは、PD で獲得したスキルの適用における推進力と妨害について理解するのに大きな意味を持つ
- 7) 教員のパフォーマンスが改善したとしても、それと特定の研修内容について結びつけて議論することは困難である
- 8) 多くの調査では参加者の満足度に注目しており、学習や現場での実践、学生の取り組み等に着目した客観的指標による評価は行われていない
- 9) 過去10年で発表されたPD評価のためのモデルは主に3つ①Kirkpatrick, ②Guskey, ③Clarke-Hollingsworth
- 10) ①Kirkpatrickと②Guskeyは、教員は積み上げ直線的成長をたどると考えているのに対し、③Clarke-Hollingsworthはより複雑な相互作用を伴う

表 13 評価モデルの比較 ([13]より訳出)

評価対象	Kirkpatrick	Guskey	Clarke-Hollingsworth
参加者からのフィードバック	Level 1:リアクション	Level 1:参加者の反応	—
参加者の学習	Level 2: 学習	Level 2: 参加者の学習	個人的領域と外的領域
組織的文脈	—	Level 3: 組織の支援と成長	変化環境
学修成果の適用	Level 4: 行動	Level 4: 参加者による新しい知識とスキルの使用	実践の領域
学生の学習成果	Level 5: 結果	Level 5: 学生の成果	結果の領域

唱されたモデルであるが、Kirkpatrick にはない Organizational Support and Change が含まれているところが特徴である。Level 1 と 2 は容易にデータ収集可能であるが、それ以降に関しては組織の協力と時間が必要であることが指摘されている。最後に、Clarke-Hollingsworth のモデルは、教師の成長はどの領域からでも始まりうるとしたうえで、ある領域での成長が他の領域での成長に影響するとみなされており、「変化環境 (Change Environment)」は Guskey のモデルの「組織の支援と成長 (Organizational Support and Change)」と類似している。しかしながら、本モデルは、必ずしも研修評価のためのモデルとして開発されたわけではない。

また、Rossett (2009) [14]による報告では、研修の評価のほとんどが「研修参加者の満足度評価」(94%)にとどまっており、最上レベルの Results について報告しているものは2009年時点で3%のみであることが指摘されている (図4)。

なお、類似の目的を持つ評価指標について、Ohio ABLE PD evaluation framework (Mullins *et al.* 2010) [15]などをはじめとした既存の指標を分析し、これらの援用可能性について検討した。その結果、これら先行研究の指標をベースとしつつ、インタビュー調査で得られた知見を反映した評価指標を開発することとした。具体的には、①行動変容に関して経験や意識を語ってもらえるようなインタビューを実施する、②モデルありきではなく、インタビュー内容をもとに、全体に対する質問紙を設計する、③「何が変わったか」だけではなく「何で変わったのか」「何故変えたのか」や、変容のプロセスを明らかにすることも視野に入れておく、の3点に留意することとした。

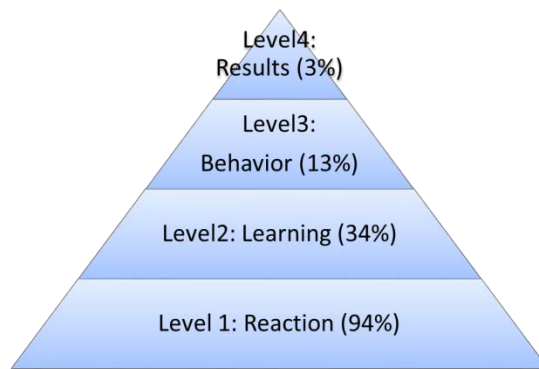


図4 研修評価のためのデータ ([14]をもとに作成)

その他、実施した研修の評価を試みている国内の先行研究調査から得られた知見については、資料編 A-16 にまとめて掲載する。

### 2.8.3. プログラムユーザ会議の内容

2016年度はまず、長期的視点でのプログラムの有効性評価のための指標の開発を念頭に置き、参加者らが「現在から振り返ってプログラムをどのように認識・意味づけているのか」「プログラムでの経験が現在の仕事にどのように活かされているのか」といった遅効性の効果の検証を目的とした修了生追跡調査として全国プログラムユーザ会議を開催した。2016年12月26-27日に蔵王ロイヤルホテルを会場に、これまでのプログラムのあゆみを振り返った後、表14に示す修了生代表者4名による話題提供、およびグループディスカッションと個別インタビュー（対象13名、学内：4部局、他大学等：10）を実施した。なお、後日別途ユーザ会議には参加できなかった修了生1名にもインタビューを実施し、インタビュー対象者は合計で14名となった。

当日のプログラムを資料編 A-17 に、プログラムの変遷についての資料を資料編 A-18、各話題提供者の発表資料を資料編 A-19、2日目の全体ディスカッション時に提示されたの羽田貴史大学教育支援センター長のまとめ資料を資料編 A-20 に収録した。

個別インタビューの質問項目を表15に示す。詳細なインタビューデータは現在分析中であるが、教授学習に関わる個別具体的な知識・スキルだけでなく、大学教育全体を俯瞰できる大学教育に関するメタ認知の醸成や教員間のネットワーク形成が大学教員としての発達に重要であることが浮かび上がってきた。また、先に挙げた Hanover Research (2015) における指摘の通り、特定の研修内容と結び付けて効果を実感しているわけではなく、プログラム全体を通して得た経験に基づく評価がなされている傾向がみえてきた。

当日の話題提供の様子や論点については、大学教育支援センターのウェブサイトにおいて掲載し（資料編 A-21）、動画を公開した（<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/about/jpum-report>）。今後はこれらのデータを基に評価指標の開発に取り組むとともに、修了生全体への質問紙調査を実施する予定である。

表 14 全国プログラムユーザ会議参加者

No.	氏名	所属	職位	話題提供
1	吉良 洋輔 PFFP2011 (UCバーレー)	会津大学 文化研究センター	准教授	
2	中川 恵 PFFP2011 (UCバーレー)	米沢女子短期大学	講師	
3	笹野 裕介 PFFP2011 (UCバーレー)	東北大学薬学研究科	助教	
4	韓 放 PFFP2011 (UCバーレー)	東北大学工学部国際交流室	助手	
5	森 新之介 PFFP2011 (UCバーレー)	早稲田大学 高等研究所	助教	
6	木内 敬太 PFFP2011 (UCバーレー)	高崎商科大学 埼玉県教育局	講師(非常勤) スクールカウンセラー	○
7	佐俣 紀仁 NFP2012 (メルボルン大)	東北医科薬科大学	講師	○
8	田村 洋 NFP2012 (メルボルン大)	東京工業大学 土木・環境工学科	助教	
9	土田 久美子 PFFP2013 (UCバーレー)	東京外国語大学 世界言語社会教育センター	特任講師	
10	野地 智法 NFP2013 (蔵王合宿)	東北大学大学院 農学研究科	准教授	○
11	星野 由美 NFP2013 (蔵王合宿)	広島大学大学院 生物圏科学研究科	助教	
12	熊谷 摩耶 PFFP2014 (UCバーレー)	湘北短期大学	専任講師	○
13	陳 思聡 NFP2014 (蔵王合宿)	東北大学大学院 教育学研究科	特任講師	

表 15 全国プログラムユーザ会議におけるインタビュー項目

- 
- ・大きな目的としては、プログラムの遅効性の効果を明らかにする
  - ・ Q1 ではプログラムに対する認識・意味づけの変容について、Q2 では過去のプログラム経験が現在の意識・行動にどう影響を与えているのかを尋ねる。

【Q1】今現在、プログラムに対してどのような認識を持っていますか？

- プログラム修了時はプログラムに対してどのような認識を持っていましたか？
- その認識はプログラムの修了時とは変わっていますか？
- どのような点で捉え方が変わりましたか？
- なぜ捉え方が変わったのですか？
- 今になってよかったと思うことはありますか？
- (プログラムに対する認識に変化が見られない場合)プログラム修了時から現在まで、あなたにとってプログラムでの経験はどのような意味があったのでしょうか？

【Q2】プログラムが大学教員としての意識や取り組みにどう生きていると思いますか？

- どんな面で活かされていますか？
  - なぜそれが活かされたのですか？
  - 別の側面(研究面・大学運営面)などではどうですか？
  - (他に)現在仕事をしている中でプログラムの内容を思い出すことがありますか？
  - 意識的にプログラムでの経験を活かそうと思ってやっていることはありますか？
-

### 3. プログラムの評価と考察

#### 3.1. 評価方法

本拠点事業では、各種プログラムの有効性評価と、今後のプログラム開発における課題や改善点の抽出を目的として、継続的にプログラムの評価を実施してきた。参加者、先達教員ともに、プログラム終了後のアンケートへの協力を得た。その他に、リフレクティブ・ジャーナル、最終課題レポート、参与観察の結果を考察し、課題および改善点を抽出した。

#### 3.2. 先達教員による評価

先達教員に対するアンケートでは、すべて自由記述方式で

- (1) 先達教員としての活動全般について
- (2) 授業公開とディスカッションについて
- (3) 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて
- (4) 先達コンサルテーションについて
- (5) 2016年度 PFFP/NFP について

の5つのセクションからなる質問への回答を得た。回答結果の詳細については資料編 A-27 に示す。以下、回答結果の概要を示す。

##### (1) 先達教員としての活動全般について

まず、先達教員の活動全般に関して、前年度と比較してより参加者のプロフィールや状況について情報提供がなされたとの回答を得た。先達教員としての活動において特に困ったことなどは報告されなかった。今後の先達教員としての活動について、運営スタッフや参加者との交流の機会の充実を求める意見もあった。

##### (2) 授業公開とディスカッションについて

授業公開に関しては、授業後のディスカッションで話し合うべき内容について例示があると助かる、授業前に授業方法等について説明できる時間があるよといった指摘があった。また、どの授業を公開すべきかは実際に授業が始まってみないとわからない面があるとの意見もあった。授業公開をお願いする際に、授業前の説明や授業後のディスカッションに関して要望がなければ確認するといった対応が考えられる。

##### (3) 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて

模擬授業のフィードバックについては、自由記述だけでなく声の大きさやスピード、資料の見やすさなど、いくつか観点を示し5段階で評価するといったものがあった。また、模擬授業の時間が短いので20~25分程度に延ばしてはどうか、手書きだとコメントが読みづらいのではないかとといった意見も出された。これらの指摘を踏まえ、自由記述以外の評価方法についても検討したい。

##### (4) 先達コンサルテーションについて

先達コンサルテーション時の参加者情報の提供については、役立ったとの評価が得られた。改善点については特に挙げられなかった。

### (5) 2016 年度 PFFP/NFP について

全体的に 2016 年度の PFFP/NFP の取り組みについてはポジティブなコメントが多く、他大学を含む授業参観、模擬授業、先達コンサルテーション、リフレクティブジャーナル等を評価するコメントがみられた。

要望としては、以下の点が挙げられた。

- イベント当日だけでなく、それ以外のプロセスにおいても先達としてもう少し関わりたかった
- NFP の参加者については参加者の授業を参観する機会があってもよいのではないか
- 講義を想定したプログラムの他に、ゼミや卒論指導など演習をどう運営するかについてのプログラムもあるとよいのではないか
- フルコースの参加者が減少傾向にあるように思う。多くの人に参加してもらえるような妥協点を探る必要もあるのではないか

### 3.3. PFFP/NFP ショートコース参加者による評価

ショートコース参加者に対するアンケートでは、PFFP ショートコース・NFP ショートコースの参加者の内、21 名から回答を得られた。結果の詳細は資料編 A-27 に収録した。以下では、(1) 各種セミナー、(2) リフレクティブジャーナル、(3) ショートコース選択の理由、(4) プログラムの運営に焦点をあててアンケート結果について検討する。

#### (1) 各種セミナー

アンケートでは、それぞれのセミナーが以下の 4 つのプログラムの目標達成に関してどの程度有益であったのかを 4 段階で評価している。

- 〔目的 1〕生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 〔目的 2〕大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 〔目的 3〕教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
- 〔目的 4〕異分野の研究や教育文化を知る

目標達成に関する有益さの平均得点は、目的 1 が 3.5 点、目的 2 が 3.5、目的 3 が 3.5、目的 4 が 3.6 であり、各種セミナーは全体的に目標の達成に有益だと評価されている。

#### (2) リフレクティブジャーナル

リフレクティブジャーナルについては、「ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった」という質問に全員がそう思う(「ある程度そう思う」+「とてもそう思う」と回答しているとともに、「ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った」という質問にも 20 名がそう思うと回答していた。ここからは、リフレクティブジャーナルがプログラムの目標達成に有効であるだけでなく、内的な思考の深化にも役立っていることが窺える。

自由記述からは、全体的にリフレクティブジャーナルにフィードバックがもらえることについてポジティブに評価するコメントが多かった。3 日以内にリフレクティブジャーナルを書くことについては、期限が短い、期限は適当であるというように、参加者によって受け止め方が異なっていた。



### (3) ショートコース選択の理由

ショートコースを選択した理由については「そう思う(「ある程度そう思う」+「とてもそう思う」)」と回答した者が、「ショートコースの方が気軽に参加できるから」で 20 名、「フルコースだと負担が大きかったから」「フルコースに参加する時間がとれないと思ったから」では 18 名、「まずショートコースで内容を試してみたかったから」が 15 名となっていた。この結果から、負担の大きさや時間の制約からショートコースを選ぶものが多いことがわかる。一方、「今からでもフルコースに参加してみたい」という質問に「そう思う」と回答した者も 11 名おり、更に充実したプログラムに参加したいという参加者も少なからず存在することがわかる。

### (4) プログラムの運営

自由記述のコメントからは、各種セミナーを通して教員としての役割の自覚や自分の教育を相対化できるようになった等のコメントがみられた。また、全体的に授業参観に関する記述が多く、具体的な授業を参観することは受講者に様々な気づきをもたらすといえる。プログラムへの要望として、ショートコースでは 11 月・12 月には授業参観は実施していたが、セミナー等は設けていなかった。このことに関して、11 月・12 月にもセミナー等を開催してほしかった、プログラムが尻すばみになってしまう印象を受けたといった指摘があった。これらのコメントを踏まえ、セミナーの実施時期等について見直していきたい。

## 3.4. PFFP/NFP フルコース参加者による評価

フルコース参加者に対するアンケートでは、PFFP フルコース・NFP フルコースの参加者 6 名全員から回答が得られた。結果の詳細は資料編 A-28 に収録した。以下では、(1) 各種セミナー、(2) リフレクティブジャーナル、(3) 国内海外他大学訪問調査、(4) プログラムの運営に焦点をあててアンケート結果について検討する。

### (1) 各種セミナー

アンケートでは、ショートコースと同様それぞれのセミナーが以下の 4 つのプログラムの目標達成に関してどの程度有益であったのかを 4 段階で評価している。

- 〔目的 1〕 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 〔目的 2〕 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 〔目的 3〕 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語るようになる
- 〔目的 4〕 異分野の研究や教育文化を知る

ショートコース・フルコース共に提供したセミナーにおける目標達成に関する有益さの平均得点は、目的 1 が 3.8 点、目的 2 が 3.8、目的 3 が 3.8、目的 4 が 3.8 であり、各種セミナーはショートコース以上に高い評価を得ていることが示された。

## (2) リフレクティブジャーナル

リフレクティブジャーナルについては、「ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった」「ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った」といった質問に全員がそう思う(「ある程度そう思う」+「とてもそう思う」と回答しており、効果的な取り組みであることが確認された。

自由記述でもポジティブな反応が多く、フィードバックがあったのがよかった、リフレクティブジャーナルを書くことで学んだことを振り返ることができたといったコメントがみられた。

## (3) 国内海外他大学訪問調査

国内他大学調査については、参加者全員が「プログラムの内容は充実していた」「プログラムに参加することで大学間の比較の始点を養うことができた」といった質問に「とてもそう思う」と回答していた。海外他大学訪問調査についても、同様の項目に全員が「とてもそう思う」と回答しており、他大学を訪問することは、本プログラムの目標の一つである比較の目を養う上で成果を上げていることが確認された。

国内他大学訪問調査に関する自由記述では、普段馴染みのない大規模私立大学を訪問できたことが貴重な体験になった、他大学の授業や施設を見ることができてよかったといったコメントが挙げられた。

海外他大学訪問調査については海外他大学訪問調査に特化したアンケートも実施したが、そこからは現地での GSI (graduate student instructor) セッションを見たり GSI の学生と議論ができたのがよかった、現地でのセミナーや毎日のデブリーフィングが勉強になった等、ポジティブなコメントが多く見られた。一方で、より多くの授業や GSI セッションを見たいといった要望も寄せられた。

## (4) プログラムの運営

自由記述のコメントからは、実践的な知識やスキルを日々の授業の中に取り入れていくことができた、学部教育に関する内容だけでなくコーチングや先達コンサルテーション等プログラムに幅があつてありがたかった、プログラムを受講することで少しずつ目指すべき大学教員像が明確になってきたといった意見が挙げられた。

一方、2~3月の負担が大きかった、プログラムについて教授会などでアナウンスしてもらおうと新任教員にも大学院生にも効果的なのではないかとといったコメントがあつた。

## 3.5. 考察

2016年度はフルコース参加者が6名、ショートコース参加者が22名と過去最大の参加者数となり、7年が経過し本プログラムへの認知が高まってきたことが窺える。また、本プログラムは2015年度から学外に対しても提供しているが、2016年度は他大学からの参加者が4分の1程度を占め、学外においても本プログラムが浸透してきているといえよう。

ショートコース、フルコースのプログラムに対するアンケートの結果を見ると、全体的に両コースともプログラムに対する満足感やプログラムを通じた目標達成度は高いと評価できる。また、先達の教員からも本プログラムの内容に関しておおむね肯定的な評価が得られている。本プログラムは毎年実施する度に参加者のアンケートに基づき改善を積み重ねており、その成果が表れていると考えられる。

2016年度における改善の例としては、ショートコース参加者に対してもリフレクティブジャーナルを課し、それに対するフィードバックを実施した。上述のようにリフレクションは参加者の学びを深めるために効果的であり、リフレクティブジャーナルに対するフィードバックが参加者の動機づけを高めるうえで重要であることが示された。また、2016年度は学外における授業参観についても拡充した。こうした取り組みは、参加者の比較の視点を養う上で有益であったといえる。この他にも、情報提供のタイミングや先達コンサルテーション、マイクロティーチング・模擬授業において過年度の経験を踏まえ改善を加えている。

一方、フルコースとショートコースのアンケート結果を比較すると、ショートコースの方が得点は低くなっていた。もちろん、この背景にはそもそもフルコース参加者の方がプログラムに対する意識やモチベーションが高い、参加者間や運営スタッフとの相互作用が密であるといった要因も関係していると考えられるが、寄せられたコメントに基づく改善の余地はあるといえる。

また、フルコースとショートコースの参加者数のバランスも気になる点である。フルコースに比べ負荷が低いためにショートコースを選択したという参加者が多かったが、負荷の高いプログラムとそうでないプログラムを提供した場合に、どうしても負荷の低い方に参加者が流れてしまうという状況があると考えられる。一方で、ショートコースの複数の参加者からはプログラムの後半にもセミナー等を設定してほしいといった要望もあり、参加者にとって適度なプログラムの負荷を模索していくことが重要だと考えられる。

#### 4. 今後の課題

これまでの議論を踏まえ、次年度に向けた課題を次のようにまとめる。

- ①ショートコース・フルコースにおける内容・時期を考慮した負荷の調整
- ②全ての参加者に教育の実践や他者との相互作用の機会を提供

まず、①の「ショートコース・フルコースにおける内容・時期を考慮した負荷の調整」についてだが、ショートコースの参加者からは11月以降にセミナー等がなく尻すぼみ感がある、逆にフルコースの参加者からは2・3月に負荷が大きいといった指摘があった。また、ショートコースとフルコースではプログラムの負荷の違いに起因する参加者の偏りも生じていた。このことを踏まえると、フルコースに関してはプログラム後半の負荷を軽減するとともに、ショートコースについてはプログラム後半の内容を手厚くすることで、より多くの参加者にとって適度な負荷になりプログラムへの動機づけを維持・向上させることが可能になると考えられる。次年度はフルコースのプログラム内容を精選するとともに、ショートコースに盛り込むべき内容や時期を検討し、両コースの在り方も含めて改善を行うことが必要だと考えられる。

②の「全ての参加者に教育の実践や他者との相互作用の機会を提供」については、ショートコースにおけるプログラム評価がフルコースに比べて低いことに対する改善案である。フルコースの参加者ではセミナーを受けるだけでなく、マイクロティーチング、模擬授業といった自身の教育を実践し、フィードバックを得る機会が用意されている。こうした実践の機会があるからこそ、様々なセミナーの内容を積極的に吸収しようとする姿勢や、プログラム参加に対する適度な緊張感が生じるものと考えられる。本プログラムの学習効果の向上のためには全ての参加者が教育実践ができる機

会があることが重要だと考えられる。また、フルコースでは参加者、先達教員、スタッフとの相互作用の機会が多いのに対し、ショートコースではこうした機会が少ない。アンケートからは他の参加者や先達教員との交流が学びを深めたり新たな気づきにつながっていることが示されているとともに、こうした相互作用の存在はプログラムでの学び自体への動機づけも高めているといえる。そのため、フルコースだけでなくショートコースの参加者についても相互作用の機会をどのように提供できるか模索していくことが必要だと考えられる。

## 文献

- [1] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2010) 『研究大学における大学院教員の能力開発の課題』, CAHE TOHOKU Report 32.
- [2] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2011) 『2010 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [3] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2012) 『2011 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [4] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2013) 『2012 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [5] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2014) 『2013 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [6] 東北大学高度教養教育・学生支援機構編 (2015) 『2014 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [7] 東北大学高度教養教育・学生支援機構編 (2016) 『2015 年度 教育関係共同利用拠点事業報告書』
- [8] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2012) 『2011 年度 東北大学 大学教員準備プログラム報告書』
- [9] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2013) 『2012 年度 東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム報告書』
- [10] 東北大学高等教育開発推進センター編 (2014) 『2013 年度 東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム報告書』
- [11] 東北大学高度教養教育・学生支援機構編 (2015) 『2014 年度 東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム報告書』
- [12] 東北大学高度教養教育・学生支援機構編 (2016) 『2015 年度 東北大学 ジュニアファカルティ・プログラム報告書』
- [13] Hanover Research (2015) "Best Practice in Evaluating Teacher Professional Development"  
[http://scee.groupsite.com/file\\_cabinet/files/791689/download/Best%20Practices%20in%20Evaluating%20Teacher%20Professional%20Development.pdf?m=1447776006](http://scee.groupsite.com/file_cabinet/files/791689/download/Best%20Practices%20in%20Evaluating%20Teacher%20Professional%20Development.pdf?m=1447776006) (2017/5/19 アクセス確認)
- [14] Rossett, A., (2009) Beyond Kirkpatrick: taking a fresh look at analysis and evaluation. *The eLearning Guild's Instructional Design Symposium*, Chicago, Illinois.  
<https://www.elearningguild.com/showFile.cfm?id=3477> (2017/5/19 アクセス確認)
- [15] Mullins *et al.*, (2010) A Professional Development Evaluation Framework for the Ohio ABLE System. The Ohio State University  
[http://uso.edu/network/workforce/able/reference/development/PD\\_Eval\\_Framework\\_Report.pdf](http://uso.edu/network/workforce/able/reference/development/PD_Eval_Framework_Report.pdf) (2017/5/19 アクセス確認)



# 資料編





## 第2部 資料編目次

A-1	Tohoku U. PFFP/NFP2016 フルコースプログラム内容	33
A-2	リフレクティブジャーナル・ガイド 2016	41
A-3	先輩の知恵	48
A-4	マイクロティーチング・ガイド 2016	55
A-5	大学教職員のための推薦図書（推薦図書リスト）	60
A-6	OB/OG 通信	69
A-7	先達教員ガイド 2016	74
A-8	先達教員説明会資料	86
A-9	Tohoku U. PFFP2016 広報ポスター	89
A-10	Tohoku U. NFP2016 広報ポスター	90
A-11	Tohoku U. PFFP2016 パンフレット	91
A-12	Tohoku U. NFP2016 パンフレット	93
A-13	大学教育支援センターウェブサイトにおけるプログラム進捗報告	95
A-14	Tohoku U. PFFP/NFP2016 事前説明会 プログラム概要説明資料	97
A-15	各活動と参加者の声	103
A-16	研修の評価指標開発のための先行研究調査	133
A-17	全国プログラムユーザ会議配布冊子	135
A-18	全国プログラムユーザ会議・プログラムのあゆみ	149
A-19	全国プログラムユーザ会議・話題提供者発表資料	151
A-20	全国プログラムユーザ会議・ディスカッション資料	158
A-21	全国プログラムユーザ会議・ウェブページ	160
A-22	パークレー研修前メールマガジン	164
A-23	Tohoku U. PFFP2016 成果報告会発表資料	168
A-24	Tohoku U. NFP2016 成果報告会発表資料	173
A-25	最終課題レポート集	176
A-26	先達教員アンケートの結果	190
A-27	2016年度 PFFP/NFP ショートコース参加者アンケートの結果	192
A-28	2016年度 PFFP/NFP フルコース参加者アンケートの結果	198
A-29	2016年度 PFFP/NFP 海外他大学訪問調査参加者アンケートの結果	204
A-30	プログラムのあゆみ（2010年度～2016年度）	206

※資料として PFFP/NFP/フルコース/ショートコース向けの複数のバージョンがあり、  
内容が類似している場合には、PFFP フルコース向けを収録した

## プログラム参加者のみなさまへ

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 フルコースへようこそ！

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 には専門も経歴も異なる 29 名（フルコース：6 名、ショートコース：23 名）が集います。プログラムで提供されるセミナーやワークショップにおいての学びだけでなく、参加者同士がお互いの視点を学び合い、より広い視野で大学教員という仕事、大学教育について考えることができるよう、プログラムを積極的に活用しましょう。なお、本プログラムは大学院生を対象とした東北大学 大学教員準備プログラム（Tohoku U. PFFP）の参加者と新任教員プログラム（Tohoku U. NFP）の参加者が一緒に取り組みます。

## 東北大学 新任教員プログラム 大学教員準備プログラム 2016

Tohoku University **New Faculty Program**  
Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**

### 参加者名簿

〔フルコース参加者〕

<PFFP 参加者>

1	イシハラ 石原 雅文	マカホミ マカホミ 雅文	男	日本	東北大学 原子分子材料科学高等研究機構	PD
2	ハヤシ 林 慎吾	シノブ シノブ 慎吾	男	日本	東北大学大学院 教育学研究科	D2
3	オウ 王 偉	イ イ 偉	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	専門研究員

<NFP 参加者>

1	タナカ 田中 智洋生	カミヤ カミヤ 智洋生	男	日本	東北大学 サイクロロン・ラジオアイソトープセンター	助教
2	ローツ Roots Maia	マイア マイア Maia	女	エストニア	東北大学大学院 法学研究科	助教
3	ヨシダ 吉田 サラン	サラ サラ 沙蘭	女	日本	東北大学大学院 教育学研究科	准教授



【シヨートコース参加者】  
 <PFPP参加者>

1	シロウ シン 周 焜	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フォロー
2	ワタナベ リョウタ 渡邊 竜太	日本	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フォロー
3	ナリタ ヒロユキ 成田 裕幸	日本	東北大学大学院 理学研究科	D1
4	ナカノ ヒロコ 中尾 教子	日本	株式会社内田洋行 教育総合研究所	研究員

<NFP参加者>

1	ニイ マキ 新居 麻樹	日本	東北大学歯学部 附属歯科技工士学校	講師
2	エン シュンゴウ 袁 春紅	日本	岩手大学 農学部	准教授
3	シユハマ コウジ 主演 佑二	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
4	オオノ ミチカ 大野 美紗	日本	岩手大学 農学部応用生物化学科	助教
5	トミノカ ヨウコ 富永 陽子	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
6	ハラタ サチコ 原田 奈穂子	日本	東北大学 医学系研究科 保健学専攻	講師
7	タナカ ヤスエ 田中 恭恵	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教
8	エンコウ コウキ 遠海 友紀	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
9	シマダ 嶋田 みのり	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
10	カマタ セイジ 鎌田 誠司	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教
11	カヤマ マサヒロ 鹿山 雅裕	日本	東北大学 学際科学フロンティア研究所	助教

12	ウエカキ ケミ 上岡 紀美	日本	仙白白百合女子大学 人間学部人間発達学科	講師
13	シロク ユカリ 塩飽 由香利	日本	東北大学 歯学研究科	助教
14	オノカワ マリコ 及川 麻理子	日本	東北大学 歯学研究科	助教
15	ツボキ トシロ 坪谷 透	日本	東北大学 歯学研究科	助教
16	ヤマノウチ マスナリ 山内 保典	日本	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	准教授
17	スオハラ アキコ 菅原 明子	日本	東北大学病院看護部 東北大学大学院医学系研究科	助手
18	タマカケ ゲン 玉懸 元	日本	いわき明星大学 教養学部	准教授
19	ニシオカ タカシ 西岡 貴志	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教



## プログラムの概要

### <達成目標>

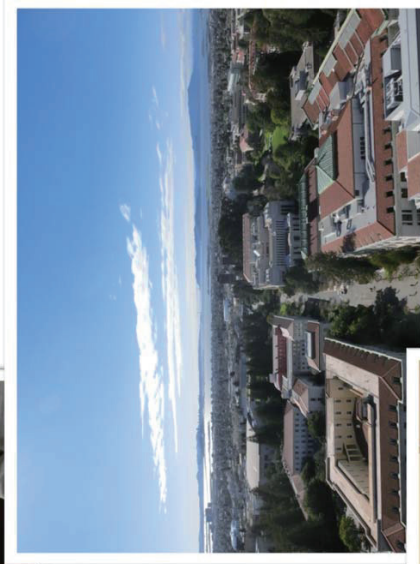
参加者はプログラムでの活動、経験を通して、次のことを目指します。

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

### <活動内容>

目標を達成するために、参加者は次の活動に取り組めます。

- 仕事を理解する（高等教育や大学教員の仕事に関するセミナー）
- 基礎知識を得る（シラバス作成ワークショップ）
- 実践力を磨く（マイクロティーチング、模擬授業）
- 比較の目を育てる（セミナー、ワークショップ、国内／海外他大大学訪問調査）
- 同僚とつながる（他の参加者との交流、ディスカッション）
- 先輩から学ぶ（授業参観、コンサルテーション）
- 自己省察力を養う（リフレクティブ・ジャーナル）



# 活動内容とスケジュール

2016年7月						
月	火	水	木	金	土	日
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

2016年8月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

2016年9月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

2016年10月						
月	火	水	木	金	土	日
				1	2	
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

2016年11月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

2016年12月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

2017年1月						
月	火	水	木	金	土	日
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29

2017年2月						
月	火	水	木	金	土	日
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

2017年3月						
月	火	水	木	金	土	日
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

セミナー等実施日

リアルタイム・ジャーナル提出締切日

- 2016.7.16 (土) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 2015.7~2016.1 授業を見る聞く学ぶ
- 2016.8.25 (木) 授業デザインとシラバス作成
- 2016.9.14 (水) 授業づくり：準備と運営
- 2016.10.14 (金) 本当のかしことは何か
- 2016.10月中 オプション：国内他大訪問調査
- 2016.11月中 マイクロティーチング
- 2016.12.9 (金) コーチャング技法を活用した院生指導
- 2017.2月上旬 模擬授業
- 2017.2月~3月 オプション：海外他大訪問調査
- 2017.3月上旬 先達コンサルテーション
- 2017.3月中~下旬 成果報告会
- 2016.7.21 (木) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 参観から3日後
- 2016.8.30 (火) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 2016.9.20 (火) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 2016.10.19 (水) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 実施から3日後
- 2016.12.14 (水) リアルタイム・ジャーナル締切日
- 実施から3日後
- 2017.2月~3月 隔日日から3日後
- 2017.3.17 (金) 課題レポート締切日





### 1. オリエンテーション -PFPF/NFP へようこそ

2016年度プログラム参加者の顔合わせです。自己紹介、大学教員という職に関する講義、比較の目を育てるワークショップ、事務手続き等を行います。これらの活動を通して参加者は、お互いのことを知り、これからの活動における準備を始めます。

- PFPF/NFPの目的に関する説明
- 大学教員の役割と大学教育に関する講義
- ランチ懇親会
- 比較の目を育てる：ワークショップ
- 今後の日程に関する説明
- リフレクションの理論と実践方法（e-ラーニング）

**日時** 2016年7月16日（土）10:00～17:30  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

### 2. 授業を見る聞く学ぶ

学内外の経験豊かな先生の授業を参観し、自分の教育活動を考えるヒントを得ます。授業後の検討会では、授業内の教育活動や授業前の準備などについて授業実践者に直接質問・ディスカッションします。最低3つの授業を参観しましょう。

前期の授業分と後期の授業分を2回に分けて参観希望調査をとりまわす。メールにて希望調査票を配布しますので、指定された締切内に提出してください。

他分野の授業の参観から得られる気づきもたくさんあります。積極的に参観しましょう。

**日時** 2016年7月～2017年1月  
**場所** 別途通知



### 3. 授業デザインとシラバス設計

大学の授業における目標、活動、評価について、シラバス作成を通して考えます。参加者は、事前課題として自分が将来担当する全学教育の授業科目を想定したシラバス作成に取り組みます。

- 学生の学習を理解する
- 授業の全体を構想する
- シラバスの要素を理解する
- 教育活動をシラバスに表現する

**事前課題** 参加にあたって、現在使用しているシラバス、あるいは大学の共通教育（東北大学の場合は「全学教育」）において将来自分が担当する授業を想定して作成したシラバスをメールで提出すること。書式は問わないが、各自大学が指定する項目や書式を調べたうえで作成すること。 **締切：8月19日（金）、送付先：tu-pfp@ihe.tohoku.ac.jp**

**講師** 申本剛  
（東北大学 高度教育・学生支援機構 准教授）  
**日時** 2016年8月25日（木）13:00～17:00  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

### 4. 授業づくり：準備と運営

学習者が集中し、十分に理解できるように授業をつくるためには何に留意し、どのような準備をして、いかに授業を展開すると良いのでしょうか。一回の講義形式の授業を念頭において学びます。

- 理解の認知プロセス
- 知識の活性化
- メンタルモデルの構築
- 気持のコントロール

**講師** 島本俊亮  
（東北大学 災害科学国際研究所 教授）  
**日時** 2016年9月14日（水）13:00～15:00  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

### 5. 本当のかしこさとは何か—感情知性と大学教育

大学教育では専門知識を身につけるために、「理論的」であることが重視され、「感情」は排除されてきましたが、豊かな感情を育てることは柔軟な思考力を育てるうえで重要な課題であることが明らかになってきました。感情知性と大学教育について学びます。

**講師** 箱田裕司（京都女子大学 教授）  
**日時** 2016年10月14日（金）15:00～17:00  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター4階 大会議室

### 6. マイクロティーチング

「授業デザインとシラバス作成」で作成したシラバスから授業1回分を選んで90分の授業計画を立て、そのうちの10分程度を実際に行います（これをマイクロティーチングといいます）。他の参加者からコメントをもとに、自分の授業計画をふり返ります。事前課題として、マイクロティーチング・プランの作成に取り組みます。

- 授業計画、設定の共有
- 7分間の実践
- フィードバック、ディスカッション
- 授業映像を利用したセルフリフレクションの実施

**日時** 2016年11月のいずれか一日の午後  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス（別途通知）

※事前課題があります。マイクロティーチングガイドを参照のこと

### 8. 模擬授業

マイクロティーチングでの経験をもとに、30分程度の模擬授業を実施し、他の参加者や先達教員からコメントをもらいます。マイクロティーチング同様、授業の様子はビデオで撮影し、後日、自分の授業を見直す際に利用します。

- 授業計画、設定の共有
- 模擬授業の実践
- フィードバック、ディスカッション
- 授業映像を利用したセルフリフレクションの実施

**日時** 2017年2月上旬のいずれか一日、午後  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス（別途通知）  
※事前課題があります。マイクロティーチングガイドを参照のこと

### 9. 先達コンサルテーション

プログラムへの参加を通して生まれた疑問や、自らの課題について、先達教員との個人面談を実施します。また、グループディスカッションを通して、参加者全員と共有したいトピックなどについて議論する時間もあります。

**日時** 2017年3月1～中旬のいずれか一日、午後  
**場所** 東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟  
CAHE ラウンジ 他

### 10. 自己省察力を養う—リフレクティブ・ジャーナルの執筆

プログラムで経験したことを通じて、大学教員という仕事や大学教育に関する考え方がどのように発展していったのかをリフレクティブ・ジャーナルに記録し、自分なりの教育観を構築します。各セミナー、ワークショップ受講後に執筆します。

**日程** プログラム実施期間中随時  
※リフレクティブ・ジャーナル作成ガイドを参照のこと



## 11. 課題レポートの執筆

本プログラムでは、課題レポートの提出により、プログラムの成果報告を求めます。下記の欄間について、研修で取り上げた内容や作成したプレゼンテーション資料を適宜参照しながら4,000字程度でまとめ、メールで提出して下さい。

### [PFPF]

- 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はとあるべきだと思いますか。」

### [NFP]

- 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はとあるべきだと思いますか。」

提出締切 2017年3月19日(金) 17:00 (厳守)

提出先 大学教育支援センター  
tu-pfpf@he.tohoku.ac.jp

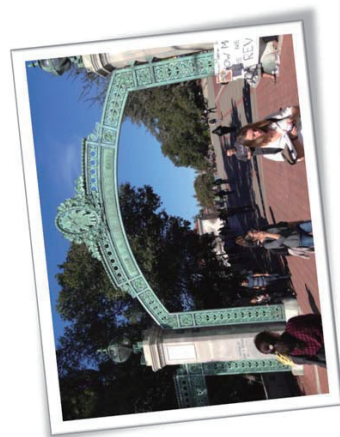
## 12. 成果報告会

先達教員やプログラムのOB/OGを招いて、2016年度Tohoku U. PFPF/NFPの成果報告を行います。特に、プログラムを通じて考えたことなどを共有し、大学教員職や教育に関する理解を更に深めることを目的としています。最後に、東北大学 高度教養教育・学生支援機構より修了証の授与を行います。

- プログラムでの経験に関する共有、ディスカッション
- 先達教員からのコメント

日時 2017年3月中～下旬のいずれか一日、午後

場所 東北大学 川内北キャンパス (別途通知)



## ISTU の利用

ISTU (東北大学インターネットスクール)とは、東北大学の全正規授業に標準対応したeラーニングシステムです。東北大学に在籍する全ての学生、教職員が利用できます。ISTUでは、次のことが実施できます。

- 講義資料の閲覧、ダウンロード
- レポートの受け取り、採点、返却
- 担当教員からのお知らせの通知
- TAによる更新アシスタント

本プログラムでは、ISTUを活用して、各セミナーの動画配信や参考資料の配布等を実施します。これにより、セミナーの内容の復習が可能になるとともに、やむを得ず欠席したセミナーの自主学習が可能になります。

これまでもISTUを利用したことがある方はもちろん、初めて利用するよう方は、東北大学が提供している学習のための設備や仕組みについて知るためのよい機会になるでしょう。自分が教員として利用することも時には想定し、その使い勝手や機能についても考察してみるとよいかもしれません。

### <ISTUにログインする>



ISTUのログイン画面

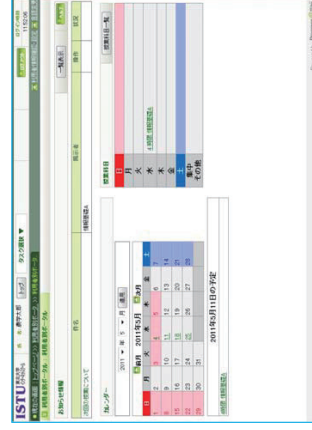
ISTUのURL: <https://xapp.istu.jp/>  
ISTUのトップページからログインします。

ユーザIDは、

学生：学籍番号 (小文字)

教職員：東北大 ID

※東北大学以外の方には別途IDを発行します



ISTUの利用者ポータル画面

利用者ポータル画面は全ての機能にアクセスできるページです。

画面右側上には、自身が担当する授業科目の一覧、右側下には受講授業科目の一覧が表示されています。NFPは右側下の受講授業科目の「集中・その他」に表示されます。科目名をクリックすると、各授業のページに遷移します。

### 【オプション】国内他大学訪問調査

自身の置かれている環境や、その特徴を理解するためには、多様な具体例を知り、それと対比しなから理解を深めることが重要です。オプションとして設定している国内他大学訪問調査では、立命館大学等(予定)を訪問し、授業参観や、教員・学生とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などについて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します。

- 訪問先大学の歴史・運営・文化・課題
- 訪問先大学の授業参観
- eラーニング・LMS等の見学
- 訪問先大学のPFPF参加者からの討議・懇談

日時 2016年10月下旬(2泊3日)

### 【オプション】海外他大学訪問調査

カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパスや授業を参観し、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかをフィールドワークします。GSI教育研究センターの講師陣と共にバークレーの教育制度やTA制度などについて議論を通して学びます。また、自身の研究分野に応じてバークレーの研究者訪問やフィールドワークを実施します。

- 教授学習、倫理に関するセミナー
- 授業参観
- フィールドワーク(自身の分野の研究者訪問、授業参観)
- プレゼンテーションによる成果発表

日程 2017年2月下旬～3月上旬

場所 カリフォルニア大学バークレー校

※12月～フィールドワークで訪問したい現地研究書への予約を開始します。各自で訪問したい研究書名・所属・連絡先(候補を3～4名分)リストアップしておいてください。予約取りは、まず運営スタッフからメールでフィードバックを取った後、各参加者に引き継ぎます。詳細は、別途連絡します。

やむをえず参加できない場合には、事前にプログラム担当者(連絡先は本プログラム最終ページを参照)に連絡して下さい。代替日の設定や、自習用教材について指示します。

各セミナー、ワークショップの様子については、ISTU(東北大学インターネットスクール)を利用して動画配信します。復習や、欠席時の受講手段として各自活用して下さい。



## 先達教員による支援

参加者のみなさんが「大学教員の役割、仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる」ようになるために、大学教員の先輩である先達教員がみなさんの活動を支援します。先達教員は、それぞれ異なる専門を持ち、東北大学以外での勤務経験も持っています。プログラム実施期間を通して、みなさんは様々な先達教員と対話します。普段、関わることのない学問分野の先生方の話を聞くことができる貴重なチャンスです。

### <支援内容>

- 授業参観への授業提供とディスカッション
- 模擬授業におけるフィードバック

### <先達教員>

#### 澤谷 邦男 先生



東北大学名誉教授、イノベーション戦略推進本部、レジリエント社会構築イノベーションセンター副センター長・特任教授、工学博士。専門は電磁波理論、アンテナ工学、電波伝播工学、無線通信工学。

#### 邑本 俊亮 先生



災害科学国際研究所・教授、博士（行動科学）。専門は、認知心理学、教育心理学。言語理解に関する研究、テキストからの学習に関する研究、災害時の認知・判断・行動と効果的な防災教育に関する研究に従事。

#### 関内 隆 先生



高度教養教育・学生支援機構 高等教育開発室・教授。専門は、イギリス近代史、社会経済史。ジェントルマン資本主義論研究、チェンバレン・キーンバーン研究、リベラル・ユニオニスト研究に従事。

#### Todd Enslin 先生



高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育開発室・講師。専門は、応用言語学（Curricular Innovation, English for Specific Purposes, Business English）。

#### 佐藤 智子 先生



高度教養教育・学生支援機構、准教授。学習支援センター副センター長。博士（教育学）。専門は社会教育、教育行政学。生涯学習のための連携・協働に関する研究に従事。

#### 平澤 典保 先生



薬学研究科 医療薬学専攻・教授。博士（薬学）。専門は、生物系薬学。アレキサンダー・生体学習機構の増悪化機構の解析と治療薬の開発。薬剤師教育プログラムの開発に従事。

#### 永吉 希久子 先生



文学研究科 准教授。博士（人間科学）。専門は社会学、社会意識論、差別、移民政策、移民の社会統合に関する研究。新任教員プログラム（2011年度 Tohoku U. NFP）の初代参加者。

#### 佐藤 勢紀子 先生



高度教養教育・学生支援機構 言語・文化教育開発室・教授。専門は日本思想史、日本文学、日本語教育。平安文学における仏教思想、アカデミック・ジャパニーズの教材開発、外国語としての日本語の教授法開発に従事。

#### 佐藤 一樹 先生



医学系研究科保健学専攻・助教。博士（保健学）。看護師、保健師。専門は緩和ケア、終末期ケア、がん看護。主に緩和ケアの質評価に関する研究に従事。国立がんセンター中央病院勤務を経て2010年4月より現職。

#### 羽田 真史 先生



高度教養教育・学生支援機構、教授。大学教育支援センター長。専門は、大学史、大学経営論、高等教育論。大学教員の能力開発、学問的誠実性研究に従事。

## 修了要件



プログラムのすべてを修了した参加者には、高度教養教育・学生支援機構より、修了証を授与します。修了証は、下記の修了要件を満たすと評価された場合のみ、発行します。

- 全ての活動に参加すること（欠席の場合の対処法については、担当者の指示にしたがうこと）
- 全ての課題を提出すること（リフレクティブ・ジャーナルの記述、シラバスの提出、課題レポートの提出）

## お願い

### <写真・動画の撮影とその使用>

ウェブポスターなどの広報や報告書の作成において、プログラム期間中に撮影した写真や動画を利用します。参加者のみなさんに不利益が生じないよう細心の注意を払って使用します。

### <提出物の共有と公開>

リフレクティブジャーナルやアンケートの結果は、運営側および先達教員らと共有させていただきます。加えて、課題レポートは報告書に収録するとともに、成果報告会において、全参加者と共有いたします。

### <アンケート、インタビューへの協力>

Tohoku U. PFFP/NFP はみなさんの意見や提案を取り入れながら日本の大学におけるモデルとなるようなプログラムの開発に取り組んでいます。プログラム実施期間中、実施終了後に各種アンケートや聞き取り調査を行うとともに、プログラム終了後も交流会のご案内の配信や、各種セミナー運営へのご協力をお願いをすることがあります。プログラム開発に対するみなさんの積極的な貢献を期待しています。

### <提出物・アンケート結果等の研究利用>

リフレクティブジャーナルやアンケート、インタビューの結果等をデータとして利用し、各種報告や研究論文として発表する場合があります。もちろん参加者の個人名が特定されるかたちでの発表はしません。参加者のみなさんに不利益が生じないよう細心の注意を払って使用します。

上記のそれぞれの事項について、ご理解、ご承諾、ご協力いただけますようお願いします。

## PDPonline のご紹介

PDPonline では、東北大学 高度教養教育・学生支援機構が開催している PD プログラム（専門性開発プログラム）におけるセミナーの様子を動画配信しています。インターネット環境があればどこからでもアクセス可能です。ぜひ視聴してみてください。

URL: <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/PDPonline/>

## 最後に

本プログラムの運営担当は次の通りです。プログラムに関する質問や、提案、ISTU の利用に関するお問い合わせなどは以下にご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Tohoku U. PFFP/NFP 担当

川内北キヤンパス 川北合同研究棟 201 高度教養教育・学生支援機構 事務室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

Email: [tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp](mailto:tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp)

Tel: 022-795-4471

Fax: 022-795-4749

# リフレクティブ・ジャーナルガイド (フル)

## 東北大学 新任教員プログラム 大学教員準備プログラム 2016

Tohoku University **New Faculty Program**

Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**



東北大学 高度教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

### 教育観を構築する—リフレクティブジャーナルの作成—

プログラム期間中に学んだこと、感じたことなどを記録していきましょう

#### リフレクティブジャーナルとは

Tohoku U. PFFP/NFPでは、プログラムを通して、大学教員という仕事や大学教員に関する自身の考え方がどのように発展していったのかを記録し、自分なりの教育観を構築します。プログラムの実施期間を通して、「**大学教員の役割、仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる**」ようになることを目的とし、このためのツールのひとつとして、リフレクティブジャーナル (Reflective Journal) の執筆に取り組みましょう。

リフレクティブジャーナルとは、自分の経験・体験・思考をふり返り、意図的に吟味した内容について記していく日誌を意味します。

最終レポート課題を念頭に置きつつ、本ガイド4ページの「執筆のヒント」を参考にして、国内セミナーや授業参観、マイクロティーチング、合宿セミナーへの参加を通して考えたこと、感じたことなどを記述していきましょう。最終レポート課題は以下の通りです。

#### ＜最終レポート課題＞

PFFP: 「学生にとって、大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」

NFP: 「自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、東北大学の教育はどうあるべきだと思いますか。」

#### eラーニング教材

リフレクティブジャーナルの執筆に取り組む前に、その意義を解説した eラーニング課題に取り組みましょう。各自 ISTU にアクセスし、「[必修]リフレクシオンについて」にアップロードされている動画を視聴してください。所要時間は 35 分程度です。

この eラーニング課題は必修です。ISTU に学習状況が記録されます。視聴を終えていないと、本プログラムの修了判定時に修了が認められませんので、各自必ず取り組むようしてください。

ISTU へのアクセスの方法については、オリエンテーション時に配布したファイルの中に入っているプログラムを参照してください。

受講に支障がある場合、動画が視聴できない場合などには、スタッフまでご連絡ください。

## 先輩たちの声

プログラムのOB/OGからは、リフレクティブジャーナルに関して次のような声が寄せられています。

このプログラムに参加する前は、リフレクティブジャーナルというものを知らなかったため、何かのセミナーを受講するとまじり書きのメモだけが残り、だんだんに学んだことを忘れていくのが常だった。しかし、頭の中にもややと残る記憶をしっかりと文字化すると、意外にも頭がすっきりすることがわかったのと、あの時知ったことは何だったのだろうかというときにすぐに見返せるジャーナルがあると便利なのを知ったので、プログラムの最初のころから自分のリフレクションを大事にしようと思えた。

リフレクティブジャーナルは学習の有効性を高める上で大変効果的であると思います。自身の教育観の言語化という観点からは、「書くこと」は必須であると思いますので、有意義な取り組みでした。

日々見るものについて「これは教育としてはどうだろう」と考えるようになり、これが一歩の変化かなと思います。学習者にとどの程度判断を委ね、どの程度導くなど、日常から学ぶことはとても多いように思います。記述を伴わないリフレクションの機会が増え、自身の思考や感情に関して昔より自覚的になったと思います。

## 先達教員との面談

Tohoku U. PFFP/NFP では、教育経験の豊かな先達教員らとの交流を通して、あなたの教育観についてさらに考えを深める機会を提供します。先達との面談では、あなたのリフレクティブジャーナルへの記述内容に対するコメント、アドバイスのフィードバックが受けられます。先達からの助言、問いかけをもとに、さらに自分の考えを深めていきましょう。面談の日程については別途通知します。



## リフレクティブジャーナルの提出スケジュール

リフレクティブジャーナルは、次に示す各セミナー、イベント後に書きましょ。提出期限は、それぞれ**3日後**（基本的に土日を除く）に設定しています。また、これ以外にも、リフレクティブジャーナルにつづりたいことがあった場合には、自由に作成してかまいません。

開催日	行事名	提出期限
① 2016.7.16 (土)	PFFP/NFP オリエンテーション	2016.7.21 (木)
② 2016.7月 ~2017.1月	授業参観「授業を見る聞く学ぶ」	参観から3日後
③ 2016.8.25 (木)	セミナー「授業デザインとシラバス作成」	2016.8.30 (火)
④ 2016.9.14 (水)	セミナー「授業づくり：準備と運営」	2016.9.20 (火)
⑤ 2016.10.14 (金)	セミナー「本当のかしここととは何かー感情知性と大学教育ー」	2016.10.19 (水)
⑥ 2016.10月	オプシオン：国内他大学訪問調査 (事前セミナー含む)	実施から3日後
⑦ 2016.11月	マイクローチーニング	実施から3日後
⑧ 2016.12.9 (金)	コーチング技術を活用した院生指導	2016.12.14 (水)
⑨ 2017.2月	模擬授業	実施から3日後
⑩ 2017.2月~3月	オプシオン：海外他大学訪問調査 (事前セミナー含む)	実施から3日後
⑪ 2016.3月	先達教員によるコンサルテーション	実施から3日後

何らかの理由により、各種セミナーに出席できない参加者のために、セミナーを収録した動画コンテンツを ISTU（東北大学インターネットスクール）を利用してオンラインで配信します。やむを得ず出席できなかった場合には、動画を見てリフレクティブジャーナルを執筆して下さい。ISTU の利用方法については、別紙プログラムの「ISTU の利用」を参照してください。

動画は、セミナー開催のおおよそ 3 日後までに配信できるように準備します。この場合、リフレクティブジャーナルの提出期限は、動画の配信開始日から 3 日後とします。該当者には、動画配信の開始について個別にご案内します。

学会等で長期出張がある場合などは、提出期限について相談に応じます。大学教育支援センターまでお問い合わせください。

## リフレクティブジャーナル執筆のルール

以下のルールに従い、Word などを利用して作成してください。

- ルール① **タイトル (ファイル名) には、日付と氏名を入れる**
- ルール② **本文のはじめに、表題 (任意) , 日付, 氏名を入れる**

リフレクティブジャーナルには、テキストの他、適宜写真や参考資料を入れてもかまいません。自分の学びの様子、過程を後にふり返ることができるよう、工夫しましょう。

## リフレクティブジャーナルの提出方法

リフレクティブジャーナルは、下記のアドレスまでメールに添付して送信してください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

PFFP/NFP 担当 宛

Email: [tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp](mailto:tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp)

提出したジャーナルにコメントが欲しい場合は、その旨をメールに明記のうえ提出してください。

## リフレクティブジャーナル執筆のヒント

自分自身の経験をふり返り、学びの軌跡を記すためのヒントです

### なぜリフレクションを重視するのか

教員養成 (教師教育) の文脈では、リフレクションの重要性について次のような説明がなされています。

今後のキャリアにおいて直面するであろうすべての種類の状況に適応できるように養成することは不可能である (Harrington, Quin-Leering & Hodson 1996)

学び方を学び、適応し変化し続ける方法を学び、安定した知識などないことを知り、知識を求め続けることだけが安定性の基盤となりうることを知った人間だけが教養ある人間であるとする (Rogers 1969)

このように、変動する社会において我々は、自身の経験から学ぶ意思の強い姿勢を発達させることが必要であると考えられています。教員がこの姿勢を身につけ、リフレクションを通して自分たちの経験から学ぶスキルを獲得したなら、いわゆる「成長し続ける力」を持つことになるといえます (Korthege 2001)。

大学教員が対応すべき状況、学生はそれぞれ多様です。リフレクションを通して、新たな課題に直面した時にも、その経験から学び、その結果を以降の実践にも活かすことのできる姿勢を養うことで、プログラム期間終了後にも、学び続けることのできる教員としての下地作りになると考えています。

### なぜリフレクティブ・ジャーナルを書くのか

Tohoku U. PFFP/NFP では、あなたがプログラムを通して自分なりの教育観を構築していくための手立てとして、リフレクション (Reflection) を重視しています。

リフレクションは、日本語では「内省」「省察」「ふり返り」などと翻訳されますが、分野によってさまざまな定義がなされています。

自分自身の考えや行動に関して、意図的に吟味するプロセス  
(認知科学辞典 2002)

自分の行動や思考を再検討し、それらを生み出した知識を再構成する活動  
(平嶋ら 2004)



さまざまな経験を繰り返す過程で、その活動の論理を引き出す思考  
(教育心理学辞典 1996)

つまり、リフレクションとは、自身の経験をもとにした学びの方法論であるといえます。

自身の経験をふり振り返り、何かに気付いたり、後悔したり、新しい策を思いついたりすることは、何も特別なことではなく、我々が日常的に実践している行為のひとつであるといえます。しかし、それらは無意識のうちに行われていたり、後からその内容を思い出そうとしても困難な場合が少なくありません。そこで、リフレクションの様子を外化してさらに深めるために、他者との対話やビデオ視聴、マインド・マップを利用した方法などがこれまでに開発されてきました。Tohoku U. PFFP/NFP では、あなたのリフレクションの様子を外化するためのツールとして、リフレクティブジャーナルを用います。

リフレクティブジャーナルの利点は、自分の思考過程の外化だけではなく、人は、「記述する」という行為によって、また新たな気づきや思考の深まりが得られるといわれています。

プログラム期間中のそれぞれの時点における、あなたの素直な思いや、発見、思考したことを記述し、後で読みかえした時に、自身の考え方の変遷がたどれるようにしましょう。

### リフレクティブジャーナル執筆における留意点

リフレクティブジャーナルには、Tohoku U. PFFP/NFP における経験を通して

- 感じたこと
- 考えたこと
- 思い出したこと
- 驚いたこと、意外だと思ったこと
- 現時点での課題や疑問
- 今後のための新しいアイデア

などについて、どうしてそのように受け止めたかを交えて記述しましょう。後で自分で読みかえした時に、その状況や思考の対象がわかるようになっているとよいでしょう。

特に字数の制限や、本ガイドの 4 ページに記載したルール以外の書式などは設けません。

以降のページは「付録」です。

### リフレクティブジャーナルの執筆に迷ったときには…

Tohoku U. PFFP/NFP では、ジャーナルの書き方について、厳密なあり方を提示することはしません。そもそも、その在りようは自由であり、人それぞれであってよいと考えているからです。もし、どのように書いたらよいかわからない、書いたけれど、これで本当によいかどうか不安だ、というときには、以降のページを参考にしてみてください。

### ＜リフレクションのプロセス＞

リフレクションにおける思考のプロセスは、多くの研究者によって多数のモデルが提唱されています。その一例として、Gibbs (1998) のリフレクティブ・サイクルを下記に示します。

リフレクションのプロセスは、何か起こったのかの描写→それに對する感情→評価→分析→結論付け→今後の対処法の創出→…であることが説明されています。自身のリフレクションのプロセスを見直すヒントになるかもしれません。(もちろん、ジャーナル内のすべての記述がこのプロセスを網羅している必要はありません。)

### ＜レポートとリフレクティブ・ライティングの違い＞

みなさんは、普段、客観性に配慮してアカデミックな文章を書いていると思います。しかし、本プログラムで取り組むリフレクティブ・ライティングでは、必ずしもそれにとらわれる必要はありません。

下記にレポートとリフレクティブ・ライティングの違いをまとめます。

	レポート (学部レベル)	リフレクティブ・ライティング
課題・テーマが…	明確に設定されている	拡散的で、不明瞭でありうる
課題・テーマは…	私的なことではない	私的なことでありうる
課題・テーマは…	他者から与えられる	自分自身によって設定される
記述の目的は…	事前に設定される	方向性がゆるのみ
思考内容は…	課題やテーマによって規定される	自分自身が関連のあると思うものなら何を含めてもよい。自身のセクスによる
結論は…	ひとつ示される	字んなこと、さらなるリフレクションが必要な領域が結論として示される
終わりは…	ある。通常単発ものであり、終わりがあって提出される	長い期間にわたるプロセスの一部として取り組まれる
体裁は…	通常、導入・議論・結論といった構造化がなされている	必ずしも明確な構造化は必要としない。ただし、冒頭に多少の説明と過程についての記述は必要とされる
記述形式は…	客観的なものである。通常一人称は使わないで書く	比較的主観的で、一人称を使って書く
取組む意義は…	通常、字んことをアピールするために書く	学ぶために書く
思考過程は…	きちんと整理された思考過程を表現する	思考や学びの経過そのものであるため、必ずしもきちんと順序立てて記述する必要はない

Moon (2004) を一部改編

### ＜リフレクティブ・ジャーナルの記述例＞

ジャーナルは、つれづれなるままに書いてもよいですし、章立てて、きちんとレポートや論文の体裁で提出してもかまいません。また、ボトム調であってもよいでしょう。

ただし、下記のような記述は、後で見返しても役に立たないので避けましょう。

今日のセミナーに参加して〇〇の知識が得られたことは、とてもよかったです。まだまだわからないことがたくさんあるので、これからも頑張ってお勉強しようと思った。このような機会を設けて下さって、ありがとうございます。

上記は、セミナー後の素直な感想と思われる。ここから効果的にリフレクションを進めるためには、

- 「〇〇の知識」を知る前には、自分はどのように考えていたか？
- 「〇〇の知識を得られてよかった」と思ったのはなぜか？
- 「まだまだわからないこと」とは、例えばどんなことか？

といった自問自答を行い、その答えを書き綴っていくとよいでしょう。

下記は、セミナーでの経験の描写に始まり、自身の気づきに触れながら、これまでの経験や考え方を、新しく字んだことを結びつけながら記述が行われている例です。

インストラクショナル・デザイン (ID) は、教育効果をあげる授業設計の方法で、ターゲットである学生を分析し、授業の目的を決め、教材を選び、構成、評価方法を決め、授業を実践することを目的としているらしい。はじめに専らだ方法論で、非常にわかりやすく授業を考えるときに利用できると感じた。

これまでに授業を担当したことがないので、授業というとなにかと「自分に教えられることは何か」から考え始め、活動としてやると面白と思うことを中心に授業を構成するイメージをもっていった。また、教育という「情熱をもって教える」「学生の関心を引くように話す」というパフォーマンスの部分は気が引けていたが、今回のワークショップを受けて、教育もって理論的に考えることが出来るのだとわかった。例えば、講義の目標をきめ、それに適した評価方法を選び、目標を達成するように教材を選び、15回の授業の配分を決める、というようなことを通じて、あらかじめ設計することができることがわかったのは新鮮な発見だった。

ファシリテーターの〇〇先生が話した内容が心に残った。「授業は生き物です。こちらが設計した通りにのってくれる時もありますが、乗ってこないこともある。そういう体験をすると落ち込みます。私はいまでもうまく行かない授業があると落ち込みます。でも、それは仕方ありません。そのときに、それは自分の設計が悪かったのか、それとも、別の要因があるのかをきちんと見極めることが大切です。それから落ち込んだ時は、同僚などに話を聞いて弱音をはいてもいいです。重要なのは、誰もがいきなりすばらしい教育者になれるわけではなく、いろいろな教育経験をして字んているのだということを感じておく事です。」この言葉を聞いて、出来る範囲内で準備をしなければ、現場の動きについていく事もできないと理解できた。

不明な点がある場合は気軽にファシリテーターに連絡してください。

### ＜リフレクティブジャーナルを執筆のヒントになる質問一覧＞

どうしてもジャーナルに書くことが思い浮かばない場合、自分が書いたジャーナルがこれだけのかわからない、といった状況になった場合には、下記の質問一覧を参照し、それに答えるかたちで執筆してみてください。

ただし、下記の質問を列挙し、それに就いてその回答のみを執筆するという形はお勧めしません。あくまでも、**自身のリフレクティブを深めるための、自分への問いかけの例**としてご利用ください。

※下記の質問は、あくまでジャーナル執筆のきっかけです。すべてのジャーナルがこれらの質問への回答を含んでいるべきであるという意味で提示するものではありません。

#### ■ オリエンテーション後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ オリエンテーションに臨む前の自分の気持ちはどうなりましたか？
- ▶ 上記の気持ちは、オリエンテーション後に変化しましたか？どのように変化しましたか？
- ▶ 参加者顔合わせでは、どのようなことを感じましたか？また、そう感じた理由は何だと思えますか？
- ▶ 他の参加者との交流で気づいたこと、感じたことは何ですか？それらは自分にとってどんな意味がありますか？
- ▶ 先達教員との交流で気づいたこと、感じたことは何ですか？それらは自分にとってどんな意味がありますか？
- ▶ 講義の内容で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ ワークショップでの経験で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 今後のプログラムに対してどのような期待をしていますか？どのような姿勢で臨む必要があると思いますか？
- ▶ オリエンテーションを終えて、プログラムに対する印象や姿勢は変化しましたか？どのように変化しましたか？

#### ■ 授業デザインとシラバス設計セミナー後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 事前課題としてシラバス作成に取り組む、どのような気づきがありましたか？
- ▶ セミナーの内容で驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 他の参加者との意見交換やディスカッションで気づいたこと、感じたことは何ですか？
- ▶ これまでのシラバスに対する理解に変化がありましたか？どのように変化しましたか？
- ▶ 今後、他者が作成したシラバスを見る機会があったら、どのような視点で見ようと思いますか？その理由は？
- ▶ シラバス作成における自身の課題は何だと思えますか？またその解決のためには何が必要だと思いますか？
- ▶ シラバス作成において自身が最も重視したこと、大切にしたいことは何ですか？その理由は？
- ▶ 同僚や後輩がシラバスについて質問してきたら、どんなことをアドバイスしたいと思いますか？その理由は？

#### ■ 他大学訪問調査後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 他大学訪問調査に臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？
- ▶ 他大学訪問調査に行く前と比較して自身に何か変化はありましたか？その理由は？
- ▶ 驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 他大学訪問調査を終えて、どのようなことを知っておくべきだったと思いますか？そのために何ができますか？
- ▶ 友人や家族に合宿セミナーについて感想を伝えるなら、どんなことを話しますか？どう伝えますか？
- ▶ 他の参加者との交流、意見交換やディスカッションで気づいたこと、感じたことは何ですか？
- ▶ これまでの大学教員の仕事、教育に対する理解に変化はありましたか？どのように変化しましたか？

#### ■ 授業を見る聞く学ぶ後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 授業を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 教員／学習者の様子や活動で、印象的なことはどんなことでしたか？なぜ印象的でしたか？
- ▶ 授業を見て、自身の授業にも取り入れたいと思ったことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 授業後のディスカッションで印象に残ったことは何ですか？またその理由は？

- ▶ 今後の授業参観で留意したい点、着目したい点はありますか？そう思った理由は？

#### ■ マイクロティーチング後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 事前課題としてプランの作成に取り組む、どのような気づきがありましたか？
- ▶ マイクロティーチングに臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？その理由は？
- ▶ マイクロティーチングをやってみて驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ フォシリターからのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？それに対してどのような対応ができますか？
- ▶ 他の参加者の実践を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ ビデオで自身の授業の様子を見て、どのような気づきがありましたか？
- ▶ 次回模擬授業に取り組む際に、どのようなことに気を付けたいですか？そのためにどうい対策が可能ですか？
- ▶ 次回の模擬授業では、どのような点に留意、着目して他の参加者の実践を観察しようと思えますか？

#### ■ 院生指導法セミナーのリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ これまでに院生の指導に関して考えていたこと、感じていたことにはどのような点がありましたか？
- ▶ セミナーを受講して驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？その理由は？
- ▶ 講師や参加者の発言や行動で印象に残ったことは何ですか？その理由は？
- ▶ 院生指導における自身の課題は何だと思えますか？またその解決のためには何が必要だと思いますか？
- ▶ 院生指導において自身が最も重視したこと、大切にしたいことは何ですか？その理由は？
- ▶ 同僚や後輩が院生指導について質問してきたら、どんなことをアドバイスしたいと思いますか？その理由は？

#### ■ 模擬授業後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 前回のマイクロティーチングの実践の時と比較して何か変化はありましたか？その理由は？
- ▶ 模擬授業をやってみて驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？その理由は？
- ▶ フォシリターや先達教員からのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？その理由は？
- ▶ 他の参加者の実践を見て驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ ビデオで自身の授業の様子を見て、どのような気づきがありましたか？
- ▶ 前回のマイクロティーチングの実践をビデオで見た時と今回とを比較して、変化はありましたか？
- ▶ 今後、実際に授業実践に取り組む際の自身の課題は何ですか？またその理由は？

#### ■ 先達コンサルテーション後のリフレクティブジャーナルのための質問

- ▶ 先達コンサルテーションに臨む前の自分の気持ちはどのようなものでしたか？
- ▶ 驚いたこと、気づいたこと、思い出したことは何ですか？またその理由は？
- ▶ 先達教員からのフィードバックで印象に残ったことは何ですか？その理由は？
- ▶ これまでの大学教員の仕事、教育に対する理解に変化はありましたか？どのように変化しましたか？



プログラム、リフレグティブジャーナル、ISTU等の利用に関するお問い合わせは下記までお寄せください。また、先達教員への質問がある場合にも、まず大学教育支援センターまでご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

(川内北キャンパス)川北合同研究棟 201

高度教養教育・学生支援機構 事務室)

Email: [tu-pfjp@ihe.tohoku.ac.jp](mailto:tu-pfjp@ihe.tohoku.ac.jp)

TEL: 022-795-4471 FAX: 022-795-4749

## 先輩の知恵とは

Tohoku U. PFFP/NFP は、2016 年度でプログラム開始から 7 年目をむかえます。毎年、参加者・講師・先達教員のみなさんと複数回のアンケートと聞き取り調査を行い、寄せられた意見やアイデアを反映し、よりよいプログラムになるよう、継続的な改善をかねてきました。

運営スタッフの多くには、プログラムへの要望はもろろん、参加者自身の「もっとあーすればよかった、こーすればよかった」という「声」が多く寄せられます。プログラムへの参加をふり返った時点で、自身の取り組み方として「もったいない」と感じたら、もっと学べたのに！」という貴重な声です。

プログラムそのもののデザインや工夫で変えられることは、運営スタッフや講師に伝え、毎年改善に取り組んでいます。これらに加え、過去の参加者のアイデアや、ちょっとした「後悔の念」を次の年の参加者に伝える手段として、この「先輩の知恵」を作りました。

このガイドには、これまでのプログラム OB/OG のみなさんが寄せてくれた、プログラムを最大限に活用するためのアイデアを収録しています。

「こんなふうにしたら、もっとよかった（のに）！」というポイントを押さえて、プログラムでの活動がより一層盛り多いものになれば幸いです。

プログラム期間中、何度も開いて読みかえしてもらえようなら一冊になっただけはうれしいです。

なお、項目のうち「フルコース」のみに関連するものには

マークを付しました。



## 東北大学 新任教員プログラム 大学教員準備プログラム 2016

Tohoku University **New Faculty Program**  
Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**



東北大学 高度教職教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

## プログラム参加の姿勢

シヨートコースは7～11月まで、フルコースは7月～3月のほぼ一年を通じてプログラムが組まれているので、参加者側としては年間計画としてプログラムを俯瞰し、**一年後自分がどうなっているか、という意識で取り組むことが必要**だと感じました。これは最初のオリエンテーションの時から重々説明があり、今野先生からのメールでもその都度、今後のスケジュールについて説明がありました。しかしながら、あくまで自分の体験としては7月から11月あたりまで、「年間プログラム」という意識が欠け、単発の講習に参加するような気分であるときがありました。もし過去の自分にアドバイスできるなら、「**一つの繋がったプログラムに参加している**」という自覚を持って」と言いたいです。



まさにその通りです。特に最初のうちは、1カ月に一度開催される単発のセミナーをちょこちょこ受講している気分になるかもしれませんが。教育観の醸成、という大きな目標に取り組むためには、一見バラバラに見えるがちなセミナーのそれぞれを関連させながら、ミクロとマクロの両方の視点を往たり来たりしながら経験をふり返ることが大切です。



## 先達教員との交流

先の方とお話する機会は多く満足しています。欲を言えば、**もう少し面談の機会を頂きたかった**です。

プログラムの序盤ではあまりお話ができずにもっといたいことかと思えます。**もっと交流をもつて、研究室の身近な問題や、授業の話など些細なことでも相談すれば良かった**です。

先達の先生方は、オリエンテーションのランチョン懇親会、授業を見る聞く学ぶ、のそれぞれで交流の機会があります。フルコース参加者の場合には、これに加えて模擬授業、先達コンサルテーション、成果報告会のそれぞれでディスカッションの機会があります。

先達教員の先生方は、プログラムの趣旨に賛同し、参加者のみなさんの学びを支援しようという志を持ってくださった方々です。最初はなかなか話しかけづらいかもしれませんが、**ぜひ序盤から積極的に交流してみてください**。

また、先達コンサルテーションの際には、**予め先達の先生方に聞いてみたいことを整理したうえで臨むと、より有益な時間が過ごせる**でしょう。



## 参加者との交流

【PFFP 参加者から】

**もっと新任教員の方々（NFP 参加者）と交流して、お話しすればよかったです。**例えば、困っていることや行っている工夫を聞けたら良かったなと思っています。

本プログラムでは、大学院生と新任教員がともに学びあう場を提供するために、台所で2つのプログラムを実施しています。

ぜひ積極的に交流し、学びあいの場として活用してください。





メンバー同士の交流は、海外他大学訪問調査に行くまでの間には少なかつたと思います。毎回セミナー後、あるいはジャーナルを書いた後 30 分ぐらいの**交流会でもあればいいかもしれない**と思いました。

(これは個人的なわかままだが)メンバー同士で飲みに行くことをはじめの方で軽く提案してもらえると、声をかけやすいのにな、と思った。自分からみんなに声をかけると図々しいのではないかと悩んでいた。



オリエンテーション後の OB/OG との交流会や、成果報告会後の懇親会などは、プログラム運営側で企画をしていますが、参加者の負担にも配慮し、毎回のセミナー後といった頻度では実施していません。

もちろん参加者のみなさんから、そうした機会を企画・実現したいという声があつた場合には、ぜひ実現してもらいたいと思います。

## 授業を見る聞く学ぶ



授業参観は思い切って**異分野の授業をいろいろ選択すれば良かった**と思います。自分の領域に近い科目、専門ではなくとも非常勤などで教えることがありそうな科目、異分野の科目を選択すると、自分の授業に活かせる技術や方法も学べたろうと思います。



まさにその通りです。自身の専門分野に近い科目はもちろんですが、**全くの異分野の授業の参観にも挑戦してみようことを強くおすすめします**。例年、異なる分野の授業参観は大変好評で、新鮮な発見や、これまで知らなかった教授手法に触れることができたこの声が寄せられています。

今どきの学生の反応や、留学生の様子、そしてその交流の様子について観察するには、語学の授業の参観もおすすです。学生の発言や主体的な取り組みを促すために、授業者によるさまざまな工夫が凝らされており、教員と学生のインタラティブなやり取りを多く観察することができます。

ぜひ参観してみてください。



参観したい授業はたくさんあったのですが、すべてを希望するとうなるのかわからず、**とりあえず最低限の教しか希望しなかつた点を後悔しました**。

「授業を見る聞く学ぶ」では、一人当たり 3 つ以上の授業を参観することを義務付けています。3 つ以上の授業を希望した場合、**必ず出席すべきメインの 3 つの授業を指定したうえで、その他にオプション（選択参観）として、都合に合わせて参観可能な授業を設定します**。

オプションの授業の参観は、自身の都合に合わせて選択できるため、授業参観がたくさんありすぎて困るようなことにはなりません。安心して、興味がある授業には積極的に参観希望を出してください。



授業見学については、事前に**見学授業の情報**について説明があればさらによかつたと思います。



「授業を見る聞く学ぶ」については、希望調査時にシラバスの概要一覧を配布しているとともに、**参観の前日までに授業に関する資料やシラバスをメールで参加者にお送りしていただきます**。これらに事前を目を通してから参観するとともに、当日は各自プリントアウトして持参すると、より授業内容や授業者の活動に着目した観察ができるでしょう。



## ISTU を利用した復習



メモを取りながらセミナーに参加はしていますが、後から復習する際に、一体何が議論されていたのか明確には思い出せないときがありました。そんなときに、**ISTU を利用してセミナーの内容を復習しました**。これはとっても便利でした！これまでISTU が存在すること自体知らなかったことを大変ありがたいと思いました。



プログラムの講義部分については、比較的欠席することが多かったため、ISTU には大変助けられました。ISTU だからといって、学習に困難があったということはありません。配信される動画がきれいに編集されていることは学習の大きな助けとなりました。**途中で動画を止めて確認をしたり、考えたりすることができる点は、動画による学習の利点であると思います。**



セミナーの様子は、セミナー終了後概ね3日後以内にISTUにおいて動画配信するようになっています。やむを得ず欠席してしまった場合や、復習に活用できます。

配信は、プログラム終了の3月末まで行っています。

※ISTUの使い方は「ガイド」をご参照ください。

ISTUにおける動画配信の様子→

当日のパワーポイント資料と講師の映像から成るコンテンツとして提供しています。

## セミナーの資料



セミナーやワークショップなどで用いられた講師陣のパワーポイントは、すべて事後にデータで欲しかった。という方が欲しい！

すべてISTUからPDF形式でダウンロードできます。

一部資料は、著作権や講師の都合上、インターネット経由での配信が不可の場合もあります。それ以外の資料については、セミナー終了後3日以内にISTUに掲載しています。ぜひ活用してください。



## リフレクティブジャーナル執筆のコツ



特に受け身になりがちなレクチャーの回は、後からジャーナルを読み返すことが多々ありました。ジャーナルの中で**到来につなげるような課題や疑問を一つ二つ書き残しておく**と、セミナーが終わったあとに自分が得たもの、あるいは考え方が変わったことを実感できるかもしれません。



「リフレクティブジャーナル作成ガイド」の付録にも解説がありますが、リフレクションでは、**自身が体験したことを綴るだけでなく、それをふり返りながら、最終的には「今後の対処法の創出」まで行き着くことが理想**とされています。ですが、毎回のセミナー後に必ず対処法や改善策が見いだせるとは限りません。その時には、「現時点での自身の課題や疑問を書き残していく」という方法が有効です。

何を書いたら良いのかわからない場合には、リフレクティブジャーナル作成ガイドを見直して、付録にある質問一覧などを参考にするとよいでしょう。





リフレクティブジャーナルは学習の有効性を高める上で**大変効果的**であると思います。ぜひ、全ての参加者のみなさんに**まじめに取り組んでもらいたい**と思います。自身の教育観の言語化という観点からは、「書くこと」は必須であると思っております。有意義な取り組みでした。



リフレクティブジャーナルを書くのとは、**大違い**だと気づきました。このプログラムに参加する前は、リフレクティブジャーナルというものを知らなかつたため、何かのセミナーを受講すると走り書きのメモだけが残り、だんだんに学んだことを忘れていくのが常でした。しかし、頭の中にもやもやと残る記憶をしっかりと文字化すると、意外にも**頭がすっきり**することがわかったのと、あの時知ったことは何だっただろう？というときに**すぐに見返せる**ジャーナルがあると便利なのを知ったので、プログラムの最初のころから**自分のリフレクションを大事にしよう**と思えました。



かなり早めの段階で、**リフレクションと科学論文執筆は非常に似たプロセス**であることに気がつきました。リフレクションの手法を身に付けることは教育者としても研究者としても有益と捉えることができましたので、**熱意を持って取り組む**ことができました。

リフレクティブジャーナルの執筆を通して自己省察力を養うことは、本プログラムが最も大事にしているプロセスのひとつです。研究や日々の生活の間をむっつり時間を作り、プログラムに参加しているみなさんによっては、時にはわずらわしく思う課題がもしもありませんが、プログラムOB/OGからは「やっておいてよかった」という声が毎年寄せられています。  
ぜひこの機会にリフレクションの習慣を身につけてもらえると嬉しいです。



### プログラム以外のセミナー



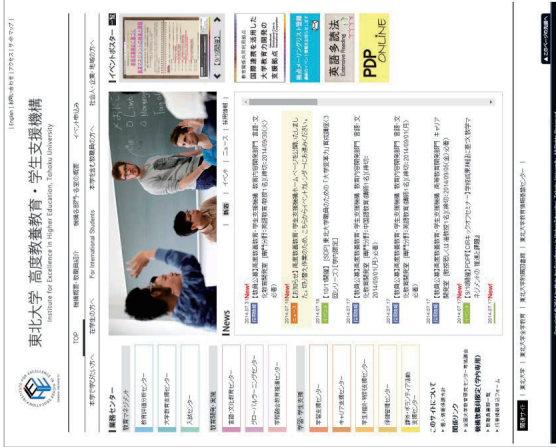
PFFP/NFP 参加期間中に開かれていた学内の他のセミナーについても、センターの活動や PFFP の内容に関連があるものは紹介があると思います。



高度教養教育・学生支援機構では多くの PD (専門性開発) セミナーを開催しています。これらの中には、もちろん、みなさんに有益なものもたくさんあります。既に参加したことのある人には、毎回メールリストでご案内がしていることと思います。

これらセミナーの情報は、高度教養教育・学生支援機構のウェブサイトで配信しています。ぜひ定期的にアクセスしてみてください。

高度教養教育・学生支援機構ウェブサイト <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/>



## 【フルコース】参加者向け

### 海外他大学訪問調査



日程表だけでは、現地バークレーでのような活動が待っているのか想像することが難しかったです。そのため現地に到着して、市内観光などに時間を費やし、**プログラムが始まってから自分たちのすべきことの多さに気付かされる**、ということになってしまいました。それ以降に睡眠時間が削られ疲労が溜まっていったのは、時差の所為だけではなかったと思います。



事前に複数回にわたり、説明の機会を設けてはいますが、**バークレー研修のプログラムはタイトだということをしっかりと頭に入れておいてください**。もちろん、若干の自由な時間はありますが、海外他大学訪問調査は「物見遊山」ではなく、教育について考え、比較の視点を養うための学びの機会です。心身ともに万全の準備をして臨みましょう。



フィールドワークでの研究者訪問と専門の先生の授業参観は領域が近いだけでも参考になりました。海外他大学訪問調査に行くことが決まり次第、**早めにアポイントを取った方が良いと思います**。



海外他大学訪問調査では、事前に用意された研修内容だけではなく、自分自身で予定を組み、アポイントメントを取って臨むフィールドワークの時間があります。過去の参加者は、自分の研究分野の研究者訪問や、ゼミ訪問、授業参観などに取り組んでいきます。**年明けにはアポイントメント取りを開始できるように、情報収集を早めに始めると良いでしょう**。訪問先のウェブサイトを活用したり、指導教員などに知人がいないかどうか聞いてみたりするのも手です。

アポイントメントの取り方については、プログラムを参照してください。



フィールドワークでの研究者訪問では、執筆された論文を数本読み、授業の課題図書を読むなど**準備をできるだけして臨みました**。専門の先生がいる場合には、**積極的に授業の参観を申し込んでみるのが良い**と思います。シラバスなども送っていただくと尚良いと思います。



海外他大学訪問調査での**フィールドワークを成功させるためには、事前の準備が鍵となります**。せっかくの機会を最大限に活かせるよう、できる限りの準備をしていきましょう。

また、インタビューや面談だけではなく、**その先生の授業参観をする、という活動が好評**です。研修内にも授業参観はありますが、必ずしも自分の研究分野に関する授業であるとは限りません。同じ研究分野の教員が、現地の大学でどういった授業を実践しているの  
かを見る絶好の機会です。ぜひチャレンジしてみてください。



フィールドワークを行う際に、**そこで見るものを相対化できるような情報をもっと欲しかった**かもしれません。それは東北大のことでいいし、日本の大学一般のことでいいし、アメリカの大学一般のことでいいです。本質的に訪問先の大学は何が  
すごくて、何が限界なのか（訪問先の大学の環境でしか実現できない理由も含めて）。そういった視点を持ってフィールドワークを行うためには、比較を行うために  
十分な情報が必要かなと思います。



海外他大学訪問調査の前に、米国の高等教育の専門家を招いてのセミナーをオンラインで学べる機会を提供しています。これに加えて、訪問先の大学のウェブサイトで情報収集するなど、**自身で「予習」することを推奨しています**。現地に行ってみてから初めて「こんなことを知っておく必要がある」と気づくことが多いのですが、できるだけ事前に想像力を働かせて情報収集しておきましょう。

また、プログラム内では、歴史の中の東北大学、東北大学ファクトブック（日・英）などを資料として配布しています。ぜひ目を通してご覧ください。



訪問先の先生の GSI (Graduate Student Instructor) と話す予定でしたが、**東北大学のメールアドレスにキャンパス外からアクセスする方法がわからなかった**ため、現地滞在中に、訪問先の先生からのメールに気がつくことができました。それで、GSI との面談はできませんでした。



毎年、メールアドレスに関するトラブルが起こっています。

#### ①フリーのメールアドレスからのメールを先方に受信してもらえない

Yahoo や Google などのフリーのメールアドレスを使用している場合、バークレー側の研究者のメールソフト上で「迷惑メール」であると判断され、受信してもらえないケースが多発しています。この場合、スムーズにフィードバックのアポイントメントが取れません。フリーメールを使用している人は、ぜひこの機会に **<tohoku.ac.jp> のメールアドレスを使用**できるように設定をお願いいたします。ac.jp のドメインは、それだけで日本の高等教育機関が送信元であるという属性を示しているため、迷惑メールフィルターにはかからず、信頼性の高いメールアドレスであると判断されます。

#### ② <tohoku.ac.jp> に学外からアクセスできない

学外からアクセスする方法を事前に設定することも可能です。これについては各自、東北大学の情報シナジー機構のウェブサイトを参照して設定をお願いいたします。また、**自分**がいつも使っているウェブメールで受信できるように設定をすることも可能です (例: Gmail で tohoku.ac.jp に届くメールをやりとりする)。これについては、使用しているウェブメールサービスで POP3 を利用して他のアカウントのメッセージを確認などの設定をお願いいたします。これでバークレーにおいてもメールの送受信で困ることはないでしょう。



私の英語力だと、会話を十分に理解できない場合が多かったので、甘えたことを言わせてもらって、「**英語を練習しておきなさい**」と事前にもっと発破をかけてほしいと思った (というが、自分であらがじめ気づいておくべきだった)。



海外他大学訪問調査の講師はすべてバークレーのスタッフです。もちろん、日本側運営スタッフも同行しますが、**現地の研修は全て英語**で行われます。

一日の終わりに、日本側運営スタッフとのふり返りのセッションを設けることも可能です。バークレー研修には十分準備して臨むとともに、現地で疑問が生じた時は、積極的にスタッフに質問するように心がけてください。

## 最後に

本プログラムの運営担当は次の通りです。プログラムに関する質問や、提案、ISTU の利用に関するお問い合わせなどは以下にご連絡ください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Tohoku U. PFFP/NFP 担当

川内北キャンパス 川北合同研究棟 201 高度教養教育・学生支援機構 事務室

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41

Email: tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

Tel: 022-795-4471

Fax: 022-795-4749



# マイクロティーチングガイド

## 東北大学 新任教員プログラム2016 大学教員準備プログラム2016

Tohoku University **New Faculty Program**  
Tohoku University **Preparing Future Faculty Program**

### 自分の授業をみつめる—マイクロティーチング—

教授活動の試行を通して、自身のティーチングスタイルをふり返りましょう

#### マイクロティーチングとは

PFPF/NFP では、授業実践のスキル獲得のために、参加者が一回の授業計画をたて、そのうちの一部を実践し、これに対して他の参加者や先達教員がコメントをフィードバックするマイクロティーチングの機会を設けています。(2016年11月15日(火曜日)開催)

マイクロティーチングは、参加者が自分のティーチングの長所を発見するとともに、さらなる練習、工夫の余地があるポイントについて認識する機会を提供するための活動です。

#### マイクロティーチングの目的

マイクロティーチングは、参加者の皆さんが自身のティーチングのスキルを向上させるための機会を提供し、支援するための活動です。次のことを目的としています。

- シラバス作成のセミナー等で学んだことを実践に適用してみる
- 他の参加者から建設的なフィードバックを得る
- 他の参加者の教え方から学び、自分自身の教え方の長所を知り、自信を持つ

#### マイクロティーチングで実施する教授活動の対象

マイクロティーチングを実施するために、「授業デザインとシラバス作成」のセミナー（2016年8月25日(木曜日)実施）で作成した授業（全15回）のうち、一回分の授業の計画を立案して下さい。

当日は、その一回の授業のうちの「任意の部分」を切り出し、7分間の実践を行います。

7分間の活動は、授業のある特定の部分とし、**活動の途中で時間が終了してかまいません。**

また、他の参加者は、授業者の設定、要求に応じて適宜受講生役を担います。



東北大学 高度教員教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

## マイクロティーチングの流れ

マイクロティーチングは以下のような流れで行います。

1. マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングに関する講義
2. 授業のふり返り方についてのセミナー
3. マイクロティーチング
  - 授業者による授業設定の概要説明（3分間）
  - ティーチング（7分間）
  - うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返り
  - 他の参加者からのフィードバック、ピア・ラーニング

### 1. マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングに関する講義

マイクロティーチングの実践に先駆けて、セミナーの冒頭では、マイクロティーチングの方法とピア・ラーニングについての説明を行います。

ピア・ラーニングとは、他の参加者：仲間（peer）と学びあうことを意味し、同じ立場の学習者同士の対話や質問のやりとりを通して、自分自身の気づきを得ていく学習方法のことを指します。

PFPP/NFP のマイクロティーチングでは、このピア・ラーニングによってお互いの実践や授業計画から相互に学びあう機会の提供を目指しています。

### 2. 授業のふり返り方についてのセミナー

マイクロティーチングの様子はビデオ撮影し、セミナーの最後に DVD に収録してお渡しします。参加者のみなさんには、後で各自視聴し、セルフ・リフレクションに取り組んでいただきます。

自身の映像を視聴することは、必ずしも心地の良いものではありません。この方法と効果について、セミナーの当日にお伝えします。

マイクロティーチングのリフレクティブ・ジャーナルには、セルフ・リフレクションの実践結果も含めた内容を執筆するようして下さい。

### 3. マイクロティーチング

マイクロティーチングでは、まず、授業者が自身の設計した授業の概要を説明します。その後、7分間で実践を行います。実践後には、まず自分自身で、うまくいったところ、さらによりよくできるところについて感想を述べます。

最後に、他の参加者からのフィードバック、ピア・ラーニングを通して、自身の実践をより良くするためのヒントを探します。

#### ※注※

マイクロティーチングで実施する7分間は、自由に選択して構いません。授業の開始から7分、重要な項目の導入部分の7分…など自分で決めましょう。

## マイクロティーチングの準備

マイクロティーチングの実施に際して、次のことを準備して下さい。

- 授業を設計する
  - 「授業デザインとシラバス作成」のセミナー（2016年8月25日実施）で作成した授業（全15回）のうち、一回分の授業の計画を立案しましょう
- 具体的な授業計画を作成する
  - 授業計画フォーマットを利用し、設計した授業の計画を示しましょう。フォーマットは、後ほど大学教育支援センターから送付します。
  - マイクロティーチング(7分)で実施する部分だけでなく、1コマ(90分)の授業計画を作成してください。
  - 授業計画には
    - ・授業者名、対象となる受講生、授業の目的
    - ・設定した目的を達成するために利用する教え方や活動
      - 例) 講義、問いかけ、ディスカッションを明記しましょう。マイクロティーチング当日に参加者全員に配布します

授業計画は**2016年11月7日（月曜日）**までに「tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp」に提出して下さい

※内容に不足や検討すべき事項がある場合には、修正のうえ、再提出を求めます。

マイクロティーチングプランの作成

マイクロティーチングプランは、他の参加者やアシリテーターが授業者の意図を理解するために重要な情報源です。有効なフィードバックを得るためにも、しっかりと作成に取り組みましょう。

実践者所属・氏名 東北大学 大学教員準備プログラム/新任教員プログラム Tohoku U. PFP/NFP 2016													
マイクロティーチングプラン													
I. 対象授業について													
授業題目	教育心理学												
対象学生	(学部) 文系学部 (学年) 2 年生												
クラス規模	40 名												
授業の目的と概要	本授業では子どもの発達に関する基本的な知見を踏まえた上で、家庭や地域、学校における教育の諸問題について心理学的な視点から理解を深めていく。その際に、専門知識を身につけるだけでなく教育問題に対してどう向き合うべきかを考えられるようになることを目指す。												
学習の到達目標	① 心理学の専門知識に基づきながら様々な教育問題の背景を説明できる。 ② 教育問題について心理学的知見を踏まえながら考えを述べることができる。 ③ 関心のある教育問題について自ら調べようとする姿勢を持つことができる。												
II. 授業全体(90分)の狙いと展開について													
想定授業の全体像	本授業では初中等教育における学力の問題を取り上げる。具体的には、学力問題に関する現状と課題を様々なデータに基づきながら示すとともに、ゆとり教育・脱ゆとり教育が実施された背景についても解説する。その過程で、自らが受けてきた教育を振り返るとともに、どのような教育の在り方が望ましいのかを考えてもらう。												
実践箇所とそこでの目的	マイクロティーチングでは展開①の学力低下・学力格差に関する解説の箇所を実践する。この箇所では、教員が様々なデータを紹介しながら学力問題の現状と課題を解説するだけでなく、学生にも発問をしながら授業を展開する。学生の反応をうまく活用しながら学力問題の現状と課題を理解させることがこの箇所の目的である。												
指導案	<table border="1"> <thead> <tr> <th>時間</th> <th>教授内容・活動</th> <th>実践の工夫／留意点</th> <th>予測される学生の反応</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>0-10 (導入)</td> <td>                             ・ 前回の授業の簡単な振り返りと、前回の授業に関する学生の質問や感想を紹介。                              ・ 前回の授業と今回の授業のつながりとして、今回の授業の流れについて伝える。                         </td> <td>                             前回の授業終了時に回収したミニトペーパーの書かれた質問や感想を紹介する。授業で紹介された場合には成績評価の際に3点を加点する。                         </td> <td>                             予測される学生の反応                              (予測される学生の行動や思考などを記入)                         </td> </tr> <tr> <td>10-35 (展開①)</td> <td>                             ・ 学力低下問題について                              発問①：現代の若者は以前よりも学力が低下していると思うか？                              解説：これまでの学力低下に関する議論の紹介。                         </td> <td>                             ・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。                         </td> <td>                             予測される学生の反応                              (予測される学生の行動や思考などを記入)                         </td> </tr> </tbody> </table>	時間	教授内容・活動	実践の工夫／留意点	予測される学生の反応	0-10 (導入)	・ 前回の授業の簡単な振り返りと、前回の授業に関する学生の質問や感想を紹介。 ・ 前回の授業と今回の授業のつながりとして、今回の授業の流れについて伝える。	前回の授業終了時に回収したミニトペーパーの書かれた質問や感想を紹介する。授業で紹介された場合には成績評価の際に3点を加点する。	予測される学生の反応 (予測される学生の行動や思考などを記入)	10-35 (展開①)	・ 学力低下問題について 発問①：現代の若者は以前よりも学力が低下していると思うか？ 解説：これまでの学力低下に関する議論の紹介。	・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。	予測される学生の反応 (予測される学生の行動や思考などを記入)
時間	教授内容・活動	実践の工夫／留意点	予測される学生の反応										
0-10 (導入)	・ 前回の授業の簡単な振り返りと、前回の授業に関する学生の質問や感想を紹介。 ・ 前回の授業と今回の授業のつながりとして、今回の授業の流れについて伝える。	前回の授業終了時に回収したミニトペーパーの書かれた質問や感想を紹介する。授業で紹介された場合には成績評価の際に3点を加点する。	予測される学生の反応 (予測される学生の行動や思考などを記入)										
10-35 (展開①)	・ 学力低下問題について 発問①：現代の若者は以前よりも学力が低下していると思うか？ 解説：これまでの学力低下に関する議論の紹介。	・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。	予測される学生の反応 (予測される学生の行動や思考などを記入)										
希望する評価の観点	(例)にフィードバックが欲しい観点を記入 例：板書の方法、説明の流れ、例示の適切さ												

マイクロティーチングプラン (例)

実践者所属・氏名	
I. 対象授業について	
授業題目	教育心理学
対象学生	(学部) 文系学部 (学年) 2 年生
クラス規模	40 名
授業の目的と概要	本授業では子どもの発達に関する基本的な知見を踏まえた上で、家庭や地域、学校における教育の諸問題について心理学的な視点から理解を深めていく。その際に、専門知識を身につけるだけでなく教育問題に対してどう向き合うべきかを考えられるようになることを目指す。
学習の到達目標	① 心理学の専門知識に基づきながら様々な教育問題の背景を説明できる。 ② 教育問題について心理学的知見を踏まえながら考えを述べることができる。 ③ 関心のある教育問題について自ら調べようとする姿勢を持つことができる。

II. 授業全体(90分)の狙いと展開について

想定授業の全体像	本授業では初中等教育における学力の問題を取り上げる。具体的には、学力問題に関する現状と課題を様々なデータに基づきながら示すとともに、ゆとり教育・脱ゆとり教育が実施された背景についても解説する。その過程で、自らが受けてきた教育を振り返るとともに、どのような教育の在り方が望ましいのかを考えてもらう。		
実践箇所とそこでの目的	マイクロティーチングでは展開①の学力低下・学力格差に関する解説の箇所を実践する。この箇所では、教員が様々なデータを紹介しながら学力問題の現状と課題を解説するだけでなく、学生にも発問をしながら授業を展開する。学生の反応をうまく活用しながら学力問題の現状と課題を理解させることがこの箇所の目的である。		
指導案	時間	教授内容・活動	実践の工夫／留意点
	0-10 (導入)	・ 前回の授業の簡単な振り返りと、前回の授業に関する学生の質問や感想を紹介。 ・ 前回の授業と今回の授業のつながりとして、今回の授業の流れについて伝える。	前回の授業終了時に回収したミニトペーパーの書かれた質問や感想を紹介する。授業で紹介された場合には成績評価の際に3点を加点する。
	10-35 (展開①)	・ 学力低下問題について 発問①：現代の若者は以前よりも学力が低下していると思うか？ 解説：これまでの学力低下に関する議論の紹介。	・ 授業で使用するパワーポイントの流れに沿ったプリントを配布する。プリントには適度に空白が設けられており、学生が自分でメモを取れるようになっている。

<p>希望する 評価の視点</p>	<p>説明と発問のバランス、説明のわかりやすさ</p>	<p>・学力と格差について 発問②：中学生のころ一日学校以外でどの程度勉強していたか？ 解説：学習時間の変化、格差の拡大についてデータを示しながら説明</p>	<p>・発問に対し手を挙げてもらい、その後で何名かの学生を指名し、手を挙げた理由を答えてもらう</p>	<p>・勉強時間～分。中学時代の自分の学習を相対化</p>
<p>35-75(展開②)</p>	<p>・ゆとり教育について 解説：ゆとり教育の目的と内実、それに対する批判について説明</p>	<p>・期間巡視をしながらうまくペアになっていない学生をペアにさせる</p>	<p>・調べ学習やキャリア教育等、何をしていたか印象にない等の反応。身についたものとしては調べ力、協調性、特になし等</p>	
<p>75-90(まとめ)</p>	<p>・脱ゆとり教育について 解説：PISAの結果や脱ゆとり教育、教育評価の難しさについて説明</p>	<p>・授業内レポート 学力問題やゆとり教育、脱ゆとり教育について学んだことを踏まえ、あるべき教育について自らの考えを授業内レポートに記述する。最後にミニットペーパーに質問・感想を書いて提出</p>	<p>・授業内レポートは成績評価に反映させる。 書き終わった学生にはミニットペーパーに感想や質問を書くよう指示する</p>	<p>・早く書き終わって退屈そうにする学生。</p>

I. 対象授業について

- 実施する授業の題目、対象学生の学部と学年、クラス規模（小規模：～30人、中規模：30～60人、大規模：61人～）を記入する
- シラバスに関するセミナーで学んだことを踏まえて、授業の目的と概要、学習の到達目標を記入する

II. マイクロティーチングで実践する部分について

- 想定している90分間の授業の全体像について記入する
  - 参加者やアシリターナーに、どういった授業なのか分かるように説明する
- マイクロティーチングで実践する7分間の位置づけと目的を記入する
  - 90分間の授業のどの部分であるかを明確にする  
例：冒頭の7分間、前回の授業の復習、覚えているかの確認  
例：今日のテーマの導入部分、□□という質問により、学習者に○〇について想起させる
- 指導案を記入する
  - 7分間のティーチングの内容を明確にする
    - ◇ 授業者が行う活動を記入する
    - ◇ 実践上工夫や留意点、何のために行うのかといった目的や意図を記入する
    - ◇ 予想される学生の反応、状況、理解の様子について記入する
- 希望する評価の視点を記入する
  - 参加者やアシリターナーに特にフィードバックをもらいたいポイントを明確にする

## 模擬授業（2017年2月予定）の流れ

模擬授業では、マイクロティーチングワークショップで受けたフィードバックを反映し、授業計画をブラッシュアップしたうえで、30分程度の実践を行います。より長めの実践を行い、さらに実践的な力に身につけましょう。模擬授業には、先達教員も参加します。参加者の他に、先達教員からもフィードバックを受けることができます。

模擬授業の流れはマイクロティーチングの実践と同様です。

1. 授業者による授業設定の概要説明（3分間）
2. ティーチング（30分間程度）
3. うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返し
4. 他の参加者、先達教員からのフィードバック

## 模擬授業の準備

マイクロティーチングと同様に、授業計画フォーマットを利用し、次のことを明記した授業計画を作成しましょう。

- 授業名、対象となる受講生、授業の目的
- 設定した目的を達成するために利用する教授学習活動  
例) 講義、問いかけ、ディスカッション

授業計画の提出締め切りについては別途連絡します

## ティーチングの実践以外の役割

マイクロティーチング、模擬授業において、他の参加者が実践を行っているときには、あなたは学生役の一人として参加し、授業者の設定に応じて、質問したり回答したりしましょう。

ティーチングの実践後には、参加者のティーチングがあなただの学習に役立ったかについて、具体的な内容を建設的にフィードバックしましょう。また、今後別な方法で実施できそうな点についても提案しましょう。

フィードバックを行う際には、授業計画の中で参加者が示している「授業の目的」を考慮するようにしましょう。

プログラム、マイクロティーチング、模擬授業の実施に関するお問い合わせは下記までお寄せください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
(川内北キャンパス 川北合同研究棟 201  
高度教養教育・学生支援機構 事務室)  
Email: [tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp](mailto:tu-pfpp@ihe.tohoku.ac.jp)  
TEL: 022-795-4471 FAX: 022-795-4749

## 大学教職員のための推薦図書リスト

これから大学教員を目指すみなさんや初期キャリアにいる教職員のみなさん、あるいは自分の日頃の仕事について見直そうとしている方々に向けて、大学教育について考えるうえで有用な書籍をご紹介します。

ここで紹介する書籍の多くは、東北大学図書館に蔵書があるとともに、東北大学 高度教養教育・学生支援機構の資料室にも収録されています。

推薦図書は、高度教養教育・学生支援機構（旧・高等教育開発推進センター）による出版物の他、「大学人としての教養」、「大学教員の仕事」、「学生理解」、「授業設計」、「学習論／心理学」、「研究室指導」、「高等教育」、「大学マネジメント」、「比較の視点」の9つのカテゴリに分けて紹介されています。また、それぞれがどのような内容なのかすぐに把握できるよう、専門性開発プログラム運営スタッフや先輩教員からの推薦文も掲載しました。

もちろんですが、ここに紹介している書籍を全て読む、ということを選択してはなりません。「もっと知りたい」、「体系的にまとめられている本を読みたい」と、ふと思った時に、本選びの参考にしてもらえればと思います。

継続的に自身の専門性を開発していくみなさんの、お役に立てば幸いです。



## 東北大学 大学教育支援センターによる 大学教職員のための推薦図書



東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」



## PDブックレット



「PDブックレット Vol.1 すすきな大学教員を目指すあなたに」(2011)

東北大学 高等教育開発推進センター編

大学院生と若手キャリアの教員向けに、大学教員の専門性をわかりやすく解説した一冊。ひとつひとつのピットも短く、気軽に読み進められます。教育、研究、大学運営だけではなく、「休暇を取る」と題して、実際の大学教員が自身の余暇の過ごし方を綴っているポイントのひとつです。



「PDブックレット Vol.2 大学の授業を運営するために」(2012)

邑本俊亮 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編

PPFP/NFP の先達教員でもある邑本俊亮先生による一冊。邑本先生は認知心理学を専門とし、優れた授業実践ならびに授業改善・工夫に尽力され、東北大学総長教育賞と全学教育貢献賞を受賞されました。心理学の知見をもとに、邑本先生自身の授業運営の工夫やアイデアが紹介されています。



「PDブックレット Vol.3 学生のための心理・教育的支援」(2012)

田中真里, 池田忠義, 堀匠, 佐藤静香 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編  
学生相談と発達障害学生の支援を取り上げ、その理解を助ける豊富な情報と事例を紹介しています。対応のポイントが簡潔にまとめられているだけでなく、社会全体としてこの問題に向き合っているのか、海外の大学ではどのように対応しているのかといった動向も学ぶことができます。  
ダウンロード版: 高度教養教育・学生支援機構ウェブサイト> 機構概要・教員紹介> 刊行物一覧・所蔵リスト> PDブックレット



「PDブックレット Vol.4 ER@TU — 多読のすすめ」(2012)

Daniel Eichhorst & Shearon Ben 著, 東北大学 高等教育開発推進センター編

本書では、東北大学の英語教員らが取り組んでいる「多読法(言語力向上を目的として外国語で書かれた理解可能な大量のテキストを意識的に読むこと)」が解説されています。東北大学における多読プログラムの特徴や、設計の原理、運営方法などについて学ぶことができます。



「PDブックレット Vol.5 高等教育における教育・学習のリーダースHIP」(2014)

Craig McInnis, Paul Ramsden & Don Maconachie 著, 杉本和弘 訳

東北大学 高等教育開発推進センター編

オーストラリアで刊行されたハンドブックの訳書。大学教育の改革や改善に携わる「リーダースHIP」を対象とし、大学組織をどう導いて変革を起こしていくのか、組織開発において、どういったリーダースHIPを発揮すればよいかを解説した指南書です。



「PDブックレット Vol.6 大学教員のブレーク・スルー」(2015)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構編

大学教員としての人生において困難にぶつかった際、それをどう打破し前進してきたのか—ベテランの先生方に、次世代を担う若手教員への励ましの意味も含めて自身の「ブレーク・スルー」について執筆していただきました。諸先輩方の経験談から学びを深めるための一冊です。



「PDブックレット Vol.7 PDR ハンドブック」(2016)

Daniel Eichhorst, Todd Ennslen, Shearon Ben 著

東北大学 高度教養教育・学生支援機構編

東北大学の英語教員が、長年の経験と試行錯誤を重ねて開発に取り組んできた、学習者主体のデザイン・カッションによる英語の授業手法を紹介するハンドブックです。実施手法や実際に使用している教材を惜しみなく収録しています。英語の授業を担当している教員にはもちろんですが、その他の科目の授業に対しても多くの示唆が得られます。

## 大学人としての教養



「科学の健全な発展のために - 誠実な科学者の心得 -」(2015)

日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会 編, 丸善出版

研究倫理を守るために、各界の専門家が集まって日本で初めて出版された研究倫理の標準的テキストです。日本学術振興会のHPからもテキスト版と英語版もダウンロードできます。  
(<https://www.jsps.go.jp/j-kousei/rinri.html>)。

ISBN: 978-4621089149, 図書館: 本館 2F 学関



「ORI 研究倫理入門 責任ある研究者になるために」(2005)

ニコラス H. ステネック, 山崎茂明訳, 丸善出版

アメリカ研究公正局がまとめた研究倫理に関する標準的テキストです。研究倫理は国を超えて共通なものであり、具体例が豊富で参考になります。大学の研究倫理推進担当者にとって必読文献といつてよいでしょう。

ISBN: 978-4621075241, 図書館: 法政実務図書室, 工学分館 2F 図書

## 大学教員の仕事



「もっと知りたい! 大学教員の仕事」(2015)

羽田真史 編著, カノンシャ出版

東北大学高度教育・学生支援機構が教育関係共同利用拠点として、5年間に及ぶ取り組みの成果を盛り込んだ集団的力作です。いわゆるFD関係者だけの執筆になるのではなく、認知心理学、情報科学、経営学、哲学、生物学など各分野の教員が自分の経験も踏まえて書き上げた大学教員のワタシが話まっています。かならずあなたの琴線に触れるでしょう。

ISBN: 978-4779510045, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「大学教員準備講座」(2010)

夏目達也, 近田政博, 中井俊樹, 齋藤芳子 著, 玉川大学出版部

名古屋大学の大学教員準備プログラムに基づいた内容構成。これから大学教員をめざす大学院生、任期付研究員、非常勤講師に向けて、大学教員の職業的特徴や、求められる知識、技能が体系的にまとめられています。

ISBN: 978-4472404009, 図書館: 本館 2F 学関



「職業としての大学教授」(2009)

潮木守一 著, 中央公論新社

大学教員とはロマンチックな仕事とお考えではないでしょうか。柳澤教授のような優雅な生活はないのです。リアルな大学教授の生活を知りたい方におすすです。

ISBN: 978-4120040672, 図書館: 本館 2F 学関



「ベストプロフェッサー」(2008)

ケン・ペイン 著, 玉川大学出版部

アメリカの高等教育関係図書のベストセラーのひとつで、著者は歴史学の教授です。紹介されている63人の「ベストプロフェッサー」には、あのマイケル・サンデル教授も含まれています。大学教員の教育観をどのように言葉にしているか、という視点で読み進めると、自分自身の教育観を明らかにしていく作業に役立ってでしょう。

ISBN: 978-4472403620, 図書館: 工学分館 2F 図書



「成長するティップス先生」(2001)

池田輝政, 戸田山和久, 近田政博, 中井俊樹 著, 玉川大学出版部

名古屋大学がウェブ上で公開していた授業の秘録集をまとめた書籍。ティップス先生の授業日誌編には、若手大学教員なら共感するようなエピソードがみつづられており、その状況や悩みに対応したティップス集が収録されています。『私の教師が大学を成仏させる』という面白い面白コラムも数多く掲載されています。

ISBN: 978-4472302572, 図書館: 本館 書庫



「大学教授職の使命—スカーシップ再考」(1996)

アーネスト・ボイヤー 著, 玉川大学出版部

夢もロマンもない職業などありません。知を生産する大学教員としてわけがわからなくなると読んで、学生たちとうんちを傾けるには絶好の一冊です。

ISBN: 978-4472098116, 図書館: 本館 書庫

## 学生理解



「知的好奇心」(1973)

波多野龍余夫, 稲垣佳世子 著, 中央公論新社

人に限らず、動物が持つ好奇心が学習の原動力になるという、今でも基本となる知見をまとめて提示し、毎日出版文化賞を受賞した名著です(同じ著者による『無気力の心理学』もお薦めします。紹介者はこの本で『獲得された無力感』という言葉を知りました。現代社会の理解には、両方とも必要?)

ISBN: 978-4121003188, 図書館: 本館 書庫



「人はいかに学ぶか」(1989)

稲垣佳世子, 波多野龍余夫 著, 中央公論新社

『知的好奇心』の著者たちによるもので、自分の学習観の見直しをするのに最適な1冊です。

ISBN: 978-4121009074, 図書館: 本館 書庫



「ポスト青年期と親子戦略 大人になる意味と形の変容」(2004)

宮本みち子 著, 勁草書房

従来の大人像の変容と、ポスト青年期(青年期から成人期への移行期)という概念を広げた名著。ポスト青年期に関する先行研究を踏まえつつ、日本と欧米諸国における状況を整理していきます。

ISBN: 978-4326601684, 図書館: 本館 書庫



「大学生の学びとキャリア 入学前から卒業後までの継続調査の分析」(2013)

梅崎修, 田澤実 編著, 法政大学出版局

静態的分析に止まらぬI-E-Oモデル(Input-Environment-Outcomeモデル)を超え、学生が成長の観点からとらえる研究書。10回にわたる学生調査の結果をもとにキャリア教育の効果や、キャリア発達の促進、キャリア意識の変容について分析しています。

ISBN: 978-4588686061, 図書館: 本館 2F 学関



## 授業設計



「シリーズ大学2 大衆化する大学—学生の多様化をどうみるか」(2013)

広田照幸他 編著, 岩波書店

大学の大量化, 学生の多様化について, 高等教育の歴史や国際比較の視点を交えながら, 現代的特質を明らかにすることを目的とした一冊です。

ISBN: 978-4000286121, 図書館: 本館 2F 学閲



「大学教育の変貌を考える」(2014)

三宅義和, 居神浩他 著, ミネルヴァ書房

いかにゆるいノンエリート大学, マージナル大学を対象にした学生論。大学を取り巻く状況の変化, 変貌を大衆化, 国際化, 多様化をキーワードに解説します。

ISBN: 978-4623070138, 図書館: 本館書庫



「思いやりはどこから来るの? 利他性の心理と行動」(2014)

日本心理学会 監修, 高木修, 竹村和久 編, 誠信書房

社会性や思いやりを心理学の立場から分析する, 目からうろこの一書。日本心理学会の監修のもと, 最新の知見がまとめられています。

ISBN: 978-4414311112, 図書館: 本館 2F 学閲



「本当のかしこさとは何か—感情知性 (EI) を育む心理学」(2015)

日本心理学会 監修, 箱田裕司, 遠藤利彦 編, 誠信書房

このタイトル, 見てドキリしませんか。少なくとも年に1度2度はため息つく思いをたははずです。キ・コンビテンシーとか汎用的能力とかいうマジックワードが飛び交っていますが, 学生を育てて自分自身も育つ大学教授には, 常に念頭に置かねばならない問いです。主に初等中等教育が対象の本書ですが, 大学教育に携わるみなさんにとっても, 答えが見つかるとは思いません。

ISBN: 978-4414311143, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「大学教員のための授業方法とデザイン」(2010)

佐藤 浩章 編, 玉川大学出版部

愛媛大学の教員研修の教科書をもとにした一冊。シラバスの書き方から実際の授業方法, 成績のつけ方, 授業の振り返りまでを網羅し, わかりやすく解説されています。資料編には, 教材として使用できる事例やワークシートが豊富です。

ISBN: 978-4472404184, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「授業をどうするか—カリアオルニア大学バークレー校の授業改善のためのアイデア集」(1995)

B. G. デイビス他 著, 東海大学出版会

カリアオルニア大学バークレー校の優秀教員から集めた授業のためのアイデア事例集。自分の興味に合わせて気軽に読める一冊です。

ISBN: 978-4472404009, 図書館: 本館 2F 学閲



「授業の道具箱」(2002)

B. G. デイビス他 著, 玉川大学出版部

「授業をどうするか!」の回答書にあたり, リアレンス・ブックとして利用できるように作られた実用的な資料集。カリアオルニア大学バークレー校の教員らが, ティーチングに関する49の技法を順に解説していきます。中には, 学生のために推薦書を書くときの留意点なども詳しく示されており実用的です。

ISBN: 978-4486015321, 図書館: 本館書庫

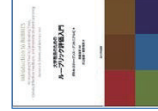


「物理学をどう教えるか—アメリカにおける新しい物理教育の実践」(2012)

日本物理教育学会 監修, 丸善出版

物理教育研究者が物理学を教える教師向けに書いた一冊。認知科学や脳神経科学の最新の研究成果を取り入れつつ, よりよい学習のための手法や教材を科学的に解説しています。物理分野のみならず, 工学はもちろん, 文系の教員にもおすすすめします。

ISBN: 978-4621085509, 図書館: 本館 2F 学閲



「大学教員のためのルーブリック評価入門」(2014)

ダネル・スティーブンス他 著, 玉川大学出版部

ルーブリックとは, 「ある課題について, できるようになってもらいたい特定の事柄を配置するための道具(本書 p.2)」です。ルーブリックを自身の教育活動に取り入れられようとしている人, 体系立ててルーブリックについて学びたい人のための入門書としておすすすめの一冊です。

ISBN: 978-4472404771, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有

## 研究室指導

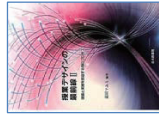


「教材設計マニュアル—独学を支援するために」(2002)

鈴木克明 著, 北大路書房

「独学を支援する」という目的に使うプリント教材の作成を例に, 教材づくりに初めてチャレンジする人を想定してまとめられた一冊。教育工学の中核であるインストラクショナルデザインという理論がベースです。

ISBN: 978-4762822445, 図書館: 本館 2F 学閲



「授業デザインの最前線 II 理論と実践を創造する知のプロセス」(2010)

高垣ユミ 編著, 北大路書房

主として教育心理学の視点から, 授業研究に関する最新の理論や研究成果を幅広く網羅しています。中にはカウンセリングの諸理論をどのように授業に活かせるか, といった興味深いテーマも扱っています。巻末の資料には, 中学生向け授業の指導案が収録されています。

ISBN: 978-4762827082, 図書館: 本館 2F 学閲

## 学習論/心理学



「アメリカの心理学者 心理学教育を語る—授業実践と教科書執筆のための TIPS」(2000)

R. J. スタンバーグ 著, 北大路書房

心理学者による心理学入門の授業実践の書ですが, 心理学教育に限らず, あらゆる領域の授業においても通じる有益なヒントが満載。アメリカの心理学者 11 人が, それぞれ自身の教育観を熱く語っています。一流研究者の「教育に対する情熱」に, 心を揺り動かされる一冊です。

ISBN: 978-4762821882, 図書館: 本館 2F 学閲



「間違えだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか」(1994)

西林克彦 著, 北大路書房

理解や学習における知識の重要性を論じています。多くの具体例とともに, 研究を基にしたデータを提示しつつ, 新たな学習論が展開されており, 非常に読みやすく, わかりやすい一冊です。

ISBN: 978-4788504882, 図書館: 本館 2F 学閲



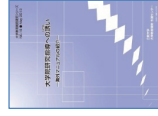
「研究指導を成功させる方法—学位論文の作成をどう支援するか—」(2008)

リチャード・ジエームス, ガブリエル・ポールドウィン 著

メルボルン大学によるガイドブックの日本語訳。基礎編では学生との関係作り, 応用編では学生へのフィードバックや動機づけの支援方法, そして仕上げ編では学生のキャリアについて考える, といった実務的なヒントが簡潔に解説されています。

ISBN: 978-4-862930125, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有

原文 (Eleven Practices of effective postgraduate supervisors) がダウンロードできます  
[http://www.cshe.unimelb.edu.au/resources\\_teach/teaching\\_in\\_practice/docs/11practices.pdf](http://www.cshe.unimelb.edu.au/resources_teach/teaching_in_practice/docs/11practices.pdf)



立教大学 大学院研究指導への誘い」(2013)

立教大学 大学院研究指導・支援センター

日本では, 大学院の研究指導のためのテキストはまだ多くありませんが, 海外では多くが発表されています。本書では, それら海外の研究指導マニュアルのエッセンスを抽出して紹介しています。

オンデマンド版を下記サイトで配布

[http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/\\_asset/pdf/No.18.pdf](http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/_asset/pdf/No.18.pdf)



「研究室マネジメント入門—資金・安全・知財・倫理」(2009)

日本化学会 編著, 丸善

理系の研究室を運営する人たちが知っておくべき事項をよみやすくまとめた一冊。資金や人のマネジメント, 安全管理, 倫理や不正行為への対応などについて, 実例とともに図や資料を交えながらわかりやすく解説しています。

ISBN: 978-4621081051, 図書館: 本館 2F 学閲

## 高等教育



「大学と社会」(2008)

安原義仁, 大塚豊, 羽田貴史 著, 放送大学教育振興会  
放送大学の専門科目の教科書。「大学の誕生と発展」から、グローバル化, 多様化, 今後の高等教育  
政策に至るまで、幅広くカバーし、歴史的経緯や国際的視野を学ぶのに最適な一冊。大学教育支援セ  
ンター長の羽田貴史教授が一部を執筆しています。

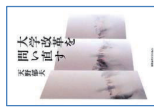
ISBN: 978-4595308024, 図書館: 本館 3F 学開放送大学



「大学改革その先を読む」(2007)

寺崎昌男 著, 東信堂  
大学教育の研究の第一人者である寺崎昌男先生による「大学問題連続セミナー」の講演録。大学改革  
史を踏まえつつ、現在の大学が抱える課題を取り上げます。さまざまなエピソードを交えつつ、口語で  
非常に読みやすく書かれています。初めて大学史を学ぶ方は、この本から始めてみてはいかがでしょうか。

ISBN: 978-4887137882, 図書館: 一, 出版社在庫なし, 機構資料室に蔵書有



「大学改革を問い直す」(2013)

天野郁夫 著, 慶應義塾大学出版会  
戦後の日本の教育行政を歴史的見地から俯瞰し, 「全入」問題や高大接続, 秋入学などの具体的な  
課題についての提言を示した一冊。法律や答申の内容を踏まえつつ, 学問的に高等教育改革を捉えたい  
人におすすです。

ISBN: 978-4766420531, 図書館: 本館 2F 学開



「シリーズ大学5 教育する大学—何が求められているのか」(2013)

広田照幸他 編著, 岩波書店  
大学教育の改革について, 教育, 職業準備教育, 専門的職業, 民主主義のそれぞれと大学, と  
いう視点で議論が展開されています。法科大学院や工学系技術者と大学に関する章もあり, その設立の  
経緯や今後のあり方についても示されています。

ISBN: 978-4000286152, 図書館: 本館 2F 学開



「シリーズ大学6 組織としての大学—役割や機能をどうみるか」(2013)

広田照幸 他 編著, 岩波書店  
大学とは, いったいどのような組織なのか, という問いに応えてくれる一冊。組織のガバナンスに関する原理  
的な考察に加え, 大学の成員としての職員と学生に光をあて, 大学組織の新しいあり方が議論されていま  
す。我々が身を置く「大学」とは一体何なのか, ちよと立ち止まって考えてみてください。

ISBN: 978-4000286169, 図書館: 本館 2F 学開

## 大学マネジメントカ



「大学マネジメント改革 改革の現場—ミドルのリーダーシップ」(2014)

篠田道夫, 教育学術新聞編集部 著, ぎょうせい  
著者は私立大学の理事を長く務め, 長い実務経験をもとに私立高等教育研究所での調査研究をもとに  
まとめたもので, 本書は現場経験に裏打ちされた厚みがあります。高等教育研究にあらがちな質問紙調査  
と統計分析によるお話ばかりでなく, リアルタイム感覚を高めるためにもお読みください。

ISBN: 978-4324097991, 図書館: 本館 2F 学開



「なぜ人と組織は変わらないのか」(2013)

ロバート・ケガン, リサ・ラスコフ・レイヒ 著, 池村千秋訳, 英治出版  
著者たちはハーバード大学教育大学院で成人発達や変革リーダーシップを研究しています。改革改革と勇  
ましい掛け声が飛び交いながら実際に変われないのは, 権限や資源の問題もさることながら, 人間の知性  
の様式に根源があることが掘り下げられています。組織運営がうまくいかない時に, 悲憤慷慨するのではな  
く, 一度手に取ってみませんか。

ISBN: 978-4862761545, 図書館: 本館 2F 学開



「市民社会組織のためのロバート・議事規則入門 民主主義の文法 新装版」  
(2014)

ロズ・P・ジーマン 著, 立木茂雄 監訳, 朝書房  
会議の運営はうまくいかないものでね。無理ありません。ルールとスキルが教えられてこなかったのだから。  
本書は, アメリカにおける会議運営のバイブル, ロバート議事規則の簡易版です。議長役の役割や効果的  
な議事進行など民主的でスムーズな議事運営のために, 委員会, 教授会, 学会などの場面でも使え  
ます。

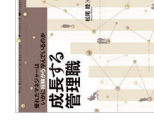
ISBN: 978-4860650858, 図書館: 一, 機構資料室に蔵書有



「リーダーシップ入門」(2005)

金井壽宏 著, 日本経済新聞出版社  
「リーダーシップ」はだれにも関わりのある問題だ。というまえがきで始まる本書は, 現場でリーダーシップを發揮  
してきた実践家の持論と, リーダーシップ研究に由来する理論とを接合しながら, 読む人それぞれがリーダー  
シップの実践へと誘います。あなたらしいリーダー像を探るためのガイドブックとしても役立つはず。

ISBN: 978-4532110536, 図書館: 本館 1F 学開新書日経文庫



「成長する管理職」(2013)

松尾睦 著, 東洋経済  
経験学習研究の第一人者の手になる一冊。組織のマネジャーになるのどんなに「経験」に学べばいいのか。  
良質な「経験」を通してどんな能力を向上させるのか, 豊富な知見をもとに, その成長メカニズムをわかりや  
すく説いてくれます。

ISBN: 978-4492533284, 図書館: 蔵書有, ただし研究室に配架, 機構資料室に蔵書有

## 比較の視点



「リフレクティブ・マネジャー」(2009)

中原淳, 金井壽宏 著, 光文社新書

働く大人は、仕事上の経験を振り返り、他者との対話や議論を通して、将来を展望しながら成長していく。本書では、そんな大人の「学びと成長」のあり方が語られます。企業における大人の学びが中心テーマですが、学び成長しようとする大学教職員が読んでも多くの示唆が得られます。

ISBN: 978-4334035280, 図書館：本館 2F 学関



「大学の教務 Q&A」(2012)

中井俊樹, 上西浩司 編著, 玉川大学出版部

自分の授業が一人前に行えるようになってくると、教員の教育力はそれだけではありません。単位の取り方や休学、卒業に単位が足りないと駆け込んで来た学生に説明することもその一つ。もちろん、大学職員であれば必須の 1 冊。

ISBN: 978-4472404566, 図書館：一, 機構資料室に蔵書有



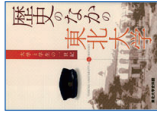
「カレッジマネジメント」隔月刊

リクルート 編

リクルートが大学等の経営者向けに隔月刊発行している雑誌。目まぐるしく変化する高等教育について折々の最新課題を特集し、課題の全体を俯瞰しつつ豊富な先進事例で迫っています。高等教育専門家による連載も読み応え十分。市販されてはいますが、WEB で閲覧可能です。

URL: [http://souken.shingakunet.com/college\\_m/](http://souken.shingakunet.com/college_m/)

ISBN: 図書館：一, 機構資料室に蔵書有



「歴史のなかの東北大学—大学と学生の一世紀—」(2009)

東北大学史料館 編

東北大学の史料館の常設展示の内容をもとに、東北大学の誕生から現在までの大学と学生の歴史をまとめた一冊。東北大学出身者は、自身の大学をより深く理解するため、学外出身者は、自身の出身大学と比較しながら読み進めてみてはいかがでしょうか。

図書館：本館 2F 学関



「世界の大学危機 新しい大学像を求めて—」(2004)

潮木守一 著, 中央公論新社

もとは大学院の通信講座のテキストとして書かれた一冊。イギリス、ドイツ、フランス、アメリカの 4 か国を取り上げ、それぞれの国における 19 世紀初頭から現代までの大学の歴史の大きな流れを捉えることを目的として書かれています。比較の視点を養い、日本の大学のあり方を相対化して考えるのにつながります。

ISBN: 978-4121017642, 図書館：本館 3F 学関新書中公新書



「激動するアジアの大学改革—グローバル人材を育成するために」(2012)

北村友人, 杉村美紀 共編, 上智大学出版

グローバル化や国際化の流れのもとで、アジアの高等教育における改革の状況や今後の発展について解説されています。それぞれの国の高等教育の状況や政策を概観し、比較の視点を養うにはおすすめの一冊です。

ISBN: 978-4324094396, 図書館：本館 2F 学関



「アメリカの大学・ニッポンの大学—TA・シラバス・授業評価」(2012)

河谷剛彦 著, 中央公論新社

アメリカと日本の大学、教育を比較して論じる一冊。両国の TA 制度の違いに始まり、授業や評価の方法についても紹介されています。

ISBN: 978-4121504296, 図書館：本館 2F 学関



「イギリスの大学・ニッポンの大学—カレッジ、チュートリアル、エリート教育」(2012)

河谷剛彦 著, 中央公論新社

著者がイギリスのオックスフォード大学に転職するというエピソードから始まり、現地からのレポートという形でまとめられているため、物語を読んでいるかのように感じられます。イギリスの大学を通して、日本の大学の特徴を改めて考えるのにおすすめの一冊です。

ISBN: 978-4121504302, 図書館：一, 機構資料室に蔵書有



# 高等教育ライブラリ



「高等教育ライブラリ1 教育・学習過程の検証と大学教育改革」(2011)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

どのような教育が効果的な学習成果につながるのか? という問いに対して, 大学教育に関する研究データを基に, 理論と実践についてまとめた一冊です。

ISBN: 978-4-86163-163-4, 図書館: 本館書庫



「高等教育ライブラリ2 高大接続関係のパラダイム転換と再構築」(2011)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

大学進学率の上昇とともに, 高校と大学の接続のあり方にも変化がみられます。「AO 入試の10 年と今後」, 「大学入試と高大連携活動」, 「良質な大学入試問題とは」の3 つのトピックを挙げ, 今後のあり方について議論されています。

ISBN: 978-4-86163-164-1, 図書館: 本館書庫



「高等教育ライブラリ3 東日本大震災と大学教育の使命」(2012)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

東日本大震災を受け, 今後の大学はどよう在り, どのような人材育成に取り組むべきなのでしょう。メディア, 科学技術史, 科学哲学の専門家による議論とともに, 東北地域の大学における復興支援活動の現状を踏まえ, 今後を展望します。

ISBN: 978-4-86163-187-0, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ4 高等学校学習指導要領 vs 大学入試」(2012)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

大学入試は高校教育にどのような影響を与えているのでしょうか。高大接続にはどういった問題が存在しているのでしょうか。高校, 大学, それぞれの立場から大学入試の問題点について考える一冊です。

ISBN: 978-4-86163-188-7, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ5 植民地時代の文化と教育 - 朝鮮・台湾と日本 -」(2013)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

韓国植民地化から100 年にあたる2010 年に, 東北大学高等教育開発推進センターで開催された国際シンポジウム「植民地時代の文化と教育」等の成果をまとめた論集。日本・韓国・台湾の8 名の研究者が最新の成果を寄稿しています。教育史, 大学史, 比較文化それぞれの視点からまとめられた一冊です。

ISBN: 978-4-86163-221-1, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ6 大学入試と高校現場 - 進学指導の教育的意義 -」(2013)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

2012 年に開催された東北大学高等教育フォーラム「進路指導と受験生心理」をもとにした一冊。多様化する高校教育において, 進学指導や大学入試はどのような役割を果たしているのでしょうか。高校, 大学それぞれの視点から大学受験の教育的意義について考察します。

ISBN: 978-4-86163-222-8, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ7 大学教員の能力 - 形成から開発へ -」(2013)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

最新の調査結果から得られたデータをもとに, 日本の大学教員の画像と, 今後の展望についてまとめた一冊。大学のあり方が大きく変化していく中で, 大学教員はその地位, スキル, キャリアをどのように進化・発展させているのかについて解説します。

ISBN: 978-4-86163-223-5, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ8 「書く力」を伸ばす - 高大接続における取り組みと課題 -」

(2014)

東北大学 高等教育開発推進センター編, 東北大学出版会

「書く力」は, 高校や大学教育の中でどのように育まれているのでしょうか。大学入試のための小論文指導の中で「書く力」はどのように伸びているのでしょうか。高校と大学のそれぞれで「書く力」の養成に取り組んでいる教員からの報告をもとに考察します。

ISBN: 978-4-86163-243-3, 図書館: 本館 2F 学関



「高等教育ライブラリ9 研究倫理の確立を目指して - 国際動向と日本の課題 -」

(2015)

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 編, 東北大学出版会

STAP 細胞事件をはじめとして, 日本の研究機関と研究者には研究倫理をしっかりと身に蓄けることが求められ, 大学教員の必修教養といえるでしょう。本書は, 日本・アメリカ・イギリス・ドイツ・中国の研究倫理確立の最新動向を共同研究でまとめたもので類書がありません。研究倫理に取り組む方々におすすめです。

ISBN: 978-4-86163-259-4, 図書館: 本館 2F 学関

## 最後に

本推薦図書リストに掲載されている書籍の書影（表紙画像）の使用については、各出版社の許諾を得ております。  
また、本リストに掲載されている書籍の一部は、「もっと知りたい大学教員の仕事」（ナカニシヤ出版）においても紹介  
しています。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
川内北キャンパス 川北合同研究棟内  
〒980-8576 仙台市青葉区川内41  
Email: cpd\_office@ihe.tohoku.ac.jp  
Tel: 022-795-4471  
Fax: 022-795-4749

## 【PFPP/NFP OB/OG 通信】

① [PFPP/NFP OB/OG] 2016 年度プログラム募集要項公開と留学生向けセミナーのご案内 2016 年 4 月 19 日 16:06

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
年度明けのお忙しい日々をお過ごしのことと思います。  
嬉しいことに、2016 年度も継続してプログラムを提供できることになりました。  
これもひとえに、様々な形でご支援くださっている OB/OG の皆さんのおかげです。  
本当にありがとうございます。

このメールから、2015 年度参加者の方々にも配信を開始しております。  
どうぞよろしくお願ひします。

今日のご案内は

- 2016 年度プログラム広報へのご協力願ひ
- 学内限定特別講義「日本の大学教員と海外での就職をめざす留学生のための進路支援！」についてです。

■2016 年度プログラム広報へのご協力願ひ

現在、4 月 28 日（木）16:00～のプログラム事前説明会に向けて  
学内外への広報に力を入れているところです。

【2016 年度プログラム事前説明会】

4 月 28 日（木）16:00～17:30  
川内会場：川内キャンパス、川北合同研究棟 101 ラウンジ  
青葉山会場：青葉山キャンパス 青葉記念会館 401（川内地区から同時中継）

ぜひ周りの方々におすめしただただだければと思います。

参加者募集 CM も公開しています。  
<https://www.facebook.com/CPDtohoku/videos/vb.1400220533587557/14913635451577/?type=2&theater>

ポスターや募集要項は CPD のウェブサイトでダウンロードできます。

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

応募の受け付けは 5 月 9 日（月）～27 日（金）です。

■学内限定特別講義「日本の大学教員と海外での就職をめざす留学生のための進路支援！」

留学生の方向けに、キャリア支援センターが特別講義を開講します！  
羽田先生も登壇します。

日時：2016 年 5 月 17 日（火）  
時間：13:00～16:00（12:40 開場）  
場所：青葉記念会館 401 大研修室（青葉山キャンパス）

※テレビ会議システムで、川内キャンパス、（東北大学高度職業教育・学生支援機構 CAHE ラウンジ  
合同研究棟 101）にも配信します。言語は、日本語（一部英語）となります。

東北大学の大学院博士課程で研究し、日本の大学に就職を目指す留学生の方も多いと思います。  
大学教員になるためには、①公募に応募し、②書類選考を突破し、③面接をクリアしなければなりません。最近では、模擬授業を入れ、採点を重視する大学も増えてきました。  
また、海外で企業等に就職する場合には、プレゼン力や履歴書 (Resume) の書き方も大きな判断材料になります。このたび、高度イノベーション博士人財育成ユニットでは、日本の大学に  
教員として就職を希望する方、海外、特に英語圏の企業に就職を目指す方へのセミナーを  
開催することになりました。日本人の大学院生も歓迎します。

申込方法など詳細は下記ウェブサイトでご確認ください。  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1461029493](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1461029493)

最後までお読みくださり、ありがとうございます。  
次回の配信をお楽しみに！

今野

PFPP/NFP OB/OG 通信【16-01】（通算第 26 号）

（署名省略）

② [PFPP/NFP OB/OG] 2016 年度プログラム参加者募集開始と大学中国語教授法強化講座のご案内 2016 年 5 月 11 日 11:48

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
あっという間に GW も終わり、今年度の PFPP/NFP の参加者募集を開始しました。

締切は 5 月 27 日（金）17 時です。  
もし周りにご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひ宣伝をお願いします！

Facebook: <https://www.facebook.com/CPDtohoku/>

Twitter: [https://twitter.com/CPD\\_tohoku](https://twitter.com/CPD_tohoku)

また、前回のメールに対し、近況報告やメールアドレスの変更などの  
ご連絡ありがとうございます。この春から新しい所属先に着任された方々の  
ますますのご活躍を心から祈っております！

さて、今日では  
◆大学中国語教授法強化講座：中国語を教える大学教員のためのスキルアップコース  
のご案内をします。

大学で中国語を教える方向けの海外集中コースです。  
北京語言大学で、中国語教育の理論・方法論、指導の実際、教材について学ぶ  
大学教員対象プログラムをカスタマイズしました。スキルアップを目指す中堅教員、  
初めて教壇に立つ教員を全国募集します。  
なお、研修のための費用の一部は、中国政府および東北大学が負担します。

【研修期間】 2016 年 9 月 2 日（金）～10 日（土）

もし、お知り合いの方で中国語を教えている方がいれば、おすすめてください！

詳細はこちら

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pdp/>

添付のポスターもご参照ください。

引き続きどうぞよろしくお願ひします！

今野

PFPP/NFP OB/OG 通信【16-02】（通算第 27 号）

（署名省略）

③ [PFPP/NFP OB/OG] プログラム参加者懇話会（同窓会）のお知らせ！ 2016 年 6 月 28 日 17:00

PFPP/NFP OB/OG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。

仙台は梅雨真っ只中の今日この頃ですが、いかがお過ごしでしょうか？

おかげさまで、今年度も 7 月から PFPP/NFP を開始する準備がたちました。  
これもひとえに、プログラム OB/OG のみなさんが口コミで参加者をひろげて  
くださっているおかげです！本当にありがとうございます。

面接の際に、「このプログラムを何で知りましたか？」という質問をするたび  
懐かしい名前を聞くことができ、本当にうれしく思っています。  
継続的なご協力、ありがとうございます！

ということ、毎年恒例のプログラムオリエンテーション後の

参加者懇親会（同窓会）を企画したいと思っております！ぜひご参加ください。

【日時】2016年7月16日（土）19時～  
【場所】仙台市内（追ってご案内します）

参加を希望される方は、7月7日（木）までにご返信ください。

今年度のプログラム参加者の数は過去最大です、  
PFFP/NFP（フルコース）6名  
PFFP/NFP（ショートコース）24名  
の総勢30名が参加します。

うち10名は東北大学以外からの参加です。

ますますプログラムOB/OGの皆さんからのお力添えが必要になるかと思っております。  
どうぞよろしくお願いたします！

この春から所属やご連絡先が変更になった方が、お手数ですがお知らせいただけますと  
うれしいです。みなさまからのご連絡を楽しみにしております！

今野

PFFP/NFP OB/OG 通信【16-03】（通算第28号）

（署名省略）

#### ④【PFFP/NFP OB/OG】7月開催PDセミナーのご案内 2016年6月29日 17:12

PFFP/NFP OB/OGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
もう2016年も半分が終わってしましますね…。

7月に予定されているPDセミナーをご案内します。  
既に何名かのOB/OGの方に申込みいただいたようなのでうれしいです。  
どうもありがとうございます。

ご都合に合わせて興味のあるセミナーにご参加いただければ幸いです。

■「しまった!」とならないために—ICT時代の教育で押さえておきたい法—

今野が企画を担当しているPDセミナーのひとつです。  
著作権法などの教員が知っておくべき法律についてクリッカーを使いながら  
クイズ形式で学ぶセミナーです。

開催日：2016年7月7日（木）  
時間：14:00-16:00  
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4F 大会議室  
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html> (A01)

講師：大（東北大学 教育情報基盤センター 准教授）  
金石 吉成（東北大学大学院法学研究科 講師）

趣旨：

教員における情報技術の活用は既にごく身近なものになりつつあります。  
一方で、急速な技術発展により法律と現場との齟齬や想定外の事項も発生しています。  
どのような法律があり、どのように解釈したらよいか、わかりやすい事例や最新の  
トピックを交えながら学びます。

詳細・申込み

[https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1465256206](https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1465256206)

■研究倫理シリーズ 第4回 発表倫理を考える

羽田先生肝いりの研究倫理シリーズの第4回です。  
今回は発表倫理について学びます。

開催日：2016年7月9日（土）

時間：13:00-17:00

場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4F 大会議室  
<http://www.tohoku.ac.jp/japanese/profile/campus/01/kawauchi/areaa.html> (A01)

講師：

山崎茂明教授（愛知淑徳大学人間情報学部）  
吉村富美子教授（東北大学大学院法学部英文学専攻）  
大隅典子教授（東北大学医学系研究科）  
羽田貴史教授（東北大学高度教育・学生支援機構）

趣旨：

真実ある研究活動を進める上で、コアとなるのは発表倫理ですが、国際的な動向と  
日本の動向とは大きなずれもあります。発表倫理のあり方は、現在もまだ流動的なのです。  
これらの問題を、『科学者の発表倫理』（丸善出版、2013年）で知られる山崎茂明氏、  
『英文ライティングと引用の作法 盗用と言われないための英文指導』（研究社、2013年）の  
吉村富美子氏、日本分子生化学会前理事長（第18期）として研究倫理に取り組んできた  
大隅典子氏、公正研究推進協会（APRIN）理事・東北大学公正な研究活動推進委員会  
専門委員会委員長（総長特別補佐）として研究倫理に関わってきた羽田貴史氏の4名で  
フロアを含めた議論を行います。

詳細・申込み

[https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1464915212](https://www.ihc.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1464915212)

どうぞよろしくお願いたします。

今野

PFFP/NFP OB/OG 通信【16-04】（通算第29号）

（署名省略）

#### ⑤【PFFP/NFP OB/OG】PDセミナーのご案内 2016年7月28日 14:21

PFFP/NFP OB/OGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。

東北大学は昨日、今日とオーブンキャンパスでにぎわっています。  
皆さんの中には忙しく対応された方々もいらっしゃると思います。  
大変お疲れ様でした。

7月16日（土）に、無事、2016年度のプログラムを開始することができました。  
3連休の初日にもかかわらず、懇親会（同窓会）へご参加くださったOB/OGの  
みなさま、本当にありがとうございます。

オリエンテーション当日の様子は、CPDのウェブサイトで随時更新中ですので  
ぜひご覧ください。

[http://www.ihc.tohoku.ac.jp/CPD/programs/program\\_cat/pfp/program\\_year/now](http://www.ihc.tohoku.ac.jp/CPD/programs/program_cat/pfp/program_year/now)

それでは、8月以降のPDセミナーのご案内です。

7月のセミナーにも、OB/OGの方々も参加していただけてうれしかったです。  
ぜひ、ご都合に合わせて興味のあるセミナーにご参加いただければ幸いです。

■機関戦略と資源配分

日時：2016年8月7日（日）10:00-12:00（受付：9:30-）

場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室  
講師：水田 健輔（大正大学地域創生学部 教授）

【趣旨】

大学経営・財務の問題に造詣の深い水田健輔教授（大正大学）を講師に迎え、我が国の  
マクロな高等教育政策や大学財政の動向を踏まえつつ、国立大学を中心にした機関レベルの  
資源配分と機関戦略について考えます。大学マネジメントに関心のある方々、  
広くご参加ください。



【詳細・お申し込み】  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program\\_num=1468671410](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1468671410)

■ 研究評価の手法とマネジメント

日時：2016年8月7日(日) 13:00-15:00(受付 12:30)  
場所：東北大学 川内北キャンパス教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室  
講師：林 隆之(大学改革支援・学位授与機構 教授)

【趣旨】

言うまでもなく、「研究」は大学の中心的機能の一つです。研究活動の評価は、科学者共同体が自律的に知識の質を維持・向上させ、研究活動を活性化するためのものとして機能してきました。しかし近年、投じられる資金の増大と研究不正の増加を背景に、社会各方面から厳格な説明責任を求める声が強まっています。研究評価は、学内資源をどう配分するかという機関マネジメントにも関係し、さらに国内外における当該大学の名声やランキングにも影響を与えます。経営戦略の観点から重要な意味をもち、その課題は重層的で、本セミナーでは、大学改革支援・学位授与機構の林隆之先生をお迎えし、研究評価をめぐる現代的課題を踏まえながら、研究評価の手法とそれに基づくマネジメントのあり方について学びます。奮ってご参加ください。

【詳細・お申し込み】  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program\\_num=1468671777](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1468671777)

■ 授業デザインとシラバス作成

近年、PFFPNFPの必修セミナーとして実施している好評のセミナーです。初期のころのプログラムには含まれていなかったのですが、学び直しの際会として参加してみるのはいかがですか？

日時：2016年8月25日(木) 13:00-17:00  
場所：東北大学川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室  
講師：串本 剛(東北大学高度教育・学生支援機構 准教授)

【定員】40名  
【申込期限】2016年8月19日(金)  
+++++

シラバスの作成は、今日ではほとんどの大学教員に求められている事柄となっていますが、その必要性がいまひとつ自覚できない、あるいは本来の機能が十分に活かされていないと感じ、という方も少なくないと思います。本セミナーでは、シラバス作成の教員ある機種のうちでも、特に授業デザインの小道具としての側面に注目し、1学期を通して展開される授業についても、授業の目標・授業の内容・成績評価方法の3つを構造化することの重要性を解説します。また、その方法を体験し身に付けてもらうために、参加者の皆さんが作成したシラバスを材料にセミナーを進めていく予定です。

【お申込】  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program\\_num=1469162334](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1469162334)

■ 授業づくり：準備と運営

こちらも近年、PFFPNFPの必修セミナーとして実施している好評のセミナーです。初期のころのプログラムには含まれていなかったのですが、学び直しの機会として参加してみるのはいかがですか？

日時：2016年9月14日(水) 13:00-15:00  
場所：東北大学川内北キャンパス  
教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室  
講師：邑本 俊亮(東北大学 災害科学国際研究所 教授)

\*\*\*\*\*

【趣旨】学生の前に授業を行うことは大学教員の当然の職務となっています。しかし、授業が思ったようにいかずに、悩んでいる教員もいることでしょう。準備したことが十分に伝わらなかった、学生が授業内容を理解してくれない、おしやべりが多い、居限りをしている、などなど、教員の頭を悩ませる状況は数多く存在します。授業を成功させるためにはどうすればよいのでしょうか。

本セミナーでは、1回の講義形式の授業を念頭に置いて、学生が集中し、内容を十分に理解できるような授業をつくるためにはどのような点に留意する必要があるのか、どんな準備をして、いかに授業を展開するとよいのかについて、受講者の認知面・心理面から解説を行います。また、受講生の皆さんの授業づくりの工夫や失敗談について情報交換を行い、よりよい授業づくりのヒントを互いに共有したいと思えます。

【お申込】  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program\\_num=1469162859](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pdf/index.cgi?program_num=1469162859)

どうぞよろしくお願いたします。

今野

PFFPNFP OBOG 通信【16-05】(通算第30号)

一 (署名省略)

⑥【PFFPNFP OBOG】授業参観および10月実施のセミナーについてお知らせ！ 2016年9月30日 19:52

PFFPNFP OBOGのみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。とうとう明日から10月ですね！

おかげさまで、7月からスタートしている今年度のPFFPNFPは過去最大人数の28名で、学び進めております。

本メールでは、10月に行われるセミナーのご案内と、今年度分の授業参観のご案内をいたします。

まず、授業参観については、今年度もプログラムOBOGからの参加を受け付けます。先生方のご協力もあり、授業のレポーターも少しずつ増やしているところです。ぜひご参加ください。

添付の授業概要をご覧ください、参観のご希望がある場合には日程調整表にご記入いただき、本メールに添付にてご返信ください。

誠に勝手ながら、10月6日(木)までの返信をお願いいたします。

もし、11~12月の日程などで、現時点では判らないものに関しては、直前(1週間前くらい)までお聞きいただけます。でも受け付けられる場合がありますのでその場合はお問い合わせください。

続いて、10月14日のセミナーのご案内です。

【PDセミナー】本当の「か」さとは何か―感情知性と大学教育―

日時：2016年10月14日(金) 15:00-17:00  
講師：箱田裕司(京都女子大学 教授)  
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援棟東棟4階 大会議室

大学教育では専門知識を身につけるために、「理論的」であることが重視され、「感情」は排除してきました。しかしEQ(心の知能指数)ということばがあるように、豊かな感情を育てることは、市民性が柔軟な思考を育てる重要な課題であることが明らかになってきました。感情知性を育てることは大学において大切な課題です。

詳細・お申し込みはこちら  
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/archives/4863>

どうぞよろしくお願いたします。

今野  
PFFP/NFP OB/OG 通信【16-06】(通算第 31 号)  
一 (署名省略)

⑦ [PFFP/NFP OG/OB] 11 月実施セミナーのご案内 2016 年 10 月 19 日 10:42  
PFFP/NFP OB/OG のみなさま  
東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
先日お送りした授業参観のご案内への返信ありがとうございました。ご参加いただきます OB/OG の方々には、近々お会いできることを楽しみにしています。  
この OB/OG 通信も、今号で 30 号の節目を迎えることとなりました。毎回返信をいただいたり、近況報告をいただいたり、みなさまから寄せられる声はプログラム関係にも大いに役立っております。改めて感謝申し上げます。  
今年度のプログラムも順調に進んでおり、今月末には昨年同様から新たに導入した「国内他大学訪問調査」を 2 泊 3 日で実施します。今年度も訪問先は、大阪大学、立命館大学、同志社大学、と昨年より訪問先はひとつ増え、授業参観の機会も拡充することができました。実りある訪問になるよう、鋭意準備を進めているところです。  
来月にはいよいよ、マイクローチングセミナーも開催します。プログラムも佳境に入ってきたと実感している今日この頃です。  
それでは、11 月のセミナーをご案内いたします。先運教員でもあるトッド先生のセミナーです！  
[PD セミナー]  
Classroom management techniques for classes conducted in English  
日時：2016 年 11 月 11 日 (金) 15:30-18:00  
講師：Todd Enslin (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)  
Barry Kavanagh (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)  
英語での授業運営をスムーズに行うためには、授業内容そのものに関する英語表現だけではなく、授業の始末方、学生への指示の出し方などもお知っておく必要があります。本ワークショップでは、得た英語で授業を担当する可能性のある教員や、大学教員を目指す大学院生のみならずを対象として、授業の中で使う英語表現を実践的に学びます。経験豊かな講師と一緒に楽しみながら表現力を身につけてくださいね。  
詳細・お申し込みはこちら  
[https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1475451857](https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1475451857)  
なお、12 月下旬には、プログラムの有効性を検証する目的で、全国ユニーザ会議を実施する予定です。主に、プログラム修了生の追跡調査を予定しております。仙台にて、1 泊 2 日の日程で企画しておりますが、ご興味のある方はご連絡ください。お待ちしております。

今野  
PFFP/NFP OB/OG 通信【16-07】(通算第 32 号)  
一 (署名省略)

⑧ [PFFP/NFP OB/OG] 12 月実施セミナーのご案内 2016 年 11 月 17 日 15:11  
PFFP/NFP OB/OG のみなさま  
東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
一段と寒くなって参りましたが、いかがお過ごしでしょうか。  
今年度も OB/OG の方も参加しての授業参観が着々と進んでおります。プログラム修了後も継続的に顔を出してもらえうれい限ります。

年末のプログラム修了生追跡調査に関しても、ご協力の申し出をたくさんいただきました。ありがとうございました。  
鋭意準備を進めておりますのでどうぞ楽しみにお待ちしております。  
今年度の PFFP/NFP は、今週ひとつの山場であるマイクローチングを終えました。とても良い雰囲気であることができて、ほっとしているところです。  
それでは、12 月のセミナーをご案内いたします。  
[PD セミナー]  
コーチング技能を活用した院生指導  
日時：2016 年 12 月 9 日 (金) 13:00-16:10  
場所：東北大学川内北キャンパス 教育・学生総合支援棟東棟 4 階 大会議室  
昨年から開催しているセミナーです。このセミナーの醍醐味は後半のワークショップにあります！昨年の受講を逃してしまつた方、ぜひこの機会にご参加ください！  
学部の卒業研究や大学院での研究は、学生が様々な知識を動員して探究的活動を行い、問題解決力を養成する最も重要な活動です。そのために欠かせないのが、研究指導ですが、日本では研究指導のスキル育成には明確な方法論がありません。研究指導を担当する教員は、モデルがなく、試行錯誤しながらスキルを身に付けているのではないのでしょうか。  
学習科学では、研究指導は、認知的徒弟制 (Cognitive Apprenticeship) と呼ばれ、モデリング・コーチング・足場かけ・詳述・省察・探索といった手順が定式化されています。特に重要なのは、学生を援助しながら助言や課題を与えるコーチングです。  
好評だった昨年に引き続き、出江(いずみ)紳一(東北大学理工学研究科長・教授と、倉重知也氏(株式会社イグニタス代表取締役、国際コーチ連盟 プロフェッショナル認定コーチ)をお招きし、コーチングを活用して院生の動機づけを高め、スムーズに指導を進めるスキルアップの機会を設けることにいたしました。院生指導に初めて取り組む方、スキルアップを目指す方はぜひご参加ください。  
※このセミナーは、東北大学大学院教員準備プログラム (Tohoku U. PFFP) および新任教員プログラム (Tohoku U. NFP) の一環としても提供されます。  
詳細・お申し込みはこちら  
[https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1477897923](https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1477897923)  
[PD セミナー]  
Classroom English: Pronunciation  
日時：2016 年 12 月 16 日 (金) 15:00-17:00  
講師：Vincent Scura (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)  
研究発表や留学生対応など英語を使用する場面は多々ありますが、大人になってからは基本的な英語の発音のコツを丁寧に学ぶ機会はないかもしれません。本セミナーでは、通じる英語に欠かせないリスムやアクセント、日本人が苦手とする音をとおりあげ、ネイティブ講師による実践的な練習を交えて楽しく学びます。  
詳細・お申し込みはこちら  
[https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1477376201](https://www.ihetohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1477376201)  
みなさまにお会いできることを楽しみにしております！  
今野  
PFFP/NFP OB/OG 通信【16-08】(通算第 33 号)  
一 (署名省略)

⑨ [PFFP/NFP OB/OG]「東京門会」設立と 1 月実施セミナーのご案内 2016 年 1 月 10 日 15:01  
PFFP/NFP OB/OG のみなさま  
東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
2017 年、今年もどうぞよろしくお願いたします。

ディスレクシアの症状のコミュニケーションやアセスメントの手法、事例に加え、ワークも取り入れながら  
大学において実施可能な対応について考えます。ご参加をお待ちしています。  
大学教職員をはじめ、関心を寄せるみなさまの参加をお待ちしています。

(主催) 東北大学 高度教育支援センター 学生支援機構  
(共催) 東北大学大学院 教育学研究科

【お申込み】  
[https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program\\_num=1479084247](https://www.ihe.tohoku.ac.jp/pd/index.cgi?program_num=1479084247)

楽しい日が続きますので、どうかご愛顧ください！

今野

PFFP/NFP OBOG 通信【16-09】(通算第34号)

― (署名省略)

⑩ 【PFFP/NFP OBOG】2016年度プログラム成果報告会のご案内 2016年3月2日 15:58

Tohoku U. PFFP/NFP OBOG のみなさま

東北大学 大学教育支援センターの今野です。  
ご無沙汰しております。

現在、PFFP/NFP の海外他大学訪問調査で今年度のPFFP/NFP参加者と  
ハークレーにいます。リンクもサブリナも元気です。  
今年のカリフォルニアは雨が多いと聞いていたのですが、今のところ  
天候にも恵まれて、充実した研修の日々を過ごしています。

さて、3月23日(木)に、今年度のプログラム成果報告会を開催することに  
なりました。ぜひ多くのOBOGのみなさんに参加していただきたいと思います。  
年度末で忙しい時期かとは思いますが、ご都合が合えばぜひご参加ください！

――

【2016年度プログラム成果報告会】

2017年3月23日(木) 13:00-16:00

川内北キャンパス 川北合同研究棟 CAHE ラウンジ

【2016年度プログラム成果報告会 修了祝賀会】

2016年3月23日(木) 19:00～

仙台駅周辺、または国分町

――

ご参加いただける場合には、3月9日(木)までにご連絡ください。

ご返信の際には、下記のフォーマットをご利用ください。

氏名:

【成果報告会】 出席する/出席しない

【修了祝賀会】 出席する/出席しない

――

また、4月から新たな所属先に移られる方もいらっしゃるかと思います。

その際には、ぜひご一報をいただけると嬉しいです。

皆さまのご参加を心よりお待ちしております！

今野

PFFP/NFP OBOG 通信【16-10】(通算第35号)

― (署名省略)

今年も、OBOGの方々から、年賀状、年賀メールをいただきました。  
みなさんお忙しいのに、大学教育支援センターのことを覚えてくれて  
本当にありがとうございます。喜ばしい近況報告も複数寄せられ  
スタッフ一同で喜んでおります。

10月にお送りしたOBOG通信【16-05】(通算第30号)にて  
ご案内しておりました、プログラム修了生の追跡調査をかねた  
「全国ユニザ会議」が雑事、昨年再来に開催されました！  
遠くは広島からもご参加いただき、2011年度～2015年度までの  
各参加者と深夜まで熱い議論が交わされました。  
ご参加いただきました皆さま、本当にありがとうございます。

そこでの議論で、修了生の勤務先が全国に広がっていることもあり  
なかなか仙台に集まるのは大変だけれど、関東支部などを作ってみては  
どうか、との提案がありました。さっそくPFFP2011修了生の森新之介さんが  
動いてくれました。下記、森さんからのメッセージです。

\*\*\*\*\*

どうも、2011年度にPFFPを修了しました森と申します。

この度、FBに「Tohoku U. PFFP/NFP 東京同門会」というグループを開設しました。

<https://www.facebook.com/groups/360133544348173/>

関東在住ですとなかなか仙台での集まりに参加できませんが、こっちでもできる範囲で  
旧交を温めたり交流を広げたりしていきたいです。

当面は、所属に關係なく参加できるFD研修会などあれば随時情報を共有し、参加者が  
ある程度の人数になったら都内(新宿?)で顔合わせ兼ねて集事会でもしたいと考えています。

ご参加お待ちしております。

\*\*\*\*\*

各終了年度別に仙台での忘年会や新年会など節目に集まりを開催されている旨  
いろいろとご連絡いただいておりますが、こうして修了生の手によって地球支部が  
出来るというのは、とっても嬉しいです。みなさまも、ぜひ！

なお、大学教育支援センターでは下記ウェブサイト、SNSでも情報を配信しております。

ぜひのぞいてみてください。

facebook

<https://www.facebook.com/CPDtohoku>

twitter

[https://twitter.com/CPD\\_tohoku](https://twitter.com/CPD_tohoku)

CPD ウェブサイト

<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

――

全国ユニザ会議の様子は、また改めてご案内いたします。お楽しみに！

――

それでは、1月のセミナーをご案内いたします。

【PDセミナー】

「ディスレクシア―読み書き困難―への気づきと支援」

【日時】2017年1月17日(火) 15:00-18:00

【場所】東北大学 川内北キャンパス

教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

――

今野が企画しましたセミナーです。ご興味のある方、ぜひお越しください！

【趣旨】

会話を流暢にでき、知的能力も標準値にありながら、文字情報の処理がスムーズにいかない  
「ディスレクシア」(読み書き困難)の存在が明らかになってきています。本人の努力不足や  
受け付けられなく、脳の働きや使い方が異なるために起る症状であることが判明されてきました。  
一方で、トーマス・エジソンやトム・クルーズなどの著名人もディスレクシアであったとされる説もあり、  
各分野で才能を発揮している例も報告されています。読み書き困難を伴う学生に出会った場合、  
大学や大学教員はどのような対応をすることができているのでしょうか？  
本セミナーでは、言語発達や読み書き困難等に関連する研究があり、小学生から成人までの  
読み書きに関する相談に当たってきた川崎聡次先生を講師にお迎えし、

# 先達教員ガイド 2016

「東北大学 大学教員準備プログラム」 「東北大学 新任教員プログラム」  
先達教員のみなさまへ

## 先達教員のみなさまへ

このたびは、東北大学 大学教員準備プログラム (Tohoku U. PFFP) 及び新任教員プログラム (Tohoku U. NFP) におきまして、先達教員にご就任いただき誠にありがとうございます。Tohoku U. PFFP/NFP は、大学教員を志望する大学院生及び初期キャリアにある大学教員が、研究・教育・社会貢献・大学への貢献など多様な大学教員の役割を理解すると共に、生涯にわたる職業的専門性発達の展望を持つことを目的としています。

両プログラムにおいて参加者は、国内でのセミナー、ワークショップ、授業参観、国内外他大学訪問調査（フルコース・オプション）などに参加し、大学院教育だけでは十分に培えない高等教育や教授・学習に関する知識・理解を深めます。また、自己省察を通じて継続的な専門性発達を行える主体的な態度・意欲・能力を形成します。

まだ経験の乏しい参加者がこうした態度や能力を形成していくには、先輩教員が自身の豊富な経験をもとに、省察への援助・助言を行うことが効果的です。当プログラムに先輩教員による支援を導入して今年度で6年目となりますが、自分の指導教員以外の先輩教員との交流の機会が持てることは、例年参加者から好評を得ています。

先達教員のみなさまには、ご自身の教育経験に基づき、先達、よき助言者として、プログラム参加者への励まし、課題を明確にする手助け等の活動へのご協力をお願いいたします。

### <2016 年度 PFFP/NFP 先達教員のみなさま>

イノベーション戦略推進本部	医学薬学専攻	澤谷 邦男 名誉教授	名譽教授
薬学研究科		平澤 典保 教授	教授
災害科学国際研究所		畠本 俊亮 教授	教授
文学研究科		永吉 希久子 准教授	准教授
医学系研究科	保健学専攻	佐藤 一樹 助教	助教
高度教養教育・学生支援機構	言語・文化教育開発室	佐藤 勢紀子 教授	教授
高度教養教育・学生支援機構	言語・文化教育開発室	Todd Enslen 講師	講師
高度教養教育・学生支援機構	高等教育開発室	関内 隆 教授	教授
高度教養教育・学生支援機構	高等教育開発室	佐藤 智子 准教授	准教授



東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」

## プログラム構成

Tohoku U. PFFP/NFP では、知識の提供と実践の場の提供により、参加者が大学教員の仕事について理解を深め、自身の教育観の構築を支援しています。

### ＜達成目標＞

参加者は次のことができるようになることを目指します。

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリア構築を設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること



### ＜活動内容＞

- 仕事を理解する（高等教育や大学教員の仕事に関するセミナー）
- 基礎知識を得る（シラバス作成ワークショップ）
- 実践力を磨く（マイクロティーチング、模擬授業）
- 比較の目を育てる（セミナー、ワークショップ、国内外他大学訪問調査）
- 同僚とつながる（他の参加者との交流、ディスカッション）
- 先達から学ぶ（授業参観、コンサルテーション）
- 自己省察力を養う（リフレクティブジャーナル）

## Tohoku U. PFFP/NFP 2016 の参加者

Tohoku U. PFFP/NFP 2016 には、全てのプログラムに参加する「フルコース」と、プログラムの一部のセミナーおよび授業参観のみに参加する「ショートコース」があります。フルコース参加者は、書類・面接審査を経て決定しています。ショートコースは、参加資格の確認を経たうえで基本的に希望者すべてを受け入れています。2016 年度のプログラムには、フルコースに 6 名、ショートコースに 23 名の合計 29 名が参加します。

### 【フルコース参加者】

#### ＜PFFP 参加者＞

1	イシハラ 石原 マサフミ 雅文	男	日本	東北大学 原子分子材料科学高等研究機構	ポスドク (助手)
2	ハヤシ 林 シンゴ 慎吾	男	日本	東北大学大学院 教育学研究科	D2
3	オウ 王 イ 偉	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	専門研究員

#### ＜NFP 参加者＞

1	タカハシ 田中 カズヨシ 香津生	男	日本	東北大学 サイクロトロンのラシオアクセラレーター	助教
2	ロウツ Roots マリア Maia	女	エストニア	東北大学大学院 法学研究科	助教
3	ヨシダ 吉田 サリン 沙蘭	女	日本	東北大学大学院 教育学研究科	准教授

### 【ショートコース参加者】

#### ＜PFFP 参加者＞

1	シエウ 周 シン 振	男	中国	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フェロー
2	シノハバ 渡邊 ヒロユキ 竜太	男	日本	東北大学大学院 国際文化研究科	GSICS フェロー

3	チリダ ヒロキ 成田 裕幸	男	日本	東北大学大学院 理学研究科	D1
4	チカオ キョウゴ 中尾 教子	女	日本	株式会社内田洋行 教育総合研究所	研究員

＜NFP 参加者＞

1	ニイ マキ 新居 麻樹	女	日本	東北大学歯学部 附属歯科技工士学校	講師
2	エン シュンコウ 袁 春紅	女	日本	岩手大学 農学部	准教授
3	シノハラ ヨロジ 主演 祐二	男	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
4	オノノ ミチ 大野 美砂	女	日本	岩手大学 農学部応用生物化学科	助教
5	トミカキ ヨウコ 富永 陽子	女	日本	岩手大学 教育推進機構	准教授
6	ハラタ ナホコ 原田 奈穂子	女	日本	東北大学 医学系研究科 保健学専攻	講師
7	タナカ ヤスエ 田中 恭恵	女	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教
8	エンカイ エロキ 遠海 友紀	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
9	シマダ 嶋田 みのり	女	日本	東北学院大学 ラーニング・コモンズ	特任助教
10	カマタ セイジ 鎌田 誠司	男	日本	東北大学 学際学フロンティア研究所	助教
11	カヤマ マサヒロ 鹿山 雅裕	男	日本	東北大学 学際学フロンティア研究所	助教
12	ウエノカキ ホミ 上岡 紀美	女	日本	仙台百百合女子大学 人間学部人間発達学科	講師
14	シロク エカリ 塩飽 由香利	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教

14	オノカワ マリコ 及川 麻理子	女	日本	東北大学 歯学研究科	助教
15	ウツボト トオル 坪谷 透	男	日本	東北大学 歯学研究科	助教
16	ヤマノウチ ヤスノリ 山内 保典	男	日本	東北大学 高度教養教育・学生支援機構	准教授
17	スガハラ アキコ 菅原 明子	女	日本	東北大学病院看護部 東北大学大学院医学系研究科	助手
18	タマカケ ケン 玉懸 元	男	日本	いわき明星大学 教養学部	准教授
19	ニシオカ タカシ 西岡 貴志	男	日本	東北大学大学院 歯学研究科	助教

## Tohoku U. PFFP の概要

Tohoku U. PFFP は、**大学教員を目指す大学院博士課程後期の学生、ポストドク、研究員を対象**に、大学教員に求められる能力を育てることを目指しています。プログラム参加者は、大学教育に関する学内セミナーや授業参観、マイクロティーチング、国内／海外他大学訪問調査（オブション）を通して大学教員に必要な能力や知識を獲得し、円滑に初期キャリアを積んでいくことができるよう、大学教職への準備を図ります。同時に、プログラムを通じて他分野の参加者と交流し、将来の同僚について知るとともに、大学における多様性を体験してもらおうことを目指しています。

## Tohoku U. NFP の概要

Tohoku U. NFP は、**新任教員を対象**（平成 23 年 4 月以降採用、概ね 40 歳以下）に、大学教員に求められる様々な能力や知識の獲得を通じて、円滑に初期キャリアを積んでいくことが出来るように支援することを目指しています。特に、参加者が組織の一員としての大学教員という視点を身につけ、自らの活動を省察し、これからの大学や大学教授職について自分なりの展望をもつことを目指しています。

## 2015 年度からの変更点

### [1] ショートコースにおけるリフレクティブジャーナルの導入

2015 年度の参加者より、フルコース参加者だけでなく、ショートコースにおいてもリフレクティブジャーナルの執筆を課してほしい、という要望が寄せられたため、ショートコースにおいてもリフレクティブジャーナルを課題の一つとして導入することにしました。

### [2] 前期授業を対象とした授業参観の実施

全学教育を対象とした場合、前期に実施している授業を参観対象としてほしいという要望が多いことから、7 月下旬に実施される授業も参観の対象とすることにしました。

### [3] 資料提供のタイミングと活用の呼びかけの工夫

オリエンテーション時に配布している各種資料や書籍が、活用されていない状況が明らかになったため、一括してオリエンテーション時に配布することをやめ、適時必要な資料を配布している方法をとることにしました。配布時には、その意図なども解説することで、より豊富な資料を活用してもらええることを期待しています。

### [4] 模擬授業の実施方法の改善

先達のみならずから寄せられたご意見をもとに、模擬授業の実施方法を改善します。これまでにも課していた「授業 1 回分（90 分間）を設計した後、そのうちの一部をマイクロティーチング/模擬授業として実践する」という流れが実際には踏襲されていない場合が多いことから、ティーチングプランの様式を 90 分間のものに変更し、授業全体の流れを先達教員と共有できるようにします。また、プログラム OB/OG からの協力により、学習者役を別におき、先達教員にはコメントのフィードバックに集中してもらおうという方法も検討していく予定です。

### [5] 先達コンサルテーションの実施方法の改善

先達教員、参加者の双方から時間の設定について要望が寄せられていることから、一人あたりにかける時間を延長する方法を検討します。また、事前に参加者からの質問内容を先達にお伝えできるように実施方法について改善します。

## 先達教員の役割

先達教員のみなさまには、次の6つの役割をお願いいたします。

1. オリエンテーションへの参加
2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後デイスカッション
3. 模擬授業におけるコメントのフィードバック
4. リフレクティブジャーナルの確認と対面コンサルテーション
5. 成果報告会への参加
6. 先達教員としての活動に対するフィードバックの提供

以降のページでそれぞれの活動内容について説明します。

## 1. オリエンテーションへの参加

参加者との顔合わせをします

**2016年7月16日(土)**に実施するオリエンテーションにご参加いただき、参加者との顔合わせをします。

オリエンテーションでは、自己紹介、プログラムの目的に関する説明、大学教員の役割と大学教育に関するブレインストーミング、比較の視点を育てるワークショップ、ランチタイム懇親会を予定しています。

終日の参加が難しい場合は、可能な範囲での部分的な参加も可能です。特に参加者との顔合わせが行われる午前中～ランチ懇親会にかけてご出席いただければ幸いです。

当日欠席の場合は、あらかじめ先達教員のみなさまの自己紹介と参加者へのメッセージをビデオ収録し、オリエンテーション当日に上映することで、先達教員のみなさまを参加者にご紹介いたします。ご協力をよろしくお願いいたします。

## 2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後デイスカッション

ご担当されている授業の参観許可とデイスカッションへの協力をお願いします

プログラム参加者は、より具体的に教育活動について考えるために、実際の授業を参観し、授業後に担当教員とのデイスカッションをします。

先達教員の皆さままで、2016年度の前期・後期に授業を開講される方には、上記の活動においてご自身の授業を公開していただくと共に、授業後のデイスカッションにご協力をお願いいたします。

授業後のデイスカッションは、参観人数に合わせて30～60分程度を予定しております。

日程の調整については、別途ご連絡いたします。



## 〔参加者の声〕「授業を見る聞く学ぶ」

- 教員に“動き”があることがやはり効果的であると思った。教員と個々との対話、グループとの対話があった。学び合う場という雰囲気を生み出してくれた。トッド先生が学生の名前を呼んでコミュニケーションをとっていたのも、あるようでなく、良いなと思った。コミュニケーションは学びを深めるということのひとつのようと思った。グループワーク中のファシリテートの役割も重要である。各グループのデイスカッションが深まるように全体への目を配り必要であった。授業見学は、毎回、新たな発見と学びがあつてとても有意義であった。特に今回は、日本語、英語、どのような講義でも共通する部分があることも面白かった。教育とは、テーマについて、学生とともに学び、深め合うプロセスであると思う。そのために教員は、引き出す、補うといった役割を担っている。教えるのではなく、共に学び、育ちあうということだろう。。静的ではなく、非常に動きのあるプロセスである。コミュニケーションは、日常一般だけでなく、教育にも重要な意味をもつことが理解できた。
- 統計計算の最も基礎的な部分に関する講義だったので、ある程度の基礎知識もあり、内容に入っていくやすかったものもあるが、それでも非常にわかりやすく、簡潔かつ抜け落ちとしない講義内容で大変勉強になった。今までのNFPでは授業の組み立て方、伝え方、学習者の理解プロセスなど、先達の先生方の経験や研究に基づいた分析・考察・実践結果の中身を主に勉強させてもらっていたが、今回は実際の授業でのパフォーマンスを拝見できとても有意義だった。なぜ「わかりやすかった」のか。いくつか印象に残った点を書いておく。1) 喋り方が明確で聞きやすく、言い方に迷いがないので、聞いている方が緊張感を持ち、雑念無く授業について行ける。自分の場合は、専門分野の内容でも、いや他人に説明するとなつた場合、言葉の定義や使い方、内容の正確さなどに自信がなくなつて言葉がスラスラ出てこない場合がよくある。普段の勉強の賜物なのだろうか。淀みなく喋る力を身に付けた。2) 当然かもしれないが、板書がキレイで読みやすい。図はキレイに、字ははっきりと。要所要所で内容を区分け（番号を振る）し、「今何をやっているのか」をわかりやすくしている。自分はまだセメスターを通して行うような授業を受け持ったことはないが、もしやる場合は板書でやると決めているので、参考にしたい。3) 宿題の解説と質問への回答を丁寧に行っている。前回のNFPの講義で、呂本先生が「既有知識、既習内容の活性化」を強調しておられたが、それに当たる。前回何を学んで、今何を学ぶのか、前回と今の内容をつなげられるように意識したい。
- 授業中一貫して、昼食後の時間帯であるにも関わらず喋っている学生が少なく、熱心に書く作業をしている学生が多かったことから、本授業では、学生の意欲を刺激し持続するような工夫がなされており、またそれが機能していると思った。学生の眠気防止については、先生ご自身も配慮している点として挙げておられたが、授業内で話題にするト

ピックそれぞれが学生の興味を惹くものであることに加えて、学生に質問したり、短い動画を複数回用いたり、学生自身に作業させたりすることで、授業にめりはりが生まれ、授業内の学生の意欲を喚起し、維持する一因になっていた。また、和間の移動も、質問に対する回答を聞きとるためだけでなく、学生との距離を心理的に縮める上でも効果を発揮していた。和間巡視や質問の仕方などは教育実習の際にも指摘された経験があるが、実際に教壇に立つと緊張して忘れてしまうことが多かったので、必要に応じて意識しながら取り入れていきたい。

- 学生の積極的な発言を促すために、非常に重要な対応の仕方であると感じた。誰も間違ったら「恥ずかしい」「先生に怒られる」などと考え、どうしても失敗を恐れて消極的な行動をとってしまう。現在の自分も、研究室の先生と議論を交わす際に怒られることを懸念し、積極的に意見を言っていない気がする。逆に後輩に意見された際には、自分は意外とはっきり「それは違うでしょ!」とやってしまっているかもしれない（あまり覚えていない）。その場にいる全員が「議論に参加していること」を感じ、「全員で結論を出した」感を得るためにも、議論（授業）の場の環境づくりは極めて重要である。授業の場以外でもぜひ出来るようになりたいし、実践していきたい。
- 自分が特に印象的だったのは2点。まず、分かりやすさよリアリティを追求して、図よりも写真を用いるという点。たしかに図の場合はエッセンスを抽出するために簡略化して、必要な部分をわかりやすく描く。自分の分野では主にそのようにしている。一方でわかりにくくても実際の写真を用いたというのは、おそらく普段から実験などをしており、そのリアリティな姿に日常的に接して、それに対し何らかの実験を行わなければならなかったため、わかりにくくてもリアリティを知っておく必要性があるのだろう。このへんは実験主体の学部(薬学含む)とそうでない学部との違いと感じた。もう一点は最後にスライド資料を配った点について。内容をしっかり覚えてもらう必要がある学部の授業（おそらく学部の授業）では資料を最初に配って書き込みをできるようにする一方、今回のような全学の授業では覚えてもらう必要はないため、授業中は聞くことに集中してもらい、最後に記録として残すために資料を残すとのことだった。このように授業の意図に応じて資料を配るタイミングをかえるというのは、簡単な手法であるが効果的であると感じたので、自分も使わせていただこうと思った。

### 3. 模擬授業におけるコメント

参加者の実践する模擬授業を参観し、フィードバックをご提供下さい

#### 模擬授業の概要

PFP/NFP では、実践的な授業実践のスキル獲得のために、参加者が一回の授業計画をたて、そのうちの任意の一部を 20 分程度実施し、これに対して他の参加者や先達教員からコメントをフィードバックする機会を設けています。

先達教員のみならず、**2017年2月予定のワークショップ「自分の授業をみよめる～模擬授業」にご参加**いただき、参加者のティーチャリングに関するコメントをご提供ください（詳しくは開催日前に再度ご説明いたします）。

#### 模擬授業ワークショップの流れ

模擬授業ワークショップは以下のような流れで行います。

- 参加者による授業設定の概要説明（3分間）
- ティーチャング（17分間）
- うまくいったところ、さらによりよくできる部分のふり返り
- 他の参加者、メンターからのフィードバック

17 分間の授業実践は、計画した一回の授業のうちの任意の部分の切り出ししたものであり、活動の途中で時間が終了することがあります。また、他の参加者、先達教員は、授業者の設定、要求に応じて適宜受講生役を担うことがあります。

#### 模擬授業におけるコメントの方針

模擬授業ワークショップにおいては、参加者が自分のティーチャングに関する長所を発見するとともに、さらなる練習、工夫の余地があるポイントについて認識できるよう、建設的なコメントをお願いたします。また、ご自身のこれまでのご経験から、参加者の課題に関連するティーチャングに関するエピソードなどもお寄せいただければ、より充実したセッションとなるでしょう。

また、模擬授業ワークショップでは、主に**教え方（implementation of teaching techniques）に主眼を置いてコメント**することとします。ただし、

授業内容上の課題が授業の成否に関わるかと判断される場合には、この点についても具体的なアドバイスをお寄せ願います。

#### 模擬授業におけるコメント時の留意点

フィードバック時には、次のことを留意願います。

- セッションの構成（導入部分として適当だったか?）
- 進行のペース（速すぎ/遅すぎるところはなかったか?）
- 言語/非言語コミュニケーション(声,アイコンタクト,ジェスチャー)
- 受講生とのインタラクション(学習を支援/促進するものであったか?)
- 道具の利用（黒板, その他教具の使用方法)

Osaka University, Course Design and Teaching Workshop 資料(2011)を一部改題

フィードバックの方法については、次のことを留意願います。

- 授業の背景・設定に関連した指摘を行うこと
- 人（人格）を批評するのではなく、パフォーマンスを批評すること
- ネガティブな点・ポジティブな点、両方のコメントをすること
- 特定の事象について、あいまいな点なく明確に伝えること
- 「どう改善するか」についてのアイデアを提供すること
- 1つか2つの主なポイントに絞ってコメントすること
- コメントの目的は支援であることに留意すること
- 学習者（受講生）の視点からの指摘も行うこと

Saroyan, A., & Amundsen, C. (2004)等を参考に作成

#### 〔参加者の声〕「模擬授業」

- 不安だったのは「仕事にするかもしれないことが楽しくなかったらどうしよう?」ということでした。言い換えれば、根本的に自分に合っていないと判明したら、ということとです。これについては、今回の模擬授業で救われました。実のところ、今回選択した授業内容について話すのがとても楽しかったのです。それも、フィードバックにおける評価を受ける前から、話すことそのものがしっくり来り楽しかったのでした。これは平澤先生が最後におっしゃっていた「若い人たちに自分の持っているものを伝えるのは楽しいし、そうあってほしい」に通じるものがあります。
- 今回の模擬授業では、板書とスライドの、それぞれの強みを見ることができて興味

深かった。自分は板書派であるが、それぞれの長所と短所を考えてみる。仮に授業の「質」を、大雑把に、①わかりやすさ、②情報量、③参考資料の質・効果性、④どれだけ学生の積極性を引き出せるか、4つで評価できるとすると、①は板書、②・③はスライドに軍配が上がりそう。④については板書・スライドという方法論以外の部分が大いだろう。板書のわかりやすさの要因は、授業の内容について、教員の中で一旦消化されたものももう一度形になって板書に表れている、という実感と安心感が大いと思う。加えて、ノートを取る学生とペーパーが合いやすいので、無理なく授業を展開していける点も大きい。②・③のスライドの利点については説明不要だろう。一長一短あるが、自分としてはやはり①のわかりやすさを追求したい。邑本先生が仰っていたことだが、「わかる」ということが学生の授業への積極性を引き出すからである。そういう意味で、①と④の関連性を自分としては大事にしたい。となると、板書派の課題は情報量と参考資料の質をどうやって確保するかである。まだ実践した経験がないので何とも言えないが、授業外の課題をうまく出すことでカバーできるのではないかと妄想している。板書で行う場合、情報量はスライドの半分程度と見積もるのが妥当だろう（澤谷先生が仰っていた）。授業外の課題を、上手くナビゲートしてやれば、残り半分の情報を学生自ら調べて身に付ける、ということではできないものだろうか。そうすれば、①②③④全て揃う気がするのだが、机上の空論だろうか。自分が実践する時までとっておきたい計画である。

- 前回のマイクロティーチングを踏まえ、分量を増やす形で模擬授業を行った。前回のマイクロティーチングでは宗教学の話が多かったため、学術的な内容より宗教と日常生活との関係がみられる資料を授業内容に取り入れた。刺激的な内容で興味をひくことを考えたが、刺激的な内容だからこそ「宗教とは何か」という問いに対して偏見をもたせる可能性があることをコメントから学んだ。また、「宗教」と「宗教学」の二柱で授業を構成したが、報告者の中でもその区別と両方の繋がりが明確に定まっておらず、曖昧なまま授業を行ったことに気付いた。二回の授業を通じてもっとも難しさを感じたのは、興味誘発と新しい知識の伝達におけるバランスである。面白そうな内容を伝えながら、それを達成するための課題いくつかがみつけた。PFFPを理想として考えているが、これまで学生の立場でみていたことを教員の立場でみるようなになりつつあると意識していたが、それらを消化するには時間が必要であるようだ。

## 4. リフレクティブジャーナルの確認と対面コンサルテーション

参加者との個人面談にご協力ください。

プログラム参加者は、「**大学教員の役割や仕事を理解し、自分なりの考え方を説明できる**」ようになることを目的とし、リフレクティブジャーナルの作成を行います。

リフレクティブジャーナルとは、自分の経験・体験・思考を省察し、考察した内容について記していく記録を意味します。記述することによって、より深い考察ができ、自分なりの考え方を表現できるようになることから、自己省察を促進するためには有効な方法だと考えられています。

先達教員の皆さまには、プログラム実施期間中に一度、上記のリフレクティブジャーナルにおける参加者の記述を確認したうえで、**2017年3月**に実施予定の対面コンサルテーションを実施していただくようお願いいたします。

対面コンサルテーションにおいて先達教員は、ご自身の経験を踏まえ、参加者が大学教員という役割の在り方について明確なビジョンと価値観を持てるように励まし、助言、問いかけをしてください。参加者がより多角的な視点で教育活動について考えることができるよう、問いかけやこれまでの経験の共有をお願いします。

### 対面コンサルテーションの流れ

対面コンサルテーションは以下のよう流れで行います。

【前半】先達一人当たり 3～4 名の参加者と各 15～20 分ずつの面談

【後半】グループディスカッション（40 分）

グループディスカッションは、参加者と先達全員で、特に全体と共有したいことや、他の参加者・先達の意見も聞きたい、というトピックを出し合って進めます。

### 〔参加者の声〕「先達コンサルテーション」

- 本プログラムで様々な研修を受講してきて、その最後の時期に、経験豊富な先達教員の方々から生の声を聞いたことは非常に良かった。6人の先生方の意見を聞いて総括的に感じたこととして、先生全員が、学生別により良い教育をどのように提供するかということを常に考えていることがわかり、とても素晴らしいと感じた。
- 今回私は、先達教員の方々に対して、教員として働いてきた中で教育観がどのように変化していったか、もしくはどのような教育観を持っているか、ということを中心に話を聞いた。教育観に関する内容は少し違った話も多かったが、学生個人のパーソナリティを踏まえて、学問の楽しさをより楽しく面白く学生に伝えることに尽力し誠行錯誤することが、大学教員の本質的な役割なのではないかと感じた。パークレーにいた時も同じことを感じたが、学生からの多少的外れで、遠慮のない質問に答えてくださる先生方の懐の深さを感じた。授業見学の後のディスカッションを踏まえた内容を聞いたつもりもしたが、ディスカッションの時と比べると、より自分のペースで質問をしたり、時には個人的に悩んでいたことなど（ライフワークバランス、教員としての生活、大学教員として人間関係をどうするかなど）を多く伺うことができた。
- 私は指導教員が学生を褒めるどころをほとんど見ることがありません。もちろんそういう育て方もあるのだろうと思っておりますので、昔はそれに慣れようとしておりました。しかし最近になり、どうにも研究室の後輩がいまいちモチベーションに恵まれないことや、自分自身の自己肯定感が低下していたことについて考えてみたときに、褒めることの必要性を感じるようになりました。これについて永吉先生は「今の時代、学生の先行きは不安定で、そこで否定的な評価だけを受けていると精神的に厳しいものがある」と時代背景も踏まえてお話ししてくださいました。また「投稿論文がなかなか通るとも限らない状況において教授にくらいは認めて欲しい」ともおっしゃっていました。これについては褒められない状況にばかりいた身としてはカルチャーションにも似た衝撃を受けましたが、本当にその通りだと思えました。また平澤先生は「まず簡単な実験からはじめてもらってその成功を褒めることで自信がつくと、ちよっと騙すように申し訳ないのだけど、より難しいことに挑戦する際に失敗を乗り越えやすくなる」というような褒めることの別の効能について教えてくださりました。これは本当だと思えます。成功経験とそれを評価された経験が不足している、投げ出しにくくなることも多々あると思えますので。
- 長い間、私にとって、大学教員という職業は研究の継続に付随するものであった。修士課程および博士課程への進学を決めた時、研究が動機の多くを占めており、大

学教員はその先の進路として可能性の高い選択肢の一つではなかった。良くないこととは思いつつも、研究と比較すると、受動的かつ消極的な姿勢でそれを選ぼうとしていたことは否定できない。しかしながら、各種セミナーを通して大学教員という仕事について知識や理解を深め、これまでの自分の経験を振り返ったり、短時間ながら授業を構想することによりやりがいを見出したりする中で、研究者としてだけでなく、教育者としての大学教員像を現実味のある形で思い描くようになってきた。先達コンサルテーションに向けて質問事項がとめどなく考えついたり、先達の方々のお話を伺いながらさらさらなる質問事項が浮かんだりすることに気づき、大学教員としての自分の在り方について、以前よりも、そして想像以上に積極的になっていくことを改めて実感し、そのような変化を良い傾向だと受け止めている自分に少し驚いた。教育への関心が高まるにつれて、特に教育と研究、それ以外の業務とのバランスの取り方への関心が高まり、私が先達コンサルテーションで提示した質問の多くはその点に関連するものだった。それらへの回答は、首尾不首尾やどれを重視しているのかなども含めて、一様ではなく、しかし、それらのバランスを考えらるうえで、不可抗力であったり予測不可能な要素は排除できるものではなく、またキャリアを通して常に一貫して保てるものではないという点は共通していた。そして、時間の使い方や教育と研究の関連を工夫すること、視点を変えて再考してみることなどのご教示をいただいた。自分にとっての教育と研究、それ以外の業務との正しいバランスは推し測ることもできないほど曖昧としている段階で、今回得られた回答の本当の意味を知るのはまだ先のことだと思いが、その点について今後ずっと考えていく際の指針を得られたように思う。柔軟性を持って自分のキャリアと向き合っていきたい。

- 自分達の研究を育んでいくのも教育だと考えたと研究も教育も境界はない。研究、教育と区別して考える必要はないんだなと思えたのは新鮮だった。自分の研究を伝えるのも、育むのも研究であり教育である。何だかすっきりした。研究と教育が育まれるのも育ちの過程と運動していて、その時の環境や自分の状態に左右されるというご意見が多かった。一歩ずつ考え進んでいけばおのずと重み付けがシフトしていくのだろうと思った。そのためにもリフレクションを今後も続けていきたい。タイムマネージメントは避けては通れないテーマである。何にどれだけ時間をかけるかは、見失いやすい。特に研究活動は終わりが無い営みのせいか、自分でオンオフのマネージメントが求められる。それぞれの価値観にもよるが、ワークライフバランスは大事にしていきたい。これからの時代背景にもよるだろう。学生であっても修羅場続きだが、修羅場があっても乗り越えていくうちに前に進む推進力になるというコメントを頂いた。修羅場続きで気持ちが減入ることも多い。先達の方々のコメントを大事にしたい。



## 5. 参加報告会および修了式への参加

参加者に、プログラム全体を通してのコメントのフィードバックをお願いします

**2017年3月**に予定されている参加報告会へご出席いただき、参加学生に対して、プログラム全体を通してのコメントをお願いします。

## 6. 先達教員活動についてのフィードバック

プログラム全体を通しての先達教員活動に関してご意見をお寄せください

海外の大学教員準備プログラムや、授業改善のための活動においては、先輩教員によるコンサルテーションが重要な役割を果たします。我が国では、組織的な活動としての取り組みはまだ不十分です。この取り組みを通じて、日本の大学にふさわしい活動のモデルを構築を目指しています。

プログラム終了後、高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センターに対して、先達教員の役割、活動体制等について、忌憚なきご意見をお寄せください。

お寄せいただきましたご意見をもとに、来年度以降のプログラム内容、先達教員活動の内容をさらにより良いものにするため、改善を図ります。

## ISTU の活用

PPFP/NFP では、より充実したプログラムにするため、ISTU（東北大学インターネットスクール）を利用します。

ISTU とは、東北大学の全正規授業に標準対応した e ラーニングシステムです。東北大学に在籍する全ての学生、教職員が利用することができます。プログラムにおける利用方法は次の 2 点です。

- 動画の配信
- リフレクティブジャーナルの掲載

国内セミナーやワークショップは全て撮影をし、欠席した参加者のために配信をします。先達教員は、ISTU の動画を視聴することで、参加者がどのような活動をしたのかを確認することができます。

また、参加者のリフレクティブジャーナルや、配布資料などもアップしますので、参加者の経験や思考の様子を確認することができます。

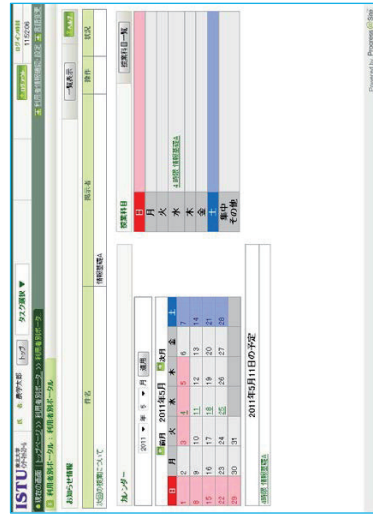
## ISTUの利用方法

<ISTUにログインする> ISTUのURL: <https://xapp.istu.jp/>



ISTUのトップページからログインします。ユーザIDは、東北大IDです。

<利用者ポータル画面>



利用者ポータル画面は全ての機能にアクセスできるページになっています。

画面右側下の受講授業科目一覧「集中・その他」の欄に「PFFP/NFP2016 先達教員ページ」が表示されています。この科目名をクリックすると、PFFP/NFP用のページに遷移します。

ISTUに各種情報がアップされ次第、メールでご案内いたします。

ISTUの利用に関してご不明な点がある場合には、本ガイド最終ページに掲載されている連絡先までご連絡ください。

## PFFP/NFPの活動スケジュール

活動名	日時
PFFP/NFP オリエンテーション	2016年7月16日(土) 10:00-17:30 (11:00~13:30 時までの参加でも可)
授業参観: 授業を見る聞く学ぶ	2016年7月 2016年10月~2017年1月中旬
授業デザインとシラバス作成	2016年8月25日(木) 13:00-17:00
授業づくり: 準備と運営	2016年9月14日(水) 13:00-15:00
本当のかいこさとは何かー感情知性と大学教育ー	2016年10月14日(金) 15:00-17:00
【オプション】国内他大学訪問調査 (立命館大学)	2016年10月(予定)
マイクローチーニング	2016年11月(予定)
コーチング技法を活用した院生指導	2016年12月9日(金) 13:00-16:10
模擬授業	2017年2月(予定)
【オプション】海外他大学訪問調査	2017年2月-3月(予定)
先達教員による個人コンサルテーション	2017年3月(予定)
成果報告会&修了証授与式	2017年3月(予定)

\* 色掛けの部分が先達教員にご出席いただきたい活動です。

## 最後に

PFFP/NFP における先進教員の役割, ISTU 等の利用に関するお問い合わせは下記までお寄せください。

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Email: [tu-pffp@iie.tohoku.ac.jp](mailto:tu-pffp@iie.tohoku.ac.jp)

TEL: 022-795-4471

FAX: 022-795-4749

東北大学  
大学教員準備プログラム (PFFP)  
新任教員プログラム (NFP)

先達教員ランチ懇親会  
2015年7月9日

東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター  
教育関係共同利用拠点「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点  
- 大学教員のキャリア成長を支える日本版SoTLの開発」

ランチ懇親会の流れ

- ご挨拶 (羽田貴史 大学教育支援センター長)
- 大学教員準備プログラム (PFFP) および 新任教員プログラム (NFP) の概要
- 先達教員のみなさまにお願いしたいこと
- 質疑応答
- 先達教員のみなさまから

目標

- 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになること
- 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できること
- 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになること
- 異分野の研究や教育文化を知ること

プログラムでの活動内容



PFFPとNFPは合同で実施

昨年度の参加者からの評価

- 模擬授業、先達コンサルは好評
- 目的・コンセプトの共有、パークレー研修の位置づけに関する昨年度の課題が解決
- リフレクティブ・ジャーナルの取組みに対する評価が向上

昨年度先達教員からの評価

- 内容はちょうどよい
- 交流の機会がもっとあってもよい
- 参加者のプロフィールやキャリアプラン、問題意識を事前に把握したい
- 先達教員も他の先達の授業を参観できると良い
- 他大のシラバスや授業も見れると良い
- 海外派遣の効果は高いので継続すべき
- コンサル時に質問が漠然としすぎていた

2015年度の課題

- ① 先達教員と参加者との交流、情報共有体制の強化  
→ 交流の機会の拡充、プロフィールの共有
- ② 東北大学以外の授業参観の実現  
→ 東北工業大学、立命館大学との連携を実現
- ③ OB/OGとの継続的な関係作り  
→ 同窓会の実施、ファシリテーターとしての招聘
- ④ プログラムの全国公開  
→ 他大学からの参加の受け入れ

今年プログラムの変更点

- プログラムの全国公開 (他大学からも参加可)
- プログラムのつまみ食い可能な「ショートコース」を新設 (セミナー+授業参観)
- 院生指導法セミナーを新設
- オプションを設定  
- パークレー研修をオプションに  
- 国内の他大学訪問調査を新設 (立命館)



## 2種類のコース

### ショートコース

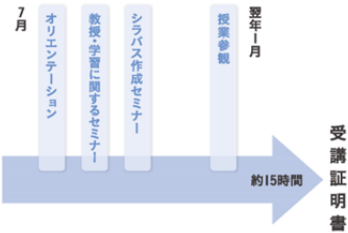
- ・まずは教育実践について学びたい方向け
- ・選抜なし（応募資格の確認あり）
- ・7月～翌年1月まで

### フルコース

- ・大学教員の仕事について総合的に学びたい人向け
- ・書類選考・面接による参加者の選抜あり
- ・7月～翌年3月まで

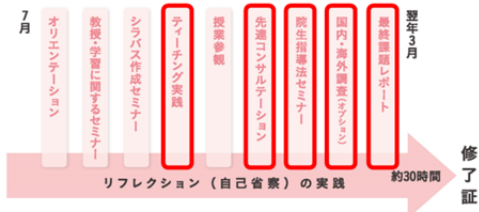
## ショートコース

■まずは教育実践について学びたい方へ(ショートコース)



## フルコース

■大学教員の仕事について総合的に学びたい方へ(フルコース)



## フルコースの特徴

- ・オプションとして、国内・海外大学の調査訪問への参加応募資格
- ・経験豊富な先達教員によるコンサルテーションの機会
- ・マイクロティーチングなどの教育実践の機会
- ・院生指導法に関するセミナー
- ・リフレクションの実践とフィードバック

フルコースのみ

## 国内・海外他大学調査訪問

- ・比較の目を育てる
  - 授業参観，教員とのディスカッション
  - 学習支援組織の訪問と聞き取り
  - 研究者訪問
- ・希望調査のうえフルコース参加者から選抜
  - 国内他大学訪問調査：立命館大学（2泊3日）
  - 海外他大学訪問調査：パークレー（1週間）

## 実施スケジュール

活動	日程	ショート
オリエンテーション	7月18日(土)	○
シラバス作成ワークショップ	8月25日(火)	○
学習と教育の科学(セミナー)	9月10日(木)	○
授業づくり：準備と運営(セミナー)	9月16日(水)	○
授業を見る聞く学ぶ(授業参観)	10月-1月中	○
マイクロティーチング(授業実践)	10月	
院生指導法セミナー	12月3日(木)	
模擬授業(授業実践)	2月	
国内他大学調査訪問(2泊3日)	10月	
海外他大学調査訪問(1週間)	2月下旬~3月上旬	
先達コンサルテーション	3月	
参加報告会&修了証授与式	3月	

## 先達の皆さまにお願いしたいこと

1. オリエンテーションへの参加
2. 「授業を見る聞く学ぶ」における授業公開と授業後ディスカッション
3. 模擬授業におけるコメントのフィードバック
4. リフレクティブ・ジャーナルの確認と対面コンサルテーション
5. 参加報告会への参加
6. 先達教員としての活動に対するフィードバック

## オリエンテーションへの参加について

【日時】2015年7月18日(土) 10:00-17:30

【場所】川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター 大会議室

- プログラムについては配布資料参照のこと
- 午前中の顔合わせにて自己紹介を実施
- 午前中～ランチ懇親会(13:00終了)までの参加でかまいません
- ランチ懇親会費用として800円をお納めください



## 「授業を見る聞く学ぶ」について

- 授業参観とディスカッションの実施
- 10月～翌年1月中に実施する授業が対象

- 後日、改めてご案内したおりに、公開いただける授業の日程をお教えください
- 授業公開とそれに引き続く30～60分のディスカッションが実施可能な日
  - 掲載授業以外にも、参観が可能な授業があれば、それについても合わせてお知らせください

【締切】2015年9月6日（日）

17

## 模擬授業におけるコメントについて

【日時】2016年2月中旬の週のいずれか1日

【場所】川内北キャンパス 講義棟を予定

- 参加者がそれぞれ20分の模擬授業を実践
- 上記に対し、コメントをフィードバック



18

## ジャーナルの確認とコンサルについて

【日時】2016年3月上旬のいずれか1日

【場所】川内北キャンパス内のどこか

- 先達一人当たり4名の参加者と各20分ずつ（予定）
- 全体でのグループディスカッション



19

## 質疑応答



20



# 大学教員を目指す 大学院生・ポスドクの みなさん

将来、大学教員になるために知っておくべきことは、どんなことでしょうか。  
東北大学 大学教員準備プログラム Tohoku U. PFFP で、  
大学教員に求められる能力や知識、実践力を身につけませんか？

## 2016年度 東北大学大学教員準備プログラム

Tohoku University Preparing Future Faculty Program (Tohoku U. PFFP)



募集要項公開

2016年5月2日(月)

東北大学大学教育支援センター HPよりダウンロード  
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pffp>

募集期間

2016年5月9日(月)～27日(金)

事前説明会を開催します

2016年4月28日(木) 16:00-17:30

- プログラムの概要
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答、など



川北合同研究棟 101  
メイン会場



青葉記念会館 4階 401  
テレビ会議にて同時中継



このプログラムには、大学教員の仕事を総合的に学ぶフルコース（30時間程度）と、教育実践を中心としたショートコース（15時間程度）があります。  
すべての活動に参加・課題を提出した受講者には、修了証（フルコース）もしくは受講証明書（ショートコース）が授与されます。

【お問い合わせ先】

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター  
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749  
E-mail : tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

URL <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/pffp>

f 「CPDtohoku」で検索

@CPD\_tohoku







# 大学のこれからを担う フロントランナーに

大学教員の仕事は多岐にわたり、  
新任教員は戸惑いや大きなストレスにさらされることが少なくありません。  
東北大学 新任教員プログラム Tohoku U. NFP で、  
大学教員に求められる能力や知識、実践力を身につけませんか？

## 2016 年度 東北大学 新任教員プログラム Tohoku University New Faculty Program (Tohoku U. NFP)



**募集要項公開** 2016 年 5 月 2 日 (月)  
東北大学大学教育支援センター HP よりダウンロード  
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp>

**募集期間** 2016 年 5 月 9 日 (月) ~ 27 日 (金)

事前説明会を開催します

2016 年 4 月 28 日 (木) 16:00-17:30

- プログラムの概要
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答、など



川北合同研究棟 101  
メイン会場



青葉記念会館 4 階 401  
テレビ会議にて同時中継



このプログラムには、大学教員の仕事を総合的に学ぶフルコース（30 時間程度）と、教育実践を中心としたショートコース（15 時間程度）があります。  
すべての活動に参加・課題を提出した受講者には、修了証（フルコース）もしくは受講証明書（ショートコース）が授与されます。

【お問い合わせ先】

東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター  
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749  
E-mail : tu-pffp@ihe.tohoku.ac.jp

URL <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp>

Facebook 「CPDtohoku」で検索  
Twitter @CPD\_tohoku









# 大学教員準備プログラム

未来の同僚や経験豊富な先達教員との対話、様々な大学から集まった大学院生たちが活動することで、大学教員としての自分、教育観、大学教育を考える視野を身につけます。



## 仕事を理解する

大学教員の役割や専門性について学びます

## 基礎知識を得る

授業設計、運営に必要な理論を学びます

## 先達から学ぶ

経験豊かな先輩教員が「先達」として皆さんの成長を応援します

## 比較の目を育てる

異分野の研究・教育文化に触れ、比較の視点を養います

## 同僚とつながる

人的ネットワークを育み、組織の一員としての大学教員について考えます

## 実践力を磨く

授業実践に対するフィードバックを得て、自信をつけます

## 自己省察力を養う

リフレクション(省察)により、自身の実践結果をふり返る力を身につけます

## 他大学訪問調査(オプション)

他大学の授業参観、教員とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などについて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します(2泊3日) 予定 ※渡航・宿泊費は東北大学高度教養教育・学生支援機構が負担します



7月

オリエンテーション

教授・学習に関するセミナー

シラバス作成セミナー

ティーチング実践

授業参観

院生指導法セミナー

他大学訪問(オプション)

最終課題レポート

翌年3月

修了証

約30時間

リフレクション(自己省察)の実践

# Tohoku U. PFFP Preparing Future Faculty Program





全国の  
新任教員  
対象

# 大学の これからを担う フロンタランナーに。

大学教員の仕事は多岐にわたり  
新任教員は戸惑いや大きなストレスに  
さらされることが少なくありません。  
東北大学 新任教員プログラム  
Tohoku U. NFP で  
大学教員に求められる能力や知識  
実践力を身につけませんか？

**東北大学のみならず、  
全国の新任教員が参加しています。**

これまでの参加大学一覧：  
岩手大学、熊本大学、東北工業大学、東北学院大学、  
仙台白百合大学、いわき明星大学、東日本国際大学、  
理化学研究所、(株)内田洋行



本プログラムでは、複数の教員から様々なコメントやアポイントがもらえます。異なる専門分野の参加者やOBとの交流もきつといい刺激になるでしょう。大学教員を目指す人、教員になつたばかりの人に、意欲と自信を持たせてくれるプログラムです。

東北大学  
高度教養教育・学生支援機構 教授  
佐藤 勢紀子先生



参加者と接していると、彼らが教育活動に対して真摯に向き合い、様々なことを考え、悩み、自分自身を向上させようとしていることがよくわかります。教員になる前やなりたての時期に、このような経験ができるのは本当に幸せですね。さあ、あなたも大学教員への扉を開いてみませんか。

東北大学  
災害科学国際研究所 教授  
邑本 俊亮先生

## 先進教員の声

参加者の声

このプログラムから得たものは、授業を行うためのスキルだけではなく、異分野の教員との交流やリアルタイム・チャットを通じて、自分の教育のあり方を見直し、自分つめなおす機会を得たことが、私にとっても大きな財産になりました。

東北大学 文学研究科 准教授  
永吉 希久子 (2011年度受講)

他分野の若手教員に加え、経験豊富な先進教員と一緒に学んだ経験は、非常に有意義でした。また、授業の仕方、設計法のポイントを実践的に学ぶことで、教育に対する漠然とした不安から解放されました。お陰で、以前より教育・研究の両方に前向きに取り組んでいるように感じています。

東北医科薬科大学 大学教養教育センター  
法学教室 講師  
佐俣 紀仁 (2012年度受講)

Want to know more about what a university faculty member is expected to do? Want to hear and share advice on career in university? Want to develop your skills in curriculum/syllabus design, teaching and supervising? Want to make friends with new and experienced colleagues on campus? NFP is here for you.

東北大学 教育学研究科 特任講師 (教育)  
陳 思聡 (2014年度受講)

教育経験ゼロであった私は、このプログラムを通して、講義のあり方を1から10まで学ぶことができました。加えて、教育者として、そして研究者として、これからの大学教員に求められていることについて議論できる、多くの仲間にも出会うことができました。

東北大学 農学研究科 准教授  
野地 智法 (2013年度受講)



【お問い合わせ先】  
東北大学高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター  
〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
TEL.022-795-4471 FAX.022-795-4749  
E-mail : tu-pfep@ihe.tohoku.ac.jp  
HP <http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/nfp/>  
f 「CPDtothoku」で検索  
@CPD\_tohoku



# 東北大学 新任教員プログラム

同僚や経験豊富な先輩教員との対話を通じて  
大学教員としての自分、教育観、  
大学教育を考える視野を身につけます。



## 仕事を理解する

大学教員の役割や専門性について  
学びます

## 基礎知識を得る

授業設計、運営に必要な理論を  
学びます

## 先輩から学ぶ

経験豊かな先輩教員が「先輩」として  
皆さんの成長を応援します

## 比較の目を育てる

異分野の研究・教育文化に触れ、  
比較の視点を養います

## 同僚とつながる

人的ネットワークを育み、組織の一員  
としての大学教員について考えます

## 実践力を磨く

授業実践に対するフィードバックを  
得て、自信をつけます

## 自己省察力を養う

リフレクション(省察)により、自身の実践  
結果をふり返る力を身につけます

## 他大学訪問調査(オプション)

他大学の授業参観、教員とのディスカッションにより、多様な大学の在り方などに  
ついて理解を深めます。参加者は希望調査のうえ、選抜により決定します  
(2泊3日) 予定 ※旅費・宿泊費は東北大学高度教養教育・学生支援機構が負担します



Tohoku U. NFP  
New  
Faculty Program



# PPFP プログラム進行状況

Progress of the Program



## 3/23 (木) PFFP/NFP成果報告会を開催しました

PPFP 2017年3月31日(金)

2016年度のPFFP/NFPの成果報告会、および修了証授与式を行いました。成果報告会にはフルコース参加者の他に、ショートコース参加者、OB/OG、先輩教員のみ…詳細はこちら



## 3/14 (火) 「先進コンサルテーション」を開催しました

PPFP 2017年3月22日(水)

フルコースプログラムの最後のコンテンツである「先進コンサルテーション」では、プログラムを通して明らかにした疑問や問いを直接先輩の先生方にぶつけて議論します。各参…



## 2/26(日)-3/5(日) PFFP/NFP「海外他大学訪問調査」を実施しました

PPFP 2017年3月21日(火)

フルコースのオプションである「海外他大学訪問調査」では、6名の参加者とともに、米国カリフォルニア大学バークレー校を訪問しました。現地での教授・学習の考え方、大…



## 2/22 (水) PFFP/NFP「海外他大学訪問調査事前研修」を実施しました

PPFP 2017年3月8日(水)

フルコース参加者のうち、オプションである「海外他大学訪問調査」として米国カリフォルニア大学バークレー校を訪問する参加者向けに「事前研修」を実施しました。まず羽…



## 2/17 (金) PFFP/NFP「模擬授業」を実施しました

PPFP 2017年2月20日(月)

フルコース参加者による「模擬授業」を実施しました。11月に実施したマイクロティーチングでの経験をふり返り、さらなる工夫と改善を行い、17分間の模擬授業として実践…



## 12/9 (金) PFFP/NFP「コーチング技能を活用した院生指導」を開催しました

PPFP 2016年12月16日(金)

大学院生の指導について考えるセミナー「コーチング技能を活用した院生指導」を開催しました。大学教員の仕事には、学生の問題解決力を育成することも含まれます。そのため…



## 11/15 (火) PFFP/NFP「マイクロティーチングセミナー」を開催しました

PPFP 2016年11月21日(月)

フルコースプログラムのハイライトのひとつ、「マイクロティーチングセミナー」を開催しました。ひとりひとりの参加者が自分の担当する(であろう)授業を設計し、そのうち…



## 10/26 (水) -28 (金) 「国内他大 訪問調査」を実施しました

PFFP 2016年11月2日(水)

フルコースプログラムのオプションとして国内他大訪問調査を実施しました。自身の置かれている環境や、その特徴を理解するためには、多様な具体例を知り、それと相対化し…  
詳細はこちら >>



## オリエンテーションを開催しました

PFFP 2016年7月25日(月)

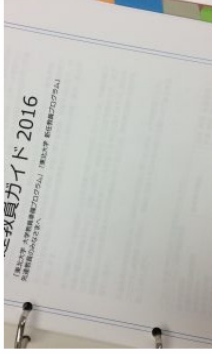
2016年度プログラムのオリエンテーションを開催しました。今年度は、NFP（新任教員プログラム）とあわせて、総勢29名の参加者の皆さんが揃います。プログラムの初…  
詳細はこちら >>



## 10/14 (金) PDP/PFFP/NFP 「本当のかしこさとは何かー感情知性と大学教育ー」を開催しました

PFFP 2016年10月18日(火)

2016年度の3つ目のセミナーは、京都女子大学教授 福田裕司先生による「本当のかしこさとは何かー感情知性と大学教育ー」でした。本セミナーも、PDセミナーとして…  
詳細はこちら >>



## 先達ランチ懇親会を開催しました

PFFP 2016年7月14日(木)

先達教員らと昼食を囲みながら今年度のプログラムに関する説明を方針を議論しました。2016年度からはお二人の新しい先達教員をお迎えします。ご期待ください！



## 9/14 (水) セミナー「授業づくり：準備と運営」を開催しました

PFFP 2016年9月14日(水)

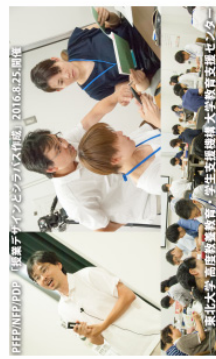
2016年度プログラムにおけるセミナーの2つ目は、東北大学 災害科学国際研究所の邑本俊亮教授による「授業づくり：準備と運営」でした。このセミナーはPDセミナーと…  
詳細はこちら >>



## 2016年度PFFP参加者募集CM (ロンガバージョン) を公開しました

PFFP 2016年5月19日(木)

Tohoku U. PFFP/NFP 2016年度参加者募集CMのロングバージョン (4分) を公開しました。4月28日に行われたプログラム事前説明会における参観…  
詳細はこちら >>



## 8/25 (木) セミナー「授業デザインとシラバス作成」を開催しました

PFFP 2016年8月26日(金)

2016年度プログラムにおけるひとつめのセミナーは東北大学 高度教養教育・学生支援機構 の串本 剛准教授による「授業デザインとシラバス作成」でした。このセミナー…  
詳細はこちら >>



## 2016年度PFFP/NFPの説明会動画を公開しました

PFFP 2016年5月13日(金)

2016年4月28日(木) に開催したPFFP/NFPプログラム事前説明会の動画を公開しました。当日お越しになれなかった方はぜひご覧下さい。こちらからどうぞ…  
詳細はこちら >>



## 2016年度プログラム説明会を開催しました

PFFP 2016年4月28日(木)

2016年4月28日(木)に開催した東北大学PFFP/NFPのプログラム説明会には、学内外から多くの方にご参加いただきました！ありがとうございます！




**東北大学**  
**大学教員準備プログラム (PFFP)**  
**新任教員プログラム (NFP)**  
  
**事前説明会**  
**2016年4月28日(木)**  
  

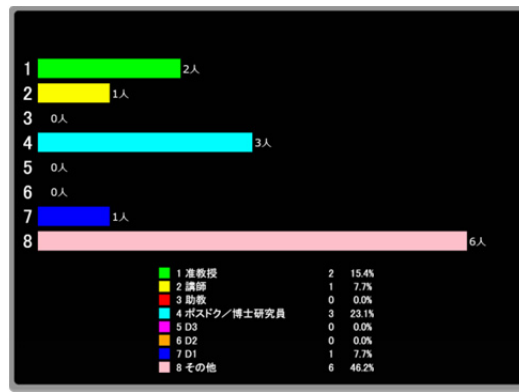
 東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

### 説明会の流れ

- 本プログラムの開発の背景
- プログラムの概要
- 選考の流れ
- 過去の参加者による体験談
- 質疑応答

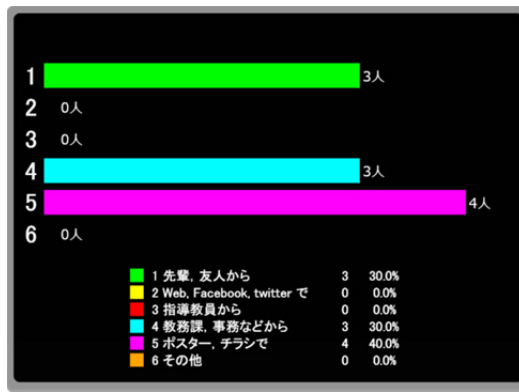
### みなさんは？

1. 准教授
2. 講師
3. 助教
4. ポスドク/博士研究員
5. D3
6. D2
7. D1
8. その他



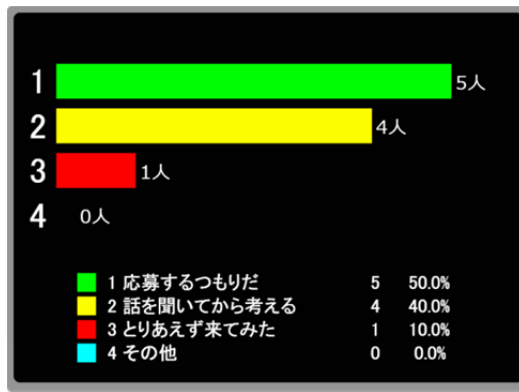
### 何で知りましたか？

1. 先輩, 友人から
2. Web, Facebook, twitter で
3. 指導教員から
4. 教務課, 事務などから
5. ポスター, チラシで
6. その他



### 応募の予定について

1. 応募するつもりだ
2. 話を聞いてから考える
3. とりあえず来てみた
4. その他



## 私たちについて

- 高度教養教育・学生支援機構(Institute for Excellence in Higher Education, IEHE)
  - 教養教育の高度化, 学生支援に関する調査研究, 企画および提言, それらの方法の開発, 実施に取り組む組織
  - 4つの部門と11のセンターから成る
- 大学教育支援センター(Center for Professional Development, CPD)
  - 教育関係共同利用拠点として大学教職員専門性開発に関する調査研究, プログラム開発, 実施するために設立

## プログラム開発の背景

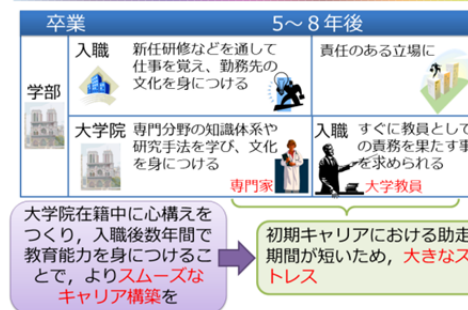
## 大学教員の役割



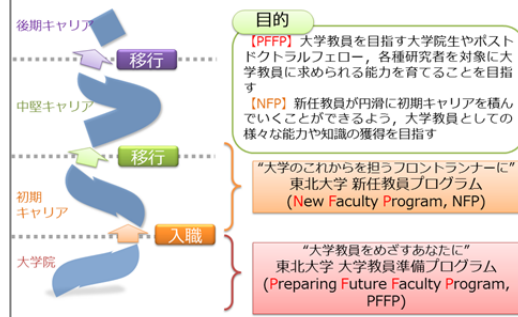
## 大学教員に求められる能力

- 概念の理解
    - 高等教育の目的と歴史/高等教育機関のタイプと使命/専門分野の知識/専門職アイデンティティの理解
  - 教員の仕事の分野の知識とスキル
    - 教育と学習プロセスの理解/研究プロセスの理解/業務とサービスの理解/組織における市民性の正しい理解
  - 人間関係のスキル
    - コミュニケーションスキル/チームワークと連携/多様性の理解
  - 専門職の態度と気質
    - 倫理と誠実性/生涯学習のモチベーション/専門的ネットワークの育成/生活におけるバランスを維持する情熱の育成
- (Austin & McDaniel 2006)

## 大学教員初期キャリアの特殊性



## プログラムの位置づけ



## 海外のPFFP

- ◆ アメリカ
  - 1993年から全米大学協会 (AACU)と大学院協会 (CGS)がPreparing Future Faculty Programをスタート, 学会も協力し, 11分野44大学で認定プログラム提供, 300以上の大学が連携
- ◆ イギリス
  - 2006年以降, 仮採用の新任教員に, 高等教育資格課程 (Postgraduate Certificate in Higher Education, PGCHE)の取得を正規採用条件, SEDAが認定した院生向けプログラムを17大学で実施
- ◆ カナダ
  - 大学院で大学教育に必要な知識・技能修得のコースを設け, 資格付与, 採用時には受講者を優先
- ◆ オーストラリア
  - 26大学で大学院での資格認定プログラムを実施し, 大学院生も履修

## 日本におけるPFFPの例

名称	年度	形式	内容
北海道大学	2010-	5日間 (15講座)の集中講義	UC/(クレー)の教員による英語でのワークショップ
筑波大学	2013-	大学院共通科目	キャリアデザイン論, クラウドライティング入門など
東京大学	2013-	半期, 大学院共通科目として2単位認定	「大学教育開発論」とブレノポストワークショップ
名古屋大学	2005-	3日間の集中講義, 大学院共通科目	大学教員という職業, 授業設計, 教授法の基礎など
京都大学	2005-	毎年8月上旬に丸一日のワークショップ	大学授業の現在と未来 (講義), 演劇でコミュニケーションデザイン
立命館大学	2011-	オンデマンド講義+ワークショップ (2日間)	教育方法論, 授業設計, マイクロティーチング, ルーブリック評価等
大阪大学	2014-	大学院高度副プログラムとしてそれぞれ2単位	大学授業開発論, 学術的文書の作法とその指導, 現代キャリアデザイン特論

## TOHOKU U. PFFP/NFPの概要

## Tohoku U. PFFP/NFPの目的

- ◆ 大学教員に必要な能力や知識を獲得し、円滑に初期キャリアを積んでいくことができるよう大学教授職への準備を図る
- ◆ 他分野の参加者と交流し、将来や現在の同僚について知るとともに、大学における多様性を体験する

### 提供者側の意図

- “視点”の提供
  - > 大学教授職としての視点
  - > 大学組織としての視点
  - > キャリアステージという視点
  - > 比較の視点
- “場”の提供
  - > 異文化交流の場
  - > 教育実践の場
- “言語化”の支援
 

“視点”と“場”を提供し、各参加者が“大学教授職”に対する“姿勢”を作り“言語化”することを支援する

## 達成目標

- ・ 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- ・ 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリア構築を設計できる
- ・ 教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語れるようになる
- ・ 異分野の研究や教育文化を知る

PFFP/NFPでは、知識の提供と、実践の場を提供することで、みなさんの目標達成を支援します

## プログラムでの活動内容



PFFPとNFPは合同で実施

## 2種類のコース

### ショートコース

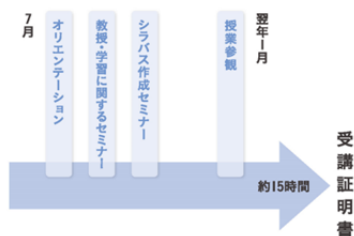
- ・ まずは教育実践について学びたい方向け
- ・ 選抜なし（応募資格の確認あり）
- ・ 7月～翌年1月まで

### フルコース

- ・ 大学教員の仕事について総合的に学びたい人向け
- ・ 書類選考・面接による参加者の選抜あり
- ・ 7月～翌年3月まで

## ショートコース

■ まずは教育実践について学びたい方へ(ショートコース)



## フルコース

■ 大学教員の仕事について総合的に学びたい方へ(フルコース)



## フルコースの特徴

- ・ オプションとして、国内・海外大学の調査訪問への参加応募資格
- ・ 経験豊富な先達教員によるコンサルテーションの機会
- ・ マイクロティーチングなどの教育実践の機会
- ・ 院生指導法に関するセミナー
- ・ リフレクションの実践とフィードバック

## 仕事を理解する



## シラバス作成ワークショップ



フルコースのみ

## 授業実践/授業参観



## 他の参加者との交流



フルコースのみ

## 先達コンサルテーション



フルコースのみ

## リフレクション



## 実施スケジュール

活動	日程	シヨート
オリエンテーション	7月16日(土)	○
シラバス作成ワークショップ	8月25日(木)	○
授業づくり:準備と運営(セミナー)	9月14日(木)	○
本当のかしこさとは何か(セミナー)	10月14日(金)	○
授業を見る聞く学ぶ(授業参観)	7月-1月中	○
マイクロティーチング(授業実践)	11月	
模擬授業(授業実践)	2月	
国内他大学調査訪問(2泊3日)	10月予定	
研究指導法に関するセミナー	12月予定	
海外他大学調査訪問(1週間)	2月下旬~3月上旬	
先達コンサルテーション	3月	
参加報告会&修了証授与式	3月	

フルコースのみ

## 国内・海外他大学調査訪問

- 比較の目を育てる
  - 授業参観, 教員とのディスカッション
  - 学習支援組織の訪問と聞き取り
  - 研究者訪問
- 希望調査のうえフルコース参加者から選抜
  - 国内他大学訪問調査(2泊3日)
  - 海外他大学訪問調査(1週間) ※使用言語は英語



**フルコースのみ** **過去の訪問調査の様子**

現地大学の講師によるセミナー  
Student Learning Centerの見学  
ディスカッションの様子  
キャンパスの様子

**プログラムの修了要件**

- すべての活動に参加をすること（欠席の場合の対処法については担当者の指示にしたがう）
- すべての課題に取り組むこと

**注意！**  
修了要件を満たすと評価された場合に高度教養教育・学生支援機構より修了証を発行します  
また、活動への参加が不十分な場合、他大学訪問調査などのオプションの活動への参加はできません。

**フルコースのみ** **最終レポート課題**

- プログラムの最後に提出するレポート（4,000字程度）
  - 大学院生向け
    - 学生にとって大学でのよい学習経験とはどのようなものだと思いますか。また、そういった学習経験を実現するために大学や大学教員は何をすべきだと思いますか
  - 新任教員向け
    - 自分の授業や学生指導において、その質を高める（よりよいものにする）ための課題は何だと思いますか。また、教員個人の立場から、東北大学の教育はどうあるべきだと思いますか

**応募方法と選考の流れ**

**応募資格**

**[PFFP]**  
大学教員志望の大学院博士課程後期学生、日本学術振興会特別研究員、専門研究員など。高等教育機関（大学・短大・高専）の非常勤教員やTAなどの教育経験を有する者が望ましい。国籍は問わない

**[NFP]**  
現在大学に勤務する平成22年4月以降採用の教員（概ね40歳以下）。本務の傍ら、東北大学川内北キャンパスで実施されるセミナーやワークショップに不都合なく参加できる者。国籍は問わない

**フルコースの応募・選考方法**

- 書類審査
- 面接（30分程度）

提出書類は大学教育支援センターHPからダウンロード  
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

PFFPはこちら  
NFPはこちら

**ショートコースの応募方法**

- ウェブでエントリー受付

エントリーは大学教育支援センターHPから  
<http://www.ihe.tohoku.ac.jp/CPD/>

PFFPはこちら  
NFPはこちら

**フルコースの選抜結果通知までのスケジュール**

募集期間	5月1日（金）～5月29日（金）17時必着
面接	6月上旬～中旬
結果通知	6月末

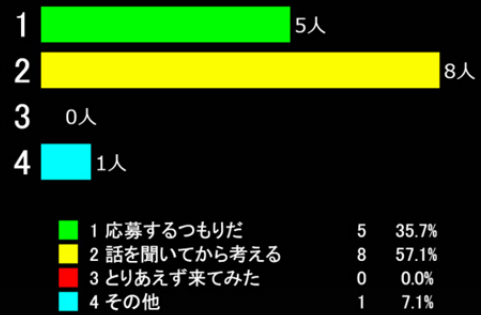
## 質疑応答



## 参加者体験談

## 応募の予定について

1. フルコースに応募する
2. ショートコースに応募する
3. ちょっと考えたい
4. 応募はしない





# オリエンテーション「PFFP/NFP へようこそ」

【日時】2016年7月16日(土) 10:00~17:30

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟 4階 大会議室

【概要】2016年度のプログラム参加者の顔合わせを行うとともに、大学教育の課題と大学教員の役割に関する講義の受講、比較教育学の視点を組み入れたワークショップの実施を通して、本プログラムに対する理解を深めた。また、先達教員らとともに昼食をとり、交流を図った。2015年の実践から、講義と参加者紹介の順序を逆にし、昼食時の交流の活性化につながるよう工夫した。

## 【タイムテーブル】

10:00-10:10	はじめに
10:10-10:40	社会の中の大学教員 大学教育支援センター長 羽田 貴史 教授
10:40-11:00	質疑応答
11:00-11:10	休憩
11:10-12:00	参加者自己紹介・他己紹介セッション
12:00-12:30	先達教員自己紹介(含むビデオメッセージ)
12:30-13:30	ランチ懇親会
13:30-16:00	比較の目を育てるワークショップ 大学教育支援センター 杉本 和弘 教授
16:00-16:10	休憩
16:10-17:00	配布資料の活用法と課題の確認
17:00-17:30	誓約書, 今後の日程について(質疑応答含む)

## 【講演資料】(抜粋)

### プログラム提供者の意図

- 「視点」の提供
  - 大学教授職としての視点
  - 大学組織としての視点
  - キャリアステージという視点
  - 比較の視点
- 「場」の提供
  - 異文化交流の場
  - 教育実践の場
- 「言語化」の支援

視点と場を提供し、各参加者が大学教授職に対する姿勢を作り言語化することを支援する

### プログラムでの活動内容

### 顔合わせ

### 1. 大学教員とはどのような職業か

- ✓ 伝統的な専門職の1つ: 医師, 法曹職, 大学教授職
- ✓ 専門職の定義: 高度な専門的技術, 資格, 専門倫理, 結社性, 自律性
- ✓ 医師, 法曹職との違い: 自営できない⇒組織に雇用されて専門性を発揮
- 仕事の実践には組織マネジメントが不可欠
- ✓ 多様な仕事の価値を理解し活動する統合的専門職(マルチ専門職)
  - Research 研究 ○Teaching 授業 ○Learning 学習指導 ○Advising 助言
  - Institutional Citizenship 大学運営 ○Outreach 社会に広げる
  - Professional service responsibility 専門家として貢献

\* A.E.Austin (2008) "Strategies for Preparing Integrated Faculty: The Center for the Integration of Research, Teaching and Learning."

### 17. それでもやっぱり大学教員は楽しい

- ✓ 発見の喜び
  - 世界はこうなっていた 自分が初めて知る 人にも伝えたい
  - 新たな知見がもたらす「違って見える世界」
  - 世の中の役に立てばさらに幸い(誘惑も多い) 人の役に立つ=自己発見
- ✓ 学生の成長を見る喜び
  - ダメなやつと思っていた人間の姿容 人間の可能性を知る
  - 人間は人間によってのみ育てられる
- ✓ 自己決定・自己統治・他人に支配されない
  - すべてが自己責任 果実も大きい...
  - 人生を自己設計する味わい

### アイズブレイク 「専門分野の違い」を探る

◆ワーク: 3つの観点で、メンバーの専門分野を比較する

最も特徴的なことを1~2点書き出す

- 1 学びの体系性
  - ・学年ごとに学ぶべき知識が明確な積み上げ型
  - ・近接領域の知識を必要とする
- 2 知の創出方法
  - ・実験によるデータ収集とその分析
  - ・フィールドワークとインタビューによるデータ収集・整理・分析
- 3 教員と学生の関係
  - ・研究室の中に強いヒエラルキー
  - ・よく会話をしていて仲が良い, 比較的フラットな関係性。

### 「比較の目」とは何か

- ◆「軸」に自覚的になる
  - 自分の立ち位置はどこか
- ◆虚心坦懐に眺める
  - 常に「唯一解」を求めようとする態度
- ◆ホリスティックな視野を確保する
  - 文脈や諸変数への配慮

### ワークショップ 「世界における日本の大学」を考える

【課題】

インターネット上に設置された「質問箱」に質問が来たと仮定します。配布されたデータ等を使いながら、相談者が納得できる、創意工夫に溢れた回答を一つ作成してください。

## 【当日の様子】



他己紹介の様子



先達を囲んでのランチ



ワークショップに取り組む参加者

## 【参加者の声】（抜粋）

- 大学教員とはどのような職業について、羽田先生の経験を聞くことで具体的なイメージを持つことができました。一般的に大学の先生の仕事を訪ねると、「私の専門は〇〇〇」と専門分野を答えることが多いですが、羽田先生が学問や研究だけが大学の仕事ではなく、組織マネジメントや学生への教育なども大学の仕事であるとおっしゃっていたのが印象的で、改めて大学の仕事の多様性に気づくことができました。また、大学の仕事は医師や法曹職と異なり、自営することができず、組織に雇用されて専門性を発揮するものであるということ学びました。大学教員は多様な能力が求められるため、今回のPFFPの研修では大学教員の概念の理解はもちろんのこと、先達教員や研修をともに行う方のスキル等も学び多様性を理解し、人間関係を構築していきたいと考えております。(PFFP/フル)
- 羽田先生からは「大学教員の役割とキャリア・ステージ」というタイトルで講義があった。「対人関係に優れていると学生に学ぶ気持ちを起こさせるような温かく近い関係を学生と結ぶことができる」ことや、若いうちにアカデミックスキルを身体化すること、教員経験8年、約38歳で1人前感を持つという調査結果、天下の東京大学でも採用が増えた1000人は任期付き教員であることをお聞きした。今回のオリエンテーションで参加メンバーの他己紹介を聞き、若い人の学歴、経歴のまぶしさと併せて、聞けば聞くほど、自分が転向するのは難しいのではないかと、不利なことだと、意気消沈した。言葉尻はきついし、アカデミックスキルがそれほど身に付いているとも思えない。私は家族を養わなくてはならないので、任期付きなどという不安定な職に就くわけにもいかない。しかし、これらの不安はこれまで漠然と感じていたものであり、それが、羽田先生により、データとして示されたことで、現実を直視する機会を得たとも言える。つまりは、そこに近づいていくのかどうか、という自分自身の問題に立ち返ったのである。(PFFP/ショート)
- NFPプログラムへの採用が決まってから、心待ちにしていた初日を、とても緊張した気持ちで迎えた。このプログラムへの参加を決めた一番の理由は、新任教員としてのいろいろな経験や悩みを共有し合い、刺激し合い、支え合える仲間を見つけることだった。そのような出会いがあることへの期待の一方で、濃密な時間を共有することになるだけに、もし合わなかったら、ついていけなかったら、馴染めなかったら、という不安も大きなものだった。開始前にグループ内で会話が起ころことはなく、その不安はさらに大きくなっていったが、自己紹介、他己紹介をきっかけに、一度場の空気が緩むと、その後、抱えていた不安は消え、今後への期待が大きくなっていった。わずか数分の自己紹介、他己紹介の中で、お互いに小さな共通点を見つけ出すことができたことが、役立っていたように思う。また、メンバーそれぞれが異なる専門分野を持っていることはもちろんだが、それだけでなく、これまでの社会経験、文化的背景、教育に関する経験などが非常にバラエティに富んでいることがわかった。特に大学以外での教育に携わった経験、教育現場以外での職務経験、海外での職務経験、育児等の私生活と仕事との両立経験などは、自分にはないもので、多様な新しい視点を得られるように感じた。一方で、100名以上の学生を対象とした講義の経験や、実習指導といった経験は、自身の特色として、他のメンバーに共有できるものであるとも思った。今後、そうした互いの強みをシェアし合うことで、ひとりでは得られないいろいろな気づきを得たり、自分の引き出しを広げたり、困った場面での対処方法を増やしたりしていくことができれば、非常に有益だと感じた。昼食の際には、学生から意見が出ない際にどうしたら良いか、学生のモチベーションを高めるにはどうしたら良いか、という質問が出て意見交換がなされた。他のメンバーの工夫点は大変参考になるものであった。特に、意見が出ない時にはまず少人数のグループでディスカッションをしてもらい、その内容を発表するようにする、というのは、すぐに取り入れることができそうだと感じた。ただ、この際、せっかく先達教員の方がいてくださったのに、遠慮の気持ちなどもあり、ご意見を伺うことができなかったことが、もったいなかったと思った。同世代でのディスカッションは、身近な意見が得られて参考になると同時に、やはり経験の少なさという弱点があるため、今後同じような機会があれば、もっと積極的に先達教員のご経験を伺得るようにしたいと思った。(NFP/フル)

## 基礎知識を得る「大学の授業を設計する—授業デザインとシラバス作成」

【日時】2016年8月25日(木) 13:00~17:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

【概要】大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考えた。本セミナーは、拠点事業によるPDセミナーとの合同開催とし、プログラム参加者以外の一般申込による応募者も参加した。

### 【タイムテーブル】

13:00~13:05	開会あいさつ 羽田 貴史 (大学教育支援センター長 羽田 貴史 教授)
13:05~16:55	授業デザインとシラバス作成に関する解説 各自のシラバスを使った演習 ルーブリックの役割と使用例 まとめ 串本 剛 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授)
16:55~17:00	閉会あいさつ 今野 文子 (東北大学高度教養教育・学生支援機構 講師)

### 【セミナー資料】(抜粋)

<h4>1-2. シラバスの役割</h4> <p>学生にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業内容の確認：期待できる事と期待される事を自覚</li> <li>学習計画の参考：必要な学習量の予測と調整</li> </ul> <p>授業担当教員にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>学生との関係作り：教育観を伝え不幸な出会いを回避</li> <li>授業設計の具体化：実施を容易にし、改善を促す</li> </ul> <p>その他の人々にとって</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>教育内容/水準の理解：課程改善や単位互換で活用</li> </ul>	<h4>1-3. 授業デザインの3要素</h4> <p>どの順番で設計しますか？</p>	<h4>2-1. 授業の目標</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>最低限の“意図する学修成果”を記述する 「教員が何をするか」ではない！</li> <li>知識の修得に偏らない目標を設定する 知識・理解/能力・技能/関心・態度 ref.参考②</li> <li>目標の妥当性を検証する 状況的要因、教育課程の目的、社会の期待 ref.参考③ →個別授業における領域の網羅が致命ではない</li> </ul>
<h4>2-2. 演習①</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>授業デザインワークシート</li> <li>個人作業：①いま使っているシラバスに基づき、学修成果の領域別に3つの到達目標を記述し、対応する教育課程全体の目的を選択する。 ②全ての領域と目的を網羅する必要はないが、既存の到達目標を整理し、複数の領域をカバーする。</li> <li>グループで共有：自分の内容を紹介し、複数の領域をカバーできない場合に助言し合う</li> <li>全体で疑問点を共有</li> </ul>	<h4>3-2. 演習②</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>個人作業1：①目標の重要度に応じて合計配点を決め、その分の学修成果を把握する方法を選択する。②ひとつの目標に対して複数の方法を用いる場合は、内訳を考える。</li> <li>個人作業2：ルーブリック作成ワークシートを使って、学習成果BもしくはCに対応する課題について、ルーブリックを作成する。</li> <li>グループで共有：フィードバックの仕方を含めて成績評価方法を紹介し、ルーブリックの出来について検討し合う</li> <li>全体で疑問点を共有</li> </ul>	<h4>5-1. シラバスの修正</h4> <ul style="list-style-type: none"> <li>修正点確認票</li> <li>個人作業：ここまで学んだ内容を受けて、事前提出したシラバスで想定していた授業設計を修正した点、およびその理由を記入する(修正のない部分は「変更なし」で可)</li> <li>グループで共有：どこをなぜ変更したかについて紹介しあう</li> <li>全体で疑問点を共有</li> </ul>

### 【当日の様子】



講師の串本准教授



直接アドバイスをもらう参加者



ワークに取り組む参加者

### 【参加者の声】(抜粋)

- 串本先生から教えていただいた「目標→成績評価方法→内容という順番で書き、目標には最低限の意図する学習成果を記述する」というシラバスの書き方は新鮮だった。とくに、事前課題でシラバス作成をしたときは、授業内容から書きはじめ、授業目標に関しては、「授業を完全に習得した状態の理想の学生が達成している目標」を念頭に漠然と書いただけだったので、「単位を取った水準の学生が最低限習得しておくべき授業目標」という、シラバスにおける授業目標の意義が明確になったのは非常に勉強になった。ただし(とくに必須科目では)ある一定数の学生に単位を取らせないといけないことが現実的に起こりうるので、「最低限の目標」をどのように設定するのかが結構難しい問題だと思われる。自分の設定する「最低限の目標」と、学生が達成できる目標には齟齬が生まれる可能性があるため、この調整に関しては現実に授業経験を通して身につけて行く必要があると思った。また、成績評価方法に関しては、事前課題では、知識や技能に偏った書き方だったのだが、態度に関しても成績として評価することも学んだ。ただし、物理学のような理系科目では、どんなに授業態度が良くても、やはり習得すべき知識、技能が一定水準まで身につけていないと評価は難しいと思われるので、学習態度をどの程度考慮するかについては今後考えていきたい。ただし、物理学においても、ゼミ形式の授業の場合は、ゼミの議論への参加態度も非常に重要になるので、今回学んだ学修時間から「知識・技能・態度」の適切な点数配分を考える方法は有用であった。また、今後例えば文系などの物理学の専門外の学生に「物理学概論」のような講義をするときには、レポートを提出させて評価をすることがありうるため、基準を明確にして、その日の体調や気分を左右されずにレポート評価を客観的にするための「ルーブリック」の作成を学べたことは非常にためになった。(PFFP/フル)
- これまでのシラバス作成は、前任者のものをそのまま引き継ぐ場合が多かったので、事前課題がなかなか難しかったというのが正直な感想だった。一番難しかった点は、今回のセミナーの内容とは直接的には関連しないのだが、当該科目の全学課程における位置付けが理解できていないため、何をどのように考えて目標を立てるのが適切かということが十分に検討できなかったことであった。実際、現在担当している大学院の科目も、そうした情報は得ないままに前任者のシラバスを参考にして組み立ててしまったが、今後実際に授業を担当する際には、そうした点をきちんと確認してから作成にあたりたいと感じた。(NFP/フル)
- 本シラバス作成に関する説明の中で、印象的だったことはシラバスという形で授業内容や評価方法についてできるだけ定量的に透明化することで、基準が明確になるため教員の手間が軽減されるのと、学生も目標を見据えることができるようになるので、より授業目標達成に近づくことができるという考え方を繰り返し強調されているところだった。一見すると自然な考え方だが、特に評価方法に対してはたして明確化するべきなのかどうかについて私の中で答えを見いだせず苦しんでいる問題である。私は実験などのレポート課題を出すときは「探究活動を行う力をつけるために、誰かに評価されるためではなくできるだけ自由な発想で考えてほしい」と考えている。そのため、レポートに対してあまりに明確な評価基準を作ってしまうと、「優秀なレポート像」が出来上がってしまい、自分なりにいいと思う実験やレポートを模索しなくなってしまうのではないかと考えている。(NFP/フル)
- シラバスを事前に書いたときには「どんぶり勘定」で書いていたことに気付いた。というか、書いている最中にも気付いてはいたが、それでもまあいいのではないかという感じがしていた。D チームの遠藤さんと周さんも同様の趣旨のことをおっしゃっていた。そういう現状の下で今回のセミナーにおいてシラバス執筆の指針と雛形を得たことは大きかった。遠藤さんと周さんはすでに授業を経験しているので、冒頭でのチーム内での発表のときには、さすがよく考えられているなど感じた。しかし、私は今は学生である。分からなくて当然という気持ちで恥を恐れずにできる限り正直でよいという方針を持った。「人生苦あれば楽あり」とはよく言ったもので、事前に苦労して授業設計をしておけば、後で(評価のときに)楽に仕事ができる。(PFFP/ショート)
- 今回のセミナーを受講したことで、授業設計やシラバス作成時の明確な指針や手法論を紹介いただいたこと今後非常に活用できると感じた。参加人数が多いので難しいとは思いますが、可能であれば各参加者のシラバスの修正案や指摘などをして頂きたかった。また、グループ分けしたが参加者同士で議論する時間があまりとれていなかったため非常に残念に感じた。個人的には、スタッフの皆さんの負担もあると思いますが、午前中から開始してよりグループ内で相互に議論できる時間を取ってほしかった。(NFP/ショート)



## 基礎知識を得る「授業づくり：準備と運営」

【日時】2016年9月14日（水）13:00～15:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス教育・学生総合支援センター東棟4階大会議室

【概要】学習者が集中し、十分に理解できるような授業をつくるためには何に留意し、どのような準備をして、いかに授業を展開するとよいのかについて、1回の講義形式の授業を念頭に置き、学習者の認知面、心理面から授業作りについて学んだ。

### 【タイムテーブル】

13:00～13:05	開会あいさつ 羽田 貴史（東北大学 高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター長）
13:05～14:55	講演「授業づくり：準備と運営」 邑本 俊亮（東北大学 災害科学国際研究所 教授）
14:55～15:00	閉会あいさつ 岡田 有司（東北大学高度教養教育・学生支援機構 准教授）

### 【セミナー資料】（抜粋）

<p>I 授業内容を理解させるために</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝わらない理由</li> <li>2. 理解の認知プロセス</li> <li>3. 理解を支援する方法</li> </ol> <p>II 学生の意欲を高める授業運営</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学習意欲とは</li> <li>2. 意欲を引き出す</li> <li>3. 意欲を維持させる</li> </ol> <p>III 気持ちのコントロール</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 伝わるのは授業内容だけではない</li> <li>2. 非言語メッセージに気を配る</li> <li>3. ポジティブな気分で授業をしよう</li> </ol>	<p>1. 伝わらない理由</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) 情報発信の不備</li> <li>(2) 知識のギャップ</li> <li>(3) 主題や要点が不明確</li> <li>(4) 言葉だけでは不十分</li> </ol>	<p>2. 理解の認知プロセス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 既有知識の活性化</li> <li>・ 知識に基づく解釈・推論・精緻化</li> <li>・ 学習者自身のメンタルモデルの構築</li> </ul> <p style="text-align: center;">↓</p> <p>学習者がどのように受け止めるかによって 情報の意味・価値は異なってくる</p>
<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(1) 授業を組み立てる</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 1コマ(90分)の構造化</li> <li>② 材料の収集・選別・配列</li> <li>③ 既知情報と新情報のバランスを考慮</li> </ol>	<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(2) 知識の活性化を支援する</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 学生の知識状態の把握</li> <li>② 既習事項の想起を教示</li> <li>③ 知識を適用しやすい教材や課題の選定</li> <li>④ オーガナイザーの利用</li> </ol>	<p>3. 理解を支援する方法</p> <p>(3) メンタルモデルの構築を支援する</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① イメージ情報の提示</li> <li>② 精緻化情報の提示</li> <li>③ 既有知識との関連づけの教示</li> </ol>

### 【当日の様子】



講師の邑本教授



セミナーの様子



質疑応答の様子

### 【参加者の声】（抜粋）

- 伝わるのは授業内容だけではなく、学生とのコミュニケーションも重要だ。こういったことは自分もそう思っているが、実施するのは難しい。非言語を使うのは内向的な自分にとっては決して簡単ではない。中でもパラ言語という言葉がはじめて聞いた。最後、「ポジティブな気分で授業しよう」という点を見て、自分の過去の姿を思い出した。自分は性格的にはどちらかというと暗い人間だと思っており、自分の本性を隠す、あるいはかえることができるのか。しいて言えば、自分は本当に大学教員に向いているのか、今からじっくり考えねばならない。つまり、どうやら自分が教師という職業を甘く見たということだ。この職業は思っていたよりはるかに挑戦的だ。(PFFP/フル)
- 開催日当日は大学院入試だったため、ISTU での受講となってしまった。ISTU での受講は、関心のある

箇所を繰り返し見られるという利点がある一方で、その場に参加して受講するのは、自分の気持ちの動かされ方が違うものだと感じた。これが「伝わるのは授業内容だけではない」ということのひとつの表れなのかもしれないと思った。後期になり、単独で担当する講義が初めて始まった。このタイミングで今回のテーマを聞くことができたことは、本当に参考になり、講義内容はいずれもすぐに自分の授業に取り入れたいと思うものであった。全体を通して印象的だったのは、学生の状態を知っておくことの重要性についてであった。講義をする際に受講者の知識に合わせたレベルで話をすることが重要である、ということによく指摘されることであり、理解もしているつもりであった。医療の分野でも、医療者と患者は知識の差が大きいので、その点を理解して話をすることが重要であるというのは常に言われることであり、心理士が現場で働く際の問題点としても「専門用語を使いすぎる」ということがあげられることはしばしばある。しかし、このことをさらに拡大し、既有知識との関連付けや、知識の活性化なども、自発的にしてもらえとは限らないということを理解し、工夫を行うことはしてこなかったように思う。特に、「〇〇Ⅱ」のような授業を担当している場合、「〇〇Ⅰ」のカリキュラムに含まれている内容については、知っていて当然と考えて触れないことが多く、「これは以前やりましたね？」の一言で流すことも多々有る。少なくとも、意識的にこちらで関連付けを促すということはしていなかった。講義の中であったワークをきっかけに、逆に自身のことを振り返ってみると、授業のみならず、日常生活においても、知識の関連付けが行われない場面、人から指摘されて「ああ言われてみれば！」となる場面は多々生じていることに気づいた。今後は、新規情報を説明するときのみならず、既有知識の応用といった話をする際にも、受講者の状態についてできるだけ理解しようとする姿勢を怠らなるとともに、受講者や学生に頼りすぎない姿勢が必要なのだと思った。(NFP/フル)

- 認知心理学の知識を授業に生かすことは大変有効であるということはずっと前から聞いていましたが、具体的にはどのようにすればいいか分かりませんでした。今回のプログラムを通して、それについて大変勉強になったと思います。授業の内容を学生に伝えるために、まずは伝わらない理由を知っておく必要があります。振り返ってこれまでの自分の授業を見てみると、残念ながら幾つか当てはまってしまったものがありました。もっとも気になったのは、やはり知識のギャップです。私自身は言語学の専門なので、語学の授業をする時も、無意識的に言語学の専門用語を使って知識の説明をすることがありましたが、学生が必ずしも分かっているとは限らないので気をつけた方がいいと思います。また、理解の認知プロセスを理解した上で、学習者の理解を支援する方法を考えることが出来ます。支援する方法がいろいろありますが、私の場合、一番気に入ったのは、知識の活性化による支援です。(PFFP/ショート)
- 【これまで】授業は好きなほうである。授業を実践するというよりも、学生と向き合っているということが恐らく好きなのである。まさしくコミュニケーションである双方向のやり取りができた時は大きな喜びとなるし、伝えたいという教員の思いと理解したいという学生の思いが一体となる瞬間はやはり感慨深いものがある。かといって、常時そのような瞬間を味わい良い実践ができていくなればさきにあらず、授業後は激しく落ち込み、無力感に苛まれることもしばしばであるが、それでもなんとかこれまでこなしてきたのが現状である。しかし、できればこれから先は、明るく楽しく、今日はよく伝わった！！と達成感を伴う授業を増やしていきたいと強く望み、今回のセミナーに参加した。【セミナーを通して】伝わらない理由に挙げられた「情報発信の不備」「知識のギャップ」「主題や要点が不明確」「言葉だけでは不十分」の4点に関しては、どれも“そうそう”と共感をもって聴くことができたため、これまでの経験を通して、学生に伝わらない要因そのものは自分なりに把握し意識化できていると感じた。では、どうするか・・・が課題である。理解の認知プロセスについては、最初に説明があった既有知識の活性化＝受け止める準備の必要性になるほどと思い、予習を真面目に行っていた頃の自身の遠い記憶を探ると、確かに、知識を使って補った(行間を読んだ)感覚がそれとなく思い出された。この想起によって、既有知識活性化の大切さが腑に落ちるとともに、知識を補うための素材をどう提供できるかが最初のカギであると感じた。理解を支援する方法については、授業の組み立てからメンタルモデルの構築支援まで、ある程度は採り入れているように思ったが、邑本先生が例示されたものと比べると、私の授業ではひとつひとつの採り入れ方が中途半端だったのでと振り返った。既習事項の想起を教示するにしても、邑本先生が示されたような丁寧さはなく、冒頭にさらっと述べるにとどまっていると思った。【今後の課題】今回のセミナーを通して、まずは、理解の認知プロセスをしっかりと把握したうえで、理解を支援する方法を確実に採り入れていくことが授業改善に向けての課題であると感じた。さらに、頭では分かっているが実践するとなると難しいのが、教員のすべてが学生に伝播する点である。これまでは、保育者を養成する立場で、授業の冒頭には決まって身だしなみや遅刻学生への指導が入ることで嫌な空気のなかで授業を進めざるをえなかったことも多い。そのあたりの教員側の気持ちの切り替えや場の作り方など、授業参観の折に先達教員に尋ねてみたいと思っている。今回の学びを踏まえて、今後は、少しでもポジティブな気持ちで学生と向き合い、自分自身を語る魅力的な授業を目指していきたい。(NFP/ショート)

## 先達から学ぶ「授業を見る聞く学ぶ」

【日時】2016年7月～2017年1月

【会場】東北大学，東北工業大学，東北医科薬科大学

【概要】授業経験豊かな教員の授業を参観し，自分の教育活動を考えるヒントを得た。授業後の検討会では，授業内の教育活動や授業前の準備などについて授業実践者から学んだ。参加者は自身の都合と興味関心に応じて，最低3件の授業参観を行うものとした。

### 【参観対象授業一覧】

	授業名	担当教員	参観日・講義会場
1	解析学C 常微分方程式入門 (対象：工学部)	見村万佐人 先生 東北大学 理学研究科	2016.7.19 (火) 1限 東北大学 川内北 C101
2	機能形態学1 (対象：工学部)	平澤典保 先生 東北大学 薬学研究科	2016.7.26 (火) 2限 東北大学 川内北 C101
3	ハードウェアセキュリティ演習 (対象：情報科学研究科)	本間尚文 先生，林 優一 先生 東北大学 情報科学研究科	2016.8.30 (火) 3限 東北大学 電子情報研究所
4	Program for 2016 Food & Agricultural Immunology Joint Lecture, Overview of vaccine development based on mucosal immunity. (対象：農学研究科博士後期課程)	野地智法 先生 東北大学 農学研究科	2016.10.11 (火) 3限 東北大学 雨宮キャンパス 農学研究科講義棟 10 番教室
5	デジタル信号処理 (対象：情報通信工学科3年生)	木戸博 先生 東北工業大学	2016.10.12 (水) 2限 東北工業大学 八木山キャンパス 131 教室
6	言語表現の世界 (水曜：医歯薬工)	呂本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.10.12 (水) 3限 東北大学 川内北 C301
7	日本語表現 (対象：知能エレクトロニクス学科)	高橋 秀太郎 先生 東北工業大学	2016.10.13 (木) 4限 東北工業大学 八木山キャンパス 121 教室
8	制度の計量分析 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.14 (金) 2限 東北大学 川内南 文学部 315
9	行動科学各論・特論 (対象：全，特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.24 (月) 5限 東北大学 川内南 413
10	差別と社会 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.10.14 (金) 2限 東北大学 川内南 文学部 315
11	英語 B2 (対象：文教)	トッド・エンスレン 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.10 (木) 4限 東北大学 川内北 A205
12	市民と政治 (対象：建築学科3年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.11.10 (木) 4限 東北工業大学 長町キャンパス R129
13	確率モデル論 (対象：大学院、学際高等研究教育院・大学院共通科目)	中尾 光之 先生 東北大学 情報科学研究科	2016.11.11 (金) 1限 東北大学 青葉山 情報科学研究科 2F 大講義室
14	ゲーム理論入門 (対象：全，特に制限していない)	佐藤 嘉倫 先生 東北大学 文学研究科	2016.11.11 (金) 3限 東北大学 川内南 文学部第二講義室
15	英語 C2 (対象：全)	ダニエル・アイコースト 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.11 (金) 3限 東北大学 川内北 A202
16	日本語 F (対象：留学生)	菅谷 奈津恵 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.15 (火) 2限 東北大学 川内北 C303

17	学習理論入門 (対象：理保歯薬工)	佐藤 智子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.11.16 (水) 1 限 東北大学 川内北 A204
18	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.11.16 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
19	社会の仕組みⅡ (対象：薬学部)	佐保 紀仁 先生 東北医科薬科大学	2016.11.25 (金) 11:40-12:50 東北医科薬科大学 小松島キャンパス 203
20	データベース (対象：工)	三石 大 先生 東北大学 教育情報基盤センター	2016.12.29 (火) 2 限 東北大学 青葉山
21	差別と社会 (対象：文学部・文学研究科)	永吉 希久子 先生 東北大学 文学研究科	2016.12.12 (月) 2 限 東北大学 川内南 文学部 315
22	日本文化を考える (対象：全)	佐藤 勢紀子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.12.12 (月) 3 限 東北大学 川内北 A307
23	学習理論入門 (対象：理保歯薬工)	佐藤 智子 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2016.12.14 (水) 1 限 東北大学 川内北 A204
24	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.12.14 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
25	応用数学 B (対象：工・電気系)	早川 美徳 先生 東北大学 教育情報基盤センター	2016.12.22 (木) 1 限 東北大学 青葉山 電気情報 1号館・2D
26	言語表現の世界 (木曜：経保歯薬工農)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2016.12.22 (木) 2 限 東北大学 川内北 B200
27	市民と政治 (対象：建築学科 3 年生)	片山 文雄 先生 東北工業大学	2016.12.22 (木) 4 限 東北工業大学 長町キャンパス R129
28	言語表現の世界 (対象：医歯薬工)	邑本 俊亮 先生 東北大学 災害科学国際研究所	2017.1.11 (水) 3 限 東北大学 川内北 C301
29	現代青年と心理 (対象：文系、理農)	岡田 有司 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2017.1.12 (木) 3 限 東北大学 川内北 C105
30	基礎中国語Ⅱ (対象：保)	趙 秀敏 先生 東北大学 高度教養教育・学生支援機構	2017.1.16 (月) 1 限 東北大学 川内北 C106

【当日の様子】



授業後のディスカッションの様子



参観者からの質問に答える趙先生



## 【参加者の声】(抜粋)

- 私はまだ学生に対して授業をしたことがないので、見村先生がどのように授業を組み立てているのかをその準備段階も含めて具体的に知ることができたのは非常に有意義であった。とくに、「まず授業で何を伝えたいかを1つか2つ決め、それを基に授業の幹となる流れを作り、そして肉付けをしていく」という言葉は、授業はもちろんのこと研究会発表や講演でも重要となる非常に汎用性の高い方法だと思う。また、中間試験により学生の理解度を確認することでその後の授業の進度を決め、場合によっては学ぶ事柄の順序を入れ替えることを知り、中間試験の重要性、有用性を知ることができた。とくに中間試験に感想を書かせるのは良いアイデアだと思う。私も授業をするうえで、どのように学生からフィードバックを得るかを常に考えていきたいと思う。特に、まったくフィードバックを得ずにいきなり期末試験をすることが如何に危険な事かを知ることができたのは非常に良かった。見村先生の「教えることで、自分の分野に対する基礎づけを再度固め、多角的な視点が得られることで、分野の理解が深まる」という言葉は、まさに共感する言葉だった。私も、自分の研究分野を分野外の人に話したりすることで、自分の研究分野の理解が却って深まる経験をしたことがあるので、教育というのは学生のためであるのはもちろんのこと、教える教員にも有用であることを改めて知ることができた。また、黒板だと字を大きく書く必要があり、結果として授業の回転が速くなくなってしまうなど、授業をしないと中々気づくことができない点もいろいろと教えて下さり有意義な授業参観であった。(PFFP フル/授業1)
- 参観してみて、分野の違いを超えて自分も取り入れられそうな工夫点がたくさんあることに気づいた。一番参考にしたいと思ったのはスライドの創り方であった。実習と違い、パワーポイントを使う講義形式の授業では、学生が、資料があることに安心してほとんど授業を聞かない、メモを取らない、集中しないというのが、数年来の悩みだった。しかし、平澤先生が取り入れていらっしゃる穴埋め形式のスライド、配布資料では、ほとんどの学生が寝たりしゃべったりスマホをいじったりすることなく、講義に集中し、メモを取り続けていた。先生は1年生の1学期だからでしょうとおっしゃっていたが、授業の後半、復習に入り、穴埋め作業がなくなると、一部の学生が寝始めたことから、やはり学生の手を動かせることの意義は大きいようであった。逆にスライドをプリントに書き写す「作業」になってしまうという弱点もあるように思われたが、1年生を対象とした基礎知識の講義で、学生が自分なりの考えをもつことよりも、むしろ必要な知識を習得することが学習目標になっているこの科目のような場合には、とても有益であると思えた。今の時点で自分自身が担当する科目は、大学院のものが多いこともあり、知識の暗記、習得よりも学生が実体験と結びつけて頭を使う、ということのほうの重要性が高いため、すぐに取り入れる機会はないかもしれないが、科目の目的と照らし合わせながら、ぜひいつか実践してみたいと思う工夫点であった。一方で、知識の暗記が重要となる科目の中でも、ただ知識が身につくさえすればよいというのではなく、学生が自身の将来展望と結びつけながら授業を受けられる工夫をされているということはとても興味深かった。基礎的な話は、具体的に何の役に立つのかわからないと関心も落ちるというのは、高校時代の数学などを思い返すと自身の経験としてもよく理解できた。その中で、目の前の講義内容が、研究または臨床で、どのように活かされるのか、なぜ必要なのかを伝えていくことは、講義をする際に大きな問題となりがちな「学生のモチベーションが上がらない」という課題への解決策のひとつとして有効だと思った。心理学の領域は、身近な日常生活とも結びつけやすい内容が多いため、こうした工夫はぜひ取り入れたいと思った。また、人数の多い講義で学生の発言を引き出すことが難しいというのも、数年前に初めて講義を経験したときから課題として感じていることだが、先生がされていた、学生に「これは何でしたっけ?」「これはどういうことでしょうか?」「ここで大切なのは何でしょうか?」と質問を向けて、すこし間をおくというのは、面白い工夫点だと思った。学生の様子を見てみると、実際にその間考えていそうな人、質問を受けて過去のプリントを見返している人などがいて、全員とはいかないまでも、学生に考えさせる時間をもつという意味では役に立っているように見受けられた。また、授業後に先生がおっしゃっていた「答えがわからなければ、わからないということに気づけることが重要」という点が、とても真をついていると思った。1時間半集中力を保つということはそれだけでも大変である。その中で、講義にリズムやメリハリをつけるという意味でも、この方法は有用であるように思えた。大人数の講義ではなかなかこちらから指名して答えさせるということが難しいことも多いため、こうした方法はぜひ参考にしたいと思った。(NFP フル/授業2)
- 今回の講義の最も顕著な特徴は、講義がすべて英語で行われた点である。野地先生の英語は非常に流暢で、話すスピードがやや速く感じられたが、日本人にも聞き取り易い明瞭な発音であるため理解し易かった。日本人学生も留学生も受講しており、先生と学生とのやり取りの様子から、日本人学生も概ね内容を理解しているようであった。専門的な内容を講義を英語で行うことは、教える側の技量や、学ぶ側の理解力など、様々な面で実施が困難であるため敬遠されがちである。しかし、今回の野地先生の講義

では、英語でも内容が理解し易いよういくつか工夫がなされていた。(1) 黒板の図示で視覚的に理解を補助・・・パワーポイントで講義を進める前に、学生とやり取りをしながら、今回の講義内容に深く関連する腸の部位や細胞の構造などを黒板に図示していた。適切に色分けされた、非常に見易く丁寧な図示であった。その後のパワーポイントによる説明の途中で、時折板書済みの図に立ち戻り補足説明してくれたため、今どの器官(細胞)のことを説明していたのか再確認しながら、話題についていくことができた。(2) 平易な語彙で言い換える・・・パワーポイントの中でよく現れる専門用語や難しい表現を、平易な語彙で言い換えている場面が何度かあった。一例を挙げると、例えばスライド上の *possess the homology to...* という表現について、*They are very similar to...* という意味ですよ、と言い換えて説明している場面があった。このような言い換えを伴うパラフレーズやリキャストなどの手法は、外国語教育で広く認知され実践されている指導スキルであるが、やはり聞き手に分かり易く効果的な手法であることを再認識することができた。(3) 学生とのインタラクションがある・・・一方的な英語の講義ではなく、適切なタイミングで学生に複数回質問を投げかけたり、理解の度合いを確認したりしていた。特に参考になったのは、先生が実験の前提や条件について説明したあと、学生を当ててその結果を予測させていた点である。学生の様子を見て、自信がなさそうならヒントや補足説明を与えるなどして、学生に考えさせ英語で何か言わせようとしていた。知識の伝達だけを目的とせず、学生とのコミュニケーションや理解度の確認についても配慮された講義であった。野地先生は、研究室の発展のために、まず受講学生に先生自身の研究分野に興味をもってもらい、将来的に研究室に来て博士課程まで進む学生を育てたいと強く願っていた。講義の構成を基礎的内容から応用へという従来通りの流れでなく、逆に応用的・先端的内容から基礎的内容に戻るといった構成にしているのも、学生を飽きさせないよう、はじめに「こんな面白いことが今研究されている」という話題提供をし興味をもたせる狙いがあったようである。今後講義を計画する際に参考にしたい構成である。(NFP ショート/授業 4)

- まず印象的だったのは、学生とのインタラクションの多さだった。授業の大半が学生とのやりとりによって構成されていた。前回の参観ではグループワークがあったが、今回のインタラクションはグループワークとはまた異なり、教員と学生とのやりとりによって、学生の主体的な参加を促すというものであったと理解している。そのことにより、学生が授業に集中している様子が伺えた。当てられることに対する適度な緊張感のようなものもあっただろう。普段自分が講義をしていても感じるのだが、日本の学生は挙手をするのがほとんどない。そのような集団に対する講義として、今回のようにマイクを向けながら進めるというのは、有効な方法のひとつであると感じた。学生が誤答した際のフィードバックが肯定的で、失敗することへの不安感が軽減されているように感じたのも印象的だった。また、インタラクションの時間以外でも、ほぼ常に先生が教室内を歩いて回っていらっしゃるのも印象的だった。講義形式の授業だとつい教壇に落ち着いてしまうように思うが、巡回することで学生との距離が近くなり、集中力を保つのに役立つようにも思った。一方で、インタラクションを積極的に取り入れることにより、いわゆる講義に避ける時間は相対的に短くなる。全学の講義など、学生に身につけてもらうことが必須の知識が多くなれば、そちらの分量に合わせて調整することが必要になるため、ここでもやはり授業の目的を踏まえての「方法」の選択が重要であると感じた。(NFP フル/授業 28)
- 授業開始のベルが鳴ったら、すぐ本文に入るのではないかと思います。趙先生がまず今日の勉強の概要をみなさんと一緒に閲覧したり読んだりしました。これによって、学生たちはこれから勉強する内容に対して、まだあまり理解できていないかもしれませんが、大体のイメージを付けることができるようになり、大変役に立つと考えられます。授業に入り、趙先生が積極的に中国語でみなさんに話しかけたり、質問したりして、巧みに学生たちとの交流を取っていました。私は普段初級学習者への配慮もあり、授業をする時には基本的には日本語でしゃべり中国語の使用を控えていました。しかし、趙先生の授業ふりを見ると、多少聞き取れなかったとしても学生たちは実は母語話者の教員の発音を聞き取ったのではないかと思います。始め、母語話者の教員の長所が何にあるかということをもう一度考える必要があると感じました。また、私は自分の専攻の影響で、授業をする時に文法や一つ一つの細かいところに拘り過ぎる傾向があると思いますが、趙先生とのディスカッションを通して、各段階の学習者のニーズに応じて授業を展開していかないといけないということを意識し、今後より豊富多彩な形式を採用し学生たちとコミュニケーションを取りながら授業の内容を修正していきたいと思います。90分の授業は基本的には休憩を設けていませんが、語学の授業は教授の内容が多いということもあり、受ける側は途中で疲れてしまう恐れが考えられます。学生のリフレッシュのために、趙先生の授業は、毎回休憩の時間を設定しています。しかも、単純なお休みではなく、TAを活用しながら、みなさんに中国語の民謡を聞かせたり、中国の事情を紹介したりするように工夫しています。これによって、中国に関する学習者の興味を喚起できるし、中国語の勉強のいい動機づけにもなれます。私も今後このようないい“休憩”を導入したいなあと思います。(PFFP ショート/授業 30)

## 自分の授業をみつめる「マイクロティーチング」

【日時】 2016年11月15日(木) 13:30~17:40

【会場】 東北大学 川内北キャンパス 講義棟 B 棟 B204

【概要】 参加者は先のワークショップで作成したシラバスから授業1回分を選び、90分の授業計画をたて、その内の7分程度を実際に行った。他の参加者やファシリテーターらからのコメントをもとに、自分の授業のふり返しを行った。また、実践の様子を収録したDVDを作成し、各自で視聴してリフレクションを実施するように求めた。

### 【タイムテーブル】

13:30~13:50	本日の流れとファシリテーターの紹介 授業リフレクションに関する説明 マイクロティーチングの実践方法に関する説明	岡田有司, 今野文子 (大学教育支援センター) 足立佳菜 (学習支援センター)
13:50~14:00	準備, マイクロティーチングプランの確認 マイクロティーチングセッションスタート	
14:00~14:03 14:03~14:10 14:10~14:15 14:15~14:30	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	石原
14:30~14:33 14:33~14:40 14:40~14:45 14:45~15:00	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	林
15:00~15:10	10分休憩	
15:10~15:13 15:13~15:20 15:20~15:25 15:25~15:40	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	田中
15:40~15:43 15:43~15:50 15:50~15:55 15:55~16:10	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	Roots
16:10~16:20	10分休憩	
16:20~16:23 16:23~16:30 16:30~16:35 16:35~16:50	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	吉田
16:50~16:53 16:53~17:00 17:00~17:05 17:05~17:20	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分) ティーチング (7分) 評価シート記入 (5分) フィードバック (15分)	王
17:20~17:30	10分休憩	
17:30~17:40	まとめ	

### 【当日の様子】



板書授業に取組む参加者



スライド提示による授業



あたたかく見守る担当者

## 【参加者の声】(抜粋)

- これまでにも講義をしたことはあるので、講義の準備をしたり計画を立てたりという経験ももちろんあるのだが、このように詳細に時間配分を組み立てたり、内容ごとに目的や留意点を整理して書き出したり、学生の反応を丁寧に想像したり、といったことはしてこなかったのが正直なところである。グループワークをするような授業では、大まかな時間配分は決めてはいたが、大抵余白の時間を設けておいて、そこで延びた分を吸収したり、延びなければ雑談で埋めたり、といった対応で、どちらかというところ、大雑把な計画の中で進めてきた。今回丁寧な計画を立てる過程で、その作業により授業の中で自分がどこに時間を使いたいのか、そのためにはどこを削らなければならないのか、といった優先順位づけの作業が発生し、自分の中での授業目標が明確化されたように感じた。授業計画を立てる作業にはかなりの時間を要したため、これから講義が増えてきたときに、毎回必ずできるかとやや自信がないのが正直なところではあるが、その意義は身をもって感じる事ができたので、できるだけ取り入れていきたいと思った。実際に書き出さないまでも、アウトラインを立てる際に、その内容に重み付けをし、取捨選択をするという作業は必ずするように心がけたいと思った。(NFP フル)
- 理系の学部一年生向けを想定しての「力学」のマイクロティーチングを行った。当初の計画ではニュートンの運動の3法則を黒板に書いたまま授業をする計画だったが、実際に板書してみると、黒板の大きさと字の大きさの関係上その計画は難しいことに気づいた。4分割スタイルの黒板だと可能かもしれないが、前もって、黒板の大きさを把握することや、無理な計画は立てないほうが良いと感じた。板書の計画をどのようにあらかじめノートに書いておくかをもっと工夫する必要があるように思った。また、丁寧に書こうとするあまり、板書の速度が遅くなってしまった。字の読みやすさをキープしつつ、板書の速度を上げられるように、訓練していきたい。また、観察者の意見や、動画を見返してみた印象から、板書をするときに話す声小さくなり、また、学生に背を向けて話すことになるので、話すときと板書をするときは分けたほうが良いように思った。また、文字のサイズも若干小さいように感じたので、最適な文字サイズを見つけていきたいと思う。また、授業が淡々としていた印象だったので、「慣性って聞いたことある？」といった学生の呼びかけや、速度の意味に関する問いかけなど、学生に振った方が良かったように思った。レジメの穴埋め式を配るという意見も出たが、個人が自由な配置でノートをとったほうが良いような気もするので、穴埋め式が果たして良いのかも今後考えていきたい。今回はパワーポイントのマイクロティーチングはしなかったが、他の授業者のパワーポイントの講義やその後のリフレクションを聴くことで、パワポ時の立ち位置や、スライドの構成、話すスピードやタイミングなど大いに参考にすることができた。(PFFP フル)
- 録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなど感じました。また、声の大きさについてもマイクを使っているのに、ほとんどの部分は聞き取れるのですが、途中何を言っているのか、正確に分からない部分がありました。実際に講義を行っているときも、少し自信が無い部分は、もごもご話している気がしておりましたが、録画を見るとその自信の無さが思っていたよりも分かるのだと感じました。つまり、生徒から見ると、声が小さくなっている部分については、自信が無いのだと分かってしまうということに気がしました。ですので、講義を行う際には、何度も練習する必要があると改めて感じました。また、フィードバックにもあったとおり、インタラクションを行う際には、考える時間を入れるべきだと思いました。模擬授業を行っているときには、考える時間を入れているつもりでしたが、録画を見ると全くないことに気が付きました。スライド資料を穴埋めで作成していましたが、穴を埋める時間が全然ないと気づきました。このことから、今後講義を行う際には、より短いキーワードに絞っていく必要があると感じました。また、トピックとトピックの間にもう少し、整理する時間が欲しいという、フィードバックがあったように、少し、授業の展開が早かったように感じました。録画でも見ると、その早さが顕著に感じました。メリハリが無い授業だなあと感じました。ですので、今後は、間をはかりながら、生徒の様子にも気を配りながら、授業を行っていききたいと感じました。授業で行う情報量もいっぱいありましたので、少し整理する必要があると感じました。(PFFP フル)
- 「質問をもう少しみくみくだいて答えやすくすることが可能かも(〇〇について知っているか/聞いたことあるか? 〇〇に関するニュースを聞いたこと/見たことあるか (yes/noで答えられるものからスタート))」というコメントについて→ごもっともです。そうです。いつも悩んでいます。質問をしてしまったから、「あ、この質問、めっちゃ答えづらい! しまった!」と思うことが多い。ここは、心掛けていきたい。同じく、学生への質問、次のようなコメント・ご提案もいただいた。「知っていますか?」だと知らないと思われるので「~についてどう考えますか? /考えますか?」のように考えさせる質問もよい。→これも、実施してみる(このような質問こそ、もう少しこちらから基礎知識・基礎情報を提供してから、ペアで話してもらってもいい場合もあると思う。(NFP フル)

## 比較の目を育てる「国内他大学訪問調査」(フルコース・オプション)

【日時】 2016年10月26日(水)～29日(金)

【引率】 岡田有司, 今野文子

【訪問先】 大阪大学, 立命館大学, 同志社大学

【概要】 国内他大学を訪問し, 授業参観, 施設・設備の見学, 教員・学生とのディスカッションにより, 多様な大学の在り方などについて理解を深めた。フルコース受講生のうち4名が参加した。

### 【タイムテーブル】

#### 1日目：10月26日(水) 大阪大学訪問

10:30～	授業参観	先端教養科目：現代キャリアデザイン論—複雑化する時代のサバイバル術(豊中キャンパス大講義室) 家島先生
12:00～	昼食	家島先生を囲んで大学生協にて昼食
13:30～	施設見学	ラーニングcommons他施設を見学
14:30～	ディスカッション	家島先生とのディスカッション
15:30	京都へ移動	

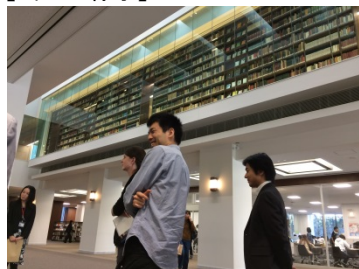
#### 2日目：10月27日(木) 立命館大学訪問

11:45～	集合	
12:10～	ランチタイム FD	立命館大学の教職員によるランチタイム FD に参加
12:50～	休憩	
13:00～	FD 集合研修に参加	立命館大学の新任教員, 大学院生向けの FD 集合研修に参加
14:30～	施設見学	図書館, 究論館などを見学
16:20～	授業参観	大規模講義「現代の教育」を参観
17:50～	ディスカッション	担当教員とのディスカッション

#### 3日目：10月28日(金) 同志社大学訪問

10:00～	ラーニングcommons 見学	[1] 概要 [2] 館内見学
--------	--------------------	--------------------

### 【当日の様子】



図書館見学の様子



家島先生を囲んでの昼食



参加者集合写真

### 【参加者の声】(抜粋)

- ロイロノートを使った授業を始めて受講しましたので, 家島先生がどのように工夫されているのかを勉強させていただくことができました。特に印象に残っているのは, 家島先生が90分間生徒に飽きさせず, 集中して取り組むような仕掛けを多く行っていることでした。私自身も研修で模擬授業を行う予定になっておりますので, 家島先生が工夫されている点を少しでも多く実施できればと感じました。また, 積極的に学生の顔と名前を紐づけする等工夫をこらした先生の授業は非常に参考になりました。東北大学でも全学教育で生徒のスマホを利用した授業を行っている場合もありますので, 私自身もスマホなど活用した授業について勉強し, 効果的な授業を展開できるようになりたいと思いました。また, 家島先生の課題で, 人生プランを双六で書くというのは大変興味深い課題でした。学生が, これまで何を実施してきたのかを過去を振り返り, 大学卒業後に何をしたいのかを考え, そのうえで, 大学で何を必要があるのかを考えるというのは非常に重要なことだと思いました。また, 学生にとっても自身で人生プランを考えることは課題を超えて重要なテーマとなり, 有益なものになっているのだと思います。学生が卒業後に役に立つような課題を課すということも大事であると改めて感じました。(PFFP フル)

- 新図書館は、2016年4月に開館されており、学習者や研究者が長時間滞在したくなるように様々な機能・工夫がされておりました。新しい施設ということで、借りたい図書を持ってゲートを通ると自動で認識され、カードをタッチすれば貸出手続きが完了するとのことでした。また、「びあら」と呼ばれる図書館ラーニング・コモンズは、「主体的な学習者としての学びの転換を促すこと」「仲間とともに学ぶ楽しさ、成長する喜びを感じる場であること」というコンセプトを持っておりました。そのため、機能的で開放的な空間デザイン（仕切りにガラスを用いていました）や什器の配色についても工夫されておりました。また、ライブラリースタッフを配置しており、スタッフの方は、配架・書架整理などの図書館の基本業務のほか、びあらカウンターでの機器類の使い方や情報検索の仕方などのサポートに取り組んでいました。また、印象的だったのは、大学の職員の方がこのような最新の施設をどうやったら、効果的に学生に使ってもらえるのかということを考えていた点でした。国立大学でも同じように職員の方が考えているかもしれませんが、私立大学の職員さんの方がより積極的に考えているような印象を受けました。究論館は、大学院生のための施設で、大学院生個々の研究を促進するだけでなく、グループディスカッションや共同研究、研究成果の発信・共有、研究科や課程を超えた大学院生間の交流を促す施設となっていました。素晴らしい施設をもっと多くの先生・学生に使用してもらうために、コミュニティ同士を交流させ、その交流を定着させるための仕掛けを行っていく必要があると職員の方がおっしゃっていたのが印象的でした。(PFFP フル)
- 授業評価を導入するからといって、授業のレベルが高くなることはない、という話が印象的であった。授業評価を通して、ダメなところを指摘されるが、それをどう改善すればよいかを教えてもらうわけではないから、改善しないのも当然である。(その意味でも、家島先生が、学生に授業評価をさせる際に、具体的な改善策の提案もお願いしているのが、すばらしいと思った。) 授業評価の仕方の見直しの必要性を感じた。非常勤で教えている法政大学には、特に新任教員の授業を (but ベテラン教員の授業も対象となる)、同僚が見学し、授業後にフィードバック・セッションを行うという、大変ありがたい仕組みがある。私もこれを経験し、非常に勉強になった。いいところとダメなところを指摘されただけでなく、ダメなところを具体的にどう改善すべきかについて、多くのヒントと提案も受け、非常によかった。(※毎回の授業で、教員から、学生にミニッツ・ペーパーなどで評価してもらう際に使えそうな質問:「今回の授業を理解できましたか? できませんでしたか?」、「疑問点」、「感想」、「話し方」と「板書の仕方」に非常に注意すべきであると改めて分かった。私自身は早口になりがちですので、それに気を付けたい。そして、板書の仕方も、改善したい。できれば、どのようなことを、どのようなレイアウトで黒板に書くかを、授業の前に決めておくことにしたい。理想としては、黒板だけを見れば、授業の一番大事なポイントが分かるような板書の仕方をできるようになりたい。(NFP フル)
- 大阪大学、立命館大学、同志社大学のラーニングコモンズを中心とした施設見学を行った。これらの施設で特徴的だったことは重点的な強化を行っている施設の多くが人文系を対象としていること、ほとんどのケースにおいて施設の利用に関する啓発活動を行っていないことであった。グループでの学びは理科系においては自主ゼミや自主的な輪講という形でほぼ同等に存在するが授業や教育課程においてこのような活動を啓発する機会がほとんどなく、特に学部学生においてはごく一部にとどまっている。一方人文系ではゼミ活動や学部の様々な授業課題によってグループ活動を行う機会がある。そのため、そこまで啓発活動をおこななくてもある程度の利用率を担保できる。そのため、どうしてもこのような施設の活用が人文系に偏ってしまっているのではないかと感じた。ざっと見学した定性的な感想として、多くが実際授業課題を相談しあう場として利用しているように感じ、課外の学習活動は多くないように思えた。例えば東大の場合自主ゼミや輪講を授業として認定して単位をだす仕組みがある。このように学生の自発的な学びをより啓発するやりかたをとることで、より理科系も含めた多彩な活動を支援できるのではないかと感じた。(NFP フル)
- 立命大学の図書館は、自分の参観した図書館の中で設備やスタッフやデザインにおいて最も優れている図書館です。図書館は教育や学術のためにある場所なので、地味でも大丈夫だという私の考え方を一新しました。最新の自動貸出機などの設備はもちろん、三階のデザインはそれぞれの用途に合わせて異なり、使用者の気持ちもそれなりに変わります。いい図書館に入り、自然的に本を手に取りたくて、落ち着いて一冊を読み始めます。あそこで実感しました。同志社大学の図書館は、「会おう」、「話す」、「まとめる」、「やってみる」という四つのコンセプトで四つの空間に分かれています。各空間にデザインが異なり、バーや日本式な座席、ファミリーレストラン風などの大変わかりやすい空間設計です。椅子の種類、ワークショップの大きさ、スタッフや学生との連動、どちらも私のしてなかった大学の施設の在り方でした。つまり、今回参加した施設は、これからの若い世代向けの学習、活動場所です。学生はただ教育を施す対象だけではなく、しいて言えば、顧客にもなります。特に私立大学はそうです。高い授業料を払った以上、もっといいサービスを体験させるのはおかしくはありません。(PFFP フル)



## コーチング技術を活用した院生指導

【日時】2016年12月9日（金）13:00～16:10

【会場】東北大学 川内北キャンパス 教育・学生総合支援センター東棟4階 大会議室

【概要】院生に対する研究指導におけるスキルについて、コーチング技術を活用した指導法の観点から、講義とワークショップによって学んだ。

### 【タイムテーブル】

13:00～13:05	開会挨拶（大学教育支援センター長：羽田貴史教授）
13:05～13:55	講演「コーチングを活用した院生指導」 （東北大学医工学研究科長：出江紳一教授）
13:55～14:05	休憩
14:05～16:05	ワークショップ（株式会社イグニタス：倉重知也氏，出江紳一教授）
16:05～16:10	閉会挨拶（大学教育支援センター長：羽田貴史教授）

### 【セミナー資料】（抜粋）

<p><b>講演内容</b></p> <p>1. コーチングの概略 2. エビデンス スキルの効果に関する若干の考察 3. 大学院生にコーチングを教える</p>	<p><b>コーチング・スキル</b></p> <p>1) ゼロポジション 2) ベーシングによる安心感の醸成 3) 接続詞を使う（それで、それから） 4) 承認する 5) フィードバック 6) 提案する</p>	<p><b>コーチング・スキル</b></p> <p>7) 要望する 8) 効果的な質問をする 9) 沈黙する 10) メタ・コミュニケーション 11) お互いが同意できたことを確認する</p>
<p><b>個別対応のツール</b> コミュニケーションスタイルの タイプ分け</p> <p>（出典：コーチエイ）</p>	<p><b>コーチングの機能</b></p> <p>1. 相手に良い感じで話してもらおう 2. 新しい視点に気付かせる 3. 行動を開始させ継続させる</p>	<p><b>まとめ</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ コーチングの概略、エビデンス、大学院授業を紹介しました。</li> <li>■ コーチングを使う場合、目的と機能に合った使い方をすることが大切です。</li> <li>■ コーチングは、コーチ側とクライアント側双方で個人の心理社会的状態を向上させると考えられます。</li> <li>■ 教員が身につけるスキルであるだけでなく、学生が学ぶことにより、教員のコーチングの効果が高まると思われます。</li> </ul>

### 【当日の様子】



講義の様子



ボールのやり取りを例に解説



ワークショップの様子

### 【参加者の声】（抜粋）

- コーチングという言葉自体は以前から知っていたが、それが具体的にどのようなものかを初めて学ぶことができ、有意義であった。とくに大学院生は、主体的に研究を進め、自分の力で論文を書いたり、発表をしたりする能力を身につける必要があるため、院生指導に当たっては、ティーチングはもちろんのこと、院生が目標を主体的に達成できるようになるためのコーチングが非常に重要であることがよく分かった。とくに、問いを共有するという未来解決型のコーチング(問いかけ)は、今まで考えたこともなかったスタイルなので、将来的な院生指導や後輩指導に対して、意識して用いるようにしたい。また、この未来解決型コーチングを自分自身にたいして用いることも、仕事や日々の生活を前向きに過ごすうえで有益であると思った。また、相槌のレポートリーやOKメッセージなど、適切なコミュニケーションスキルを身につけるには、練習も必要だと実感した。私自身も、相槌のレポートリーが少なかったり、無意識に腕を組んだりするなどの癖があるので、意識的に改善をしていきたい。(PFFP フル)

- 実践的に、コーチングに必要な「聴く技術」を学ぶことができた。最初の問いかけにも見事に引っかかり、話を聴くことの難しさを実感した。また、「好きな食べ物を話してもらおう」という実践では、組んだ相手が台湾人であり、私も台湾に住んでいたため、自分自身の台湾に対する知識が邪魔をして、しっかりと聴くことが不十分になってしまった。大学院生の指導の時も、教員の方が専門分野の知識や経験がある分、院生のお話をしっかりと聴けなくなる恐れがあるので、この経験を生かして、意識的に院生のお話を聴くようにしなければと思った。(PFFP フル)
- 出江先生が、コーチングの目的が、1. クライアント(=院生)の目標を達成することと、2. 主体性を向上させることであると指摘した。これを念頭において将来院生の指導にかかりたい。そして、その前提としてワークショップで学んだ「聞く力」を生かして、具体的な院生の「目標」が何かを、正確かつ丁寧に把握していきたい。出江先生が、院生の目標を達成させるために、「健康」、「金銭管理」と「人脈」も大事な能力・道具であると意識すべきであると指摘した。全くその通りだと思う。この3つのうち「金銭管理」についてももう少し詳しく述べると、特に日本では、高等教育が非常に費用がかかるため、ほとんどの院生が、授業料の支払いに苦しみながら研究を進めているから、教員もそこを意識して、理解を示すべきである。また、科研費等の管理の仕方を指導するのも、学生から見て大変ありがたいと思う。院生の指導に際して、あいつちのレパートリーを増やすのが大事だと指摘もあった。そこで、先生のリストを参考にしたい。ワークショップの最初に、岡田先生が入っていたグループから、留学生の指導の際に特別な配慮・技能が必要である、というご指摘が出た。全くその通りだと思う。研究分野によっても違いがあると思う、「質問攻め」がよくないのは、どの分野でもそうかもしれない。というのは、留学生に対して、その人の母語でない言語で指導する場合(日本人である教員が、日本人でない学生に対して日本語で指導する場合や、英語を母語としない教員が、英語を母語としない学生に対して、英語で指導する場合)、そうでないケースと比べて、そもそも言語のレベルで、誤解が生じやすいし、しかも、その誤解に気付くのが、とても難しいと思う。それこそ、時間をかけて、言われたこと/聞かれたことの内容と意図の確認を繰り返しながら、指導を進めないと、大変なことになるかもしれない。また、特に文系で、例えば日本人でない学生が日本の文化等に係る何かを研究している時に、その日本人でない学生と、日本人学生の、前提知識が違うことに、配慮する必要があり、それこそ「教える」の部分がより重要であると思う。(NFP フル)
- 院生指導の講座に参加し、特に印象に残っているのは、講義いただいた出江先生が、「指導する側(教員)と指導される側(学生)は同じ立場である」という点です。大学院生の研究が、教員よりも高いインパクトファクターのある雑誌に掲載されることもあり、決して、教員が全てにおいて上回っているわけではないということです。しかしながら、コーチングは必要とされます。なぜならば、コーチングはティーチングではなく、クライアント(学生)の望むところに最短の時間で到達するために、必要な能力や道具を自ら備えさせるものであるからです。つまり、対話(コミュニケーション)を通して、学生の望むことは何なのかを考えることが重要になってくるということです。出江先生は、この対話こそが、新たな価値を創造するコミュニケーションであるとおっしゃっていました。このコミュニケーションを実施していくためには、必要なスキルがあることを学びました。特に難しいスキルと感じたのが、ゼロポジションです。ゼロポジションというのは、先入観無しで、話を聞くことです。私は、今まで、修士課程の学生や学部生の論文を見ている時に、何となく、その個人の特性を考えながら、あるいはイメージしながら、アドバイスをしていました。今後は、できるだけ、ゼロポジションのスタンスで、インタラクティブなコーチングを実施していきたいと思いました。特に、一方的にアドバイスをすることないように、常に、相手を承認し、お互いが同意できたことを確認しながら、すすめていくことが重要だと改めて感じました。出江先生は、教授という立場にも関わらず、あいつちのレパートリーを増やしたり、OK メッセージの練習をされたりしているという話を聞きました。豊富な経験がある先生でもこのような練習し、努力されているという話を聞き、今後、大学教員を目指している私としては、絶対に練習しなければならぬと感じました。私は、まだまだ、あいつちのレパートリーが少ないので、レパートリーを印刷して、壁に貼ったりするなどして、意識的に、あいつちレパートリーを活用していきたいと思いました。また、出江先生は、効果的な質問がコミュニケーションをとるうえで、重要だとおっしゃっていました。効果的な質問については、本研修のワークショップでも実施しましたが、傾聴するということが非常に大事だと感じました。あいつちをうつだけでも、相手側が勝手に、解決法を考えるということも改めて感じました。院生指導する際には、自身の考えを一方的に教えるのではなく、学生に考えさせるということが重要であるということ学びました。(PFFP フル)



## 「自分の授業をみつめる」模擬授業

【日時】2017年2月17日（金）13:00～18:15

【会場】東北大学 川内北キャンパス 講義棟 A 棟 A103

【概要】参加者は先に実施したマイクロティーチングにおける実践結果やリフレクションを踏まえて、17分間の授業実践をおこない、他の参加者や先達教員からのフィードバックを得た。また、実践の様子を収録したDVDを作成し、各自で視聴してリフレクションを実施するように求めた。

### 【タイムテーブル】

13:00～13:20	本日の流れとファシリテーター、先達の紹介	岡田有司, 今野文子 (大学教育支援センター 今野文子) 足立佳菜 (学習支援センター)
	模擬授業の実践方法に関する説明	
13:15～13:30	準備, 模擬授業プランの確認	
模擬授業セッションスタート		
		佐藤勢紀子先生, 佐藤智子先生, 澤谷先生, 関内先生, トッド先生, 羽田先生, 平澤先生, 邑本先生
13:30～13:33	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	吉田
13:33～13:40	ティーチング (17分)	
13:50～13:55	評価シート記入 (5分)	
13:55～14:10	フィードバック (15分)	
14:10～14:13	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	王
14:13～14:30	ティーチング (17分)	
14:30～14:35	評価シート記入 (5分)	
14:35～14:50	フィードバック (15分)	
14:50～15:00	10分休憩	
15:00～15:03	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	Roots
15:03～15:20	ティーチング (17分)	
15:20～15:25	評価シート記入 (5分)	
15:25～15:40	フィードバック (15分)	
15:40～15:43	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	林
15:43～16:00	ティーチング (17分)	
16:00～16:05	評価シート記入 (5分)	
16:05～16:20	フィードバック (15分)	
16:20～16:23	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	田中
16:23～16:40	ティーチング (17分)	
16:40～16:45	評価シート記入 (5分)	
16:45～17:00	フィードバック (15分)	
17:10～17:13	授業設定, 目的, 着目ポイントの説明 (3分)	石原
17:13～17:30	ティーチング (17分)	
17:30～17:35	評価シート記入 (5分)	
17:35～17:50	フィードバック (15分)	
17:50～18:15	まとめ	

### 【当日の様子】



模擬授業の様子



先達からのフィードバック



板書に取り組む参加者

### 【参加者の声】(抜粋)

- 理系学部一年向けで且つ物理があまり得意ではない学生を対象にした「力学」の模擬授業を行った。前回のマ

マイクロティーチングでは、板書に時間がかかり過ぎたが、今回は適度なスピードで書くことができたと思う。しかし、字が小さくなってしまったので、字の適切な大きさに関しては今後さらに気を付けて行こうと思う。慣性の法則について図を使って説明したが、あとで動画を見ると、水平線が斜めになっている等、欠点が目についた。黒板で図をきちんと描けるように練習をしていきたい。また、描いた図を黒板から消して、次の第二法則の説明に進んだが、図はしばらく残したほうが良いように思った。あるいは、質問タイムを設けて、その時間に学生がノートに図を描けるように配慮すればよかったと思う。ノートを見ながら講義をしたが、先達の教員の方から指摘された通り、ノートは見ないほうが良いように思った。覚えた上で板書するのはなかなか大変だが、ノートに頼らずに講義できるように努めていきたい。また、注意していたものの、講義の音が小さかったり、黒板にむかって話していたりする部分もあったので、後はさらに意識的に改善していきたい。宇宙飛行士のボール投げの動画を見せたほうが良いという意見があったが、たしかに、その部分はプロジェクターで見せたほうが良いように思った。図もパワーポイントの方が良かったかもしれない。板書だけだと学生にとって集中を継続するのが辛いかもしれないので、板書とプロジェクターの併用や、(事前練習をした上での)だるま落としの実演など、学生が飽きることのないような授業を後は考えて行こうと思う。(PFFP フル)

- これは学生からもフィードバック大有り。大人数で大講義室だと、文字をとでも大きくしないと、後ろの方の学生は見づらい。とすると、文字の数を少なく、大きさをできるだけ大きくするしかない。だけど今回のフィードバックの中では、もっと情報があるとよいとのご指摘もあった。個人的には、最近の好みとして、もっとも重要な KW だけスライドに入れるのがいいと思う。そうすると、学生が私の話を聞いてノートをとってくれる。しかもスライドの情報量が多いと、学生も疲れるし、私の存在意義がなくなる。普段は漫画やイラストを入れるように努力している。今回は準備時間が足りなかつただけ。最後に、スライドの数とデザインがそのままよいとのフィードバックと、もっと多くの情報を載せてほしかった・絵などを入れてほしかった、というフィードバックを受けた。そこから分かったこと：人お好みはそれぞれ。今後は私にとってやりやすい(作りやすい+授業のペースメーカーになるような+感じが欠けないという私の一つの短所を補うような)スライドでやっていきたいと思う。(NFP フル)
- 先達の先生方を前に、大学の講義を実際に行うのは初めてで、大変緊張しました。しかしながら、先達の先生方から、様々なアドバイスをいただくということは非常に良い経験だと改めて感じました。今回のマイクロティーチングを実施する際に、家族に生徒役をお願いし実施し、フィードバックをもらってから、本マイクロティーチングに臨みました。専門的な話を初めて聞く人でもきちんと理解できるかを確認するために、生徒役を依頼しました。しかしながら、先達の先生からアドバイスをいっぱいいただいたので(当然ですが)、まだまだ、改善するところは多いのだなと感じました。しかしながら、先達の先生から、「導入として東北大学の写真を用いている点が良い」「驚きを与える工夫もよい」「話し方がハキハキしていてよい」など、良いところも多く、挙げていただき、自信を持つことができました。ほめられることはいいことだなと思いました。大学教員を採用する際には、模擬授業があるということでしたので、今回のマイクロティーチングは非常によい経験になったと思います。また、自身の講義をしている様子の録画を見て振り返るというのも効果があると思いました。昨年11月のマイクロティーチングのあとに、初めて自身の授業する姿をみたときは、恥ずかしいなという思いが強かったのですが、しかしながら、2回目になると、他の先生方に講義を見てもらうことや、自身で録画を見て振り返るという経験は非常に重要だと、頭の中で理解しておりますので、恥ずかしいという気持ちはほとんどありませんでした。もっと、より良い授業を作っていこうという気持ちが強くなってきました。まず、今回の模擬授業を通してよかったところは、授業を展開しながら、学生に呼びかけができていたという点です。一方的な授業になるのではなく、学生と双方向の授業を展開していければと考えていたので、その点は録画を見てもうまくいっていたのではないかと感じました。しかしながら、市役所で働いているという経験談についてもうまく取り入れて、行く予定だったのですが、自身の経験談を話したいという思いが強くなり、経験談以外のところの話すスピードが速くなっていたと感じました。また、経験談を取り入れるタイミングもあまりよくないところもあったと感じました。一方で、録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなと感じました。そのため、自信がないように見えました。また、声の大きさについてはほとんどよく、ほとんどの部分は聞き取れるのですが、途中スピードが速くなるせいか、正確に話しをしていることが伝わっていない部分がありました。前回同様に、実際に講義を行っているときも、少し自信が無い部分は、もごもご話している気がしていましたが、録画を見るとその自信の無さが思っていたよりも分かるのだと感じました。つまり、生徒から見ると、声が小さくなっている部分については、自信が無いのだと分かってしまうということに気付きました。ですので、講義を行う際には、何度も練習する必要があると改めて感じました。前回はスライド資料を穴埋めで作成しておりましたが、穴を埋める時間が全然ないとアドバイスをいただきました。このことから、今回の授業を行った際には、より短いキーワードに絞り、うまく対応できたなと思いました。(PFFP フル)

## 「比較の目を育てる」大学教育制度と役割について考える～日・米の比較 海外他大学訪問調査参加者向け事前案内（フルコース・オプション）

【日程】2017年2月22日（水）13:30～17:30

【場所】東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟 101 CAHE ラウンジ

【概要】カリフォルニア大学バークレー校における海外他大学訪問調査の事前学習として、海外の実践から学ぶ意義、アメリカの高等教育のしくみについて講義とディスカッションを行った。また、出発前案内として、旅程、日程の確認、危機管理と質疑応答を実施した。なお、本オプション参加者には、「バークレー研修前メールマガジン」（資料編 A-22 を送付して、研修前の情報共有や知識提供に活用した）（フルコースオプション参加者対象セミナー）

### 【タイムテーブル】

13:30-13:40	はじめに
13:40-14:10	「なぜ我々は諸外国から学ぶのか」 大学教育支援センター長 羽田 貴史 教授
14:10-14:20	質疑応答
14:20-14:30	休憩
14:30-15:10	「アメリカの学士課程教育は日本と何が違うのか」 東北工業大学 教職課程センター 中島 夏子 准教授
15:10-15:20	質疑応答
15:20-15:50	ディスカッションとまとめ
15:50-16:00	まとめ
15:50-16:00	質疑応答
16:00-16:10	休憩
16:10-16:30	バークレー研修についての出発前確認 大学教育支援センター 稲田 ゆき乃 コーディネーター
16:30-16:45	海外渡航に際しての危機管理 大学教育支援センター 岡田 有司 准教授
16:45-17:10	バークレー研修のプログラムの概要について 大学教育支援センター 今野 文子 講師
17:10-17:30	質疑応答

### 【講演資料】（抜粋）

<h4>本日の内容</h4> <p>&lt;日米の大学の6つの違い&gt;</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 学士課程教育の目的が違う</li> <li>2. 入学の仕方が違う</li> <li>3. 専攻の決め方が違う</li> <li>4. カリキュラムが違う</li> <li>5. コースの進め方が違う</li> <li>6. 単位あたりの（実際の）学習時間が違う</li> </ol>	<h4>1. 学士課程教育の目的が違う</h4> <table border="1"> <thead> <tr> <th>日本</th> <th>アメリカ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>●「国家/重要二応スル學術技藝ヲ教授」する帝国大学が起点</li> <li>●学士課程は専門教育の場。 <small>【大学設置基準】 第十九条 各 専攻課程の修成に當つては、次号は、学部の設置目的に適合する程度に、相當の専攻課程の修成に當つての専攻の修成、專攻の修成を修成するものとする。</small></li> <li>●大学院は専門教育を高度に発展させる場。</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>●全寮制のカレッジが起点</li> <li>●学士課程は教養教育（Liberal Education）の場。教養ある人物（Educated Man）の養成を行う。</li> <li>●大学院は職業/専門教育（Professional Education）の場。</li> </ul> </td> </tr> </tbody> </table>	日本	アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>●「国家/重要二応スル學術技藝ヲ教授」する帝国大学が起点</li> <li>●学士課程は専門教育の場。 <small>【大学設置基準】 第十九条 各 専攻課程の修成に當つては、次号は、学部の設置目的に適合する程度に、相當の専攻課程の修成に當つての専攻の修成、專攻の修成を修成するものとする。</small></li> <li>●大学院は専門教育を高度に発展させる場。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●全寮制のカレッジが起点</li> <li>●学士課程は教養教育（Liberal Education）の場。教養ある人物（Educated Man）の養成を行う。</li> <li>●大学院は職業/専門教育（Professional Education）の場。</li> </ul>	<h4>2. 入学の仕方が違う</h4> <table border="1"> <thead> <tr> <th>日本</th> <th>アメリカ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>学部/学科に入学する。</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>大学/学部(School)に入学する。編入学(Covert)が一時的に行われる。 <small>(e.g. @Berkeley, 600 Freshmen, 200 Transfer Students)</small></li> </ul> </td> </tr> <tr> <td> <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センター試験</li> <li>・学部単位の筆記試験</li> <li>・近年ではAO入試も増加</li> </ul> </td> <td> <p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校の成績（AP Course）</li> <li>・SAT、ACTなどの適性試験</li> <li>・課外活動やボランティアの実績</li> <li>・大学進学理由を述べたエッセイ</li> <li>・推薦文</li> <li>・構成員の多様性</li> </ul> </td> </tr> </tbody> </table>	日本	アメリカ	<ul style="list-style-type: none"> <li>学部/学科に入学する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学/学部(School)に入学する。編入学(Covert)が一時的に行われる。 <small>(e.g. @Berkeley, 600 Freshmen, 200 Transfer Students)</small></li> </ul>	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センター試験</li> <li>・学部単位の筆記試験</li> <li>・近年ではAO入試も増加</li> </ul>	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校の成績（AP Course）</li> <li>・SAT、ACTなどの適性試験</li> <li>・課外活動やボランティアの実績</li> <li>・大学進学理由を述べたエッセイ</li> <li>・推薦文</li> <li>・構成員の多様性</li> </ul>
日本	アメリカ											
<ul style="list-style-type: none"> <li>●「国家/重要二応スル學術技藝ヲ教授」する帝国大学が起点</li> <li>●学士課程は専門教育の場。 <small>【大学設置基準】 第十九条 各 専攻課程の修成に當つては、次号は、学部の設置目的に適合する程度に、相當の専攻課程の修成に當つての専攻の修成、專攻の修成を修成するものとする。</small></li> <li>●大学院は専門教育を高度に発展させる場。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>●全寮制のカレッジが起点</li> <li>●学士課程は教養教育（Liberal Education）の場。教養ある人物（Educated Man）の養成を行う。</li> <li>●大学院は職業/専門教育（Professional Education）の場。</li> </ul>											
日本	アメリカ											
<ul style="list-style-type: none"> <li>学部/学科に入学する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>大学/学部(School)に入学する。編入学(Covert)が一時的に行われる。 <small>(e.g. @Berkeley, 600 Freshmen, 200 Transfer Students)</small></li> </ul>											
<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・センター試験</li> <li>・学部単位の筆記試験</li> <li>・近年ではAO入試も増加</li> </ul>	<p>【評価方法】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・高校の成績（AP Course）</li> <li>・SAT、ACTなどの適性試験</li> <li>・課外活動やボランティアの実績</li> <li>・大学進学理由を述べたエッセイ</li> <li>・推薦文</li> <li>・構成員の多様性</li> </ul>											

### 【当日の様子】



羽田先生による講義



中島先生による講義



熱心に話を聞く参加者

### 【参加者の声】（抜粋）

- 日本の大学制度は、海外の先進事例の良いところを取り入れて実施されたものであるということがわかりまし

た。この先進事例をモデルとして取り入れる手法のメリットとしては、後発効果による効率的なイノベーションがあります。しかしながら、デメリットとしては、先進事例ばかりに目が行き、模索の努力と方法論が身につかないということがわかりました。羽田先生は、現在の日本は、単に先進事例を真似るだけではなく、独自の大学制度を創出していくことが重要だとおっしゃっていました。また、海外の大学を理解することで、これからの日本の大学で起きることを予測することができると羽田先生はおっしゃっていました。具体的には、アメリカの大学の状況を見ると、日本では、今後、外国人学生の拡大、発達障害学生、LGBT、宗教・多文化、高額授業による破産などの問題が起こってくるのではないかと、羽田先生はおっしゃっていました。現在、私は、障害者理解の研究を行っておりますが、大学における発達障害学生は増えており、その対応を大学でも行っております。東北大学でも特別支援センターなどを設けて発達障害者の対応などをおこなっております。日本の大学だけを知るのではなく、海外の大学の状況を知ることとは大変大切なことだと思いますので、パークレー研修では、Disabled Student's Program がどのように展開されているかを、しっかりと学ぶことが重要だと改めて思いました。羽田先生の授業でもあったように、大学の制度などを、基盤から理解することで、幅広い視野を持つことができ、日本の大学にも貢献することができると考えました。(PFFP フル)

- 中島先生からは、日米の大学の違いについて、「学士課程教育の目的が違う」「入学の仕方が違う」「専攻の決め方が違う」「カリキュラムが違う」「コースの進め方が違う」「学習時間が違う」という6つの観点から授業をおこなっていただきました。その中でも、印象に残っているのは、専攻の決め方がちがうということです。具体的には、日本は組織帰属主義で、自分が所属する学部、学科の科目を履修し、アメリカでは、プログラム主義と呼ばれるもので、専攻要件をみたすように科目を履修することや、複数専攻等の選択肢がある点で異なるという点です。アメリカの大学では、既修条件で統制されるため、単位が厳格に決められており、テスト方法なども明確に示されているような印象を受けました。しかしながら、日本と違い、研究室などは無いようで、専門の教授とも、大学4年間で、面会する機会も無い人もいるということでした。日本の大学では、専門家を育成しているのを目的とし、アメリカの大学では、リベラルアーツを重要としている印象を受けました。アメリカの場合は、専門的な学習というのは、大学院に入学してから行われるということを知りました。また、今回海外研修で訪問するパークレーの教室についても、中島先生から紹介がありましたが、映画館のように非常に大きい部屋で実施されるということがわかりました。また、大規模の授業は、教授が行い、小規模のGSIは大学院生(TA)が実施しているということでした。今回の海外研修では、GSIにも訪問する予定ですので、どのように授業展開をおこなっているかをしっかりと勉強できればと考えております。海外研修では、施設などのちがいのもちろん、勉強になるかと思いますが、大学での生徒の様子などもしっかりと把握していきたいと思えます。(PFFP フル)
- 羽田先生の講義の中で印象的だったのは、相違点がさまざまある一方で、両国の共通点もあるという点であった。今回は比較を通して自分の組織の問題点をクリアにできれば、と考えていたが、それだけでなく、同じような悩みの中から、先生方がこらしている工夫を伺うことも十分できるのだという気づきがあった。特に、アカデミック中心のカリキュラムから職業志向へという話は、コースの教員で会議をするたびに話題にあがる点であった。特に、心理士の国家資格化を控え、この傾向は強まるのが予想されている今、研究大学としての東北大学の心理部門が今後どうあるべきか、ということについては、なかなか結論が出ずにいる。現地では、大学附属のクリニックの先生にお会いし、学内外での臨床研修の体制を伺うとともに、臨床と研究をどのようにバランスを保っているのか、ということについて伺いたいと考えているが、日米では資格取得に至る過程も違えば、資格取得後の社会的地位も異なるため、学んだことをどう持ち帰ることができるか、という点については、正直悩んでいたところだった。しかし、昨日の講義を受け、アメリカでも同様の問題が生じている可能性も十分考えられるということがわかったので、そういった視点でのディスカッションが深められれば、と思った。パークレーは、地域における研究大学ということで、東北地方で心理の博士課程を有する東北大と立場としては共通する部分も多いように思われるため、学んだことを活かせる部分もいろいろとあるのではないかと期待したい。資格取得までの流れについてはある程度勉強したが、まだ不十分な点があるため、残りの時間でさらに情報収集につとめたい。また、日本の心理の国家資格化を含む現状について、きちんと英語で説明ができるよう、準備しておきたいと思う。質問したい部分の議論を深めるためには、日米それぞれで定められる実習時間など、カリキュラムの違いや類似点についても、事前に可能な範囲で整理しておきたいと思った。現在立場上、学部学生に関わるのはゼミ生の指導が中心で、講義を担当する機会はほぼ大学院に限られている。そのため、米国の学部教育についてはあまりきちんと調べていなかったため、中島先生の講義は大変勉強になった。フィールドワーク以外の時間は学部教育に関する内容がほとんどだと思うので、講義で得た知識を自分の中で整理し、授業参観やGSIとのディスカッションに臨みたいと思う。卒論がなく、指導教員という概念もない、というのは正直かなり驚きだった。大学院に進学しても、最初の2年程度はゼミという概念はほぼないので、今の自分の仕事の中心を占めているゼミ生の指導という関わりがD生に限られる状況というのはとても新鮮であった。(NFP フル)

## 東北大学図書館ツアー（フルコース・オプション）

【日時】2017年2月24日（金）10:00～12:00

【会場】東北大学 川内南キャンパス 図書館

【概要】東北大学図書館の協力のもと、本学の図書館の理念、サービス内容について講義を受けるとともに、ラーニングコモンズ、二号館、狩野文庫などの見学を実施した。フルコース参加者のうち、希望者の他、プログラム修了生、高度教養教育・学生支援機構の教員などの参加もあった。

### 【タイムテーブル】

10:00～10:30	東北大学の図書館について
10:30～12:00	図書館見学、質疑応答

### 【当日の様子】



見学の様子



## 「比較の目を育てる」海外他大学訪問調査（フルコース・オプション）

【日程】2017年2月27日（日）～3月5日（日）

【引率】岡田有司 准教授, 今野文子 講師

【概要】カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパス見学や授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行った。また、大学院生で Graduate Student Instructor（いわゆるティーチングアシスタント、GSI）のトレーニングを行っている GSI 教育研究センターの講師陣と共に、バークレーの教育制度や GSI 制度などについて議論を通して学んだ。

【タイムテーブル】

### Monday 27 February

09:00-09:30	Welcome and introduction to the program	Linda von Hoene Sabrina Soracco
09:30-10:00	Teaching and Learning at erkeley	Linda von Hoene
10:00-11:30	The Basics of Teaching	Linda von Hoene
11:30-12:30	Lunch	
13:00-14:30	Campus Tour	
15:00-17:00	Fieldwork, meetings with faculty	

### Tuesday 28 February

09:00-11:00	Observation: The Politics of Educational Inequality (being finalized)	Lisa Garcia Bedolla
11:00-12:30	Workshop: Fostering Student Participation; Fieldwork, meetings with faculty	Michel Estefan
12:30-13:30	Lunch	
13:30-14:30	Student Learning Center	Cara Stanley
15:30-17:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (Lecture)	Prof. David Presti

### Wednesday 1 March

09:00-10:00	Observation: Politics of Educational Inequality (GSI section)	Noah Katznelson
10:00-11:00	Debriefing of Day 2	Linda von Hoene
11:00-12:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (GSI section)	GSI
12:00-13:00	Lunch	
13:00-14:00	Fieldwork, meetings with faculty	
14:00-15:00	Observation: Politics of Educational Inequality (GSI section)	Noah Katznelson
16:00-17:00	Observation: Brain, Mind, and Behavior (GSI section)	GSI
17:30-19:30	Graduate Student Social Event	

### Thursday 2 March

9:00-9:30	Overview of Day's Program; Debriefing of Day 3	Linda von Hoene
10:00-11:00	Fieldwork, meetings with faculty	
11:30-13:00	Lunch with GSIs	
13:00-17:00	Observations, fieldwork, meetings with faculty; discussions with GSIs; prep for final projects.	

### Friday 3 March

09:00-09:30	Overview of Day's Program	Linda von Hoene
-------------	---------------------------	-----------------

10:00-11:30	Professional Standards and Ethics Workshop	Linda von Hoene
11:30-12:30	Lunch	
12:30-14:00	Preparation for Presentations	
14:30-16:30	Presentations	
16:30-17:00	Completion Ceremony	
17:00-18:00	Closing Reception	GSI Center

### 【研修の様子】



講義の様子



他己紹介の様子



授業参観の様子



学習支援センターCara センター長



ディスカッションの様子



参加者集合写真



ゲストハウスからの眺め



プレゼンテーションの様子



修了証授与

### 【活動全体について】

2016年度のパークレーでの研修は、2015年度のプログラムで位置づけの見直しを行い、「海外他大学訪問調査」としてフルコース参加者のオプション項目での実施という形式を継続するかたちをとった。その結果、PFFPフルコース参加者から1名、NFPフルコース参加者から3名、2015年度に参加が叶わなかったPFFPフルコース修了生1名が参加した。内容についても、2015年の内容を引き継いで実施することとし、授業参観の対象については、なるべく文理両分野から1科目ずつ設定できるようにパークレー側に依頼した。

### 【フィールドワーク（研究者訪問）】

例年通り、参加者には自分の専門分野に関係する研究室などを積極的に訪問するよう呼びかけた。事前に訪問を希望する研究室や大学教員を探し、自分の研究テーマを含めた自己紹介、訪問理由を英文で執筆し、アポイントメントをとった。例年同様、これらのプロセスを通して、他大学の大学教員へのアポイントメントの取り方、英語による自己紹介、訪問理由の書き方の一連の流れを体験してもらうことができた。また、研究室訪問のみにとどまらず、授業参観についても積極的にアポを取って実施するよう促した。

## 【参加者の声】(抜粋)

- 率直に、海外の教育に触れ学ぶ機会がやってくるなんて想像もしていなかった。UC Berkeley での日々は教育を考えていく上でかけがえのない経験となった。身に飛び込んでくる光景は私にとって何もかも新鮮で、イマジネーションを掻き立てるものだった。私は、現在博士課程に在籍しており、まだ教員として働いた経験はない。その「まだ教員として働いた経験はない」や「自分は教員ではない」という少しばかりの思いがとてもナンセンスであることを痛感させられたのは、現地での GSI との出会いからだった。GSI のセミナーやセッションに参加した際に、私は「Faculty の方々ですか？」と質問してしまった。それほど、GSI は Graduate student には見えなかった。なぜか。それは、GSI が楽しそうに、そしてアグレッシブに教育について語り、取り組んでいた姿と、彼らが沢山の時間を授業準備にかけているという語りを、身をもって経験したためである。これほどまでに教育について考えるという環境は、未だ大学にいて経験したことのないものであった。理論的に理解する機会もあった。Bloom's taxonomy や integrated courses など、実践を形式的に表すことも必要である。GSI セッションでは、レポートのテーマを事前に学生同士でディスカッションさせて考えをぶつけていた。学生のキャラクターに合わせて指導案を変えたり、自分の経験を話すことで学生の関心を引き出したりしていた。TA とは何か？ということについては、少なくとも私はこれまで改まった場で教えてもらったこともないし、諸先輩から聞いたこともない。博士課程で東北大学に来て初めて、「TA はね、サポーターじゃないです。自立した教員としてみられます。」と TA のあり方について指導を受けたことが記憶に新しい。TA という名ばかりだけでなく、そもそも TA とは何か、TA 育成のための環境整備が必要だと感じた。学生への指導方法をめぐる GSI セミナー、Linda の倫理セミナー、あんなセミナーを受けてみたかった。比較の目という観点でいえば、これらの事象は、社会的背景の違いによるものであることは言うまでもない。しかし、日本と米国では根本的に違うからといってしまったらもともとももないとも思う。日本は、豊かだ、恵まれている、多民族国家でもないことから国籍が違うということはない。米国では、人種、gender、宗教、国籍など、多様性に満ち溢れており、それらが包摂されている。格差も顕在化している。街を歩けば、多くのホームレス、そして家族で路上生活を送っている姿を目の当たりにする。様々な要素が教育に影響しているし、教育は様々な社会的事象を生成している。そんなダイナミズムに、街を歩いている時間、キャンパス内を歩いている時間、食事をしている時間、日々の生活の中で触れた。日本はそうではないかと言われると、日本にも多様性や格差は存在する。いわゆる方言や特有の食文化が存在するように、人々が暮らすエリアによっていわゆる関西人などのキャラクターがあり、多様である。私は、学位ごとに大学が異なるため、地域による違い、大学による違いを感じるからである。また、最近では、勝ち組、負け組、子ども食堂など食事を家庭でとれない子どもが増えているなど、格差が生じている。Student learning center では、これらの現代社会の色がとも現れているなという印象を受けた。発達障害を抱える学生へのサポート、LGBT の学生、母子・父子家庭の学生、国籍のない学生など、様々な学生のサポートを行っていた。これらは、教育における倫理的側面にも影響するが、多様性を理解し、包摂、対応する力が求められると考えさせられた。教育は社会と表裏一体であることを痛感した。このような背景の中で、どのように community building をしていくかというのも重要なテーマだと感じた。(PFFP フル)
- はじめての海外の大学での研修は、非常に興味深いものでした。その中でも、特に印象に残ったことを下記に記述します。GSI が実施する授業では、20人規模の授業であるが、多くの生徒がディスカッションやディベートに積極的に参加している様子を感じることができた。日本の学生の場合には、恥ずかしがったり、もじもじしたり、と反応があまり、よくないこともあるが、パークレーでは、各々が自分の意見を持ち、身振り手振りをういて、相手に自分の意見を伝えるように授業に参加していたように感じました。また、ディベートの内容も人種に関するような話もあり、これもまた日本とは異なるなと感じました。日本でも、ダイバーシティの重要なテーマとして扱われているが、障害者、最近では、ジェンダーの話は行われている印象であるが、人種については、あまり話す機会が無いように感じています。実際に私もパークレーで授業等を受けるまでは、人種についてはあまり、ピンとは来ておりませんでした。しかしながら、パークレーは、リベラルな地域ということもあり、様々な方が住んでおり、様々なバックグラウンドを持った方々が学校に通っています。そのため、自身の意見を行う際にも、相手側のバックグラウンドを把握していなければ、気づかないうちに傷つけている可能性があります。また、私は、日本の文化や歴史についてしっかりと勉強しておこうと思いました。海外に出た際に、日本の場合はどうだ？などと聞かれる機会は多くなると思います。日本の動向について興味を持っている人も多いと思います。そこで、しっかりと意見を言うことが必要だと考えました。さらに、自身で授業を持つことになった際にも、人種を含めた多様性を意識した授業展開を行っていかなければならないと感じました。実際に、パークレーで受けた倫理の研修では、ダイバーシティに重きをおいた研修を受けました。具体的には、授

業で、グループ分けをする際にも、学生のバックグラウンドを意識してチーム分けをしなければならないと感じました。日本では、ほとんどの学生は同じ人種（日本人）であることが多い為、あまり意識することはありませんが、海外の場合はそうはいきません。今後、日本に学びに来る海外学生は増えてくる可能性もありますので、ダイバーシティについて改めて考えなければならないと考えました。また、今回海外研修で訪問するパークレーの教室についても、中島先生から紹介がありましたが、実際にパークレーに行き、本当に映画館のように非常に大きい部屋で実施されるということがわかりました。そして、パークレーの授業では、数百人の学生を前に、授業を行っていました。私が参加した授業では、多くの学生が質問を教授にしていました。日本では、あまり見られない光景であり、私がイメージしていた通りのアメリカの大学での授業でした。また、質問に対しても先生は的確に、回答していたのが、印象的であった。やはり、日本同様に、授業の準備をしっかりとっているのだと感じました。さらに、クリッカーを使って授業を展開している先生や、途中で、授業に関するテレビ番組やネットの番組を活用することによって、学生が飽きることなく、授業に参加していました。私も実際に授業に参加してみようという間に授業が過ぎたような気がしました。また、ある先生は、授業の時間に5分程度瞑想の時間を取り入れていました。私も実際に瞑想することで、眠気などがとれて、瞑想後はさらに、集中して、授業に取り組むことができました。私も今後授業を持つことになった際には、学生が90分間集中して取り組めるような仕組みを考えていきたいと思えます。驚いたことに、パークレーの授業では、学生のほとんどがMAC pcを持ち込んでおり、先生の提示するスライドはもちろんのこと、先生が話している授業について、的確にメモをしていた。さらに、pcを持ち込んでいない学生については、メモするスピードが日本と比べてかなり、早い印象でした。非常に熱心に授業のメモを取っている印象を受けました。しかしながら、開始時間に遅れてくる学生が多いのは少し驚きました。実際にパークレーには、パークレータイムがあり、授業開始が開始予定時間の10分遅れで開始することが多いとのこと。少し気になったので、デブリーフィングの際に、リンダにどのように改善していくのか、と尋ねたが、明確な反応はありませんでした。日本のビジネス文化では、遅刻はあまり許されることではないのですが、他の国では、寛容である可能性もあるので、他国の文化を知ることは改めて重要だと感じました。単純にパークレータイムが良いということではなく、他の文化を知ることが重要だと感じました。(PFFPフル)本訪問調査において、“The Politics of Educational Inequality”と”Brain, Mind, and Behavior”のいずれも200人程度の大講義を2つ見学した。講義は教員毎の個性もあるため一概に国内と国外の比較が難しいところもあるが、明確に学生の授業姿勢及び教員の授業スタイルについて優位に異なると思った点があった。学生の授業姿勢について大きな違いを感じたことは、それが”多様”であることである。ある学生は一心不乱にノートを取り、ある学生はラップトップPCでSNSに勤しみ、ある学生はとにかく質問などの発言に力をいれていた。この背景には教員の授業スタイルについての国内外の違いが大きいと感じた。相対的に国内の授業ではできるだけ標準的な授業の受け方を提示し、それに沿うケースが多いと感じている。例えば授業参観をした常微分方程式入門でもそうだったが、多くの理科系の授業において、ノートに書いてほしいことはそれとほぼ同じフォーマットで黒板に書くことが普通になっている。私も高校でも模擬授業などをすると「生徒にノートにかいてほしいことが正確に同じフォーマットで黒板にかかっているか」を重要視されて評価された。また、仮にスライドを用いて授業をする場合は、そのスライドを学生がメモしやすいか、もしくは配布しているかということをよく一つの観点にされている。これはできるだけ多くの学生が授業についていけるような形にする上で、ある一定の形をつくることでできるだけ授業にのぞむ姿勢にとらわれない理解度を目指しているからだと考えられる。今回見学した授業はいずれもスライドを用いた授業だったが、どちらの授業のスライドもキーワードのみを羅列したもので、目的としては学生にそのスライドを読んだり確認してもらうというよりは、教員がその都度何の話をするかを忘れないためのメモ書きのようなものを感じた。そのため学生がその授業の内容を確認するためには何らかの形で記録に残す必要があり、その結果かなり多様な授業を聞くスタイルになっていると感じた。例えば近年東大で105分授業を導入しそれを皮切りに複数の大学が90分を超える授業時間を採用するようになってきているが、その背景に大学設置基準だけでなく授業内に復習をする時間(10分程度のミニテスト)を設けるという動機がよくきかれるようになってきている。これもある意味では授業における学生の最低限の理解度を担保しようという取り組みであるが、Berkeleyにおいてはこのような細やかな教育的配慮についてはGSIシステムにゆだねて、その分授業は自由な思想で取り組んでいると感じる事ができた。また、学生の姿勢として「積極的な質問」というのも印象的だった。これは今回BerkeleyでGSIの学生や教員等に聞いた限りでは授業の構成や運営が適切であるからと説明されていたが、国内において同程度以上に授業が上手く回されている先生の授業でさえその限りではないと感じており、Berkeleyに入学時点での学生の特徴があるとしか考えられなかった。一つの仮説として考えられるのは国内外における中等教育の学生違いである。例えば日本でも小学校の授業を参観してみると、差はあれど一定数積極的に授業内で質問などの反応を行う学生がいるが、中学、高校と上がった段階でその数は一気に減ると感じている。その背景には初等教育から中等教育への学びの転換としてできるだけパッシブな授業が増える(小学校では調べ学習やディベート等が相対的

に多い) ことが考えられる。一方以前オーストラリアにおける中学校教育に触れたときはかなり自由度の高いレポート課題等が多く、その学びの転換がまた異なる形であると感じることができた。Berkeleyも多様な文化圏から学生を受け入れているが、その結果一部の生徒について非常にアクティブな授業の受け方が背景となる中等教育からあるのではないかと感じた。(NFP フル)

- 研修が始まるまで、海外での研修に対する強い抵抗や不安があった。しかし、初日に行われた最初のワークショップで Linda から、英語力を気にせず積極的に参加を、とのお話があり、かなりハードルが下がったように感じた。また同時に、同期メンバーたちが常に主体的に質問や発言を述べたり、空き時間に積極的に会話を持ちかけたりする様子は、何よりの刺激になった。初日に英語に対する抵抗が取り払われたおかげで、聞きたいことを聞き、言いたいことを言い、ほぼ何も我慢することなく過ごすことができ、この 5 日間をむだにせず済んだように感じている。ここでの体験が本当に楽しく充実して、自分にとって肯定的なものとなったということは、おそらく今後のいろいろな機会での自分の姿勢を変えてくれるものと考えている。少なくとも、今の時点で、今年の夏にある国際学会を楽しみにできていることは、研修前には想像もできなかったことである。また、「聞きたいこと／伝えたいことがある」ことの大切さも実感するところだった。自分自身の関心が高まることで、聞きたいあるいは伝えたいという気持ち、うまく伝えられるかという不安を上回っていたように思う。今回、事前にパークレーや GSI について調べたり、オンラインで公開されているパークレーの心理学の講義動画を見たりすることに極力時間を割くようにしていた。フィールドワークについては正直なところ準備の時間が足りず、毎回前夜に行う自転車操業のようなかたちになってしまったが、質問したいことを英語で整理したり、日本の状況を説明する練習をしたり、web 上で調べられることは調べて質問の時間を省けるようにしたりと準備をしていった。事前に丁寧に準備をすることで、自分の中で知りたいことが整理されたり、焦点がしぼられたりし、その結果、限られたワークショップの中で特に知りたいことに優先順位をつけて質問したり、ディスカッション自体が構造化されて相手との疎通がよくなったりし、ストレスの少ないコミュニケーションをとることができていたように思う。Dr. Sheri を尋ねた際には、事前に質問事項を送っていたことで、聞きたいと思っていたことの大半の回答になる資料を用意していただいた。そのため、事前に用意した質問はほぼ役に立たなかったのだが、準備の過程で関心が高まっていたおかげで、追加の質問やディスカッションも自然と発展させることができた。アポ取りを開始する頃から、事前準備の必要性を強く説明してくださった先生に大変感謝している。また、おそらくこれは英語に限ったことではないと思うので、今後もこうした姿勢を継続していきたいと感じた。最後に、研修期間を通じて、同期たちと一緒に過ごした時間は、本当にかげがえのないものだった。各自が明確な目標や問題意識、そして高いモチベーションをもち、今回の研修に望んでいた同期の姿は、研修期間中常に刺激を与えてくれた。年齢や職位を超えておそらく互いにライバル視も牽制もしあっていたらうと感じている。それでいて、互いの話をいつも本当に一生懸命聞き、もらさず吸収しようとし、全く異なる互いの個性を認め合い、ほめ合うこともできていたと思う。尊敬できる相手だからこそ、そうした関係はとても自分の支えになるものだった。毎夜同じ部屋で、なぜか離れた席で、それぞれの仕事をしながら、それでも途中で途中で教育や研究の話をしあった時間は、いつも新しい世界を見せてくれた。違う領域、違う立ち場であるだけでなく、今に至るまでに大学以外の場で多様な経験を重ねて来ている同期たちの経験は、自分の世界や辞書になかった様々な知識や考え方や文化を教えてくれた。自分が当たり前だと思っていたことを話すとおどろかれ、その逆もまたそうだった。何時間話しても飽きることはなく、知りたいことはどんどん増えていった。また、日中同じものを見て、同じものを体験しているはずなのに、そこから得たものや気づいたことは、人によって様々に異なっており、1 日の振り返りを共有することで、互いにまた新たな気づきを得ることができていたようにも思う。他人の目を入れること、人と話すこと、ひとりで考えたり決めたりしないこと、自分の知っているものを当たり前だと思わないこと、そうしたことの大切さを、改めて実感する機会にもなっていた。そしてそんな話をする彼らがいつも本当に楽しそうだったこともまた、この 1 週間の間、自分の支えになっていたし、今後やりたいことや希望もたくさん増やしてくれた。彼らがしている、あるいはしたいと考えている様々な教育のあり方は、自分自身もまた真似してみたいと思うものだった。決して必要以上に近づくことはなかったが、これだけ短い期間で、これだけ強い影響を与えてくれた関係性はおそらくこれまでの人生で初めてで、いわゆる「仲良し」とは少し違うものの、とても大切な同志、仲間を得ることができたように感じている。おそらく修了すればもう全員が集まることはないだろうと思うので、このメンバーで過ごす期間も残りわずかだが、残りの期間、同期たちとの関わりも今まで以上に大切にしていきたいと感じている。(NFP フル)



## 先達コンサルテーション

【日時】2017年3月14日（水）13:30～16:30

【会場】東北大学 川内北キャンパス 合同研究棟 A303, A304, A305, A306

【概要】先達教員による個人コンサルテーションを実施した。先達教員一人につき4名の参加者と30分ずつ面談する構成とした。先達教員には、事前に担当する参加者名を通知した。また、参加者のプロフィールとリフレクティブジャーナルからの抜粋を掲載した「カルテ」を配布し、参加者が置かれている状況や課題意識について先達が簡便に情報を得られるようにした。

### 【タイムテーブル】

13:30～13:40	はじめに
13:40～14:10	コンサルテーション①
14:10～14:40	コンサルテーション②
14:40～14:50	休憩
14:50～15:20	コンサルテーション③
15:20～15:50	コンサルテーション④
15:50～16:30	全体ディスカッションとまとめ

### 【当日の様子】



コンサルの様子



コンサルの様子



休憩中の参加者

### 【参加者の声】（抜粋）

- 次のような疑問を旨に、先達コンサルテーションに臨みました。第一に、高校と大学との講義のギャップ及び重複に対して、先達の先生方はどのように対処をしているのかということ、第二に、学生の理解度のフィードバックをどのように得、成績評価をどのようにしているのか、ということです。第一の疑問に関しては、ギャップに関しては、例えば薬学の授業では高校で生物学をそもそも履修していない学生もいるので、そのような学生にも配慮して基礎から教えるということでした。また、高校と授業内容が重複している場合では、大学の授業では、高校ではあまりお目にかかれない実物の写真を用いた授業をすることなどにより、大学ならではの講義をすることで学生の興味を惹くような工夫をすることでした。高校と同じような授業内容でも、資料や講義方法を変えることで、大学で学ぶ面白さを伝える余地が多くあることを実感しました。第二の疑問に関しては、学生の理解度を測るうえで、中間試験が重要であることを改めて感じました。また、成績評価に関しては、出席を評価すると、授業の終わり間際に参加して、出席したことにするなど不届きな学生も現れるのでなかなか評価が難しいとの意見を聞くことができました。また、レポート課題だと同じような文章のレポートが提出されるので、テスト評価とレポート課題の選択制に変更したとの意見もありました。このように、現場を経験している先達の先生方からリアルなコメントが聞けたことは、大変勉強になり、非常に有意義な時間となりました。（PFFP フル）

- 3月14日の先達コンサルテーションでは、4名の先達の先生方々に魅力的な授業を展開していくうえで、様々なアドバイスをいただきました。4名の先生方に共通していたのは、自身の授業に対して、学生の評価をしっかりと把握するという点でした。アンケートなどを通じて、学生の反応を把握することはもちろんのことですが、実際の授業している際に、学生の様子をしっかりと把握している点でした。学生の意欲を継続させるために、常に工夫している先生もおられ、その先生は、いつも工夫していることが成功するわけではないとおっしゃっていました。しかしながら、全員が満足する授業を目指しておりました。私も、今後、授業をする機会がありましたら、下準備をしっかりと行い、学生の意欲を継続させることができるような授業を展開していきたいと思いました。また、パワーポイントが主流になりつつある中、板書で授業を行っている先生がおりました。板書の場合は、進むペースはパワーポイントと比較すると、速くはないが、図を書く際に、説明しながら進めることができ、また、先生が書くスピードに合わせて学生も板書できるという点で、学生の理解度が高まるとおっしゃっていました。私もPFFP研修の模擬授業で、板書にチャレンジしようかと考えておりましたが、実際に準備していると非常

に難しいと感じました。特に、板書での授業での経験がないために、板書している間に教室が静かになることが耐えられないと考えておりました。その先生に板書する際の工夫を聞いたところ、長年実施してきた経験があるために、特に問題ないとおっしゃっておりました。改めて、経験を積むことが大事なことだなと感じました。私は、現在、社会人学生として、博士課程後期に通学しておりますが、今後、機会があれば社会人をしてながら非常勤での授業の実施や、1コマでもいいので、授業を行う機会を作っていかなければならないと感じました。なぜならば、これまで PFFP で学んだことを実践していくことが経験となり、自分の力を伸ばせるのではないかと考えているからです。実際に、コンサルテーションしていただいた先達の先生方に、社会人をしてながら、非常勤をするケースはあるかと聞いたところ、そういった事例は聞いたことがあるとおっしゃっておりました。また、非常勤の募集については、基本的には公になっているが、人間関係なども重要だとおっしゃっておりました。そのため、自身の指導教官にも相談しようと思いました。今回のコンサルテーションでは、4名の先生方が年度末のお忙しい時間中、時間を作っていただいたにも関わらず、非常に親身になって、相談を聞いてくれました。また、4名の先生方は、どのようにしたら、良い授業を展開することができるのかを常に考えているような印象を受けました。私もこのような貴重な機会に参加し、アドバイスを受けたところを実践していくことはもちろんのこと、将来的には、後輩育成できるように日々精進していきたいと思っております。指導教官以外の先生方にコンサルしてもらうということは非常に良い機会となりました。改めて PFFP に参加することで自身の視野を広げることができました。(NFP フル)

- もうすぐ新学期が始まるということで、焦っている私なので、先達方には、授業の具体的な運営に関する質問と悩みばかり投げかけてみた。非常勤先の私立大の学生から、授業でもっとディスカッションをしたかったというご要望があった。But、ディスカッションをどうセットアップすればいいか、盛り上がらなかったらどのように盛り上げればいいのか、そして、評価をどうすればいいかなど、分からないことばかりの私である。そこで、先生方から多くの具体的ご助言をいただいた。トッド先生からは、3-4人のグループが、人数的にいいという助言。そして、グループの中で、それぞれの学生の役割を決めることよい (leader, note-taker, pace-maker など)。これまでの授業で、グループ・ワークやペア・ディスカッションをさせたら、全く関係ない話 (部活や飲み会・・・) で盛り上がるグループもあったが、どうすればそういうのが防げるかと聞いてみたら、mixing students up (同じ学部・学年の学生をできるだけ一緒のグループにしない、毎回、前回とかぶらないように、あらかじめグループを決めておくなど) が効果的なものかもしれないという助言をいただいた (また、邑本先生は、男性が多いクラスだったら、女性をリーダーとすると、うまくいく、という大変興味深いことを言ってくださった)。(NFP フル)
- 7月からの NFP での様々な体験と、この1年間の教員としての体験を通し、先達の先生方に伺ってみたいと思っていたのが、教員としての基本的なスタンスとして、「平等であること」と「個々の学生に合わせること」との間でどのようにバランスをとるのがよいのか、ということであった。この点について、個別の学生指導と講義という2つの場面それぞれについて、1年を通して考えてきたものの、自分の中ではなかなか答えが見出せず、ぜひいろいろな人の観点からこのテーマを考えてみたいと思っていた。まずこのことについて、個別の学生指導という視点から話を伺った。現在のポジションでは、学部生を対象とした講義は業務の中に占める割合がかなり少なく、大学院における少人数の講義と、個別の学生指導が業務の中心になっている。そのため、個別の学生指導は自分にとってもっとも優先度の高い課題でもある。具体的に、この1年の中で特に悩んだのは「私何をやらいいですか？」と尋ねてくる学生への対応だった。卒論や修論のテーマを考える段階で、自分なりの案を持たず、教員に丸投げされたとき、どう答えるのが良いのか、迷い続けてきた。できるだけ学生に主体的に考えてもらえるよう、質問を重ねて学生自身の興味関心を洗い出す作業と一緒に重ねたり、ヒントになりそうな文献を紹介したりするよう心がけてはいた。ここではコーチングのワークショップで習った質問のスキルなどを取り入れてみるなどの工夫もしてみたつもりだった。しかし、卒論や修論というものの特性上、時間的な制約があり、最終的にこちらからテーマを提案するような場合も出てきてしまっていた。学生の能力やモチベーションに合わせた個別対応という捉え方もできるだろうが、一方で、学生同士が受けた指導について情報交換をすれば、人によって結果的に要求水準や対応が異なっていることがわかってしまう、というところで平等な指導ができていないということにもなるのではないかと、という葛藤を抱えながら指導にあたってきた。この疑問や葛藤を、今回先達の先生方に伺ってみた。まず、先生方が口を揃えておっしゃったのは「それは本当に難しい課題だ」ということだった。豊富な経験をおもりの先生方がそうおっしゃるのを聞き、このことについて今後も継続して、またケースバイケースで考えていきたいと感じた。同時に、具体的な助言もたくさん得ることができた。先生方が共通して助言してくださったこととしては、基本的にはやはり学生の主体性を引き出す関わりをすることが望ましいということだった。(NFP フル)

## 成果報告会／修了証授与式

【日時】2017年3月23日(木) 13:00～16:00

【会場】東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟 101 CAHE ラウンジ

【概要】PFFP, NFP 各参加者によるプレゼンテーションの後、プログラム OB や先達らとの質疑応答を行った。これまでの活動の様子や報告の内容に関して、先達教員からのコメントを受け、全ての活動の修了とした。その後、羽田貴史大学教育支援センター長より修了証が授与された。

### 【タイムテーブル】

13:00～13:05	はじめに (羽田貴史 大学教育支援センター長)
13:05～13:15	これまでのプログラムのあゆみ
13:15～14:00	PFFP 参加者によるプログラム成果報告 (各 15 分 : 10 分報告 3 分質疑応答)
14:00～14:15	休憩
14:15～14:45	NFP 参加者によるプログラム成果報告 (各 10 分 : 7 分報告 3 分質疑応答)
14:45～15:30	先達, OB/OG, 列席者からのコメント
15:30～16:00	修了証授与式, 写真撮影

### 【当日の様子】



成果発表の様子



発表を聴く先達教員



集合写真

各発表の資料は、資料編 A-23, A-24 を参照のこと。

### 参加者最終課題レポート

フルコースプログラムの参加者には、例年同様、最終課題レポートの提出を義務付けた。レポート課題はプログラム応募の際に設定した課題と同じ内容とし、参加者にはプログラム参加期間中、課題を念頭に置いてリフレクティブ・ジャーナルを作成し、本課題レポートの執筆に役立てるように促した。従って、参加者は同じ課題のレポートに、プログラム応募時と全セミナー終了後の2回取り組んだこととなる。これには、自分が記述した内容を比較、省察することで、成長を実感してもらおうと同時に、自らの価値観を理解、表現してもらおうという意図がある。レポート課題は、大学院生向け、新任教員向けにそれぞれ以下のように設定した。

**PFFP**（大学院生向け）：「学生にとって、大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。」

**NFP**（新任教員向け）：「自分の授業や学生指導において、その質を高める（よりよいものにする）ための課題は何だと思えますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思えますか。」

提出された最終課題レポートは、資料編 A-25 に掲載した。

研修の評価指標開発のための先行研究調査

岡田佳子 (2015)「ソーシャルスキル教育実践のための導入的な教員研修プログラムの実施とテキストマイニングによる評価の試み」『日本教育工学会論文誌』39(Suppl.), pp.133-136.	
【目的】	ソーシャルスキル教育実践のための教員研修プログラムを実施し、プログラムの評価を行う。
【手法】	受講者の感想をテキストマイニングの手法を用いて分析。
【結果】	プログラムの目標を達成するためには身近な具体例や実際の体験を通じた理解が重要であることが示唆された。また、多くの内容を短時間に凝縮したり、大人数で実施したりすると十分なプログラムの効果が得られないことも分かった。1回の研修で全てを広く浅く網羅するのではなく、対象者と目標を絞ってプログラムをいくつかのユニットに分けて準備する必要がある。研修の効果検証のためには、質問紙による調査や、意欲が実際の行動の変化につながったかを行動指標によって追跡調査することなどが必要。
田中一孝ら (2014)「プレFD を通じた大学教員になるための意識の変化と能力の獲得」『京都大学高等教育研究』20, pp.81-88.	
【目的】	プレFD を修了した大学院生・オーバードクター (OD)・PD がプログラムを通じてどのような意識の変容を被り、またどのような能力を獲得するかを定性的に明らかにする。
【手法】	京都大学文学研究科プレFD プロジェクトに参加したOD 53 名を対象にアンケート調査を実施。プログラム全体について、リレー講義における講義、授業後検討会、事後検討会、グループ・全体ディスカッション、ミニ講義、ワークシートを用いた振り返りについて満足度とその理由を回答。自由記述調査で得られた記述から「～できるようになった」「～の意識が高まった」「～ということに気づいた」という記述を抽出し、類似している記述を分類し、カテゴリ名を付与。最後に得られたカテゴリをその特徴によって上位・下位に分類。
【結果】	「教育技術の向上」「知識の獲得」「教育者としての意識の向上」「研究者としての成長」の4つの大カテゴリーが得られた。
大山牧子ら (2013)「カード構造化法を用いた大学初任教員の授業省察」『日本教育工学会論文誌』37(Suppl.), pp.173-176.	
【目的】	カード構造化法を用いることで可視化される大学初任教員の授業省察の特徴と利用の限界を明らかにする。
【手法】	哲学と歴史学を専門とする大学初任教員2名を対象とし、カード構造化法を用いて、授業省察を可視化。
【結果】	カード構造化法によって促された授業省察は、大学初任教員にとって授業デザインへの意識の高まり、授業改善のための多様な短/長期的な課題を発見し、フィードフォワード情報へとつながることが確認された。カード構造化法は、大学初任教員の授業省察の可視化を促すツールとして機能する可能性を持つことが示された。同時に、効率的な実施方法の開発の必要性が明らかになった。
林素子ら (2012)「立命館大学における新任教員対象『実践的FDプログラム』の成果と展開」『教育情報研究』29(3-4), pp.25-36.	
【目的】	実践的FDプログラムの妥当性と有効性を検証する。
【手法】	各ワークショップ(全10件)終了時に受講生に対して事後アンケートを実施。15項目。加えて、受講が比較的良好(WS受講率50%以上かつオンデマンド講義受講率平均45%以上)な受講生20名を対象に「教授・学習支援能力」の6観点25項目の修得度を4件法で回答、10名から回答を得る。さらにプログラム未修了者22名に対して受講困難の理由等をアンケート調査(5名22.7%から回答を得る)。外部評価委員による評価も実施(口頭および書面)。
【結果】	修了生からの評価は概ね高い。特に「授業の質保証」「自己の専門性の継続的な発展」の項目で平均3.0以上。未修了生は主に時間調整のカテゴリを受講困難の主要因としていることがわかった。
木村優 (2015)「中学校の担任教師はスクールカウンセラーの活動をどのように生かしているのか」『教育心理学研究』63, pp.279-294.	
【目的】	中学校の担任教師が、生徒・保護者への対応において、スクールカウンセラーの活動をどのように生かし、その結果どのような体験をしているのかを担任教師の視点からボトムアップ的に把握する。
【手法】	半構造化面接によって16名の中学校教師にインタビューを実施。1~1時間半程度のインタビュー。「学級担任の立場で、1人または複数の生徒の問題に、スクールカウンセラーとやり取りしながら対応した経験について教えて下さい」と教示して質問項目に回答を求める。グラウンデッド・セオリー・アプローチ(GTA)を援用して分析。
【結果】	「担任のしづらい動きを担ってもらうことでゆとりを得る」「カウンセラーの情報や発言から生徒・保護者への理解を深める」「対応にあたってのガイドを得て判断の参考にする」「気持ちや考えへの保証を得て精神面の回復に役立てる」の4つに整理されることが示唆された。
香川秀太 (2012)「看護学生の越境と葛藤に伴う教科書の「第三の意味」」『教育心理学研究』60, pp.167-185.	
【目的】	学内から学外への状況間移動に伴い、学習者が両者間のいかなる緊張関係に置かれ、どんな社会的相互作用行為に関わり、何がどう変化していくか、学習過程を調査する。
【手法】	基礎看護実習に参加した看護学生2年生12名を対象に、実習期間終了後に半構造化面接を実施。一人当たり2回、各計2~3時間、全34項目。GTAを使用して分析。文字データを検討し、概念の作成→概念間の関係づけ→カテゴリ構成を実施。
【結果】	学内学習では教員の指導にかかわらず、ほぼ教科書通りの実践にとどまる。臨地実習では教科書知識を「現場の実践を批判的に見せるが柔軟に変更もすべき道具」とみなすように変化。これらの結果より、省察やリアリティ豊かな学習を促進する「越境知探究型の学習」を提案。



木村優 (2010) 「共同学習授業における高校教師の感情経験と認知・行動・動機づけとの関連」『教育心理学研究』58, pp.464-479.	
【目的】	授業における教師の感情経験と、教職の専門性として説明されてきた認知や行動、動機づけとの関連を検討する。
【手法】	高校教師 10 名を対象とした面接調査を実施。授業観察から教師の実践の特徴や生徒が示す行為を把握した上で、面接により授業中の感情経験を教師に尋ねる段階的な方法を用いた。半構造化面接を約 1 時間実施。質問は 6 項目。GTA を用いて分析。
【結果】	喜びや楽しさなどの快感情は教師の活力・動機づけを高めることで実践の改善に寄与し、さらに授業中では教師の集中を高めることで瞬間的な意識決定と創造的思考の展開を促進していた。一方、いらだちなどの不快感情は教師の身体的消耗や認知能力の低下を導くが、苦しみや悔しさなどの自己意識感情は授業後の反省と授業中の省察に結びつき、教師が実践を改善し、即興的に授業を展開するのを可能にしていることが明らかになった。

徳舛克幸 (2007) 「若手小学校教師の実践共同体への参加の軌跡」『教育心理学研究』55, pp.34-47.	
【目的】	若手教師が自らの教師としての実践、学習をどのように捉え、どのように学習していくのかという過程を検討する。得られた結果に基づき、教師の学習に関する若手小学校教師の認知に基づいた学習過程のモデルを作成する。
【手法】	教師歴 1 年目から 3 年目の若手小学校教員 11 名を対象に半構造化面接を実施。1 人当たり 45～90 分。教師になろうと思った動機は何か、自分は教師に向いていると思うか、自分にとっての理想の教師像とはどうであるか、職場での人間関係はどうか、どのようなことに困難や苦痛、もしくは良好であると感じているか、について回答を求める。得られたデータを修正版 GTA で分析。
【結果】	若手小学校教師は、教師として身につけるべきスキルや知識があると語る一方で、他の教師や児童、保護者、地域との相互交渉によって教師としての学習がなされると考えていることがわかった。そのため、「教師になる」とは、個人主義的に達成されるものではなく、社会的相互交渉によって社会的に達成されることが示唆された。さらに、学習の概念とは、従来の個人主義的な達成に加え、社会的達成物であることも示された。

# 全国プログラムユーズ会議

2016.12.26 MON - 27 TUE

宮城蔵王ロイヤルホテル



## 1. スケジュール

【1日目】 12/26 (月)	
11:00	東北大学 川内北キャンパス 川北合同研究棟 101 集合 顔合わせ
11:10	川内出発 (チャーターバスにて宮城蔵王ロイヤルホテルへ)
12:10	ホテル到着 (各自昼食をお取りください。3階ロビーが使用できます)
13:00	開会の挨拶 (羽田貴史 大学教育支援センター長)
13:05	PFFP/NFP の歴史
13:20	ユーズ会議の目的
13:25	話題提供 (各 15分 + 質疑 5分) ①PFFP2011 修了生 木内敬太さん ②PFFP2015 修了生 熊谷摩耶さん ③NFP2012 修了生 佐俣紀仁さん ④NFP2013 修了生 野地智法さん
14:45	休憩 (15分)
15:00	全体討論
16:00	まとめコメント
16:30	歴代開発・運営者からのコメント
16:50	閉会の挨拶 (大森不二雄 大学教育支援センター副センター長)
16:55	記念写真撮影
17:00	日帰り参加者帰宅, 宿泊者チェックイン, 休憩

## 2. 施設

**1階: 温泉, ショッピングプラザ**

**2階: 1日目 夕食会場 宴会場 “烏帽子”  
2日目 朝食・昼食会場 ダイニングルーム “四季”**

**\*温泉大浴場・ウツドアリ調露天風呂**  
入浴可能時間: 5:00-10:00 & 12:00-25:00(1:00am)

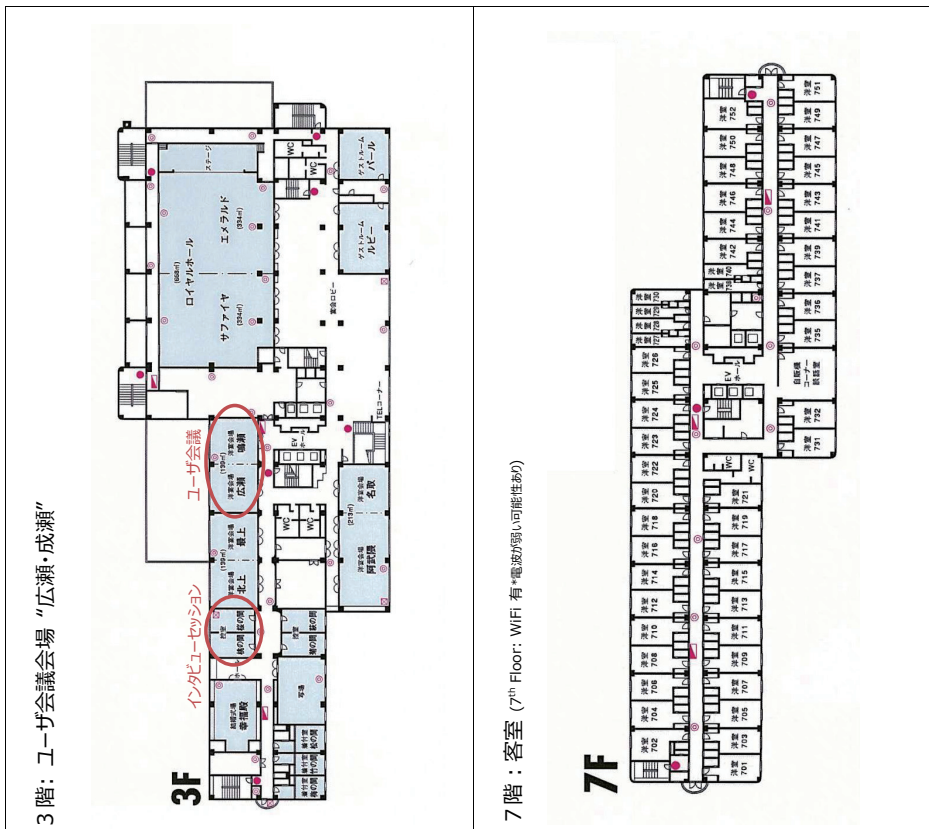
**\*ショッピングプラザ**  
営業時間: 7:00-21:00

17:15	インタビューセッション	桜の間 (岡田)	桃の間 (今野)	3F 桜の間
		17:15 野地さん	熊谷さん	3F 桃の間
		* インタビューのない方は自由にお過ごしください		
18:30	夕食会	2F 烏帽子		
	乾杯の挨拶 (杉本和弘 教授)			
20:30	懇談会	3F 広瀬・鳴瀬		
	~22:00 ごろまで			

<b>【2日目】 12/27 (火)</b>				
7:00-	朝食 (各自)	2F 四季		
9:00	インタビューセッション	桜の間 (岡田)	桃の間 (今野)	3F 桜の間
		9:00 陳さん	田村さん	3F 桃の間
		9:30 星野さん	中川さん	
		10:00	休憩	
		10:10	土田さん	森さん
		10:40 木内さん	吉良さん	
* インタビューの時間になったらディスプレイカクソンを抜けてください				
9:30	ディスプレイカクソン	3F 広瀬・鳴瀬		
	1日目にお寄せいただいたトピックに基づき議論します			
11:30	2日間の総括〜まとめ			
11:45	撤収準備			
12:00	昼食	2F 四季		
13:30	ホテル出発			
14:30	仙台駅到着→その後川内キャンパスへ			

### 3. 参加者

No.	氏名	所属	職位	Rm#
1	吉良 洋輔 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	会津大学 文化研究センター	准教授	713
2	中川 恵 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	米沢女子短期大学	講師	715
3	笹野 裕介 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	東北大学薬学研究所	助教	
4	韓 放 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	東北大学工学部国際交流室	助手	
5	森 新之介 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	早稲田大学 高等研究所	助教	713
6	木内 敬太 PFFP2011 (UC(パ-フルー))	高崎商科大学 埼玉県教育局	講師(非常勤) スクールカウンセラー	714
7	佐俣 紀仁 NFP2012 (X(ルポシン大))	東北医科薬科大学	講師	711
8	田村 洋 NFP2012 (X(ルポシン大))	東京工業大学 土木・環境工学科	助教	711
9	土田 久美子 PFFP2013 (UC(パ-フルー))	東京外国語大学 世界言語社会教育センター	特任講師	715
10	野地 智法 NFP2013 (蔵王合宿)	東北大学大学院 農学研究所	准教授	712
11	星野 由美 NFP2013 (蔵王合宿)	広島大学大学院 生物圏科学研究科	助教	716
12	熊谷 摩耶 PFFP2014 (UC(パ-フルー))	湘北短期大学	専任講師	716
13	陳 思聡 NFP2014 (蔵王合宿)	東北大学大学院 教育学研究所	特任講師	712



#### 4. 大学教育支援センタースタッフ

No.	氏名	所属	職位	Rm#
1	羽田 貴史	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	教授 センター長	701
2	大森 不二雄	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	教授 副センター長	702
3	杉本 和弘	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター 教育評価分析センター	教授 センター長	703
4	岡田 有司	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	准教授	704
5	今野 文子	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	講師	705
6	佐藤 万知	広島大学高等教育研究開発センター (2010-2012年度プログラム担当)	准教授	706
7	稲田 ゆき乃	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	支援スタッフ (コーディネーター)	710
8	金子 未来	高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター	支援スタッフ (記録担当)	710

## 参加者プロフィール



氏名 菅野 裕介 (ささの ゆうすけ)		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	東北大学 大学院薬学研究科	職階・職名等	助教
出身地	神奈川県 相模原市	趣味	野球観戦, 娘と散歩
専門	有機合成化学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	大学院時代より、一貫して医薬品の合成に適用可能な触媒的アルコール酸化反応の開発について研究を行っています。2012 年の助手着任以降、研究室の大学院生の指導と学生実習を主に担当してきました。2014 年 10 月に助教になり、有機化学に関する講義も担当するようになりました。		
メッセージ	切磋琢磨した同期の PFFP のメンバーと話をできるのがとても楽しみです。また、先輩や後輩がどのようなレニングを受け、どのような学びを得たのか是非情報交換をしたいと考えています。 (今野先生：今までの PFFP と NFP で何をやったのか、まとめたものを作っていたらいいと思います。) 特に変更点に関してハイライトしていただけるとありがたいです。)		

氏名 韓 放		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	東北大学工学研究科	職階・職名等	助手
出身地	中国	趣味	グルメ, 映画
専門	情報教育, メディアリテラシー		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	現在、国際交流の業務を担当しています。主に、留学生研修プログラムを企画し、コーディネーターとして様々な活動を取り組んでいます。授業を担当してないが、普段チャーター活動などの学生活動を指導しています。それとともに、メディア教育について研究しており、論文の執筆も頑張っています。		
メッセージ	PFFP で学んでいたことを生かしているのを実感しています。一方、教育現場の限界を感じつつ、どのように授業あるいはキャンパス活動を通して、学生のモチベーションを高め、生き生きとした学習生活ができるか教育国際化に応じた提案を日々の課題としています。		

氏名 吉良 洋輔		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	会津大学コンピュータ工学部 文化研究センター	職階・職名等	准教授
出身地	大分	趣味	料理、サイクリング、山菜・きのこ狩り、オーディオ、証券投資
専門	教理社会学、ゲーム理論		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	これまでゲーム理論を使って協力行動や社会規範の研究をしてきましたが、せつかくコンピューター専門大に来たので、これからはシミュレーションやオンライン実験を使いたいと考えています。授業では、一般教養の「社会学」上、来年度より「社会シミュレーション」を担当します。研究も教育もコンピューター漬けですが、自分の性にあっているようで楽しいです。		
メッセージ	会津大学に就職できたのは、30%くらい PFFPのおかげだと思っています。会議では、他の皆さんがどのような面白い授業をされているか、教えてもらいたいと思います。		

氏名 中川 恵		PFFP2011 (UCバークレー)	
所属	山形県立米沢女子短期大学	職階・職名等	講師
出身地	秋田県	趣味	ここ数ヶ月できていませんが・・・ギターと卓野球
専門	食と農の社会学 (食をめぐる生・消費の現状と課題)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	担当授業 「社会学」「地域社会学」「社会調査演習」「社会情報論」「社会ネットワーク論」「情報処理演習 I」「教養ゼミ I」「基礎ゼミ I」「専門ゼミ I」(以上、所属校)「社会学」(看護学校での非常勤)		
メッセージ	PFFP-2012 年度修了の中川恵と申します。雪かき当番に怯える日々を過ごしています。皆様にお会いできるのを楽しみにしています。		

氏名 森 新之介		PFPP2011 (UCパークレー)	
所属	早稲田大学高等研究所	職階・職名等	助教 (任期3年、延長なし)
出身地	神奈川県	趣味	飲酒、海外ドラマ (推理もの) 鑑賞、無料ネット麻雀
専門	日本思想史		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>3年前に博論を出版したら、業界の大物教授から学術的に殴り付けられました。仕方がないので学術的に殴り返し血祭りに上げてやったりと、業界で名が知られるようになりました。その教授には感謝しています。運よく助教 (任期3年、延長なし) として拾われたものの、まだ授業を担当する機会に恵まれていません。その代わり、早稲田ではFD関係の研修会などに人一倍参加するようにしています。来年度やと教歴を付けられることになり、人心地が付きました。</p> <p>つい先日、職場で30分の研究紹介を同僚相手に英語でしました。用意しておいた原稿を読み上げるだけで精一杯で、これでは90分の英語授業など遠い夢です。とはいえ、多少は度胸が付いたのでやってよかったです。</p>		
メッセージ	このPFPPだけでなく、利活用できるものや挑戦できるものまでさるうちにおいておいた方がよいと思います。		



2011\_PFFP@UCパークレー

氏名 木内 敬太		PFPP2011 (UCパークレー)	
所属	高崎商科大学	職階・職名等	非常勤講師
出身地	千葉県	趣味	ドラマ、アニメ、映画など
専門	産業組織心理学 (メンタルヘルス、組織開発)、臨床心理学 (認知行動療法)、コーチング心理学、学校カウンセリング		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>最近企業のスプレッドシートに携わり、メンタルヘルスに関する研究を行っています。本来ストレスチェックの結果は、働きやすい職場づくりに活用されるべきものですが、実践も研究もそこに至るのはなかなか難しいのが現状です。授業は産業組織心理学、ホスピタリティ心理学、生涯学習論を担当しています。特にホスピタリティ心理学は、東京オリンピックに向けて観光産業に力を入れている我が国において、重要な分野の一つだと思います。しかし、日本では、心理学の観点から行われたホスピタリティに関する研究や実践はほとんどなく、学界でも課題となっています。そのため、授業も手探りで進めています。</p> <p>9月に実践サイロロジ-研究所という合同会社を設立しました。心理学研究を金もついでに利用する。逆に言えば、金になる心理学研究を行うことが、私の目標です。研究者兼実業家として、日本の心理学の研究と実践の間にある大きな溝を埋めたいと考えています。</p>		
メッセージ	<p>今回は皆様ながら、大学教員としての私の活動について発表させていただきました。一流大学というわけではありませんが、全く実績もコネクションもない状態から、私が今の大学に採用されたことは、奇跡としか言いようがありません。その高嶺には、東北大学大学教員準備プログラムの存在が少なからず貢献していたはずです。また、実際に教員としての活動を行う中で、PFPPでの学びが活かされ、さらに、これまで気づかなかかった大学教員の難しさや、大学に求められる支援体制が見えてきた部分もあります。今回はこれらの点について、皆様とダイアログを深めたいと思っております。</p> <p>特に一緒にPFPPに参加したメンバーに久しぶりに会えることを楽しみにしています。このような機会をいただけるのも、長年本プログラムの運営に携わってくださった方々や、貢献された参加者の皆様のおかげだと思います。心より感謝申し上げます。</p>		



2011\_PFFP 成果報告会

氏名 佐俣 紀仁		NFP2012 (メルボルン)	
所属	東北医科薬科大学教養教育センター	職階・職名等	講師
出身地	群馬県高岡市	趣味	自転車通勤が良いストレス解消です。最近「ラート」なる新スポーツも始めました。独特の身体感覚が楽しいです。
専門	国際公法 (特に海洋法、国際組織法)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	研究：国連で条約作りが始まった「国家管轄権区域外の生物多様性」について研究をしています。海洋科学者の方々とも話しながら、学際的にやっています。 担当授業：法学入門、憲法、政治学、国際法		
メッセージ	この春、薬学部と医学部しかない医療系大学に着任しました。受講生は国家試験に情熱を燃やす学生連です。そんな環境ですが、私の仕事は、国家試験から目を離させるように誘惑することです。「余計なこと」に思いを巡らせるよるこびを伝えたいと考えています。時に理想と現実のギャップに驚きつつも、一筋縄ではいかない大学教員の仕事を楽しんでいます。皆さんとお話できるのを楽しみにしています。		



2012 PFFP/NFP 成果報告会

氏名 田村 洋		NFP2012 (メルボルン)	
所属	東京工業大学	職階・職名等	助教
出身地	埼玉県	趣味	スキューバダイビング?
専門	土木工学, 橋梁工学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	演習や実験の授業を担当しています。シラバスの作成する際、NFP で得た知識が大変役立っておりま す。いまは、授業で行っている独自の実験の手法と教育効果を論文にして発表しようと執筆を進めていま す。		
メッセージ	仙台を離れて約3年になります。櫻加しの仙台で (といっても出張で結構行きますが)、NFP の同窓生 にお会いできることを楽しみにしています。特に、実践を重ねて授業が上達しているであろう同期生と熱く語り 合っことが楽しみです!		



氏名 土田 久美子		PFFP2013 (UCパークレー)	
所属	東京外国語大学	職階・職名等	特任講師
出身地	青森県青森市	趣味	読書・散歩・料理・エスニック・コミュニケーションづくり
専門	社会学 (国際社会学・移民論・社会運動論)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	授業：多文化社会・国際移動に関わる授業を行なっています (学部・大学院)。授業の中には、英語で教えることが求められているものもあり、毎回苦労しています。		
研究：	海外ではロサンゼルスの日系・その他アジア系コミュニティと都市再開発をテーマに継続的調査研究を行っており、国内では外国出身者のネットワーク形成と経済的自立を目指す活動に関心があり、(予備)調査をしています。		
メッセージ	3月まで東北大学文学研究科社会学研究室に所属していました。院生・ポスドクとして比較的自由気ままに過ごしていたせいなのか (その時は自由だとは思っていませんでした)が、または出身大学と今の大学の「文化」が違ったらいいのか、いざ教員として働くとなると色々なことかと思ってしまう。戸惑いを抱えながら過ごしています。		
	今回集まったみなさんと経験を共有し、また貴重なお話やアドバイスをいただけたとありがとうございます。		



2013\_PFFP@UCパークレー

氏名 野地 智法		NFP2013 (蔵王)	
所属	東北大学大学院農学研究所	職階・職名等	准教授
出身地	静岡県浜松市	趣味	息子と釣り
専門	粘膜免疫学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	○研究：授乳中の乳腺に到達する免疫機能の解明と乳腺炎/乳房炎予防・治療技術開発 ～乳腺炎に苦しむお母さん、乳房炎に苦しむお乳を救いたい！～		
○授業：動物機能形態学 (対象：農学部3年生、1.5回、2単位)、組織細胞機能学特論 (対象：大学院修士1年、2単位；教授と半分ずつ、計7回担当)、動物生命科学合同講義 (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、細胞生物学合同講義 (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象：大学院修士1年、オムニバス1回)、Applied Animal And Dairy Science (対象：学部留学生、オムニバス2回)、アドバンスIV (対象：歯学部5年生、オムニバス2回)			
メッセージ	大学院員になって早いわで3年半が過ぎました。教育経験ゼロで赴任しましたが、赴任の年にNFPに参加できたことで、教員としてのいろはを習得することができました。現在は、教育と研究活動に追われながら、日々を必死に過ごしております。最近では、東北大学農学研究所に新たに設置した「食と農免疫国際教育研究センター (CFAI)」の活動にも力を注いでいます。CFAIの運営に携わる運営委員会のメンバーに選出されたこともあり、組織の中でのリーダーシップの発揮の仕方にも興味を持ち、現在、アガリック・リーダー育成プログラム (LAD) を受講中です。将来の夢は、「科学の世界で一目おかれる研究室を作ること」です。		

氏名 星野 由美		NFP2013 (蔵王)	
所属	広島大学 大学院生物圏科学研究所	職階・職名等	助教
出身地	群馬県前橋市	趣味	アウトドア、温泉めぐり、着物
専門	生殖生物学、家畜繁殖学		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	昨年11月に広島大学に異動しました。一年が経過し、これまでの仕事には慣れてきたところです。研究指導をする学生数や担当する授業・実習数は以前より少ないので、研究活動に専念できる状況にあります。講義や研究指導では、NFPでの学びを活かすべく意識しながら取り組んでいます。異動後こちらでも、受講必須の新任教員プログラムを受けているのですが、細やかな指導の下、体系的に学ぶことができたNFPは素晴らしいプログラムだったと改めて実感しています。大学での教育に携わっている限り、適切で効果的な指導ができるように、学習・実践・省察、のサイクルを継続していきたいと思っています。		
メッセージ	お世話になった先生方や修了生のみなさんとお会いし、情報交換できることを楽しみにしています。		



2013\_NFP@藏王合宿セミナー



2013\_PFFP/NFP/NFP 成果報告会

氏名 熊谷 摩耶		PFFP2014 (UCパーラー)	
所属	湘北短期大学 総合ビジネス・情報学科	職階・職名等	講師
出身地	宮城県 大崎市古川	趣味	映画鑑賞、旅行、水墨画 (予定)
専門	比較文化学 (18-19 世紀の英中交渉史)		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)	<p>昨年 4 月より現職に就きました。昨年は引越もあり忙しすぎ、今年は指導教官らのご指導の傍で博士号を取得しました。担当授業は主に英語で、基礎英語から、オールイングリッシュで行うアジア文化を教えるなどの授業を行っています。また、ゼミナールでは 18 名の学生に対して「世界の映画にみる異文化理解」をテーマに、様々な映画を題材に学生たちとディスカッション・発表、そして卒論指導を行っています。</p>		
メッセージ	<p>3 年前から PFFP にとても興味を持っていたので、一昨年参加することが出来てとても幸運でした。また、PFFP で得ることのできた体験、知識、先生方や同期たちをはじめとする人々との出会いは、ややもすれば孤独になりがちな現職でも大いに支えとなっております。実際にまだ自分の力が及ばず活用しきれていないところもありますが、このプログラムに参加したことを後悔した日はありません。この場を借りて、改めて御礼を申し上げます。本日はどうぞよろしくお願いたします。</p>		



2014\_PFFP@UCパーラー



氏名 陳 思 聡		NFP2014 (蔵王)	
所屬	職階・職名等 東北大学 教育学研究科 特任講師 (教育)		
出身地	趣味 中国・広東省 ビール		
専門	Citizenship Education		
近況報告 (最近の研究/担当授業 etc.)			
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 進行中研究プロジェクト: Asian citizenship and international joint education</li> <li>● 担当授業: Researching Education in English; Global citizenship education; Alternative schools in East Asia; Education and Global Citizenship</li> </ul>			
メッセージ NFP2014 年度のユーザーです。よろしくお願ひします。			



2014\_NFP@蔵王合宿セミナー



2014\_PFFP/NFP 成果報告会



2015\_PFFP/NFP 成果報告会

## プログラムのあゆみ

### プログラムのコンセプト

Tohoku U. PFFP と Tohoku U. NFP は、大学教員に求められる能力を実践的に学ぶ機会を提供することで、参加者のスムーズかつ充実した初期キャリアの遂行を実現するためのプログラムです。



Tohoku U. PFFP と Tohoku U. NFP のコンセプト



NFP 内容一覧 (2010~2016 年度)

	2011	2012	2013	2014		2015		2016	
				S	F	S	F	S	F
1 プログラム説明会									
2 オリエンテーション									
3 プログラム・イベントプログラム									
4 高等教育機関としての大学の役割	(O)								
5 一大学教員のキャリア									
6 一大学教員の役割									
7 リフレクションについて	△			e	e	e	e	e	e
8 一先達のランチ懇話会									
9 一大学教育を考えるWS									
10 一比較の目を育てるWS									
11 シラバス作成セミナー									
12 マイクロティーチング									
13 授業参観「授業を見る聞く学ぶ」									
14 模擬授業									
15 英語で授業を									
16 授業づくり：準備と運営									
17 教授＝学習に関するセミナー									
18 院生指導セミナー									
19 諸外国の高等教育を知る									
20 大学教育制度と役割について考える									op
21 危機管理について									op
22 メール集中コース									
23 国内合宿セミナー（メルボルン大講師による）									
24 海外他大学訪問調査（パース）									
25 国内他大学会訪問調査									op
26 ポートフォリオ									op
27 リフレクティブ・ジャーナル									
28 先達によるジャーナルへのコメント		△							
29 運営担当によるジャーナルへのコメント									
30 先達コンサルテーション									
31 最終課題論文									

S : ショートコース  
 F : フルコース  
 e : 動画化し e-learning で提供  
 O : オプション (選択)  
 O : 実施  
 (O) : 一部実施  
 △ : 試行導入 / 選択セミナー  
 : 2016 年度実施項目

2016 年度プログラムの内容

活動名	内容	時間 / 頻度	フル	ショート
事前学習 (e-learning)	プログラムの目的、内容について事前に web 上で各自動画を視聴し理解を深める	約 1 時間		
オリエンテーション	参加者顔合わせ、プログラムの目的、大学教育の課題と教員の役割に関する講義、比較教育学の視点を組み入れたワークショップ	1 日		
リフレクションとは (e-learning)	リフレクションの理論と実践方法について web 上で動画を視聴して理解を深める	約 1 時間		
授業デザインとシラバス作成	大学の授業における目標・活動・評価について、事前に参加者が作成したシラバスを改善することを通して考える	4 時間		
教授＝学習に関するセミナー	認知科学の側面から、人間の情報処理や理解に関する理論やモデルを学び、授業や学習のデザインに活かせる知見を得る	3 時間 × 2 回		
授業参観	授業経験豊かな教員の授業を参観し、授業後のディスカッションを通して、教育活動について考えるヒントを得る	1 人当たり最低 3 件		
マイクロティーチング	一人 7 分間のティーチングの実践とフィードバック、および授業リフレクションの実施	半日		
模擬授業	一人 17 分間の模擬授業の実践と先達教員からのフィードバック、および授業リフレクションの実施	半日		
院生指導法に関するセミナー	研究室運営、学生を対象とした研究指導に関する手法や留意点を学び、海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションにより日本の高等教育と比較する	半日		
大学教育制度と役割について考える	アメリカの高等教育について学び、海外他大学訪問調査に向けて準備をする。参加者同士のディスカッションにより日本の高等教育と比較する	半日	op	
国内他大学訪問調査	国内の他大学（主に私立大学）を訪問し、キャンパスや授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	3 日間	op	
海外他大学訪問調査	カリフォルニア大学バークレー校にて、キャンパスや授業参観を行い、学生の学びを促進するために大学がどのような教育環境を整えているのかについてフィールドワークを行う	5 日間	op	
先達教員による個人コンサルテーション	先達教員（経験豊富な先達教員）による個人コンサルテーションとグループディスカッション	半日		
リフレクティブ・ジャーナルの作成	各セミナー後に自身の学びを振り返り、これまでの自身の経験や価値観と結び付けながら教育観を言語化する	各セミナー後、毎回		
課題論文	「学生について、大学でのよい学習経験とはどのようなものかと考えますか。また、そういった学習経験を表明するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。というテーマで執筆する	4,000 字		
成果発表	プログラムで学んだことを発表し、OB/OG や先達らとの質疑応答を行い、総括する	3 時間		
受講証明書				
修了証				

PFFP/NFPの参加者の所属

	2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		計
	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	PFFP	NFP	
学内															
文学研究科		3	1	1		5					2	1	1	1	15
教育学研究科				1		1		1					1	1	5
法学研究科			1	1	1	1						1		1	6
経済学研究科	1			1		1					1				4
理学研究科			1				1						1		3
医学系研究科	6	2							1					1	10
歯学研究科														6	6
薬学研究科		1													1
工学研究科		3		3					1						7
農学研究科			1			2									3
国際文化研究科	5	4	1	1			1					1	2		14
情報科学研究科		2	1									1			4
環境科学研究科	1						1	1				1			4
医工学研究科								1							1
学際科学フロンティア研究所									1			2			5
東北アジア研究センター						1									1
原子分子材料科学高等研究機構											1	1			2
マイクロ・ラジオアイソトープセンター													1		1
大学院院														1	1
高度教養教育・学生支援機構						2								1	3
(学内合計)	13	15	3	6	6	9	2	5	3	4	2	5	3	3	111
学外															
理化学研究所											1				1
東北工業大学										1					1
岩手大学											1			4	5
いわき明星大学											1			1	2
東日本国際大学												1			1
熊本大学											1				1
仙台白百合大学													1		1
東北学院大学														2	2
鶴岡大学														1	1
鶴岡大学													1		1
(学外合計)										0	2	1	3	0	15
合計	13	15	3	6	6	9	2	5	3	4	4	6	6	4	111



教育関係共同利用拠点  
「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点」  
東北大学 高度教養教育・学生支援機構  
大学教育支援センター







**全国プログラム  
ユーザ会議**  
@宮城蔵王ロイヤルホテル

東北大学 高度教養教育・学生支援機構  
2016.12.26 (月) -27 (火)



**2010~2017  
7年間の軌跡**

**プログラムのあゆみ**

**プログラムの立ち上げの経緯**

- 2つの予算
  1. 特別経費
  2. 教育関係共同利用拠点
- 世界水準で大学教育を実施する能力の育成
  - 日本の大学院教育は研究能力の訓練が中心
  - 大学教授職に必要な教養・知識・技能を育成する必要あり

➡ 大学院生向けのプログラム開発をしよう！

**開発のプロセス**

海外の先行事例調査  
海外の大学における研修への院生派遣  
プログラムの国内化  
他大学への公開  
プログラム評価・改善

参加者からの声, CPDスタッフからの声  
共同利用運営委員会, 文科省の審査結果  
外部評価の結果

**プログラムの変遷**

1. プログラムのコンセプト p.19
2. プログラムのあゆみ p.20
3. PFFPの内容一覧 p.21
4. NFPの内容一覧 p.22
5. 2016年度プログラムの内容 p.23
6. PFFP/NFPの参加者の所属 p.24

**開発のプロセス p.20**

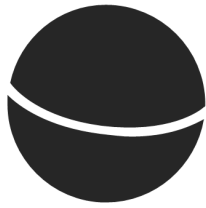
- 2010 1 派遣先実地調査  
試験的派遣 (パークレー/メルボルン)
- 2011 2 NFPを試験的に開始  
国内実施セミナーを開発
- 2012 3 派遣先の切り分け  
国内実施セミナーの拡充
- 2013 4 NFP:蔵王合宿に切替  
授業参観の拡充
- 2014 5 教材の拡充  
OB/OG通信配信開始

**開発のプロセス**

- 2015 6 ショートコース設立 (つまみ食いコース)  
海外派遣をオプション化  
プログラムの全国公開 (他大学参加者の受入)
- 2016 7 ショートコースの拡充  
国内他大学訪問調査の拡充  
授業参観の拡充

**プログラムのコンセプト**





この2日間で  
何をしたいのか

## ユーザ会議の目的



## ユーザ会議の概要

- 2016年度機能強化経費を獲得
    - 学内の競争的資金を得て実施
  - 長期的視点でのプログラムの有効性評価
    - 単なるプログラム終了直後のアンケートでは明らかにできないような遅効性
    - プログラムに対する認識・意味付けの変容
    - プログラムの経験が現在どう影響しているか
- ➡ 専門性開発プログラムの評価指標を開発



## 2日目の流れ

- インタビュー
  - 1人30分
  - 時間になったら桜／桃の間においでください
- ディスカッション
  - 議論したいトピックをシンポジウム後に聴取



## 拠点事業における評価計画

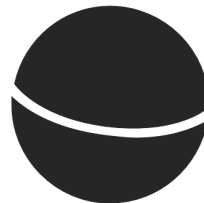
	【成果指標】	【焦点・対象】	【測定方法】
レベル 5	組織変容度 Systemic Impact	組織への影響, 効果 (組織・学生による評価, 波及効果)	ココ!
レベル 4	行動変容度 Behavior	職場での実践 (知識・スキルの転移, 実践, 応用)	
レベル 3	学習到達度 Learning	獲得した知識, スキル (参加者の学びの状況)	リレクティブ・ジャーナル 課題論文
レベル 2	満足度 Satisfaction	参加者の知見 (参加者の満足度)	質問紙調査 インタビュー
レベル 1	参加状況 Participation	プログラム実施状況 (参加者数・属性, 割合等)	記録, 観測

Kirkpatrick, D. L. (2006) Evaluating Training Programs: The Four Levels. Barrett-Koehler.  
Guskey, T. R. (2000) Evaluating Professional Development. Corwin Press.



## 1日目の流れ

- 話題提供
  - PFFP2011修了生 木内敬太さん
  - PFFP2015修了生 熊谷摩耶さん
  - NFP2012修了生 佐俣紀仁さん
  - NFP2013修了生 野地智法さん
- 全体討論
  - 参加者全員からの声を!
- 懇談会
  - 参加者同士の交流, 情報交換



どうぞ  
よろしく!

## 話題提供

PFFP

## 大学教員準備プログラム 長期経過と効果

木内敬太 高崎商科大学 非常勤講師  
(産業心理学、ホスピタリティ心理学、生涯学習論)

2011年度PFFP修了

keitak517@gmail.com

## 私の考えるPFFPの長期的効果

成績  
評価

授業中  
居眠り

自信をもって働けること



課題  
提出率  
の低さ

教科書が  
網羅  
できない

Page 2

### 本日の内容

1. 発表者の紹介
2. PFFPでの経験
3. 自身の採用試験への影響
4. 現在の教育活動
5. 今後の課題

Page 3

### 発表者の紹介

- 1984年生まれ (32歳)
- 専門：産業組織心理学、臨床心理学
- 2011年PFFP参加 (博士課程1年時)
- 心理学の専門家が大学教員を目指す理由
  - 研究や科学的根拠に基づく実践
  - 経済的安定
  - 専門家の養成

- プログラム開発と評価に関する事前知識
- 実践家 (教育寄り)

### PFFPでの経験

個人的な留学経験  
シドニー大学 (学部)

1. セミナーおよびマイクロティーチング
  - 高等教育、大学教員の現状とあり方
  - シラバスの書き方、授業の構成
  - 授業のマネージメント、教授法
  - 測定と評価
2. 海外研修
  - カリフォルニア大学 (バークレー)
  - 学習・学生支援システムの視察
  - グループ発表 (就職との関連)

Page 5

### 採用試験への影響

- 高崎商科大学の場合
  - シラバスの提出 (4科目分)
  - 面接および模擬授業
- その他の大学でも...
  - 研究1割、教育9割
  - 教務も教職員力を合わせて
  - アクティブ・ラーニングを売りに

Page 6

### 現在の教育活動

- 授業構成
  - 復習・予習テスト
  - 個人ワーク
  - ディスカッション
- 成績評価
  - 積極的な授業参加 (テスト、発表)
  - 振り返り (ディスカッションを踏まえて)
  - ポートフォリオの作成
  - グループ発表
  - 期末試験 (記述の内容は事前に発表)

Page 7

### 今後の課題

- 学生による評価と学問との葛藤
- 成績評価の配分
  - 経験重視 (課題) vs 到達度重視 (試験)
- 時間管理：今のところ1コマ6時間
- ICT設備
  - 成績の即時フィードバック
  - 録音・録画

Page 8

## まとめ

- PFFPの長期的効果について、教育を重視した教員の立場から考えた
- 高等教育や大学教員に関する信念に基づいて、自信をもって働けることが、一番の効果だと思われる
- 経験と達成度、学生の評価と学問の葛藤、時間管理等、課題は尽きない



ご静聴ありがとうございました。

Page 8

# PFFPを受講して

湘北短期大学 総合ビジネス・情報学科  
熊谷摩耶

## 本日の流れ

- I 受講理由
- II プログラム参加の効果
- III 現場と実践
- IV プログラムを受講して

## I. PFFP受講理由

- ① 大学教員の仕事内容は膨大で漠然としており、一人では把握しきれず、不安であった
- ② 学生として研究者としてのキャリアはあるものの、大学の教員としての意識や基礎的な知識等の素地が欲しかった
- ③ 海外の大学事情を知ることのできるパークレー校への研修に興味があった
- ④ プログラムを担当している教員の方々が魅力的だった

## II. PFFP参加への効果②

- 【現職での効果】
- ④ 採用試験での積極的な姿勢  
→ 先達の先生方との懇談会、マイクロティーチング等実施による不安の払拭
- ⑤ 授業プランを立てる際、迷いが生じた際の参考  
→ なかなか他の先生方の授業を受講することはできない。また、かつては学生であったときの自分の目線を忘れがちになり、初心に帰ることができる。
- ⑥ 海外の大学事情を実見した経験、知識、教育観への影響  
→ パークレー校への参観

## II. PFFP参加の効果①

- ① 大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた  
→ パークレー校への研修、ルーブリック評価法、先生方による講義等
- ② 女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた  
→ 先達の教員との懇談会、交流
- ③ 他分野の研究者との出会い、繋がりをはじめ新たな発見があった

## III. プログラムとその実践①

- 【教育現場とその調整】
- ① シラバス作成時の注意点を把握できるようになってきた  
→ 同科目の担当教員と内容をすりあわせる必要がある、という組織の中で働く認識
- ② 授業への創意工夫への意欲を持つべきであるという意識を保持
- ③ 大学教育そのものへの理解の素地が活用されている  
→ 教授会等の議題に対しておおまかなイメージは沸く（本来であれば自分でもっと行うべきでしょうが・・・）

## III. プログラムとその実践②

- ④ 短期大学の学生とこれまで担当してきた学生との学力の差、生活スタイルの違いの調整  
→ 自主学習時間の負担時間の調整、授業の進度、既知情報、嗜好等。  
⇒ 「現実の学生」との差異を確認（リフレクティブ・ジャーナル、および担当教員からの返信等の活用）
- ⑤ 教育観の変化  
・ 学生の成績が正しく評価されること  
・ 学生が積極的に授業に参加したという実感を持たせることで、自主学習の姿勢を促す  
⇒ より、**実生活に繋がった「実践的」な講義と実践を意識的に行う**

## IV. PFFPを受講して (総括及び今後の課題)

- ① リフレクティブ・ジャーナルにて記した「今後の課題」へのフォローアップがまだ行い切れていない。
- ② 「よい教育」とは何か、と自身の教育観を常に考え、柔軟に対応する習慣を持ち続けること。
- ③ その他
  - ・ 他にも多くの先達の女性教員がいるとより様々なロールモデルをお伺いできるのでは。
  - ・ 可能であれば、様々なキャリア(or現職)の先生との懇談も行える多様なキャリアプランを聞けるのでは。
  - ・ 国内の大学や授業への見学。(実施済み)



# 話題提供

2012年NFP修了

佐俣 紀仁

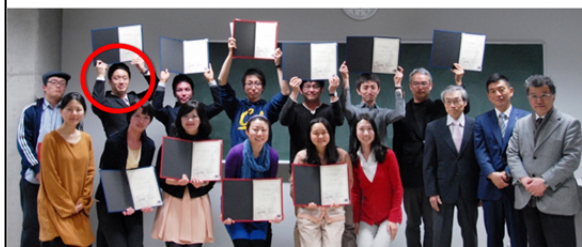
## 話題

- I. プログラムの影響・効果
- II. どのように役立っている？
- III. 今だからこそその評価の視点

## はじめに:今の教育環境

- 医学部・薬学部の教養教育
  - 法学、政治学系科目を担当
  - 初年次教育も
  
- 着任一年目

## I. プログラムの影響・効果



## I. プログラムの影響・効果



## I. プログラムの影響・効果

パンフに写真を掲載していただく  
⇒各所で格好のツカミに

## I. プログラムの影響・効果

- セルフ・リフレクションの習慣化
  - 自分・学生双方の原因を整理
  
- ⇒授業を常に微調整

## II. どのように役に立ってる？

授業設計：  
授業の**目的**に沿った合理化  
「あれもこれも教えねば」との決別

## II. どのように役に立ってる？

「普通の」法学教育  
一定の内容を教えることが目的に  
例：憲法であれば人権条項全て  
表現の自由  
信教の自由  
経済的自由  
生存権etc..

法学系の各種試験では必須

## III. どのように役に立ってる？

私立医・薬学部生のリアクション  
「医師・薬剤師国試に出ますか？」

## II. どのように役に立ってる？

医師・薬剤師をめざす学生  
法学を専門とする学生  
⇒授業の目的・内容も当然異なる

## III. どのように役に立ってる？

法学教育の常識から自由に  
到達目標を自分で工夫・調整  
目標の為に必要な素材を選択  
youtube, ブログ記事etc.

## 学生の声から

「意外に法学も面白い」  
「国家試験だけが人生ではない」

## 今だからこそその評価の視点

大学教育における多様性  
大学の力点  
学生のレベル/専門分野

## 今の所属大学の特殊性

「それ国家試験に出ますか？」  
70分×15回×3クラス  
出席率「だけ」は良い  
落第させずらい

## 今だからこそその評価の視点

研究大学出身者にこそ  
大学教育の多様な実情を

# NFP受講後の自分

全国プログラムユーザー会議

**野地 智法**  
東北大学大学院農学研究科

## 自己紹介 野地智法



- 1976年 浜松市生まれ (40歳)
- 1995年 静岡県立浜松西高等学校卒業
- 2000年 東北大学農学部卒業
- 2002年 東北大学大学院農学研究科修士課程修了
- 2005年 東北大学大学院農学研究科博士課程修了 博士(農学)取得
- 2005年-2009年 東京大学医科学研究所 博士研究員
- 2009年-2013年 ノースカロライナ大学 博士研究員
- 2013年-現在 東北大学大学院農学研究科 准教授
- 2013年度 NFP受講
- 2015年-現在 東北大学食と農免疫国際教育センター 感染免疫ユニットリーダー
- 2015年-現在 東京大学医科学研究所 客員准教授
- 2015-2016年度 LAD受講

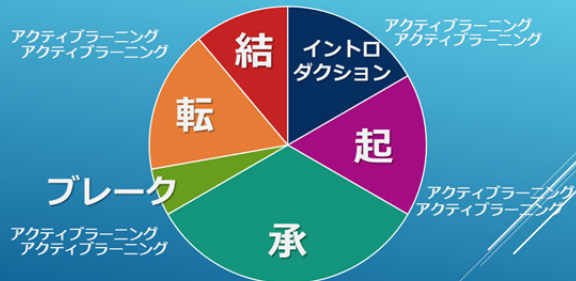
## 今日お話しする内容 (NFPから学んだもの)

- アクティブラーニング
- オムニバス
- PBL (Problem-based learning)

## 私が担当する講義

- 動物機能形態学 (対象:農学部3年生、15回、2単位)
- 組織細胞機能学特論 (対象:大学院修士1年、2単位:教授と半分ずつ、計7回担当)
- 動物生命科学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- 細胞生物学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Applied Animal And Dairy Science (対象:学部留学生、オムニバス2回)
- アドバンスIV (対象:歯学部5年生、オムニバス2回)

## 私が考えるNFPから学んだ理想的な講義の時間配分



## ブレイク

- 最先端のサイエンスの魅力
- 学生のキャリアパス
- 留学
- 東進予備校
- あなたが畜産農家になるとしたら
- どうでもいい話 などなど

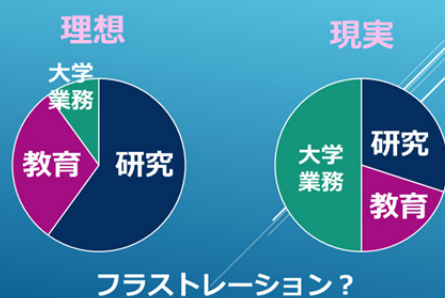


## 私が担当する講義

- 動物機能形態学 (対象:農学部3年生、15回、2単位)
- 組織細胞機能学特論 (対象:大学院修士1年、2単位:教授と半分ずつ、計7回担当)
- 動物生命科学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- 細胞生物学合同講義 (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Food & Agricultural Immunology Joint Lecture (対象:大学院修士1年、オムニバス1回)
- Applied Animal And Dairy Science (対象:学部留学生、オムニバス2回)
- アドバンスIV (対象:歯学部5年生、オムニバス2回)

オムニバスは、自分の研究の魅力伝え、自分と一緒に研究したいと学生に思わせる最高の場

## 大学教員としてのエフォート率



今野先生、NFPスタッフの皆さま

ありがとうございました。

## PBL (Problem-based learning)の活用

- 学生自身が研究課題を構築できるステージに揚げるための教育
- 学生が研究する楽しさを覚える
- 学生が出してくる結果を、自分の出した結果のように楽しめる
- 研究の時間配分が少なくても、気持ちが楽になる



### ディスカッションセッション

## 1.2 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由2:
- 組織文化の相違: 研究大学としての東北大学と所属大学の目標・使命「学生志向」という理念を共有しても、「学問志向で専門分野の学問を究めたい学生」の集まる大学、「就職をはじめとする実用性を求める学生」の集まる大学、「選抜性がなく学習意欲がないが、とりえず進学してきた学生」の集まる大学...
- 大学・短大の多様性を理解しつつ、共通性を追求するにはどうしたらよいか
- 大学教員の矜持を失わず、学生たちに接するにはどうしたらよいか(大学教員のプライドの根源は何か)

## 2.1 対応の方策

◆大学教育の目的と役割, 学ぶことの意味についての講義:  
 学問は目的であるとともに人間形成の手段であるという面がある。この両者の比重は、研究者のための大学と社会人・職業人のための大学では異なりがちだが、学問中心主義以上に大学の共通項である(難点)現代科学は、価値自由の立場に立つので、(研究大学ほど)教員や院生は、人間形成のための学問のように価値観のかかわる事項は忌避する傾向が強い。どのような内容がふさわしいか

## 2.3 対応の方策

◆学生論の講義:  
 学生とはどうい存在か、どう発達するのか、授業における理解は認知心理学(呂本)を組み入れてかなり構造化したが、学生の成長をどう見るのか、知的専門的発達のみか人格的なものも含むのか、欧米の大学と日本の大学はここが一番違う。人間を育成するという視点の弱さ。それを支えているのは、学生発達理論。この導入と普及が弱い。  
 ◆教員論も再検討する必要がある:  
 どこまで教員がかかわるかは微妙な問題。ここは教員以外の専門職化が進んでおらず、教員のステータスが非常に高い、かつ職員の数が学生数に比して増加しなかった日本の特性がある。ハラスメントは重要だが、所属大学の中で本来取り組み受講すべきこと、どこまで各論に至り得るか。

## 6-2 研究倫理に関するキャリア・ステージ別学習参照基準

役割	対象	課題
レベル0	博士研究員に就く、進出するか、責任ある研究職を先導する・指導	専門分野における倫理的問題、特に研究倫理、倫理に精通する必要がある
レベル1	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施を指導	①学生指導において責任ある研究職に就く必要となる場合の倫理的問題について責任ある研究職の立場で十分な理解を有すること ②研究倫理に関する研究の進展を有すること
レベル2	研究倫理及び共同研究で責任ある研究の実施を指導	①博士・助教・専任教員 研究倫理に関するすべての教員が十分な理解を有すること ②研究倫理に関する研究の進展を有すること
レベル3	指導の下で責任ある研究の実施	①研究倫理に関する研究の進展を有すること ②責任ある研究職に就く必要となる場合の倫理的問題について十分な理解を有すること
レベル4	指導の下で責任ある研究の実施	①博士・助教・専任教員 研究倫理に関するすべての教員が十分な理解を有すること ②研究倫理に関する研究の進展を有すること
レベル5	指導の下で責任ある研究の実施	①博士・助教・専任教員 研究倫理に関するすべての教員が十分な理解を有すること ②研究倫理に関する研究の進展を有すること

## 1.1 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由1:
- 専門職は、①「職業的社会化」(専門職に必要な知識・技能と価値観を身につけ、一人前として認められ、自覚すること)と②「組織的社会化」(職場の文化を身につけ、期待される役割を果たし認められ、自覚すること)が必要で、そのための③「予期的社会化」(教育機関での訓練)が準備されているが、大学教員の場合、この3つが整合していない
- 特に、「予期的社会化」(大学院教育)の目標が専門分野での研究能力(学位)の獲得であり、一般教育(教養教育)は通過する前段階でしかないのに、着任するとその担当が主な役割になる場合のずれをどう克服するか
- リベラルアーツが学士課程教育全体で完結しているアメリカとの違い

## 1.3 昨日の議論から

- 職場での葛藤の理由3:
- 所属大学におけるポジションの相違: 研究指導を担当するポジションか一般教育など特定の授業責任のみ担うポジションか
  - 前者は研究室運営や学生指導のために学生に対する強いコミットメントが不可欠であるが、後者は余りメリットがない。しかし、後者のポジションの方が、大学への適応を重視する初年次教育を担当する地位にあるため、大学の側では、強いコミットメントを求めがち。しかし、当該の学生自身が研究室やゼミ配属に関心があるため、後者のポジションの教員の関与にあまり期待しない
  - 後者のポジションの教員は、4年間にわたる学生の変化を観察できないため、扱う学生の発達課題と現状を認識しにくい

## 2.2 対応の方策

◆大学の多様性とそれぞれの使命に関する講義:  
 アメリカのPFPPやFDでは不可欠な部分。総合大学・複合大学・単科大学などの組織形態、国公私立などの設置形態、学部教育・大学院教育・専門職大学院などの理解は重要  
 (難点)多様性を論じると教育困難を抱える大学の課題も視野に入るが、そのことでかえって教育困難大学への就職を回避したり、始めから型にはまって学生や大学を見ることにならないか

## 2.4 対応の方策

◆大学院では研究は教えるが研究者は育てていないという指摘:  
 研究の側面をどうするか、大学院でしっかり指導されているという前提。ただし研究倫理、責任ある研究活動はどの研究科も完備できていない。PFPP/NFPがスタートした以後の課題。東北大学は、学部1年生からシニア教員まで6つのステージに区分した研究倫理教育体系を決定しており、その一部はPFPP/NFPに導入可能  
 また、学んでいる学問分野の特性が、教員研究者の行動様式や価値観も決めるということは教員論の中に組み込めるかもしれない。ただし、その種の調査研究では日本ではなかった。

### 義務付け

レベル0	①研究倫理の具体的な事例に関するワークショップ類に3年以上参加すること ②3年以上1度以上、研究倫理審査など研究倫理に関する実務や具体的なケースの処理を経験すること
レベル1	①研究指導やメンターシップに関する認定されたセミナー/ワークショップに5年以上1度以上参加すること ②5年以上一度以上、学芸資料に基づく最低3時間程度の学習を行うこと
レベル2	③5年以上1度、最低3時間程度の学習機会を設けること ④学習機会にはケーススタディを含み、実践的側面を養い機会を設けること ⑤人権や生命倫理、工学倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル3	⑥最低3時間程度の学習機会を設けること ⑦学習機会にはケーススタディを含み、実践的側面を養い機会を設けること ⑧人権や生命倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル4	⑨各学部において3-4年生に於いて、研究指導等の機会に併せて3時間程度の学習機会を設けること ⑩各研究科において大学院前期課程の学生に於いて、研究指導等の機会に併せて最低3時間程度の学習機会を設けること ⑪学習機会には研究倫理の機会を含めること ⑫人権や生命倫理など、より広い理解が必要な分野においては、さらに必要な学習内容を追加、実施すること
レベル5	⑬各学部において前期2年間のうちに3時間程度の学習機会を設けること ⑭学習機会には質疑応答の機会を含むこと



### 3 アンケートからの課題

- ◆個人として抱える最大の課題:ワークバランス(7名)  
→背景には人件費の削減, 解決はまず個人的ノウハウか
- ◆所属組織をどう変えるか(1名)
- ◆授業方法論, 学生をどう議論させるか(1名)
- ◆共同研究での同僚との付き合い方(1名)
- ◆思いつきでなんでも変える上司とどう付き合って継続的に仕事をするか(1名)



CPDとは

PDセミナー

PFFP

NFP

LAD

SDP

DTP



## 「全国プログラムユーザ会議」の実施報告

2016年12月27-28日、2010年度から続いてきたPFFP/NFPの修了生が集い、

「全国プログラムユーザ会議」が開催されました。

「プログラムユーザ」とは、PFFP/NFPのプログラム参加者、つまり同窓生を指します。

全国プログラムユーザ会議の目的は、長期的視点でのプログラムの有効性評価です。  
プログラム終了直後のアンケートのみではわからない運行性の効果を検証しました。

- 現在から振り返ってプログラムをどのように認識・意味付けているのか
- プログラムでの経験が現在の仕事にどのように活かされているのか

これらについて、プログラム修了後数年が経過した今、それぞれの就職先でどのように感じているかについて、率直に語っていただきました。

当日は、13名のプログラム修了生が全国から集まりました。  
その中から4名に、話題提供として「今、PFFP/NFPをふり返る」と題して講演をいただきました。



**PFFP/NFP**

## 高等教育や大学教員に関する 信念に基づいて、 自信を持って働けること

高崎商科大学 非常勤講師  
木内敬太さん

2011年度のPFFP修了生である木内敬太さんからは、「高等教育や大学教員に関する信念に基づいて、自信を持って働けること」がプログラムの一番の効果であったとお話いただきました。木内さんは、現職の就職活動における採用試験においても、シラバスの提出が求められたこと、面接や模擬授業においてPFFPで実施したマイクロティーチングが役立ったことなどを実体験を交えて紹介してくれました。また、「経験と達成度、学生の評価と学問の葛藤、時間管理等、課題は尽きない」といった現状も報告されました。

PFFP  
2011  
修了生



**私の考えるPFFPの長期的効果**

成績評価

授業中居眠り

自信をもって働けること

課題提出率の低さ

教科書が網羅できない

Page 2

01:53 10:58



## 大学の教員としての意識や 基礎的な知識等の素地が 欲しかった

湘北短期大学 専任講師  
熊谷摩耶さん

2014年度のPFFP修了生である熊谷摩耶さんからは、当時のPFFPの受講理由として「大学教員の仕事内容は膨大で漠然としており、一人では把握しきれず、不安であった」「学生として研究者としてのキャリアはあるものの、大学の教員としての意識や基礎的な知識等の素地が欲しかった」「海外の大学事情を知ることのできるパークレー校への研修に興味があった」「プログラムを担当している教員の方々が魅力的だった」ことが挙げられました。また、プログラムの効果としては①大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた、②女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた、③他分野の研究者との出会い、つながりははじめ新たな発見があった、④採用試験での積極的な姿勢、⑤授業プランを立てる際、迷いが生じた際の参考、⑥海外の大学事情を実見した経験、知識、教育観への影響を報告いただきました。

PFFP  
2014  
修了生



### Ⅱ. PFFP参加の効果①

- ①大学教員に必要な問題意識、基礎知識、ツールなどを学べた  
→パークレー校への研修、ルーブリック評価法、先生方による講義等
- ②女性研究者としての今後のキャリアを考えることができた  
→先達の教員との懇談会、交流
- ③他分野の研究者との出会い、繋がりははじめ新たな発見があった



01:53 10:58



## 大学教育の多様性を理解し リフレクションしながら 実情に寄り添った授業を設計できること

東北医科薬科大学 講師 佐俣紀仁さん

2012年度のNFP修了生である佐俣紀仁さんは、プログラムの影響・効果として「セルフ・リフレクションの習慣化」「授業の目的に沿った合理化」を挙げてくださいました。これにより、問題が発生した時に、自身と学生の双方における原因の整理とそれに基づく微調整が可能になったとの報告がありました。また、資格試験合格がミッションである教育メインの大学において教養教育を担う現職の実態、難しさ、それに対してどのようなモチベーションと姿勢で臨んでいるのかについて語っていただきました。「研究大学出身者にこそ、大学教育の多様な実情を知る」機会が提供されることの重要性について、ご自身の経験を交えてご指摘いただきました。

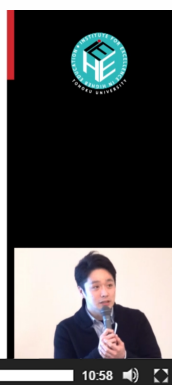


NFP  
2012  
修了生



### I. プログラムの影響・効果

- ・ セルフ・リフレクションの習慣化
  - ・ 自分・学生双方の原因を整理
  - ⇒ 授業を常に微調整



NFP  
2013  
修了生

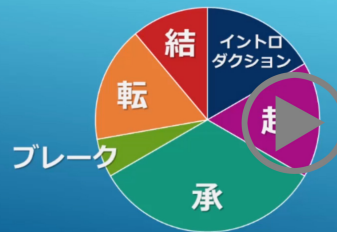
## 学生に興味を持ってもらい 共に研究に取り組む関係性を育むために 授業設計において工夫できることは

東北大学大学院農学研究科 准教授 野地智法さん

2013年度のNFP修了生である野地智法さんからは、NFPで学んだこととして①アクティブラーニング、②オムニバス授業の活用方法、③PBLの3点が挙げられました。優秀な学生に大学院に進学してもらい、研究者として育てもらうための有効なきっかけとして、授業に注力することの重要性をご自身の日々の授業設計上の工夫を事例としてお話しくださいました。学生と困難を様々な乗り越えながら研究を遂行していくためには、関係性作りが大切であり、そのためにはまずお互いに関心を持ってもらうことが必要であると力説いただきました。



### 私が考えるNFPから学んだ理想的な 講義の時間配分



## A-21 全国プログラムユーザ会議・ウェブページ

---

ユーザ会議では、これら話題提供に引き続いて参加者全員でのディスカッション、個別インタビューを行いました。この様子は現在分析中です。今後はこれらの分析結果をもとにプログラムの有効性評価のための評価指標を開発することを予定しています。

さらなるプログラムの発展にご期待ください。

お忙しい中全国からお集まりいただきました参加者のみなさまに心から感謝いたします。ありがとうございました！



本ユーザ会議は「平成28年度機能強化経費（部局ビジョン）事業：専門性開発プログラムの有効性に関するユーザベース評価指標の開発」の一環として開催されました。



【海外他大学訪問調査前メールマガジン】

①【PFFP/NFP】パークレー研修に向けて(1) 2017年1月5日 10:13

パークレー研修 参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。今年もどうぞよろしくお願いたします！

さて、本日からパークレー研修参加者に向けての情報提供のメール配信を開始します。過去の参加者からの声で最も多いのが「もっとちゃんと準備してからパークレーに行ければよかった」という後悔です。

もちろん完璧な準備はできませんし、パークレーに行って初めて「こうしたことを知っておくべきだった」と気づくのは、学習の成果の一つつだと考えるので必ずしもネガティブな意見ではないと我々は考えています。ですが、何にも知らずに行くことできるはずのこと、なんだよかわからぬ、ということになってしまいう可能性があるのも事実です。実際そうしたケースが毎年発生しています。

このメール配信を開始して今年で3年目ですが、毎年「もっとあのメールをちゃんと読んでおけば良かった」という声が寄せられています。また、例年は2月に配信を開始して1月から配信を開始してきます。

パークレー研修はまだまだだと思っているかもしれませんが、日々の研究や業務と同時並行で遠航の準備をすることは、結構大変です。意識的に時間をみつけて作業を進めてもらえたら嬉しいです。

また、パークレー研修では、事前の準備や工夫次第で、普通にパークレーを訪問した場合には見せてもらえないようなところ、聞けないことにも触れられるチャンスがたくさんあります。それらを充分に活かすためにも、今できることを少しずつ始めておきましょう。

さて、今回の研修は、2016年度 PFFP/NFP フルコースから5名、2015年度参加者から1名(大橋さん)が参加します。大橋さんは、12月のセミナー時にみなさんと種あわせをしましたが、2月の選考授業にもフィードバック担当として参加していただく予定です。よろしくお願いたします。

さて、本日はまず基本的な情報提供からお送りします。

\*\*\*\*\*  
 【パークレーのウェブページ】 <http://www.berkeley.edu/>  
 すでにフィードバックの訪問先調査の時点で一通りみているかと思いますが、パークレーの雰囲気や基本情報を把握するために一度時間をとって眺めてみてください。  
 研究や教育だけでなく、キャンパスライフとして、様々なアクティビティの紹介もあります。

【GSI Teaching & Resource Center】 <http://gsi.berkeley.edu/>  
 GSIとは、Graduate Student Instructor の略で、パークレーのいわゆるTAのことです。今回プログラムを提供してくれるのは、このセンターのスタッフたちです。ウェブページでは、GSIに関する様々な情報や研修プログラムの案内について公開されています。TAとして働くうえでこういった要件があり、どんなトレーニングを受けているのかについて知っておくと、実際にGSIに会った時に理解が深まるでしょう。

特に、センター長のLinda 先生には教養・学習に関するレクチャーをしていただきます。とっても優しい素敵な方です。

\*\*\*\*\*  
 それでは、渡航まで体調を整えつつお過ごしください。  
 次回のメール配信もお楽しみに！

今野

---  
 (署名省略)

②【PFFP/NFP】パークレー研修に向けて(2) 2017年2月7日 8:58

パークレー研修参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。「パークレー研修に向けて」メールマガジンは1か月前に送ってしまいました。

みなさん、いかがお過ごしでしょうか？中には、先週報道にあったパークレーでの暴動を知って心配されている方もいるかもしれませんが、私も、よく見慣れた場所が壊されていく、火を付けられたりしている映像を見て、ショックを受けたのですが、現地スタッフは驚くほど落ち着いておりキャンパスも既に通常に戻っているようです。なので、みなさんも過度な心配はせず着々と準備を進めてもらえればと思います。

パークレーといえば、フリスビーやピッチの地。興味がある人はぜひ調べてください。研修中のキャンパスツアーでも、これを知っていると、倍楽しめる解説もありますので、ご期待ください！また、今回の暴動化したのは、実は学生ではなく、外部の団体のメンバーだということもあります。冷静に受け止めて判断したいと私も思っています。

この報道を受けて、アポ取り連絡をストップしていましたが、今週から随時進めて行きたいと思っています。よろしくお願いたします！

さて、今回のメールでは、現地でのプログラムスケジュールを解説します。添付ファイルは、現時点でのスケジュールのドラフトです。印刷して手元に置きながら、下読を確認するとわかりやすいと思います。

- 【1日目(27日)】
- ・ Welcome and Introduction to the Program  
プログラムの全体を紹介するイントロダクションと現地スタッフとの顔合わせです
  - ・ Teaching and Learning at Berkeley  
パークレーでの教育、学習についてのレクチャーを受けます。レクチャーを担当するのは GSI センター長のリンダ先生です。
  - ・ The Basics of Teaching  
ティーチングの基本について、現地で GSI が学んでいる内容をもとにレクチャーをしていただきます
  - ・ Lunch  
各自キャンパス内、あるいは周辺で自由に昼食をとります。
  - ・ Campus tour  
パークレーのキャンパスツアーをします。
  - ・ フィールドワーク  
15:00～フィールドワークの時間です。  
この時間にアポを入れてもよいですし、図書館や学内施設の見学をするなどして有意義に過ごしましょう

- 【2日目(28日)】
- ・ Observation: The Politics of Educational Inequality (調整中)  
全員で講義を参観します。
  - ・ Workshop: Fostering Student Participation/フィールドワーク  
パークレーの教員向けのワークショップに参加するが、自分でフィールドワークをして週ごころを選択できます。
  - ・ Lunch  
各自キャンパス内、あるいは周辺で自由に昼食をとります。
  - ・ フィールドワーク  
～15:00 までフィールドワークの時間です。
  - ・ Observation: Brain, Mind, and Behavior  
全員で講義を参観します。

- 【3日目(1日)】
- ・ Observation of GSI session (The Politics of Educational Inequality)  
前日に見学した講義の GSI セッションを見学します。  
「GSI セッション」とは、陸生 TA による授業を指します。ディスカッションや課題の解説などが主な内容になることが多いです。現地の大学院生がどのようにこのセッションを運営しているのか

実際に見ることが出来る貴重な機会です。  
ただし、GSIセッションは少人数で行われるため、一度に参加できる人数が限られています。2つの時間帯がありますので、2グループに分かれて見学します。  
9時または14時開始のセッションから、どれかひとつを見学してください。  
また、それ以外の時間は、フィールドワークの時間に充ててください。  
どのセッションで参加するかは、アポの状況と希望順で決めます。  
すでにアポが取れている、どのセッションに参加すべきかわかっている人は今野まで連絡をください。基本的に早い者勝ちです。  
後ほどセッションわけをします。

- Briefing of Day 2  
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Observation of GSI session (Brain, Mind, and Behavior)  
前日に見学した講義のGSIセッションを見学します
- 11時から16時開始のらる、どれかひとつを見学してください。  
また、それ以外の時間は、フィールドワークの時間に充ててください。  
• Graduate Student Social Event  
現地のGSIらとディナーに行きます。みんなが割り勘するので、その心づもりをお願いします。

#### 【4日目 (2日)】

- Briefing of Day 3  
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Student Learning Center  
学生の学習支援を担うセンターを見学します
- Lunch with GSIs  
現地GSIと昼食をとりながらディスカッションをします
- フィールドワーク (13時以降)  
各自フィールドワークの時間に充ててください

#### 【5日目 (3日)】

- Overview of Day's Program  
本日の内容の確認と、昨日の内容のリフレクションを行います
- Professional Standards and Ethics Workshop  
倫理についてのワークショップを行います
- Presentations  
本研修のまとめとして、みなさんが成果発表をします。  
内容は本研修の成果を基ずるものであれば自由です。  
使用言語は英語で10分間とします。  
発表スタイルは自由ですが、例年PPTを作成して発表する例が多いです。

詳細や補足情報は22日のセミナー時にお伝えします。  
何か気になることや不明な点があればお問い合わせください。

今野...  
(職名省略)

#### ③【PF/FANFP】パークレー研修に向けて (3) 2017年2月17日 18:58

パークレー研修 参加者のみなさま

研修授業お疲れ様でした。いや〜長丁場でしたね。  
ささっとリフレクテリブジャーナルを提出して  
なるべく早く、意識をパークレー研修モードにしていくことをおすすすめします。

来週がフィールドワークのアポを固める勝負(最後)の一週間です。  
1件でもアポが取れている人は、それに向けて準備をしておいてください。  
2件目、3件目も取りたいという方は、現地スタッフと相談しますその  
その旨、ご連絡ください。

複数アポが取れ始めている人は、ダブルブッキングにならないよう  
気をつけてスケジュールを整理しておいてください。

スケジュールが確定し始めたら、前回のメールでご案内した通り

3日目のGSIセッションの希望の時間をメールでお寄せ下さい。早い者勝ちです。  
(既に連絡済で、私の方から「予約確定」の連絡をもらった人は必登ありません。)

【現時点で予約済みの方々】  
Observation of GSI session (The Politics of Educational Inequality)  
9時～: 田中さん、吉田さん、王さん  
14時～:

Observation of GSI session (Brain, Mind, and Behavior)  
11時～: 田中さん、  
16時～:

必ずしも、全てのフィールドワークの時間をアポで埋める必要はありません。  
現地に行つてからとれるアポもあるかもしれませんし、キャンパスの各種設備、  
図書館や博物館を見学するということもありません。

例年、参加者は現地に入ってからGSIや現地スタッフから情報を得たり  
新たな授業参観、ディスカッションの機会を得ており、フィールドワークの  
時間が足りないと感じる人もいます。(出発前の1件のアポが参観して、ゼミに出席したり  
その先生の授業を見学したり、ホームパーティーに呼ばれたり...。ただしこれは、入念に  
準備をして臨み、議論が盛り上がったケースに限ります。準備不足で臨んだ場合には  
後でお叱りのメールが届くこともありますので、十分気を付けてください。)  
ということなので、パララスタスを考えてスケジュールをたててもらえればと思います。

また、充実した活動にするには、積極的に自分からコミュニケーションをとって  
行動を起こすことが大事です。

なお、本メールには、パークレーのキャンパスマップを添付します。  
自分がフィールドワークに行く場所の確認にお役立てください。

それでは、本日分の参考ウェブページのご案内です。

\*\*\*\*\*

#### 【The Politics of Education Inequality の授業情報】

<https://schedulebuilder.berkeley.edu/explore/courses/SP/2012/6178>  
見学に行く授業のうち、教育学分野の講義に関する情報です。  
過去にこの授業をとった学生の成績分布や、授業の受講者数などの  
データが参照できます。

また、下記のサイトでは上記の授業を受講した学生による授業評価コメントを  
みるができます。いろいろと面白い指摘がなされていますので  
ぜひ目を通して見てみてください。  
<https://minjiaocourses.com/ratings/view/course/19381/>

#### 【Brain, Mind, and Behavior の授業情報】

<https://schedulebuilder.berkeley.edu/explore/courses/SP/2016/17718>  
2日目の午後に見学に行く授業の情報です。

下記からは、シラバスをダウンロードすることができます。  
かなり詳細にわたって情報提供がなされていますね。

<http://mcb.berkeley.edu/labs2/prestifiles/mcb.berkeley.edu/labs2.prestifiles/u3/Syllabus%20BMB%202016.pdf>

また、下記のサイトでは上記の授業を受講した学生による授業評価コメントを  
みるができます。

<https://minjiaocourses.com/ratings/view/course/6520/>

#### 【宿泊先の情報】

<http://www.berkeleyabquesthouse.org/>  
宿泊先となるパークレーゲストハウスのウェブページです。  
宿泊先は、パークレーの山の上にあります。  
イメージとしては青葉山の中に位置している感じです。  
皆さんはスタンダンチームを2名でシェアします。  
アメニティの情報も載っていますので、確認してみてください。  
バスタオルとボディースーツ、シャワーなどはあります。  
蘭プランシバジャマはありませんで、お忘れなく。  
平日は無料で乗車できるシャトルバスが運行しています。

毎日のバスを利用してキャンパスに通うことになりました。

【シャトルバスの情報】

[http://www2.libi.gov/Workplace/Facilities/Support/Busses/off-site\\_blue.html](http://www2.libi.gov/Workplace/Facilities/Support/Busses/off-site_blue.html)  
グスタフバス最寄りのバス停は、「54」です。  
キャンパスに行くには「Euclid」のバス停で下車することが多いです。  
6:30~20:00の間は10分おきに出ています。  
19時を過ぎると、グスタフバスまで行かず山の中腹でサービス終了と  
なってしまうバスもあるので、各自時刻表を確認してください。  
グスタフバスに到着したら、このバス用の pass をお渡しします。  
買った一枚の紙なのですが、これを持っていないとシャトルバスには乗れません。  
シャトルバスのサービス終了後は、例年、タクシーなどを利用しています。  
また、到着日である26日は日曜日であるため、このシャトルバスは利用できません。  
タクシーを使います。

\*\*\*\*\*  
(署名省略)

それでは、渡航まで体調を整えつつお過ごしください！  
特にこの週末は冷えるとのことですので、十分気を付けてくださいわね。

今野

..

(署名省略)

④ 【PFFPNFP】パークレー研修に向けて (4) 2017年2月21日 11:09

パークレー研修参加者のみなさま

来週の間頃は、すでにパークレーのアプローチもいよいよ佳境を迎えているかと思えます。  
フィールドワークの準備もいよいよ佳境を迎えているかと思えます。

フィールドワークでお世話になる先生方に、ちょっとしたものでよいので  
細心の気持ちは示せるような「お土産」を持参することを強くおすすめします。  
東北グッズでもよいですし、仙台のものでも喜ばれるでしょう。  
過去には「こけし」をしょっていった参加者もいましたが、そこまでなくとも  
多忙な中、時間を割いてくれる先生方への感謝の気持ちを表すものとして  
何がよいかが、この週末の時間を充てて考えてみてください。

これまで3回にわたってお届けしてきましたが「パークレー研修に向けて」  
はチェックしていただいているでしょうか？  
みなさんそれぞれに忙しく過ごしていることかと思いますが、少しでも  
時間を有効に使うため、目を通してもらったり、紹介しているウェブサイトに  
アクセスしてもらえたら嬉しいです。

例年、研修前に「もっと英語を頑張っておくと尻を叩いてほしかった」という  
意見が寄せられます。今日は、英語への耳ならしの意味を込めて、動画を2本、  
記事を1本、ウェブサイトを1件紹介します。

\*\*\*\*\*  
【The Science of Learning: An Overview for Graduate Student Instructors (GSI)】  
<https://youtu.be/8KfP-wlF5>

この動画は2016年にパークレーで開催された Teaching Conference for First-Time GSIs に  
おける講演の様子です。初めて GSI を担当する学生のためのオリエンテーション的性質づけの  
カンファレンスです。30分程度の動画です。オプショナルで設定すれば字幕も表示できるので  
Teaching について語るボキャブラリーの確認や英語に慣れるという意味でも役に立つと思います。  
また、GSI たちがどのようなトレーニング、知識提供を受けているのかがについて  
知ることができている内容になっています。

動画の冒頭に登場するのが、私たちが現地でお世話になるリンダ先生です。  
現地スタッフにフィールドワークのアプローチのアシストをお願いします。  
このリンダ先生が煙々にコーディネートして下さっています。

【Berkeley's 2016 Distinguished Teaching Award】

<https://youtu.be/KZssFaVsJ60>

2016年のパークレーの教育賞受賞者のビデオです。  
授業の様子や学生の様子、それぞれの教師がどのように教育を考えているかが  
垣間見られる内容になっています。  
6分弱と短い動画なので、ちょっとした休憩時間にぜひ見てみてください。  
パークレーの教員、学生のタイハーンティンも出てきます。  
東北大でもこんなビデオが作れないかな〜とも思っています。  
2015年 Ver. などもあるので、興味があったらぜひ見てみてください。

【GSI Teaching & Recourse Center の Linda von Hoene 先生関連の記事】

<http://grad.berkeley.edu/news/egrad/how-students-learn/>  
我々がお世話になる GSI センターのセンター長関連の記事です。  
記事の内容からは、「学び」についての研究や、Linda 先生がそれに対して  
どのように取り組んできたかが、Berkeley で起きていることとして  
理解できるかと思えます。

【Student Learning Center のウェブページ】

<http://slc.berkeley.edu/>  
3日木曜日の午前中に開学に行く予定の、Student Learning Center のウェブページです。  
東北大学の SLA のお手本、見本となった取組みがなされている場所です。  
他にも学生の様々な側面へのサポートが展開されています。  
国内調査に参加した人は、東北大学だけではなく、立命や同窓社のサービスクラスとの  
比較ができると思えます。

\*\*\*\*\*  
(署名省略)

直前の一週間、ぜひ計画的に準備を進めていってください。  
応援しています！

今野

..

(署名省略)

⑤ 【PFFPNFP】パークレー研修に向けて (5) 2017年2月23日 12:35

パークレー研修参加者のみなさま

大学教育支援センターの今野です。  
昨日の事前研修、お疲れ様でした。

いよいよ出発が3日後に迫りました。  
体調と心の準備を万全にして、先発組のみなさんは羽田空港、  
後発組のみなさんは、パークレーで会いましょう。

こそっと、お伝えしておきますと、昨日の事前研修も  
リフレクティブジャーナルの対象です。ほんの5分くらいいいので  
気づいたこと、感じたこと、パークレーで自分は何に焦点を当てて  
学びたいかについて、ちやちやと書いて提出してしましましょう。  
提出期限は2/27(月)としますが、どうしても時間が取れない場合には  
パークレー研修後でも OK です。

また、明日、2月24日15時締切で、以下をメールで私宛に送ってください。  
(田中さんは、もうお送りいただいているので不要です。)

★フィールドワークのスケージュール

面会相手の名前、日時、場所  
今野の方でも控えています。念のためダブルチェックしておきたいと思えます。

まだ出発前ですが、帰国後のスケジュールをおさらいしておきます。  
3月5日に帰国してからは、いるいると忙しい日が続きます！  
どうか計画的にこなしていきましょう。

3月8日(水) 海外研修リフレクティブジャーナル提出締切

3月14日(火) 先達コンサルテーション

3月17日(金) 先達コンサルテーション

3月17日(金) 最終レポート提出締切

3月23日(木) 成果報告会

パークレー研修のリフレクティブ・ジャーナルは研修全体をまとめて1本でかまいません。もし毎日提出したいという場合には、拒みませんが負担が大きくなると思うので、自分で考慮してください。

3月14日の先進コンサルテーションでは、先進の先生方と30分程度個別にお話しできます。プログラムを通して明らかになった疑問や課題「先生はこんな点についてどうしているんだらう？」という素朴な質問をぶつけてみます。もし、「この先生とお話ししてみたい！」という希望があればメールでお知らせください。組合せを設定するときに配慮します。

また、23日の成果報告会では、プログラム全体を総括する成果報告のプレゼンテーション(一人当たり10分程度)をしていただきます。パークレー研修だけが発表内容になるとは限りませんが、滞在中から写真や資料集めなどを心がけておくと、スムーズに進むと思います。

最終レポートの締め切りは、3月オリエンテーション時にお渡ししたプログラムに掲載していた期日に限りがありましたので訂正いたします。正しくは3月17日です。この締切におくると修了証が発行できない事態になる場合があります。かならず締め切りを守るようにしてください。

そのためにも、パークレー滞在中から、意識して文章化を進めておくことをおすすめします。

「パークレー研修に向けて」は、本メールを含めてこれまでに5通お送りしましたが目を通してもらえたでしょうか。またの方は、ぜひ渡航前に紹介しているウェブサイトにアクセスしてみてください。

さて、今日はもう直前ですので最後の情報提供のみです。

【パークレーの天気】

<http://www.accuweather.com/us/berkeley-ca/94704/february-weather/332044>

昨日お伝えした時よりも、日・月の天気が悪いようです。

せめて、キャンパスツアーの時には晴れるといいですね！

【パークレーのレストラン情報】

<http://hatchstudioinc.com/archives/3559>

レストラン情報はネット上にいろいろあるので、興味があれば調べてください。

過去には、上記のページで紹介されているお店のうち、ベトナムと中華料理、

タイ料理のお店、そしてAu Coquetlet Cafe Restaurantに行きました。

初日のお昼にAu Coquetlet Cafe Restaurantでバーガーやハンケーキを食べるのが

ここ数年の恒例になっています。当日のお腹のコンディションと相談して

どこで食事をとるか相談しましょう。

ちなみに、3年前の最終日は何故か「チベット料理」、2年前は「残った食料処理の会」

でした。

※現地でお酒を飲む時、買うときは、日本人の場合、必ず年齢確認をされます。

バスポートを持って買い物に行くようにしましょう。

それでは、まずはみなさん、心身ともに健康で時間通りにお会いできるようお願いいたします！忘れ物のないように！

今野

--

(署名省略)

◎【PFPPNFP】パークレー研修に向けて(6) 2017年2月24日 16:18

パークレー研修参加者のみなさん

大学教育支援センターの岡田です。

現地の交通機関とパークレーの街についてのガイドブックを

以下のアドレスにアップしました。パソコンにダウンロードするなど

して参考にしてみてください

それではまた空港・パークレーでお会いしましょう

--

(署名省略)

## PFFP

石原雅文

## 受講前

大学での講義経験がない

アドバイスをしていた高校生が全国大会に出場

## 動機

- 学生教育の方法を専門的な知識、方法とともに身に着けたい。
- 研究者でもあり教育者でもある大学教員という仕事についていろんな視点から知っていききたい。
- この講座を通じて、自分なりの大学教員像を形作っていききたい。

大学教員とは「組織に雇用された総合的専門家」 羽田先生

心理面 感情知性(箱田先生)  
授業づくり・準備と運営(邑本先生)

実践面 シラバス作成(串本先生)  
院生指導・コーチング(出江先生(実はご近所)、倉重先生)  
授業参観

実践 模擬授業・マイクロティーチング

## 心理面

感情知性: EIの測定及び向上の可能性。一般化知性と線分弁別検査

授業準備と授業運営: 既有知識を刺激、3つの「そう」、  
具体と抽象の往復

## 実践面

シラバス作成: 初の作成、授業目標は可を基準に  
ルーブリック(レポート作成の基準)

コーチング: 聴くことの難しさと重要性 未来解決型のコーチング

授業参観 フィードバックの重要性、具体的な授業配分  
耳に残るフレーズ、板書だけでなくプリントの活用  
グループワーク

## 模擬授業・マイクロティーチング

緊張しました。

板書形式(力学:慣性の法則 深く考えすぎると自分もよく分からなくなるトピック)

改善点: 字の大きさとスピード、書くタイミングと話すタイミング、  
声の大きさ、図の丁寧さ、問いかけの仕方 etc..

良かった点: 背筋が伸びてた。

## 異分野交流

学生と教員の関係 (フラット型 垂直型)

学び方 (積み上げ式 幅広く学ぶ式、グループワーク、講義形式)

専門的な知識に基づいた実践的な方法が身に着いた  
理系の授業参観では、現場ならではの授業運営を具体的に知ることできた。  
文系など異分野の授業参観では、相対的な視点で理系の授業を見ることができた。  
大学教育の面白さを再確認  
模擬授業を通じて(少し)自信がいった。  
パークレーに行きたかった。



# 2016年度PFFP成果報告会

2016年PFFPフルコース 王偉  
国際文化研究科 専門研究員

## プログラム参加する前に

大学教員の仕事

教育

研究

サポート

## 授業の流れ



## 学んだこと・変わったこと

- (1) 知識
- (2) スキル
- (3) 教育観

### (1) 知識

- ① 箱田裕司教授の「学習意欲とEQ」
- ② 出江紳一教授の「ティーチングとコーチングの違い」

### (2) スキル

- ① 授業デザイン (シラバス作成)
- ② 授業の難しい部分を実演する (邑本俊亮教授のセミナー)
- ③ 質問を提示するタイミング

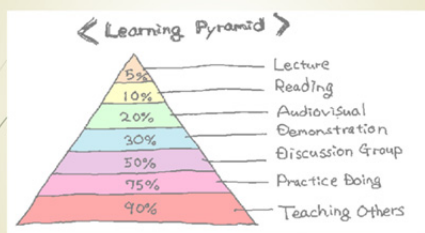
### (3) 教育観

- ① 教育者の視点から学習者の視点へ
- ② 専門以外の知識に触れる
- ③ 常に内省する

## まとめ

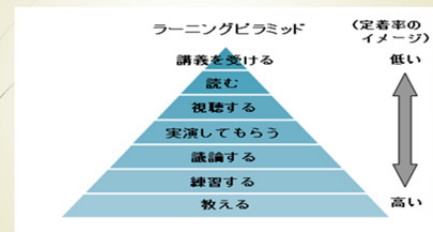
- 人を教えてからこそ自分自身の不足が分かってくる (マイクロティーチングや模擬授業など)

## Learning Pyramid



図出典 : <http://pettomo.azurewebsites.net/?p=3401>

## ラーニングピラミッド



図出典 : <https://allabout.co.jp/gm/gc/449536/>

まとめ

人を教えるからこそ自分自身の不足が分かってくる



教える前に教える知識やコツを学ぶべき

このプログラム（PFFP）が教える基礎・コツを学ぶ貴重な場

# PFFP

## Preparing Future Faculty Program 成果報告

東北大学大学院教育学研究科博士課程後期  
林 慎吾

### 2016年度 PFFPスケジュール

1. 「オリエンテーション」
2. 「授業デザインとシラバス作成」
3. 「授業づくり：準備と運営」
4. 「本当のかしこさとは何か－感情知性と大学教育－」
5. 「国内他大学訪問調査」
6. 「マイクロティーチングセミナー」
7. 「コーチング技能を活用した院生指導」
8. 「模擬授業」
9. 「海外他大学訪問調査 事前研修」
10. 「海外他大学訪問調査」
11. 「先達コンサルテーション」

※随時  
授業参観  
に参加

POWERPOINT DESIGN 2

### PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 
- 
- 
- 

POWERPOINT DESIGN 3

#### 1. シラバスの書き方を理解する

PFFP研修を受講する前は、シラバスの役割について考える機会はなかった。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> <li>☐ 「教員が授業で何をやるか」示すもの</li> <li>☐ 学生が授業内容を参考にするもの</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☐ 「学生との関係づくり」に必要なもの</li> <li>☐ 「授業設計」を具体化するもの</li> </ul>

シラバスは大学教員と学生との架け橋となるツールである！

POWERPOINT DESIGN 4

### PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- 
- 
- 

POWERPOINT DESIGN 5

#### 2. 授業準備の重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、「授業の準備にどのくらいかけるものか」、「魅力的な授業とは何か」分からなかった。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> <li>☐ 先達教員のように魅力的な授業を展開したいと考えていた</li> <li>☐ 学生時代に受講した授業の中でしか、考えることができなかった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☐ 実際に先達教員の授業を参観することが必要</li> <li>☐ 質の高い授業を行うために、日々チャレンジする</li> <li>☐ 経験も必要</li> </ul>

魅力的な授業は一朝一夕で出来るものではない！

POWERPOINT DESIGN 6

### PFFPで得られた5つの成果

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング（模擬授業）の重要性を理解する。
- 
- 

POWERPOINT DESIGN 7

### 仙台市には盲導犬は何頭いるでしょうか。

- A. 0頭
- B. 1頭～10頭
- C. 100頭

POWERPOINT DESIGN 8

**仙台市には盲導犬は何頭いるでしょうか。**

A. 0頭

**B. 1頭～10頭**

C. 100頭

POWERPOINT DESIGN 9

3. マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、先生方を目の前に授業をすることは不安でした。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> <li>自身の授業を見られるのは恥ずかしいな、不安だなと思っていた</li> <li>他の人から指摘されるのは少し苦手だなと思っていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>先達教員(第三者)からのアドバイスは重要である</li> <li>自分の授業している姿を見ることは重要である</li> <li>褒められるとうれしい</li> </ul>

客観的に授業を見ることは重要!

POWERPOINT DESIGN 10

**PFFPで得られた5つの成果**

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する。
- 比較する目を持つことの重要性を理解する。
- 

POWERPOINT DESIGN 11

3. 比較する目を持つことの重要性を理解する

障害者に対する制度等の日本と米国の比較

	日本	米国
基本法	障害者基本法	ADA
福祉サービス	自治体によるサポート充実 ・障害者手帳発行 ・障害者総合支援法	民間団体によるサポート充実 ・個人で障害者申請できる ・自立支援活動活発
差別された時	まずは自治体に相談をする	法的には個人で訴えるのみ

米国が日本の好事例を取り入れていることもある!

POWERPOINT DESIGN 12

4. 比較の目を持つことの重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、米国の先進事例を学び、日本でも活用することが重要だと考えていた。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> <li>米国は日本よりも進歩しているイメージを持っていた</li> <li>米国の事例を参考にするのが重要だと思っていた</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>米国の事例を参考にすることも重要</li> <li>日本の好事例を発信していくことも重要</li> </ul>

比較することは重要!

POWERPOINT DESIGN 13

**PFFPで得られた5つの成果**

- シラバスの書き方について理解する。
- 授業準備の重要性を理解する。
- マイクロティーチング(模擬授業)の重要性を理解する。
- 比較する目を持つことの重要性を理解する。
- 複数でリフレクションを行う重要性を理解する。

POWERPOINT DESIGN 14

5. 複数でリフレクションを行う重要性を理解する

PFFP研修を受講する前は、過去の研修資料などを見てリフレクションすることが重要だと考えていた。

Before	After
<ul style="list-style-type: none"> <li>PFFP研修のキーポイントの一つとしてリフレクティブジャーナルがあると考えていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「一人で」のリフレクション、「対話で」のリフレクション、「集団で」のリフレクションを行うことが重要であると理解。</li> </ul>

複数でリフレクションを行うことは重要!

POWERPOINT DESIGN 15

**ありがとうございました!!**

POWERPOINT DESIGN 16

# 東北大学 PFFP・NFP 成果報告会

東北大学サイクロトロン・ラジオアイソトープセンター  
田中 香津生

## 大学のシステム

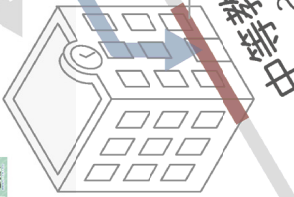


高大連携  
QuarkNet  
オープンキャンパス  
中高を対象とした施設見学



学での転換2

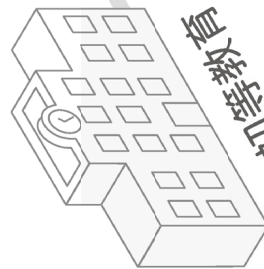
高等教育



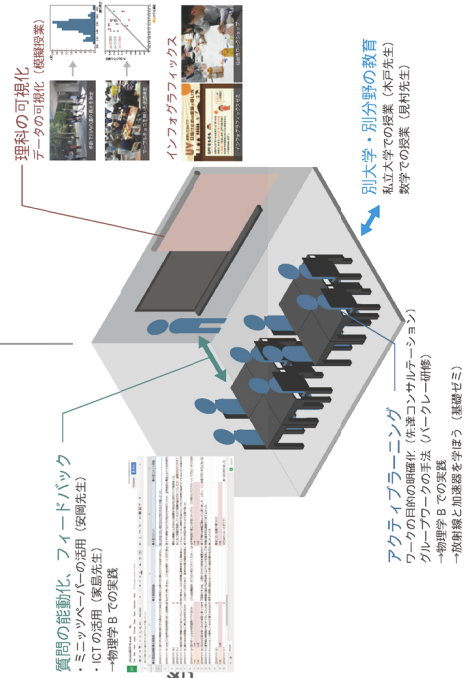
2012年~2014年  
お家実験レポート  
物理(高1~2)  
科学と人間生活  
課外研究活動、研究発表の啓発

2008年~2012年  
作文教室  
天文教室

学での転換1




2016年~  
放射線と加速器を学ぼう(基礎ゼミ)  
可視化の時代(基礎ゼミ)  
物理学B  
インフォグラフィックスゼミ(自主ゼミ)







教員養成課程を持たない教育学部で  
教員をするということの意味を  
あなたはどのように考えますか？



グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてくるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

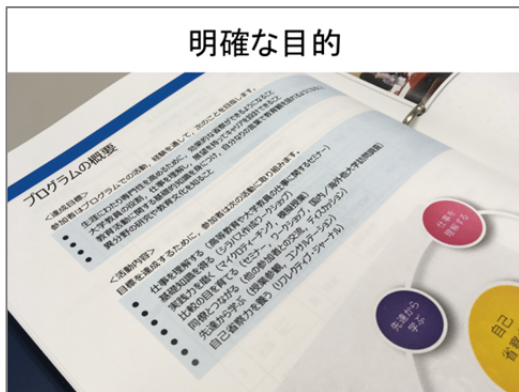
グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてくるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

グループワークを活用する	学生同士が学び合える場を作る	学生の将来展望と結びつける	優先順位を明確化する	目標と評価を一貫させる
インタラクションを活用する	見えてくるものは人によって違う	互いの強みを認める・ほめる	手段としての選択肢を増やす	提供する情報に重み付けする
配布資料を活用する	異なる強みをもつ人と出会う	自分の常識は他人の非常識	評価・更新を継続する	学生の準備状態を知る
ISTUを活用する				学生に合わせて授業を変える
メディアを活用する	他者の視点を受け入れる	自分の強みを知る・活かす	目的から手段へ	既知知識を活性化
ループバックを活用する				全体像や現在地を示す
フィードバックを活用する	学生と双方向的に学び合う	結果ではなく過程としての一貫性を保つ	学んだものを受身的に取り入れれない	成功体験を積ませる
提出物を活用する				試行錯誤を繰り返す
グループ分けに配慮する	学生の目標から授業を見直す	自身の態度を振り返る	経験者から学ぶ	学生の自主性に甘えない
驚きを引き出す	主体性を導く質問を活用する	学生自身に問いかける	時間的展望をもって指導する	規模に関わらず授業は授業

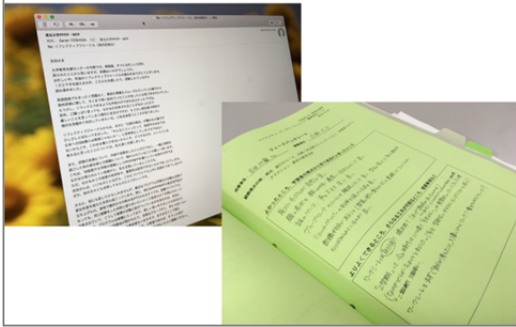
自分で見つける

### 「自分で見つける」を支援する

- 明確な目的
- 適切な素材
- 継続的なフィードバック

## 継続的なフィードバック



教員養成課程を持たない教育学部で  
教員をするということの意味を  
あなたはどのように考えますか？



## 2016 年度 東北大学 大学教員準備プログラム

Tohoku University Preparing Future Faculty Program



最終課題：あなたが考える学生にとって大学でのよい学習経験とはどのようなものだと考えますか。また、そういった学習経験を実現するために、大学や大学教員は何をするべきだと考えますか。

私は、体系的に大学教員としての指導方法を哲学を身に着けた上で、将来、学生教育及び指導に臨みたいと思ひ、この PFPNPFP プロگرامを受講しました。

まず、7月のオリエンテーションでは、今後ともに学ぶフルコースのメンバーとの初顔合わせとなりまりました。同じ物理学の方について心強く思うとともに、心理学や法学、社会問題の先生など、普段知り合うことが難しい様々な分野の方々との相違点や共通点など、興味深い話をすることができました。大きな相違点としては「学び方の違い」が印象的で、具体的な、物理学などの理系科目では割としっかりとしたカリキュラムの元で積み上げ方式で学んでいくのに対して、心理学などの人文系では、学生はまずはいろいろなることを幅広く学んでいく方法がとられていました。一方、共通点としては「教員と学生との関係」があり、物理学、心理学ともに、学生と教員との関係が割とフラットな関係になっているということが分かりました。このような相違点と共通点を認識することで、自分の専門分野の物理学の学び方を相対化することができ、今後につながる新たな視点を得ることができました。

また、このような分野間の細かな情報は、実際にその分野に携わっている方と交流しないと分からないので大変有意義な初顔合わせでした。オリエンテーションでの羽田先生の講演で言われた「組織に雇用された総合的専門家」という、大学教員の定義は非常に印象深く、受講前まで漠然としていた大学教員という職業に対して、明確な職業観を得ることができました。

8月の串本先生の「授業デザインとシラバス作成」という講義では、シラバスの作成の仕事、及び成績評価の方法を実践的に学ぶことができました。「目標→成績評価方法→内容という順番で書き、目標には最低限の意図する学習成果を記述する」というシラバスの書き方を知ることができたのは大変有意義でした。とくに、受講前はシラバスの授業目標に対して「授業を完全に習得した状態の理想の学生が達成している目標」と認識していたが、それは間違いで、シラバスの授業目標とは「単位を取った水準の学生が最低限習得しておくべき授業目標」ということが分かり、非常に勉強になりました。ただし、教員の考える「最低限の目標」が、学生にとって「高度な目標」になる危険性もあるので、この調整は、授業の実践を通して身に付けていく必要があると思います。

成績評価においては、習得すべき知識や技能だけでなく、態度も評価対象として点数を配分するということを学びました。実際問題として、物理学の講義では、どうしても知識や技能に大きく偏った点数配分になってしまいがちですが、ゼミなどの学生の自主性が問われる授業では、学生のゼミに対する積極性などの態度も明確に評価する必要があると改めて思いました。また、レポートの評価に対して評価の客観性を担保するために、あらかじめ評価基準を明確にする「ルーブリック」という手法を学ぶことができたのは有意義でした。今後、「物理学概論」など文系向けの全額教育でレポート課題を出す機会もあり得る

ので、「ルーブリック」を作ることで、学生に対する公平な評価を心がけていこうと思ひます。

9月の邑本先生の「授業づくり：準備と運営」では、学生が授業を理解することに於いて、既知知識を持つていること、及びそれを活性化することがいかに重要であるかを、具体例を通して学ぶことができました。たしかに、私も既知知識がある物理学の分野の本よりも、あまりない分野の本の方が難しく感じます。講義では、学生に単に授業内容を伝えるだけでなく、学生が既知知識をしっかりと保持し、それを授業時に活性化させるために手助けをすることが重要であると実感しました。また、授業外の予習復習等も、学生が既知知識を自身で活性化させるという明確な目的があるということが知られることができ、今後授業で宿題を課す上での重要な指針を得ることができました。また、学生が授業での新情報を既知情報に関連付けて、「発見」、「共感」、「自己関連付け」の3つの「そう」を体験することで授業内容の理解が深まることも学びました。ただし、学生がこの関連付けをしている間に、授業が進んでしまひ、学生が置いて行かれてしまひ状況になる危険性もあるので、授業スピードと、学生の理解する速度のバランスには気を配らなければならぬと感じました。また、具体と抽象の往復により「理解」をゆきぶり、3つの「そう」により、感情を揺さぶることで、学生の授業にたいする意欲を引き出す話も、私自身が学生時代に経験していたことなので、大変興味深く、非常に納得できる話でした。

10月の箱田先生の「本当のかしこさとは何か 感情知性と大学教育」では、知能因子である IQ 及び、情動的知性である EI を学ぶことができました。まず知能因子に関して驚きだったのが、様々な「頭の良さ」の奥底には、一般知能因子が存在する可能性があり、線分の知能弁別検査の処理速度によって測定可能であるということでした。知性とは何かというのは、かなり大きなテーマなので、今後どのように研究が進んでいくのか大変楽しみです。

また、情動的知性の EI テストに関しても、人物情報処理のない表情認知検査との間に有意な相関があることで、客観的に情動的知性を測定ができ得ることを知り、また、SEL によって、EI の向上もでき得ることを知り、非常に興味深く思いました。ただし、感情面での成長は重要だが、学生の個性との兼ね合いも考慮する必要があるとも思いました。

12月の出江先生、倉重先生の「院生指導法セミナー」では、コーチングに関して初めて具体的に学ぶことができました。大学院生は、学部生と異なり、主体的に研究を進め、独力で論文を書いたり発表をしたりする能力を身に付けられるようになる必要があるため。そのために、ティーチングだけでなく、院生が主体的に目標を達成できるようにするためのコーチングが非常に重要であることを、学ぶことができました。とくに出江先生により教わった、問いを共有するという未来解決型のコーチング(問いかけ)は、院生が前向きに日々の課題に向き合う上で、大変有益な方法であると感じました。また、院生に対してしっかりととしたコーチングをするために、意識的に適切なコミュニケーションスキルを身に

着ける必要も実感しました。今後相継のレバートリーを増やすなどして、意識的に改善していきたいと思っています。また、倉重先生の「聴く技術」に関するワークショップでは、実践的な話を聴くことは予想以上に難しいことだと実感するとともに、有益な「聴く技術」を学ぶことができました。この経験を生かして今後意識的に院生の話を聴くように努めていきたいと思っています。

PPFP/NFP では、授業参観を通じて、先生方の具体的な授業方法及び授業に対する哲学を学ぶことができました。数学の見村先生の「まず授業で何を伝えたいかを1つか2つか決め、それを基に授業の幹となる流れを作り、そして肉付けをしていく」と具体的に授業方法を学べたことは非常に有意義でした。この方法は、今後授業だけでなく、研究会などに物事を分かりやすく伝える上での指針となりました。また、中間試験などにより、学生の理解度を教員が把握する重要性も学ぶことができました。早川先生の応用数学の授業では、グラフを見せることによりスタターリングの公式の精度を学生に実感させたり、所ジョージのセリフ「だいたい良いから正確に教えてください」を引用して近似の極意を教えたりと、学生に興味を持たせる工夫をいくつも拝見することができました。また、演習の時間を、学生の集中力が途切れがちな授業の中ほどにとするなど、学生に90分間授業についてこさせるためのヒントを得ることができました。また、普段なかなか受講する機会が少くない文系の授業も参観できたことは、理系科目を相対的に見る上でも大変参考になりました。とくに、佐藤先生の授業では、難しい課題に対して、各グループそれぞれが興味深いアイデアを出し、それに対して佐藤先生からの的確なコメントとそれに対する学生の発言でさらに内容が深まっていくという見ごたえのある授業を見ることができ、このような授業形態は、理系のゼミなどでもぜひ取り入れていきたいと思っています。

私は大学での授業経験がないので、マイクロラーニング及び模擬授業を通じて、講義方法を実践形式で学ぶことができたのは大変良い経験となりました。とくに、私の講義を見たPPFP/NFPの仲間や先達の先生方からのアドバイスやコメントにより、黒板に字を書くスピードを上げること、字を大きく書くこと、話すときと書く時を分けること、だるま落としの練習をすることなど、具体的に改善点を学べたことは、今後講義を実際に行っていく上で、大変参考になりました。また、模擬授業のDVDで自分自身の授業風景を改めて見て直すことで、図の水平線をきちんと描かれていなかったことなどが判明し、今後注意すべき点として客観的に把握することができました。また、PPFP/NFPの方々による、パワーポイントやレジュメを用いて工夫された講義を聴けたことは、それ自身が大変面白かっただけでなく、板書中心に行った自身の授業をより客観的に把握する上で大変役に立ちました。

PPFP/NFPフルコースにより、専門家の先生方から具体的な教育方法を体系的に勉強し、マイクロラーニング及び模擬授業を通じて実践的な授業スキルを学べたことは、将来教員として学生に指導をするうえで大いに役立つとともに、大きな財産となりました。この講義で得た知識、スキルを礎にして、今後は講義の実践や学生指導によってさらに研鑽を積むことにより、教育の質の向上に努めていきたいと思っています。

## 最終課題レポート

**自分の授業や学生指導を質のよいものにするために、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。**

東北大学大学院教育学研究科博士課程後期3年の課程  
林 慎吾

PPFPの研修を受講し、自身の授業の質を上げていくために、必要な課題は大きく3つありと考える。それは、「授業デザインとシラバス設計」、「授業づくりの準備と運営」、「マイクロラーニング（模擬授業）」であると考える。それぞれについて、具体的に記述する。まず、はじめの課題であるが、「授業デザインとシラバス設計」である。なぜ課題になるかというと、シラバスの書き方が統一されていないことが挙げられる。自大学においては、統一したシラバス設計を行うことが急務と考える。まず、授業やシラバスを構築する前に、ディプロマ・ポリシーを確認する必要がある。なぜかという点、シラバスを作成する上で、最も重要な点として、「知識の習得に偏らない目標を設定する」ことが挙げられるからである。東北大学の場合、ディプロマ・ポリシーは、①専門分野に関する知識及び学問全体への興味関心と幅広い知識に基づく複眼的視野を有している、②教養ある社会人としての素養を備え、専門分野特有の技能を生かして社会に貢献できる、③グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている、である。上記の3つのディプロマ・ポリシーを鑑み、授業の目標をシラバスに記述していくことが必要になる。

具体的には、学修成果の領域を、知識・理解、能力・技能、関心・態度、に分けて目標を記述していくことが求められる。私自身が、実際にシラバスを作成した際には、上記のディプロマ・ポリシーの③のとおりわけ、グローバル社会というところについては、到達目標に反映することが難しく、自身の授業を通して、学生がどのようなグローバル人材としての素養を身につけていくのか、というところを考えなければならぬと感じた。つまり、より質の高い授業を展開していくためには、シラバスがディプロマ・ポリシーを反映しているかをもう一度、振り返る必要がある。目標の妥当性を検証する必要があると考える。さらに、授業の到達目標については、授業修了時の最低基準、つまり、授業判定ではC(可)となるが、それが達成できないければ単位を与えることができない規程を考える必要がある。また、成績評価方法については、漠然とシラバスに記載するのではなく、また、漠然と考えるのではなく、学生へのフィードバックを考慮することや、評価の規程・基準 (rubric) を明示することが必要であると考える。具体的には、PPFPの研修時では、東北大学の串本先生に用意いただいたルーブリック作成ワークシートを使うことで、合理的に評価基準等を決定したが、このような基準を基に算定していく必要があると考える。また、ルーブリッ



クのワークシートから算出した評価だけを鵜呑みにするのではなく、あくまでも目安にし、実際に授業を行う際には、柔軟に対応していく必要もあると考える。私自身、シラバスの役割は、あくまでも、学生と教員の架け橋になるツールだと考える。そのため、シラバスは教員が何をするか、記載するだけでなく、学生の目線で、授業内容の確認ができ、学修計画の参考になることを記載する必要があると考える。

次に、「授業づくりの準備と運営」の課題についてである。授業づくりについては、教員が伝えたいメッセージを伝える方法を独自に考えることが多い。専門ごとに教え方などは異なってくると考えられるため、独自に伝える方法を考えることは、誤ったことではなく、当然に必要なだと考える。しかしながら、大学教員が、効果的に学生にメッセージを伝える方法を学ぶことは重要だと考える。私自身、PFPF の研修時に東北大学の邑本先生から「授業づくり：準備と運営」と題して講義いただいた際に、印象に残っていることがある。それは、「ほとんどの教員は、学生に自分の講義内容を効果的に伝えたいと考えているにも関わらず、なかなかうまく伝わらないのか。」という問いかけから講義が始まったことである。私自身も大学で講義を受ける中で、授業内容の難易度に関わらず、講義している先生が伝えたいメッセージを理解することができている場合と理解できない場合があり、それは何故かという疑問を持っており、そのため、邑本先生の講義は非常に興味深いものであった。学生にうまく伝わらない理由として、「情報発信の不備」「知識のギャップ」「主題や要点の明確化の不備」「言語だけでは不十分」ということが挙げられる。特に印象に残っているのは、「知識のギャップ」であり、教員と学生の知識レベルに差異がある場合には、言いたいことがうまく学生に伝わらないということである。具体的には、コミュニケーションにおいて、情報の送り手と受け手の間に知識ギャップがあると、メッセージはうまく伝わらず、誤解が生じたり、受け手が理解不能になったりするということである。つまり、授業というコミュニケーションの中では、教員側の知識レベルが高く、学生側は低い状態にあり、教員が自分の知識レベルで話をすると、同じレベルの知識をもたない学生が理解できないということである。質の高い授業を展開していくためには、学生の知識レベルに合わせてメッセージを送っていくかなければならず、そのためには、学生の知識レベルをしっかり把握する必要があると考える。さらにメッセージについても、簡潔なものでなければならず、1回の授業をまとまりのあるものにし、その中で、何を伝えたいのか、要するに何が言いたいのかを明確にすべきだと考える。さらに、言語は決して完全なコミュニケーションツールではないと邑本先生も講義していたことから、質の高い授業を行う際には、言葉では伝わらないもの、伝わりにくいものがある場合、視覚的な資料等を活用して学習者の理解を促進する必要があると考える。

また、学生の意欲を維持することも重要である。邑本先生からは、「理解と意欲の関係」、「短期的学習意欲と長期的学習意欲」の2つから説明いただいたが、邑本先生の授業こそ、意欲を維持させる授業展開をされていた。私自身、大学の授業は90分間であるため、その間、意欲を維持するというのは難しいと考えていた。しかしながら、邑本先生が絶妙な

タイミングで小道具や効果音を使われることで、90分間があっというまに感じられ、授業に惹きつけられるような感覚を感じた。PFPF の研修中に邑本先生にお話を聞いたところ、邑本先生は、教員になってから、試行錯誤しながら、身につけたと話していた。学生の学習意欲を維持させる授業をすることはもちろんであるが、邑本先生のように、学生がどうやったら、理解できるのかを常に考えている姿勢こそが、非常に重要であり、質の高い授業を展開していくためには必要不可欠だと考える。そのためには、下準備には時間がかかるといふことや経験が必要だということも頭の中に入れておく必要があると考える。

次に、「マイクロティーチング（模擬授業）」の課題である。マイクロティーチングとは、授業1回分(90分)の授業計画をたて、そのうちの10分程度を実際に行うことである。マイクロティーチングを終えた後は、他の参加者からのコメントを基に、自分の授業計画の振り返りを行う。私自身もPFPF の研修際にマイクロティーチングと20分程度の模擬授業を行った。私自身、大学の講義を実際に行うのは初めてで、大変緊張したことを覚えており、また、マイクロティーチング後は自身の講義をしている様子の録画を見て振り返ると、自分自身で録画を見て振り返るという経験は非常に重要だと考える。具体的には、自身の経験で大変恐縮であるが、先達の大学教員の方々から、「導入として東北大学の写真を用いている点が良い」「驚きを与える工夫もよい」「話し方がハキハキしていてよい」など、良いところを多く、挙げていただいたことは、自信を持つことができた。大学教員を採用する際には、模擬授業を実施するケースもあるため、今回のマイクロティーチングは非常に良い経験になったと考える。一方で、録画を見て思ったことは、緊張しているせいもあり、まず無駄な動きが少しあるなと感じ、そのため、自信がないように見えた。また、声の大きさについては、ほとんどは聞き取れるのですが、途中スピードが速くなるせいか、正確に話していることが伝わっていない部分があるなどの気づきがあった。録画を見て、自信の授業を客観的に評価することは重要だと考える。このようにマイクロティーチングでは、気づきが多く、専門を異なると他の先生方からアドバイスをいただくことは非常に良い機会である。しかしながら、このような機会はほとんどの場合無いのが、現実であり、課題と考える。同一の研究科であっても、先生同士がどのような授業を行っているのかは、分からないのが現状である。おそらく、他の先生の授業を参観できるとは、PFPF などの研修に参加しなければならぬと考えられるが、今後、質の高い教育を実施していくためには、オープンな雰囲気づくりを実施していくことが重要だと考える。実際に、様々な研究科が連携して研究を行うことも増えている。高校などでは、アクティブラーニングが実践されている。大学においても、授業方法について転換する時期を迎えているのではないだろうか。時代の変化に応じて大学での授業方法も変わってくるのではないかと考える。東北大学では、他の大学に先行して、PFPF・NFP などの研修を行っている。今後も時代の変化に耐えうる人材育成(教員養成)を行っていくことが、大学が生き残っていくために、重要だと考える。

2017年3月17日  
王偉

### 最終レポート

7か月も続くプログラムで学んだことや気が付いたことをまとめます。最初にこのプログラムに参加するのは、いつか自分が大学教壇に立つ日がくるかもしれないので、その日が来るまでしっかりとスキルやノウハウを見つけておきたいと思っていました。実際この日のセミナーに参加できなかつたが、事前説明会でもらった「大学教員の役割」という資料や映像をベースに、自分の目標を以下の図の左側のように設定しました。

	教育	その他
予想	① シラバス作成 ② 授業運営 ③ 教授法 ④ 採点・成績管理 ⑤ 院生指導 ⑥ 学生からの相談への対応	① ランニングセンター、図書館、コモンズなどの施設の活用 ② TA 制度 ③ 研究との両立 ④ 精神面のケア
実践できた	① ② ③ ⑤	① ② ③
実践できなかった	④ ⑥	④

大学教員の六つの役割があるが、わたしにとって大事なものは教育と学生指導だと思い、「教育」と「学生指導」、この二つを学習目標に設定した。このプログラムが最後となる時点で、当時の予想した目標と達成した目標を上表のように提示している。

#### (一) セミナー

最初のセミナーは大学教員の役割に関するものだった。「大学教員の役割は何ですか」と自問自答した。自分の理解は浅かった。レフレクティブ・ジャーナルでも書いたが、

わたしは「大学教員」という職業は「多様な仕事の価値を理解し活動する統合的専門職」といった定義に「専門職」に新鮮感を覚えた。「専門職」と定義した以上、なぜ大学教員は「大学運営」に関わらなければならないのか。これは、当時の私にとっても理解できないことだった。このプログラムを通じて、自分の理解での「大学運営」という仕事とその本義にずれがあることが今は分かった。「大学運営」というのは「管理」だけでなく、学生指導や教学支援もその内容だ。今はもはや大学教員に多様な能力が求められる時代だ。当時学んだことだが、初期キャリアの教員はスムーズにキャリア構築を完結するのに大体5年から8年までの時間がかかる。初期キャリアの教員は、職務の重点は「教育」、「研究」と「学生指導」に置くべきだ。

8月25日の「授業デザインとシラバス作成」に関するセミナーは初めてのシラバス作成のセミナーだった。「授業デザイン」の3要素というセッションで「逆引き設計」、すなわち、「目標→成績評価方法→授業の内容」という方法論を学んだ。その後、「ワークシート作成」に入り、授業の目標という欄を見て結構迷っていた。自分の授業は文系なので、学修成果の領域に、「知識・理解」と「関心・態度」を書いたが、「能力・技能」を書けなかつた。なぜなら、文系の場合は、おそらく能力・技能を身につけるとの目標を実現しがたい。しかし、セミナーを終えて、わたしの考え方は正しくないと感じた。文系でも、文系なりの能力や技能が授業を通して身につける場合があるのではないかと考え直した。後のマイクロテイナーや模擬授業でその正しさを証明した。ほかに印象に残ったのは、「授業の目標」に「最低限の意図する学習成果」を記述すべきという新しい考え方だ。文系の場合は、教員の思い込みがやりやすいため、設定した目標と学生の学習能力に差があるかも知れない。大事なことは、教員が何をやるのではなく、学生がどうなるかだ。

9月14日の「授業づくり」で具体的な知識やスキルを学んだ。この日に学んだ最も印象に残った部分は「授業内容を伝えるために」という部分だ。伝わらない理由情報発信の不備、知識のギャップ、主題や要点が不明確、言葉だけでは不十分。以上の4点は、私の修士時代の担当した授業には全部あると痛感していた。特に第2点、教師と生徒の間の知識のギャップ、邑本先生の授業を受けるまでに、わたしは気がついていなかった。したがって、第3部分の「理解を支援する方法」で紹介された知識は、自分の不足を補うための必要なことだ。そこで習った新しい知識は「メンタルモデル」だ。必要があれば、実践してもいいという考えは大変意味深い。これからは自分の授業にも取り入れたいと思っていた。模擬授業の時、とりわけ第四点を実践した。具体的な例をプリントで配り、生徒を読ませたと同時に、要点や説明を板書し、生徒の授業内容への理解は深まったと思う。

10月14日のセミナーは「EQと大学教育の関連性」を中心に展開した授業だった。EQ教育という言葉は非常に抽象的で、「感情」、「人間関係」、「空気を読む」と連想されやすい。しかし、この講演ではじめてわかつたことは、EQあるいはEIを様々な手

段で具体化できることだ。ビネー・シモン検査、知能検査の方法があり、IT の測定で知能指数がわかってくる。このような科学的な方法は授業や生徒に対する指導にもこういう研究が活用できている。語学授業の場合、会話やグループワークが多数あるため、EI の測定が大活躍するに違いない。学生管理の場合も、EI に関する知識が活用できるかもしれない。

12月9日に、「コーチング技能を活用した院生指導」では院生指導の特徴やそれに関する留意点やスキルを学んだ。わたしはよく「コーチング」を「ティーチング」と間違える。コーチングは決して一方的な行為ではない。教育界のみならず、人間社会の様々な領域でのコミュニケーションは、上下関係を無視して平等に相手のことを思うことが大事だ。例えば、大学教員の場合、自分が教員の立場で常に教える姿勢で学生と会話を癖がある。そうすれば真のコミュニケーションは不可能だ。一度学生の視点から、自分の授業内容を見直す必要がある。学生の一見未熟な考え方を批判するのではなく、まずは褒めるのだ。その後、いい問題解決の方法や視点を提供すべきではないか。逆に言う、この情報が毎日更新する時代では、学生の方が、最新の情報にアンテナを張っているのかもしれないので、教員は自分の狭い視界で生徒の見解を判断するのはむしろ検討すべきだと思う。わたしの場合、勉強だけでなく、生活や価値観において、おそらく学生を教えたい癖がある。このセミナーを参加して、自分の教育側だが、「コーチング」の能力は足りないということが分かった。

### (二) 授業参観

3回の学内授業参観で学んだことを述べる。参観した三つ授業の共通点は語学授業であることだ。参観する前に設定した目標は主に二つある。授業の進め方とグループワーク(会話練習)だ。違いは、英語の授業の場合、ランダムでグループ分けした。日本語の授業は少人数だし、インタビュ形式で行った。中国語の授業は、グループは事前に決まった。三つの授業のグループ分けはそれぞれ違った。その理由は、おそらく学生数が違うや教員の設定目標が違うためだと思う。個人としては、事前にグループ分けするのがいいと思う。その理由は、1学期の授業を行う以上、安定したメンバーで会話練習したのが展開しやすい。それに、メンバーが慣れてきたため、会話する際緊張感が消えることが期待できる。特に恥ずかしそうな一年生にとって、自主的に会話するのはもっとも大事なことだ。

この三つの授業を参観して、今までの自分の授業を比較しながら、理解を深めたことは文法と会話練習のパララクスだ。ほとんどの外国語の授業の目標は、会話とほかの運用能力アップだが、日本語は中国語から借用することが多いため、文法を間違える人が多い。なので、初級を経た中級の中国語の学習者にとっては、上達するようになるまで、文法の説明が大変重要だと思う。もちろん、最終目標はおそらく会話能力を身に付けることだろう。しかし、学習者は一定のレベルに達したら、何かの見えない壁がある。その

壁を破れなければ、上級の学習者になれないだろう。なので、今回の授業を通して分かったのは、会話を中心に授業を展開すべきことだ。ただし、学生のレベルに合わせて文法の授業時間を調整する必要がある。

国内他大学や海外の大学の授業参観で感じたのは、専門分野以外の領域の知識や新しい方法を探ることの大事さだ。例えば藤本先生の授業は、障害教育の分野の話だった。心理テストを20分程度で行い、7割もの具体例が挙げられた。また、家島先生の授業はアイパッドやアプリを使い、学生が楽しんでる姿は身近で感じた。学力低下といわれる今は、いかに学生の学習意欲を引き出すか、大学教員らが真剣に考えなければならぬ課題なので、そういう意味で家島先生はいいモデルになっている。大学教師というのは、ほかの分野の知識を吸収してはならない。若者の間に流行っているもの、新しい理論、自分の分野の現状、どちらかをとおろそかにしたら、学生が自分から遠ざかっていくに違いないと危機感を感じた。

### (三) 実践授業

マイクロティーチングと模擬授業を経験した。改善した部分は授業内容や材料の選び方がうまくいった。あと、マイクロティーチングで「つまらない授業」を連発したが、模擬授業でこれを辞めた。やはり、教師たるものはポジティブに考えるのは大事だ。これは学生の学習意欲を損なわないため、授業がつまらないか面白いかが自分で判断してもよいが、口に出すべきではない。

よくできていない部分は主に二つがある。スライド作成と授業のペースだ。前者の例としては、スライドの字の大きさが一致しないところと枚数の多すぎるところがある。これを解決方法は、自分で何回もチェックすることだ。授業のペースは二回の授業とも早すぎる気がする。実際、フィードバックで何名の観察者から同じ意見があった。早すぎになる原因は二つある。一つ目は自分が焦っていることだ。二つ目は専門用語が多いので、自分にとって簡単だが生徒にとっては難しい。つまり、生徒に対する配慮が足りない。この点は大阪大学の家島先生に授業参観でもう一回振り返ると分かってきた。家島先生の授業は一見心理学な理論知識が多いようだが、クイズや豊富な事例を説明したので、一年生の学生にとっても大変理解しやすい授業だった。家島先生並みの授業がすぐできないうが、今度専門用語を提示するとき事例で説明するのを忘れないのが今のできるところだと思っっている。

### (四) まとめ

この長いプログラムを通して、大学教員になるために何が必要かと自分にもう一回開いたところ、いくつかのキーワードが頭の中に浮かんで来た。「事前準備」、「工夫」、「情熱」、「態姿勢」、「自省」、「自己進化」となる。授業をする前に細かいところまで工夫して、情熱的に授業をしながら、学生の様子を見て授業の進捗を調整する。様々な手段

を通じて学生の声を聴くとともに、自分の授業内容や方法を反省して、その結果、時代に  
応じて自己進化を遂げる。教師たるものはプロ専門職だが、様々な能力が求められる  
職業にもなると感じた。

## 2016 年度 東北大学 新任教員プログラム

Tohoku University New Faculty Program



最終課題：自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには、何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、所属大学の教育はどうあるべきだと思いますか。



## 最終課題レポート

### 自分の授業や学生指導を質の良いものにするために、何が課題か

私は主に初年次教育を中心とした教養授業に関心を持ち、今年度も意図的に授業実践を行いながらNFPプログラムのぞんできた。そのうえで具体的な授業に対する案としてフィードバックのとりにかた、グループワークの実践について、理科をどのように見える形に落とし込むかについて焦点をあてて本プログラムで得た気づきを記す。

#### 1. フィードバック (アンケート)

教育活動におけるフィードバックの重要性は今まで意識していなかったがNFPプログラムを通して認識できたものの1つである。中等教育現場においても授業評価アンケートは標準的になっているが、多くの場合が定量的な教員評価にとどまり、そこから有機的なフィードバックをかけられていることが少ない印象があったが、本プログラムで見学した授業等で意識して授業アンケートを工夫している複数の先生方とお会いすることができた。

例えば、国内他大学訪問調査において大阪大学の家島先生のキャリア教育の授業では、各生徒のスマートフォンとロイノートを活用してリアルタイムのフィードバックを意識している授業を展開されていた。特に印象的だったのは、授業後のコメントをロイノートをを用いて即時に回収して、その場及びその次のコマにおいて一部を紹介・回答する等を行い、length関数を用いて生徒のコメントを再評価したり、その評価についても生徒に明示することでできるだけ生徒からのフィードバックの質を上げる努力をされていたことである。

また立命館大学の安岡先生の授業評価に関するセミナーにおいても、先生が授業内で積極的に日頃の疑問をアンケート形式で募り、次のコマで丁寧にコメントしていくというスタイルも同じような思想を感じることができた。いずれにおいても私が担当している物理学Bでも実際に試してみたが、日頃の疑問に答えることで少しずつ学生からのフィードバックが具体的になり、結果として私が自分の授業を見直す上で必要な回答も多く集まるようになった。このように今まで軽視していたアンケート形式によるフィードバックも、複数回の授業においては継続的な工夫を行うことでより高い価値のあるものにする事ができるといえることがわかった。また、先述コンサルテーションにおいても呂本先生がアンケートについて強く言及しており、ペテランの先生にとってもアンケートによるフィードバックが高い価値をもつということが改めて理解することができた。

#### 2. グループワーク

できるだけ学生の理解を授業内で深めるための方法としてアクティブラーニングは中等教育・高等教育いずれにおいててもよく取り上げられるテーマである。例えば国内他大学訪問調査においても関西の様々な大学においてラーニングコミュニティを整備している様子は印象的であった。具体的な実践例としては海外他大学訪問調査でみることができたGSIによる少人数セッションのディベートや少人数グループにおける課題本の要約など国際的にも多様な実践方法をみることができた。

自身のクラスにおいてもこの要素を意識して、毎回15~30分程度のグループワークを導入し、実際に手を動かすことで学習する内容について手で感じられるような授業づくりを目指し、マイクロティーチングと模擬授業においてはそのブラッシュアップの機会も得られた。一方パークレーでは授業自体がパッシブなものでも大変能動的に質問をしている生徒が多いことは私にとって印象深いことであった。そこで、必ずしも授業に対する能動的な学生の参加は授業のスタイルに相関しないのではないかと考え、先述コンサルテーションにおいて

Todd 先生に相談した。

これらの背景には初等教育から継続した能動的な授業経験があるという私の仮説についてある程度賛同していただき、そのうえでやはり能動的な授業スタイルが大事であるとアドバイスをいただいた。さらに具体的な授業スタイルとして主にグループワークのHowto部分についてアドバイスをいただいた。Todd先生のアドバイスの主眼は教員の目標をどうやって正確に参加者に共有するかということで、具体的にはワーク前に目的をしつかり説明すること、グループ内の役割分担やグループの作り方をできるだけクリアに決めること等が必要であるということだった。今まで50人を超えるクラスでは役割分担決め等のファシリテーションを短い時間で行うことが難しいのではないかと思いついてきたが、今後TAにも協力してもらうことで具体的な方策をイメージすることができた。

一方見村先生の常微分方程式の授業見学の際にいただいたコメントとして印象的だったのが、高校の行列と大卒における線形代数とのつながりについてである。高校において行列は、それが“使える”レベルまで教えることが難しいので単純な四則演算の訓練に止らざるを得なかったこと、大学受験においてウェイトが低いため多くの高校でそこまで扱えないこと、一次変換について指導要領によっては複素平面で同等のことを扱うことが多いことから、中には必要ないのではないかという議論があった。ところが見村先生の意見は「大学できわめて新しい概念である線形代数を突然学ぶのはハードルが高いため、高校で計算方法だけでも履修することによってより自然に理解してもらおうメリットがある」というものであった。私は「高校での学習は、学生がなぜそれを学んでいるかを理解し、さらにはそれがどう世の中にならなっているかを理解することが目的になっているわけではない」という強い信念があった。これは「高校での理科と現実の科学をつなげる」という私の問題意識にも強く関係している。そのため、単純な計算技法に特化した授業にも意義があるという見村先生の意見は私の中に全くないもので大きく驚いた。この背景には高校で学ぶ多くの単元は大学以降により深く履修するとは限らないが、行列に限って言えば、ほぼ対象となる学生は大学で自動的線形代数を学ぶ(数Ⅰ履修者のほとんどが理工系)と考えられているという背景もあると思う。このように授業や分野やその後の学生のキャリア像によって教育目的は多様にわたり、その中で1つ1つの授業がもたらす必要がある役割も千差万別であるということ理解できた。

#### 3. 理科にとっての可視化

できるだけ理解しやすい授業を行う上で、特に理科では学生がその内容に対して身近なものとして紐付けてイメージをつかむことができることが大事だと考えている。本プログラムを通してこの“イメージ”に相当する概念を様々な先生から伺うことができた。例えば、呂本先生による「授業づくり：準備と運営」のセミナーでは、認知心理学の観点から“メンタルモデルの構築”という言葉で説明いただいたのがこれに相当するものであると見えらる。また先述コンサルテーションにおいて澤谷先生が「力学が得意な学生は多いが電磁気のような目に見えないものについては苦手な学生が工学部でも多い」と指摘されていたのも同様のことを指すと考えることができ。物理教育でよく問題になることが、物理教員がしばしば「現象をイメージすればわかる、イメージしなさい」と学習者に方法論として「イメージ」を直接的に要求することである。これは今までサイエンスに興味を持っていたり、現象のイメージになじみのある一部の中高生にとってはそれほど難しく感じないことなのに対して、多くの学生にとってはイメージをするのに必要な素養がない。これが理科において得意な生徒と苦手意識を持つ生徒に大きく2分されてしまっている原因なのではないかと私は考えていた。

また、学習者がある分野においてイメージを可視化できるようにすることも重要な教育だと考えている。例え





## 最終課題

自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには何が課題だと思いますか。また、教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

ローツ・マイア  
2017/03/17 提出

まず、自分の授業や学生指導を質の良いものにするために何が課題であるか、及び、その対策としてどのような工夫をしているか、しようとしているかについて述べ、その次に、教員個人の立場から、東北大学の教育がどうあるべきかについて述べることにしたい。

### 1. 自分の授業や学生指導を質の良いものにするためには何が課題だと思いますか。

#### ア) 授業のデザインと実施の際の理念と工夫

授業の設計の段階から、検討をはじめたい。まず、当たり前のように毎年作っている、あるいは修正を加えているシラバスについてだが、授業の質を上げるために、既にシラバスの作成の段階で、意識し、注意しなければならないことが多いと思う。各回の授業のおまかな内容や成績評価方法を記述するだけではなく、シラバスも学習のツールの一つになるように、様々な工夫が必要である。具体的には、各回の授業のテーマに関連する参考文献や基本的教科書のチャプターを明記することなどが考えられる。また、例えば、レポートの提出が求められる場合には、レポートの提出期限や具体的な課題等の、あらかじめシラバスにおいて明記することにより、学生によるより効果的な時間の管理とプランニングを促す効果もあり得る。

次に、授業の成績評価方法と授業の目標を関連付けるとともに、適切な成績評価方法を設定するのが、重要である。様々な考え方があり得るが、私の場合は、できる限り、試験のみ、あるいはレポートのみによる評価方法を選んでいる。それは、それぞれの学生の学習プロセスとメカニズムが多様であるからである。したがって、学生が授業で得た知識や能力(習った情報を分析する能力、自分の経験と関連付ける能力等)を、多面的に把握・評価するために、一つの授業で複数の評価方法を使っている。また、それらの方法が、割合的にも授業の「目標」に合っているかを再三確認する必要がある。

さらに、授業を設計・実施する際に、文部科学省の「学士力に関する主な内容」<sup>2</sup>や大学の diploma policy を確認し、できるだけそれに沿った授業を設計・提供するよう、心掛けている。自分の学問が大好きなため、学生に伝えたい情報が多いが、「知識」の提供のみを重視した授業にならないよう、気を付けていかねなければならぬと感じる。日本の高等教育

育(学部段階の教育)においては、「専門教育」とともに「教養教育」が重視されている<sup>3</sup>。つまり、「様々な角度から物事を見ることができると能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力」を養うことが、求められている<sup>4</sup>。また、東北大学の diploma policy<sup>5</sup>では、「グローバル社会において、指導的・中核的役割を果たす自覚と展望を持ち、基礎能力を備えている」卒業生像が描かれている。それらの能力を養うような授業の進め方を、授業の設計の段階から意識し、「知識」中心の授業運営、すなわち、教員による情報の提供と、学生がその情報を暗記したかどうかの確認で終わる試験による成績評価を避けていきたい。

先述の「教養」にも関連するが、近年高等教育における「アクティブ・ラーニング」をめぐる議論が盛り上がりつつある。学生の分析力等を養うためにも、学生に授業において「聞く以外の行為」をさせることは、確かに望ましい。(ただし、時にバッシングを受ける典型的な「講義」(教員が90分ほぼずっと話すような授業)も、やり方によっては、学生がその授業から多く得られる。教員が板書、スライド、絵、図、ビデオ等、多様な「道具」を利用することで、授業の質が上がり、学生の興味や学習意欲が向上し、より効果的な学習が行われることが十分あり得る。)

学生による積極的参加を促す方法・手段はいくつかあるが、その一つとして、いわゆる授業ペーパー(ミニッツ・ペーパー等とも言う)がある。全員が発言できそでない大人数の授業でも利用でき、また、人の前で話すのが得意ではない学生にも、自身の意見や疑問を述べる手段となる。授業ペーパーの作り方にも、様々な工夫があり得るが、授業で「気づいたこと」、「疑問に思ったこと」や「もっと知りたいこと」を、授業時間内に書き添えることにより、学生にその場で授業を振り返り、授業内容に関する理解を深める機会を与えることとなると感じ、今後の自分の授業で必ず取り入れたい。さらに、授業で「分からなかった」ことを書き添えることにより、教員が自分の授業の改善すべきところを発見することができ、今後の授業の改善にもつながるだろう。最後に、授業ペーパーに「穴埋め」や、学生が自由にノートをとれるスペースを空けておくことで、学生の「書く」という行為を促すことができ、学生に「ノートをとると」という労働の喜びを味わせることもできる

次に、授業の実施において、ピア・ラーニングが効果的な学習方法の一つであると思われる。学生がお互いに学び合えることは、実に多いはずであり、また、同じことを教員が言うのと、自分と同じ立場にある学生が言うのと、インパクトと吸収度がかなり違うと思われる。ピア・ラーニングにも、様々な形があるが、中にもピア・ワークを、今後の自身の授業でもっと利用したい。ただし、学生による授業での発言やピア・ワークをどのように評価するかが、一つの大きな課題であると思う。

### イ) 学生指導について—ライティング指導の重要性

<sup>3</sup> [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/attach/1309749.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309749.htm) (last accessed 2017/03/16).

<sup>4</sup> Ibid.

<sup>5</sup> <http://www.tohoku.ac.jp/japanese/disclosure/disclosure/09/education0901/policy06.pdf> (last accessed 2017/03/16).

学部生を指導する際にも、大学院生を指導する際にも、ライティング指導が一つの重点であると感じる。学部生にとっては、卒業論文を書く際に役立つだけでなく、社会人になってからも必要となる、情報を収集し分析する力や、自分の意見を論理的に述べる力等を身に付ける練習となる。しかし、日本の大学において、ライティング指導が十分に行われているとは言えない。私自身は、担当している学部授業において、学生にレポート等を書かせる際に、引用の仕方や論文の構成のみならず、参考文献の選出方法や、レポートや論文が完成するまでのスケジュール作り等についても、細やかに指導してきた。また、締め切りの直前に作業を始める学生が多いため（その結果、提出されたレポート/paperの質が低い）、提出締め切りの数週間前までに、research topic, research question 及び参考にしたいような文献をいくつかメールにて提出してもらい、それに対し第一フィードバックをする。さらに、これまでは、学生が希望すれば、締め切りの1週間前までに、first draft を読み、第2フィードバックをしてきた。しかし、ここでも、私からのフィードバックのみならず、ピア・ラーニングを導入するのが、効果的ではないかと考えている<sup>6</sup>。具体的に、学生にお互いにそのfirst draft を読ませ、フィードバックをさせるやり方が、フィードバックを受ける側にも、する側にも、勉強になると思う。同じようなことを、大学院生を対象に実施することも、大学院生のライティングスキルを向上させると思われる。

## 2. 教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきだと思いますか。

### ア) 教員に教育すべき

東北大学での教育（特に授業）の質を向上させるために、教員全員に、定期的に、継続的に研修を受けさせる体制が必要であると思う。日本の大学教員は、教えるための免許をとる義務がないようだが、大学の教員になった全員がいい授業ができる（及びその他の大学教員に求められる業務を執行できる）とは限らない<sup>7</sup>。海外では、大学の教員が定期的な講演やスキル・アップ研修を受けることが義務付けられている国/大学もあるようだ。日本でも、授業の質を確保するために、そのような制度が必要なのではないか。研修を受けることで、教育に関する最新の傾向、情報、研究成果を知るとともに、ワークショップなどにより、自身のこれまでの授業を振り返り、改善する機会も得られるであろう。

### イ) TA に、レジュメのコピー以外も任せべき

東北大学のTAは、教員の授業用レジュメのコピーなどしか任せられない。しかし、より実質的な手伝い、時には（部分的にでも）授業そのものを、TAにさせることが、TAにとっても、その授業を受ける学部生にとっても、そして大学にとっても、メリットが多いは

ずである。将来的に大学教員を目指すTAにとっては、就職する前から、授業運営にかかわり、授業をする経験を身に付けることができるメリットがある（そのような経験があることが、就職活動をする場面でもプラスになり、又、実際に就職してからも、最初からより高いレベルの授業ができる可能性を高める）。学部生からみて、教員より年齢的にも距離が近いTAと信頼関係を築きやすく、近づきやすい。さらに、教員と大学にとつてのメリットであるが、TAが授業の一部を担当すれば、教員の負担が軽減され、研究活動により多くの時間を与えられる（私立大学と比べて、東北大学では、一人の教員が担当する授業のコマ数がまだ少ないようだが）。ここでは、例えばバークレー大学のGSI(graduate student instructor)制度が、参考になるだろう。

### ウ) 大学の教育支援関連サービス提供の拡大

学生の授業での学びを支えるために、様々なサービスと支援があり得る。東北大学には、学生による学生に対する学習支援としてSLA(student learning adviser)の制度がある。そして、付属図書館のスタッフによる、レポートの作成のためのスキルを教える講座なども、例として挙げられる。大学での教育の質と学生の学習意欲を高め、大学を卒業してからも役立つ様々なスキルを身に付けるために、それらの試みが、非常に有意義である。が、現時点まで十分でないところもあり、そのようなサービスや支援の拡大が望ましい。特に、アカデミック・ライティング支援が、まだ不十分であると思う。今現在、SLAがライティング支援も行っているが、その周知度がまだまだ低いようである。私自身が授業で見ている学生レポートのレベルから言えば、ライティング支援・指導が行われていることをより周知させ、また、その規模を拡大させる（独立のライティング・センターの設立等）のが、急務であろう。

<sup>6</sup> ここでは、バークレー大学の Graduate Student Instructor Teaching and Learning Center の Sabrina Soracco の大学院生向けライティング・セミナーが参考にされた。

<sup>7</sup> 本プログラムのオリエンテーションの際に、羽田先生が、大学教員の「専門性」は「研究分野の専門性」だけではない、「教育と学習のプロセスの理解」なども、その専門性の不可欠な一部分であるとおっしゃった。しかし、このような意識が乏しい教員も大勢いる気がする。教員の意識の変化をもたらすためにも、定期的研修が必要なのではないか。

みて、そこに「学生に直接問う」というプロセスがあまり含まれていなかったことに気付いた。何か問題が生じた際、きつこということが起こっているのだから、きつことこの学生はこういう得手不得手があるのだから、と自分なりに想像し、それに合わせて対応を考えてきた。そのことにより、目立った問題は起こってはいなかったように思われるものの、その見立てがどの程度学生自身に当てはまっていたのか、疑問が残る。また、問題が起こってはいなかったかどうかということ自体、学生の立場からの評価はわからない。すべてのことを直接問うということはあまり現実的ではなく、またその必要もないかもしれない。しかし、自分の軸や価値基準で判断せずに、直接問いかけることを忘れないという姿勢は、今後常に意識していることが必要だと感じた。これはおそらく個別指導だけでなく、集団を相手にした授業にも当てはまることだろう。

そして最後に、他者の評価を受けることを回避しないということである。これが、自分自身にとつては最も大きな課題であると考えている。これは教員ということに限ったことではないのだが、他者の評価を受けること、他者の前で失敗すること、人と比べてうまくできないことに対して、以前からとても強い抵抗と嫌悪感がある。何をしても負け戦さはず、特に自信がないときには極力他者からの評価を受けずに済むよう、回避するということを繰り返してきた。しかし、教員 1 年目の今年、同じ研究分野に所属する教員が合同で実施するゼミ等の場で、定期的にこの「他者の評価を受け、さらに比較される」という状況にさらされてきた。授業後に学生が教員同士を比較し、評価している様子を目にするのはかなり侵襲的でもあり、極力評価を耳にすることは避けるようにして過ごしてきた。そのような NFP でも、マイクロティーチングや模擬授業、バーレーでのディスカッション等、比較し評価を受けるという環境に何度も身を置くこととなった。NFP を通じて積んだこれらの経験は、授業場面とは対照的に、自分にとってむしろ肯定的な体験になっていた。その理由のひとつとして、自分自身に対する評価を、横目にはなくきちんと正面から受け取る環境があったということがあったように思う。フィードバックに際して安全な環境が整えられていたということもあるとは思わず、不意に評価を受けるのではなく、その評価と向き合う準備をして臨んだことで、今までは異なる受け止め方ができたように感じている。同時に、これまで比較対象であった相手とは、同じあるいはかなり近い軸で比較、評価されていたのに対し、今回評価の場を共有した同期が、一直線上の勝ち負けという概念を超えた、全く異なる背景や判断の基準を持っていったということも、重要だったように思う。そうした同期との比較を通して、一義的な良し悪しではない、個性という観点から、自分や他人を見る視点を、身につけることができたように思う。NFP では明らかに背景の異なる同期が集まったことでその視点が見出しやすくなっていったが、今後身を置く、同じ分野の中での比較であっても、おそらく同じことが言えるだろう。それは決して「これが自分のやり方だ」と開き直るということではなく、自分自身の得手不得手を理解し、それらをふまえた課題を明確にするという役割を担っていた。加えて、自分の実践を改善していくためには、内省だけでは不十分であるということの気付きにもつながった。内省の大切さはリフレクティブジャーナルを通して痛感するところではあったが、これはどちらかというと元来自分自身で得意とすることだった。しかし、内省だけでは結局、自分の視点からしか評価し振り返ることができない。上述の視点の違いにも通じることはあるが、他者の評価と自己評価がどれほど異なるか、ということを感じ、自分以外の視点での評価を受けることで、新

## 1. 自分の授業や学生指導を質の良いものにするための課題

教員 1 年目がようやく終わりにさしかかった現段階では、経験や知識が不足している部分も多く、具体的な課題をあげれば際限がない。そこでここでは多様な場面に共通する、自分自身の姿勢に関わる課題について、3 つの観点から述べる。

まず 1 点目は、集団としての学生を前にした際に学生の動機付けや学びを促す姿勢を怠らないということである。今年 1 年業務に当たってきて、顔の見える関係性の中で行っていく指導においては、敢えて強く意識せずとも学生の動機付けや学びを促すということを重視し、そこに注力していることに気付いた。これは、かつて非常勤講師として、100 名以上の学生を相手に講義をしていたときとは、異なる感覚だった。学生とよりアールな関係性の中で接すると、個々の学生の状況や反応に合わせて対応することは自分自身にとって必然であり、また、対応しがいも感じられていた。一方、顔と名前が一致しないような大人数の講義の場面では、同じようにそこに注力することが容易ではなかった記憶がある。学生側も必修だからという理由で受講しており、授業を聞いている学生は半分にも満たない状況だったが、「しよがない」と、自分の中でどこか最初から諦めていた部分があったように思う。東北大やバーレーでの授業参観は、こうした過去の自分の姿勢と照らし合わせ、非常に新鮮で驚きを生む経験だった。100 名近い受講生のいる講義であっても、先生方は学生の関心を高めたり、理解を深めたり、授業にコミットさせたりすることに對して、全く手を抜かれていなかった。加えて、講義の規模に関わらず、学生の反応や属性に、柔軟に授業の組み立てを変えていかれているということが、何よりも印象的だった。そして学生の側も、そのことによく反応しているように思えた。これは、大規模な講義に対する自分自身の考え方を大きく変えるものだった。大人数であっても少人数であっても、授業であることに違いはないのだが、どこか大人数の講義に對して、労力を節約するような価値観があったことを反省した。今後全学の講義を担当することになる際には、先生方のように学生ときちんと向き合う授業づくりをしていきたいと思った。

2 点目として、個々の学生に接する際に、学生の見ているものや感じていることを、学生側の視点から理解しようと努めるということがあげられる。今年度は初年度で担当する学生も少なく、比較的余裕があったため、個々の学生について自分なりに丁寧なアセスメントしながら関わってきたつもりだった。しかし、NFP のプログラムを受けながら、感想や気付きを同期とシェアし合う中で、同じ場で同じことを体験しても、人によって気付くことや感じること、見ているものが予想以上に異なるということを折に触れて感じてきた。似たような立場の同期同士、かつ参加者という同じ側に立っている場合であってもそうしたことが生じるのであれば、学生と教員という全く異なる立場で、教育する側とされる側という裏表の関係にある場合、その違いはさらに大きくなるだろう。教員と学生のギャップは、バーレーのフィールドワークにおいて教員と学生双方から話を聞く機会を得た際にも目当たりにした。教員との関係性がたえ良くても、遠慮や利害関係から、学生が教員に言えないことは少なくなく、それが、両者の認識のギャップを生じさせていた。この 1 年の自分の指導を振り返って



しい発想や解決策を見出すことができる可能性が広がることを感じることができた。おそらく今後、人前に立つことや、評価を受けることが得意になることはないだろう。しかし、NFPでの経験を通し、その重要性を再認識することができたことは、今までよりも、逃げずに踏みとどまる姿勢につながっているのではないかと感じている。

## 2. 教員個人の立場から、自大学の教育はどうあるべきか

レポート課題の1点目で述べたことを含め、NFPを通し、自分の中では目が覚めるような体験を何度もし、多くの新しいことを自分なりに発見したように思い、とても印象的に感じていた。しかし、プログラムが終盤に差し掛かり、ISTUの動画を見直した際、その、あたかも自力で発見したかのよう感じていた気付きの多くが、説明会等ですでに先生方やOBから話されていたことに驚きを禁じ得なかった。当時も、そのときの自分なりに、内容を理解し、納得し、話を聞いていたはずだった。それでもなお、自分自身で経験し、自分なりに見つけなおすことで、これほどまでに新鮮で、印象深い学びが得られるということが、NFP全体を通して得た一番大きな収穫だった。そしてこのことが、自分が目指したい教育の根幹を成すものなのではないかと感じている。

東北大学は、研究第一を理念として掲げる研究大学である。そのため就職前、東北大学の教員になるところは、研究者を育成することを使命として担うということだと考えていた。この時点で研究者の育成とは、研究そのもののスキルを高める、質の高い研究指導環境を整えるといったことを想定していた。しかし、実際に就職してみると、研究職を目指して博士に進学する学生は修士学生の2割にも満たなかった。この環境の前に、研究大学の教員としての役割を考え直さざるを得なかった。

その答えが見つからない中で、NFPを通して得たのが上述の気付きだった。この経験を経て、研究者の育成ということも、少し般化して捉えるようになったように思う。研究スキルのもっとも基礎的な部分を成すのは、自分で考える力、自分で見つける力だと考える。授業やゼミ活動、個別の指導等を通し、様々な、自分で考える、自分で見つけるという体験を重ねることができれば、今回NFPの中で自分自身が感じたような肯定的な感覚を学生に提供することができれば、多様な進路を選択する学生にも対応しながら、一部の学生にとって研究の面白さを見出すことにもつながるだろう。自力で気付かせるということは、一見放任のように見えて、実際には直接言葉で教えることよりもはるかに難しい。それはこのNFPを通して痛感したことだった。受講中には意識していなかったが、後から振り返ると、丁寧に作り込まれたプログラムによって、気付きを得られるように導かれていたことがわかる。学生に何を考えさせ、何を経験させるのか、そしてそれをやる目的は何かということも含めて、教員側が十分に考えることで初めて、学生が学生自身で学ぶ、気付く、そのための場を整え、サポートすることが可能になるのだろう。そして、そうした教育を受けるといって経験を学生に提供することは、広い意味での研究者育成、教育をも担える大学教員を育成するという、この大学の役割にもつながるのではないだろうか。それが現時点で、この大学の教員として、自分が目指したい教育だと感じている。

## 2016年度先達教員アンケート結果

2016年度先達教員アンケートでは、以下に示す5つのカテゴリからなる質問項目を設け、6名の先達教員からの回答を得た。

- I. 先達教員としての活動全般について
- II. 授業公開（授業を見る聞く学ぶ）とディスカッションについて
- III. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて
- IV. 先達コンサルテーションについて
- V. 2016年度PFPP/NFPについて

### I. 先達教員としての活動全般について

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
1. 前年度と比較して、より参加者のプロフィールや状況について情報提供がなされたと感じるか？	0	0	3	2

### 2. 先達教員としての活動で困ったこと

- 特にありません
- とくにありません
- 困ったことはない
- 活動で困ったことは特にありません。日程が合うことが少なく、貢献できなかつたことを申し訳なく思います
- 前年度のことを知らないもので、前年度比較評価はできません。困ったことなどは、特にありません
- I think the demands on the teachers' time has decreased over the years, so I didn't have any problems with the way the program was run this year.

### 3. 先達教員としての活動のために、どのような支援があると良いか

- とくに思い当りません
- 現在と同様で問題ありません
- 現状の経済的な支援だけで十分
- NFPで実際に授業を担当している教員には担当授業を実際に参観する企画を取り入れてもよいかと思います
- スタッフの皆さんとのコミュニケーションの機会（受講生の皆さんの経時的な様子や変化を報告してもらえる場など）→時々メールで頂いていたと思いますが、なんとなくメールだと実感が持てないので…
- I can't think of any additional support that I would need as a faculty mentor for the

participants. Everything was well-organized and well planned out. I have been doing this for a few years, so a new faculty member might have a different opinion.

### 4. 次年度のプログラムにおいて、先達教員の活動としてとりやめた方がいい、または、新たに取入れられると思うこと

- 特に無し
- インフォーマルな対話の場（スタッフの皆さんと先達&受講生）
- すでにかなり充実している企画と思います
- 今年の活動が最適のように思います
- I think all of the activities in 2016 were important for mentor faculty to be involved in. I wish I could have been more involved, actually, but due to other commitments, I could not participate in the orientation and the final ceremony. I can't think of other areas where the mentor faculty input would be needed though.

## II. 授業公開（授業を見る聞く学ぶ）とディスカッションについて

### 1. 授業公開とディスカッションについて、改善すべき点、要望、提案等

- 本年度は授業公開をする機会がありませんでした
- 授業公開していませんので、コメントなし
- 現状で問題はないと感じています
- ディスカッションすべきテーマや項目が（ゆるくでもいいので）事前にあるとやりやすかつたかなと感じました
- 授業の進捗や学生の状況等によっては、公開にしない方がいい場合もあるので、どの授業を公開にするか、実際にその授業が始まってから決められるとありがたいです
- I believe classroom observation is a fantastic way for students to understand the classroom environment and the issues that need to be dealt on the spot. It might be helpful to have a short meeting before classroom observations so that the teacher can explain to the observers why they have organized the class the way they have.

## III. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて

### 1. 模擬授業におけるコメントのフィードバックについて、改善すべき点、要望、提案等

- 特にありません
- 模擬授業は現状で17分でやや短いので、20分~25分程度にした方がよいと思う
- 評価の項目が（緩いものでいいので）ある程度示されているとやりやすかつたかなと感じました。自由記述だけでなく、例えば、声の大きさ、話すスピード、資料・スライドの見やすさ、話の流れ、テーマのおもしろさ、アクティブ・ラーニングへの工夫等々について、5点ないし7点尺度でマルをつけるなど
- コメントが手書きのため、それをもたらった参加者が読めない可能性があると思います。ノートPCなどを用意しておいて、コメントを入力するような方法も考えられると思います
- The feedback system in place seems appropriate. Giving the speaker a chance to self-identify their own weakness is a good way to lead into the general comments.

IV. 先達コンサルテーションについて

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
1. 先達コンサルテーション時に配布した参加者のプロフィールを掲載した「カルテ」は役立ったか	0	0	3	1

2. 先達コンサルテーションについて、改善すべき点、要望、提案等についてお教えください。

- とくに思いありません。
- 特に無し。
- 参加できていないのでコメントありませぬ。
- 特にありません。なお、今年度は研究テーマと授業担当内容との兼ね合い、あるいは参加者のアカデミックマーケットへの就職懸念の話があり、各個人の状況に沿ったコンサルが必要とも感じました。
- I can't think of any. I think by expanding the time to 30 minutes but explaining that finishing early was fine was a good way to deal with the request from some participants for more time.

V. 2016 年度 PFFPNFP について

1. PFFPNFP のプログラム内容等について、良かった点、今後も継続すべき点をお教えください
- 基本的に充実した内容であったと思いますので、継続を希望します。
  - おおむね今年度の内容でよいのではないかと感じました。
  - プログラム内容のすべてを把握しているわけではないので適切にコメントできませんが、授業参観、模擬授業やコンサルテーション、リフレクティブジャーナルなどは、とても良いと思います。
  - 年々改善が行われており、大変充実したプログラムになっていると思います。授業参観で他大学の授業が見学できたのは、多様な大学・授業を見るという点で非常に良かったと思うので、今後も継続すべきだと思います。
  - 2010 年度の開始以来、このプログラムは改善・発展してきているが、さらに改善・発展が進むと PFFPNFP を実施する人達の手間も増加することが懸念される。
  - I think it is all good and useful and that it should be continued. There is a lot of value in giving the participants various perspectives of teaching and allowing them to try what they have learned through micro teaching. I am not sure if the participants are made aware of other workshops or seminars that aren't part of the NFP/PFFFP curriculum that they might be interested in attending. If not, that might be a good idea. However, I imagine the participants have time limits, too.

2. PFFPNFP のプログラム内容等について、改善すべき点、要望、提案等をお教えください。

- とくに思いありません。
- 「先達」の立場からは、実はもう少し色々関わりたいかっただけです。こちらのスケジュールが合わなかった部分もありますが、何かイベントがある当日だけの関わりだけでいいので、本当は準備段階や途中経過においても、もっとスタッフの皆さんと、苦労や課題なども共有できれば、もっと「一緒にやり終えた」感が持てたかもしれません。とはいえ、実際問題、(私個人ではなく先達教員の先生方全体として) どれくらいこのプログラムのための時間が割けるのかは難しいところだとも思います。
- 特にありませんが、上述のとおり、NFP 参加者の担当授業参観もよいのではないかと思います。
- 講義 (特に全学対象のもの) を想定したプログラムが多いのですが、実際に自分が授業するときには演習の方なので、いわゆる「ゼミ」をどのように作っていくかや、卒論指導を想定したプログラムがあるとおよよいかと思えます。学問分野によって異なりすぎて難しい側面もあるかと思えますが、文系/理系で分けてほかの受講生と意見交換するなどでも役立つ側面はあるかと思えます。
- ショートコースの設置が理由なのかも知れないが、フルコースへの参加者が減少傾向にあると思う。プログラムの充実と受講生の負担は Trade off の関係にあると思うので、多くの人に参加してもらええる妥協点を探る必要があるかも。(名案はありません)
- I don't think I can answer this well since most of the contents are in Japanese and my Japanese is limited, at best.

3. PFFPNFP のプログラム内容等について、上記以外にご意見、ご感想等があればご自由にお書きください。

- 特にありません。
- 「先達」をさせていただきましたが、その中でもベテランの先生方から、私のように若輩者までいるので、なんとなく「先達」という肩書が重かったです(苦笑)。若輩者である私としては、受講生の皆さんとそれほど立場が変わらなくもあり。受講生の皆さんも先達教員も一緒に、「大学の授業とはどうあるべきか」、「どんな授業の可能性があるのか」などについて、コーヒードキながらワイワイ楽しくブレーストできるようなワークショップがあってもいいかなと思います。
- 今年度は、フルコースの参加者を十分に把握できた気がします。個性的だったこともありましたが、人数がちょうどよかったのかもしれない。ショートコースは、人数も多かったこともあり、やはり参加者を覚えきれませんでした。たくさんの方に、何らかの形で参加してもらったことが大事だと思えますので、それはそれでよいのかもしれない。
- 大学全体の教員数を考えると理系の方が多いのですが、受講生は文系に比べて理系が少ないのが気になる。理系の部局への宣伝が必要かも。
- I think the mentor consultations are an important aspect for the students, which can be seen from their request to expand the time for these interviews. If some of the faculty don't see the value maybe other faculty could join in their place.

## 2016 年度 JFP ショートコースアンケート結果

2016 年度 JFP ショートコースアンケートでは、以下に示す5つのカテゴリからなる質問項目を設け、参加者からの回答を得た。回答者は 21 名であった。

- I. 各種セミナーについて
- II. リフレクティブジャーナルについて
- III. 動画配信の利用について
- IV. プログラム参加における情報提供について
- V. ショートコースを選択した理由について
- VI. プログラムの運営について
- VII. プログラム受講の効果について

### I. 各種セミナーについて

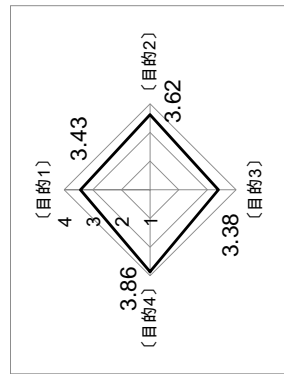
1. 以下に示す達成目標に対して、それぞれのセミナーはどの程度有益であったかについて 4 件法 (1. 全く有益ではなかった～4. とても有益だった) で評価を求めた。

#### 【JFP の達成目標】

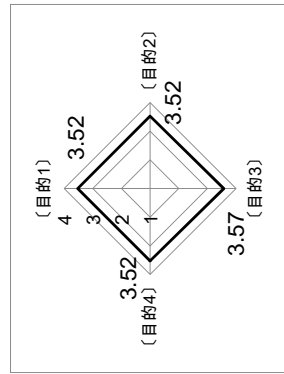
- 【目的 1】生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 【目的 2】大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 【目的 3】教育活動に関する基礎的知識を身につけ、自分なりの言葉で教育観を語るようになる
- 【目的 4】異分野の研究や教育文化を知る

以下に各種セミナーに対する参加者からの評価結果を示す。図中の数値は全体の平均値である。

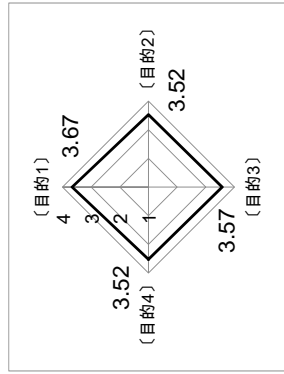
(A) オリエンテーション  
「大学教員の役割…」 「比較の目を育てる」



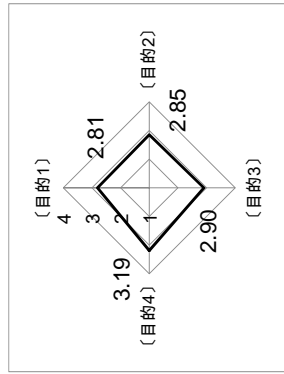
(B) 「授業デザインとシラバス作成」



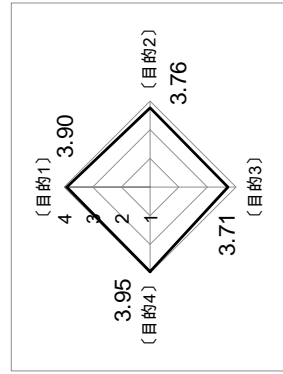
C) 「授業づくり：準備と運営」



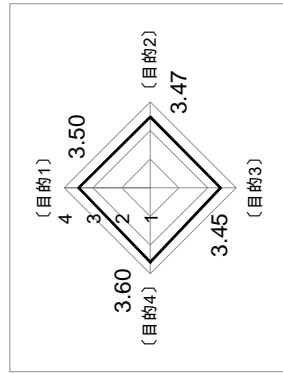
D) 「『本当のかしこさ』とは何か」



E) 「授業を見る聞く学ぶ」 授業参観



F) 全平均



## 2. 各セッションへの意見、要望、提案は以下の通りである。

- ショートコースにおいても、先達教員との個別面談の時間が設けられると良かった。
- 「理解」のプロセスやシラバスの書き方など自分が知らなかったことが多く大変なめになりました。また自分とは異なる専門の先生方の授業を拝聴できたのは大変良い機会になりました。
- 色んな分野先生方のお話を聞いたり、他の先生方のお話する機会が普段あまりないので、今回のプログラムは非常に自分自身にとって良い機会だった。この機会をいかに自分の現状や今後につなげていくかは、自分次第であるとも改めて思った。
- 他分野の教育・指導の実情が学べたことはとても貴重な体験でした。また、各セミナーも講師と参加者との間で意見交換や質疑等が積極的に進行することができている環境であったことも大変有意義でした。授業参観の内容や質ともに非常に充実しており、授業評価が高いこともあり、どの先生も分かりやすく大変工夫した授業であったことが印象的でした。セミナーについて、内容のベースが文系であったこともあり専門用語や授業の構成などで一部ついていけないことがあった。セミナー前に内容の把握ができるような資料や当日でも良いので専門用語リストなどがあると授業の際にありがたいと感じた。また、セミナーが固定であったので上記のように難しい内容もあり、可能であれば選択制であると自分に特に必要な内容が受講出来るように思う。
- 2016 年 12 月 9 日の「コーチング技能を活用した院生指導」で講師の方との相性が悪いせいか、

- 質疑応答の際の対応が不快に思った。気を付けてほしい。
- 教育に関する制度や理論など、学生の時には知ることができなかつた知識が得られて有益でした。また、授業参観では、自分が学生であった時との変化（IT機器の普及など）への対応とそれらの活用などを見せただけは、専門外の学生も非常に熱心に取り組んでいるのを目の当たりにし、そのようにできる工夫など、考えさせられました。
- ショートコースではありましたが、どのセミナーも大変参考になりました。特に授業参観と、担当の先生に直接お話を伺う機会が得られたことは、その後の授業の設計に大きく影響し、以前より少しは効果的に内容を伝えることができたのではないかと思います。
- 各種セミナーは、「本当のかしこさとは何か」以外、参考になるものばかりだった。逆に、「本当のかしこさとは何か」も反面教師という意味では参考になったとも言える。また、ショートプログラムにおいては、必修でないセミナーも案内していただいたのはありがたかったが、必修でないというだけでも敬遠しがちになるので、11月、12月にも1回ずつくらい、必修セミナーを入れてもらいたいと思った。
- 今回のコースに参加させていただき、非常に良い勉強になりました。改めてコース運営の皆様へ感謝の意を申し上げます。
- 一度だけ、ちんぷんかんぷんな講習がありました。しかし、有益とは思えない講習が一度しかなかったというのは、このプログラムの質の高さを示していると思います。今後、同僚等に勧めます。ありがとうございます。
2. プログラム全体を通して、自分のリフレクションが深まるきっかけになった出来事について。
- リフレクションを書くごとに、振り返るという行為に慣れてきたような気がします。また、こんな振り返りでいいのだろうか・・・と、リフレクションに対して少し不安もあったのですが、コメントをいただくことで、安心できモチベーションも上がったように思います。
- リフレクションについてビデオ講習を観てその重要性を分かった。その後の講演なども意識しながら参加できた。
- 授業見学をさせてもらったあと、これまでの経験と照らし合わせてリフレクティブジャーナルを書いたことで、これまで自分が選択してきた方法とは違う取り組みの良さに気がついたこと、機会があれば取り入れてみたい、と思ったこと。これがきっかけで、これまで以上にその時のプログラムで考えた事と、これまでの振り返りを関連付けて考えるようになった。
- 初回以外はリフレクションを書くことを前提としてセミナーを受けたため、授業内容についてどのようにとまどめるかを現在進行形で受講しながら検討できたことは思考を深める良いきっかけになった。また、その時に分からなかった点や解決方法など新たな視点に気づくことができた。再考すると当日気が付かなかった点や解決方法など新たな視点に気づくことができた。
- セミナーの中で教育心理学に関する参考図書の紹介があり、興味を持ったのであとで図書館で本を借りて読みました。セミナーの内容の理解が深まったことはもちろん、もっと詳しく知りたいという学習意欲が高まりました。先達の先生方が若手の頃に読んで参考になった図書や資料など、差し支えない範囲でぜひ教えていただきたいと思いました。
- リフレクティブジャーナルの課題があることによって、セミナーや授業参観以外にも、教育に関する諸問題に関心を持ち、関連付けて考える習慣がついたと思います。
- 学生のグループ・ディスカッションに参加させていただいたことが最も印象に残っています。学生のモチベーションと学習の効果を感じ、ネガティブ両方向で垣間見ることができました。

- まず、初めのリフレクティブ・ジャーナルガイドやISTUの動画を通じてのリフレクションに関する講義が、自分がどうすればよいかを導く重要な役割を果たしてくれたと思う。動画の一方通行の講義でも、興味をもって聞くことができ、学ぶことができた。さらに、毎回、ジャーナルを提出すると、担当の先生方がコメントを返してくださった。自信がない文章や否定的な文章についても、価値つけて返信して下さることで、そういう見方もあるのかと思うことができた。
- これまで考えもしなかった考え方に接したときには深まったと思います。また、講師の先生が紹介したものとに対して、敢えて批判的に考察することも考えを深めることにつながったかもかもしれません。
- 異分野授業参観で改めて講義のデザイン、授業の手法について考えさせられました。
3. リフレクティブジャーナルについての意見、要望、提案は以下の通りである。
- コメントをする方の苦勞を思うと泣けてくる。
- 毎回、コメントを頂いたことは大変有難かった。欲を言えば、リフレクションの実践を個別のものとしてだけで終えるのではなく、他の受講生やスタッフの方々ともさらに共有し、深

- 質問が不快に思った。気を付けてほしい。
- 教育に関する制度や理論など、学生の時には知ることができなかつた知識が得られて有益でした。また、授業参観では、自分が学生であった時との変化（IT機器の普及など）への対応とそれらの活用などを見せただけは、専門外の学生も非常に熱心に取り組んでいるのを目の当たりにし、そのようにできる工夫など、考えさせられました。
- ショートコースではありましたが、どのセミナーも大変参考になりました。特に授業参観と、担当の先生に直接お話を伺う機会が得られたことは、その後の授業の設計に大きく影響し、以前より少しは効果的に内容を伝えることができたのではないかと思います。
- 各種セミナーは、「本当のかしこさとは何か」以外、参考になるものばかりだった。逆に、「本当のかしこさとは何か」も反面教師という意味では参考になったとも言える。また、ショートプログラムにおいては、必修でないセミナーも案内していただいたのはありがたかったが、必修でないというだけでも敬遠しがちになるので、11月、12月にも1回ずつくらい、必修セミナーを入れてもらいたいと思った。
- 今回のコースに参加させていただき、非常に良い勉強になりました。改めてコース運営の皆様へ感謝の意を申し上げます。
- 一度だけ、ちんぷんかんぷんな講習がありました。しかし、有益とは思えない講習が一度しかなかったというのは、このプログラムの質の高さを示していると思います。今後、同僚等に勧めます。ありがとうございます。
1. リフレクティブ・ジャーナルについて
1. リフレクティブジャーナルの執筆についての感想について4件法（1. 全くそう思わない〜4. とてもそう思う）で評価を求めた。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ジャーナルの執筆方法について十分な説明・支援を受けた	0	1	10	10
(2) ジャーナルの執筆が学習内容の整理・記録に役立った	0	0	4	17
(3) ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った	0	1	4	16
(4) ジャーナルの執筆により新たな気づきを得られた	0	1	8	12
(5) ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	8	13
(6) ジャーナルに何を書いたらよいかかわからないことがあった	3	13	4	1
(7) ジャーナルの提出締め切りは適切だった	0	1	11	9
(8) ジャーナルの執筆に取組むことでリフレクションのやり方が身についた	0	1	12	8
(9) ジャーナルの執筆はこのプログラムに必要だと思った	0	0	5	16



められると良かった。

- ▶ 一回目の講義の時からリフレクションに関するビデオを観ておきたかった。観ていたらもっと違った姿勢で臨めたと思う。
- ▶ ただ参加するだけでは忘れてしまうことも多くありそうだが、リフレクティブジャーナルを書くことで、これまでの自分の経験と関連付けて考えることができたと思う。どんなことを考え、どうしようと思ったのかについてもいい記録になったと思う。毎回コメントを頂いていたので、しっかり書かないと！と思っていた。
- ▶ 期日について、もう少し締め切りまでの日時が長いと大変助かる。3日は少し短く感じた。また、リフレクション・ジャーナルを書かなくても、気になる内容や未解決の問題などは熟考すると思うので、解決方法や新たな視点などはジャーナル作成で気づかされたこともあるが、そこまで劇的に思考が深まる方法でもないように思う。
- ▶ ジャーナルを提出すると担当の方が毎回丁寧なコメントをくださるのが、単に事務的に受け取るのではなくあくあたたかみがあって、とても嬉しかったです。ありがとうございます。
- ▶ 最初に冊子やISTUを通じて、目的や書き方をわかりやすく説明していただき、助けになりました。
- ▶ 場合によってはあまり書くことが思いつかない時もありましたが、無理にでもアウトプットすることによって身に付くこともあるので効果があるのではないかと思います。他の方がどう受け取られたのかを知る機会があるとより効果があるように思います。
- ▶ 後半の「授業を見る聞く学ぶ」のジャーナルは、私は締切を守ることができなかった。見たこと聞いたことという事実と、自分が感じたこと、学んだことをどう整理すればよいかが分からなかったからではないかと思う。しかし、3営業日内に提出という期限は、適切だと思う。
- ▶ 日常生活の中であることをきっかけにして「あの先生がおっしゃったことに関して、こうやってこうやってこうやればもっと良くなるんじゃないのかなあ。」などということをふと思いつくことがあると思います。そういうときには何らかの形でそれを記録しておくとか後々役に立つように思います。
- ▶ 三日以内でリフレクションを書くことが良いと思います。

### III. 動画配信の利用について

動画配信の利用について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

1. プログラム期間中を通して、ISTUを利用したか

1. 利用した	19
2. 利用しなかった	2

2. 動画配信について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ISTUの利用方法について十分な説明・支援を受けた	0	1	12	8
(2) ISTUによる動画配信は学習の役に立った	1	2	10	8

### 3. ISTUの利用についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- ▶ 実際には使いませんが、ある種の保険として、安心できます。
- ▶ 参加できなかった講演を観た。その際に、講演者がパワーポイント観ながら話している様子の時にレーザーポインターを使用していたが、ビデオではそれが分からなかったため、文字情報が多いスライドの時にどの部分を読んでいるのかを理解するのが大変だった
- ▶ 初回の事前説明の動画を見た。どうしても研修に参加できないときなどに役にたつと思う。
- ▶ ISTUのシステムは大変便利であり、特に10-20分間隔で区切られて見れるので集中でき、かつ時間があるときに途中まで見ることができ大変助かった。その一方で、PPTのスライドと内容が連動していない箇所もいくつかあったので、そのあたりを改善するとより理解しやすいと思う。
- ▶ 録音なので仕方がないとは思いますが、音声が聴き取りにくい場面が所々ありました。
- ▶ まとまった時間が取れない場合には集中して取り組むことが難しいと思いましたが、わからないところは何度も繰り返し視聴することができると役に立ちました。実際にセミナーに参加してもその時にはよくわからない点があって、あとからもう一度確認したいところがあった際にも、ISTUを利用することで理解が深まりました。
- ▶ あまり見る機会がなく、折角の仕組みなのにもったいなかった。担当の先生方にはご面倒をおかけすることになるが、セミナーの数は限られているので、動画がアップされる度にアナウンスをしていただければ、もう少し視聴したかもしれない。
- ▶ 今後も利用したいと思います。

### IV. プログラム参加における情報提供について

1. オリエンテーション時に配布した「先輩の知恵」について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 「先輩の知恵」を読んだ	0	4	15	2
(2) 「先輩の知恵」の内容が研修の参加に役立った	0	4	14	3

2. 「先輩の知恵」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- ▶ リフレクションの際に、大変役立った。
- ▶ 先行研究例として参照することができ、役に立った。
- ▶ これまで受講されてきた方の意見を早い段階で知ることができたので、プログラム内容に期待して参加することができた。
- ▶ 「先輩の知恵」によって、どのような心構えでPFPP全体を受ければよいかを知ることができた。また、「先輩の知恵」は、先輩の「後悔」？でもあるので、それをあらかじめ知ることができたのはよかった。もつと言うと、初回に渡されるのではなく、初回が始まるよりも前に読ませてもらえたとよかったかもしれない。
- ▶ 改めて読み返してみても「？？」となった箇所がいくつかありました。「授業を見る聞く学ぶ」に関する回答の中に「参加の前日までに授業に関する資料やシラバスをメールで参加者にお送りしています。」という記述がありましたが、実際にはシラバスをいただいたのは授業の直前。事実と異なることが書いてあるのはいただけませんね。私の場合には、自主的に大学のWebサイトでシラバスを参照してから授業参観に臨んでいたので可能であればシラバス参考図書を読んだりその日の授業は何をやるのかということも事前に知ったりすることができました。もろい大人である以上はそういうことは言われずともやるのが当たり前かもしれませんが、事実と異なることが記載されていることは良くないことだと思います。

V. ショートコースを選択した理由について

1. ショートコースを選択した理由について、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) フルコースだと負担が大きかったから	1	2	11	7
(2) フルコースに参加する時間がとれないと思ったから	0	3	4	14
(3) まずショートコースで内容を試してみたかったから	2	4	10	5
(4) ショートコースの方が気軽に参加できるから	0	1	9	11
(5) 指導教員、所属長からの推薦状を取得するのが難しかったから	5	5	10	1
(6) 書類選考や面接による審査を避けたかったから	4	5	10	1
(7) 自分にはショートコースの内容で十分だと思ったから	4	8	8	1
(8) フルコースに参加するには日常の業務が忙しすぎるから	3	12	6	0
(9) (ショートコースを受けてみて) 今からでもフルコースに参加してみたい	2	6	10	1
(10) (ショートコースを受けてみて) ショートコースの内容で十分だと思う	1	7	12	1

2. ショートコースを選択した上記以外の理由

- ▶ 着任1年から2年目の教員こそ特にフルコースが必要に思うが、新天地での研究や授業の準備が大変であり、さらに新任のためそこに時間を使うことや部局との兼ね合いなどから中々受講しづらい現状である。また、任期付きの立場であるが、周囲から「受講しても採用には意味がない。研究した方がよい」との意見も言われ（私は全くそうは思わないが）、少なくとも私の週は堂々と受講することを良しとする環境では無かった。
- ▶ NFP・PFPPについて知って知ってから応募までの期間が短かったため、フルコースの内容や実現可能性を十分に検討する時間がなかったためショートコースを選択した。また、フルコースは海外での学びがあるが、その期間の業務ができないことが、フルコースを選びにくい大きな要因であると思う。
- ▶ 私は要領の良い人間ではないので、初めて体験することは内容をうまくこなせなかったり理解できなかったりします。ですから、このプログラムはこういうことをやるんだということやショートコースを体験することによってある程度知った上で、フルコースを受講するのであれば受講するというようなやり方が自分には合っているのだろうと思ったわけです。また、英語がまったくダメなので海外研修を行うことはかなり難しいと思ったことも理由のひとつです。

VI. プログラムの運営について

1. プログラムの運営について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) JFPの広報、募集の時期は適切だった	0	0	12	9
(2) JFPにおけるセミナーの回数は適切だった	0	1	15	5

2. プログラム提供期間について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1)JFPの提供期間は適切だった	0	1	12	8

- 該当者ではないが、個人的な都合（出張等）では7, 8, 9, 10月あたりに集中して講演等のセミナーがある都合がつきやすいです。
- ちょうど授業参観の参加期間が推薦入試や一般入試の準備期間と重なり、日程の調整がとて難しかったため。希望調査をもう少し早めに行うか、もし可能であれば希望調査を行った結果、決定した参観可能な授業を参加者全体にもう一度お知らせしていただけると、急な変更があった際に再度予定を組み易いのではないかと感じました。
- 前半の自由記述欄にも書いたが、ショートコースにおいても、11月、12月とセミナーを設けてほしかった。例えば、いくつかの授業見学をした後での、理想の大学教員像の明確化とそのための自身の自身の行動計画の立案など、まとめの機会があるとよいと思った。

3. プログラムの広報方法についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
  - 所属部局からの転送メールで知った。直接知っていたとしても参加したかどうかは怪しい。所属部局からのメールであったことと、知り合いに説明会に参加してもらったことなどが参加するきっかけになった。修了生が口コミで広げていくのもありだと思う。
  - 特になし。
  - 東北大学の学生向けとしては、入学式のオリエンテーションでプログラムの紹介があってもいいかもしれない。

4. プログラム全体についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
  - 教授の方々にもぜひ参加してほしいプログラムであった。
  - 特定の分野で納まらず、さまざまな内容が提供されていたので毎回興味深く参加しました。リフレクティブジャーナルを書くことも大変役に立ったと思います。授業について考えつつ、学生(受講生)の気分を思い出すのにも良い機会だったと思います。今後も機会があれば参加したいな、と思います。
  - セミナーや授業参観については、先に書きましたが、何よりも、今野先生、岡田先生をはじめ、プログラムのスタッフの方々が、運営に熱心に取り組んでおられることがよく伝わり、仕事に対する情熱の大切さを学ぶことができました。このような機会を与えていただきましたこと、お礼申し上げます。お世話になりました。
  - 他の参加者の方と交流できる機会があまり取れなかったのが残念ではありますが、個人の事情に依るところが大きいので、プログラム全体はよく構成されていると感じます。
  - 「先輩の知恵」に、「PPFP」の各セミナーが単発のものではなく、大きな目的のためのつながったプログラムであることを意識するように」とあった。このことをなるべく意識するようににはし

たが、ショートコースで例えば、12月（もしくは1月）のセミナーとして、PPFPショートコース全体を振り返り振り返るような締めくくりの会を設けてはどうかと思う。「授業を見る聞く学ぶ」でバラバラに活動した受講者が最後に集って、半年の学びを振り返るのはどうだろうか。後半が尻すぼみになってしまう感が非常に勿体ない感じがする。

- 中等教育の教職課程を学部のとくに履修した経験から言えることは、中等教育と高等教育とでは教員が行う必要があること、知っている必要があることにはかなり共通点があるということです。おそらくは初等教育でも同じことが言えるはずですが、ゆえに、大学教員だけを対象にすることは少々もったいないと思います。授業参観に関して、最初はどのようなところにも注目すべきかよくわかりませんでした。現職の教員の方であればある程度心得ているのかもしれませんが、何らかの指針があると分かりますか、障害を持つた方も含まれません。数回のセミナーを受講してみても、評価の行い方や学生の引き付け方、障害を持つた学生への対応のしかた等の視点で授業を見ることが、質問をすることができるといいなっていました。

## VII. プログラムの運営について

1. プログラムの受講の効果について、参加者から以下の回答を得た。
  - 本プログラムを受講することで、自分の教育実践を振り返る視点を増やせたと思う。特に、授業見学が私にとつて大きな収穫だった。他の教員の授業をみることで、いろいろな選択肢を増やせたと思う。
  - 数回のプログラムだけでは、リフレクションを日常を通して行う姿勢などまだまだ習慣化できていないこともあるが、多角的な視点を持つことへの理解や教授法など、多くの気づきがあった。大学教員としての在り方は、置かれた場所により多様であり、その多様性から得られた視点を自身の立場にうまく取り入れていくことを学んだ。他分野の受講生や経歴豊かな先輩教員の皆さんと触れ合うことで、これまでの教育観や価値観に柔軟性を加えることができたと振り返る。
  - 1 単位に相当する学修に必要な時間というものを全く理解していなかったため、毎回の講義内容をどの程度濃度にするかを考えたことがなく、その理解をしたのちは、自分が漠然と考えていた内容では足りないと思った。評価する方法を考えながらシラバスを設計する必要性などもはつきりと意識して考えたことがなかった。これまで教養科目の講義経験がなかったため深く考えてこなかった点であるがこれらについても考える必要があるとわかった。理解のプロセスについても今回初めて話を聞くことができ、私が講義を行なう場合には活かしていきたいと思う。
  - これまで自分が取り組んできたことを客観的に振り返って考える機会になった。また、他分野のお話を聞くことで、自分の視野が狭くなっていくことに気がついた。業務の関係もあってか、ここしばらく教育に意識が強く向いていたが、研究することについてもじっくり考えねばと思う機会が多くなった。
  - 授業参観が特に参考になった。各先生とも授業内容やスタイルに併せた独自の創意工夫をしており、自身の授業と照らし合わせてフィードバックできる良い機会となった。また、セミナーに関してはシラバス作成が特に効果的であったと感じ、私自身本プログラムを通して座

学的なセミナーよりも実学的なものがより身についたと思う。そう言う意味でも、受講生のタイプや分野、目的に合わせたセミナーを開講してくれるとありがたい。私自身が実学派、理系なので実習や問題作成・回答形式のセミナーがもっと多いとありがたい。また、理系教員に向けてのプログラムもあると個人的にはありがたい。

▶ 授業の単位認定に値する「可」の考え方について、当初はシラバスの水準をクリアできた場合80点と位置づけていましたが、最低限の基準(60点)をクリアできるようなシラバスを設定するべきだと心境に変化がありました。また、3つの専門性の異なる授業を受けさせて頂いて、いい授業とは一方的に講義することなく、いかに学生を巻き込むか・参加させるかというところが重要であり、その準備には膨大な時間が必要であることがそれぞれの授業から学べ、これまで漠然ととらえていた講義というものの裏側が垣間見えてよかったです。

▶ 先達の先生方の授業を参観できる機会には本当に貴重な経験であり、今後の自分の教育活動にとって間違いなく財産になると感じます。諸先輩方の教材研究・授業運営の手法や学生を想う熱意に触れ、今まで手探りであいまいままやってきたことがいかに学生にとって不利益であったかを反省させられる思いでした。教育活動初期の教育者を育成・教育する仕組みをもっと充実させ、またそのような機会を教多く経験することができるようになれば、さらに質の高い教育活動を行うことができると感じました。先達の先生方のお話や授業を拜見して特に感じたことは、教員自身が熱意をもって授業を計画し運営することで、必ず学生にもその熱意は伝わるということです。学生が集中して授業に取り組む環境をいかに工夫して整えてあげられるか次第で、その後の姿勢も大きく変化することが実感でき、教員自身の評価やフィードバックの不足などの問題点も改めて自覚できました。すでにリアクションシート等を導入して学生からの授業評価や改善要望を集めています。今後このようなプログラムに参加する機会があればぜひまた参加したいと思っています。

▶ これまで、TA以外には教育にかかわる機会がなかったので、改めて教育の精勤の重さを考えさせられました。他分野、とりわけ理科系の方々との対話を通じて、人文・社会科学の役割を考えさせられるとともに、授業参観では、専門外の学生への教養教育の重要性、関心を引き出すための工夫の必要などを考えさせられました。また、受講を通じて、大学や教育をめぐる諸問題に関して、これまで以上に関心を持ち、考えるようになったと思います。

▶ 以前よりは自分の授業を客観的に見られるようになったと感じます。

▶ 自己満足の授業にならないよう、たとえ経験年数を重ねて自信がついてきても、謙虚な姿勢で他から学ぶ、良い教育実践から学び続けることが大事であると、改めて認識させていただきました。プログラム実施を支えていただいた皆様、貴重な機会をありがとうございました。

▶ 等身大の大学教員の姿 永吉久子先生は、ご自身の授業を見る聞く学ぶのために公開してください、ディスカッションで、試行錯誤しての苦労をお話しくださった。また、12月の授業見学では、永吉先生は、すでに大学教員をされているにもかかわらず、2コマも授業見学に参加されていた。自分の教育の質を高めようと努力されている姿を見せていただいた。私自身は、大学生の時、教育実習に行き、あまりの指導のできなさ、理想の教師と現実の自分のギャップに失望した。今から思えば、大学2年生がいきなり理想の教師のように授業ができるわけなどなかったのだが、当時はそんなこともわからず、自分は教員に

は向いていないと教員になることをやめた。研究も完璧にこなせるスパーマンマンだが、大学教員になるわけではないのだ。努力するからこそ、目指す大学教員の姿に近づいていくのである。永吉先生の等身大の大学教員としての姿は、私に希望を与えた。・大学教員の役割 それでは私にとっての理想の大学教員の姿とはどのようなものか。東北大学の堀龍也先生の講義は、講義の内容そのものが興味深いこととはもちろんであるが、大学生対象であっても、線を引きながら資料を読む、メモを取りながら映像を見るなど学習の仕方を教え、良い意味でパターン化された授業の進め方で学生に自動化を促し、どんな発言も拾ってくれることで発言したくなる雰囲気を作られている。今回、邑本俊亮先生の授業を、PFFPのセミナーと実際の学生を相手にした授業との2回も味わうことができた。邑本先生は、クイズのように事例を織り込むことで、そうなんだと学生を感心させながら理論的なことを教えてくださる。パターン化されたワークシートで、授業の全体像を示し、ワークシートの中で毎回のリアクションを実現する。張りのある声で、でも決して押しつけがましくない雰囲気がある。このように講義内容が学生にとって有用であり、学び方も教え、学生に力が付き、意欲的に取り組んでくれる、(漠然としている表現しかできないが、)これが私の理想の大学の授業であり、それを表現できることが理想の大学教員である。このことをもって行動レベルに落とし込んで実現できるように目標立てていかなくてはならないのである。アンケートに書くのはここまでである。PFFP2016に参加したことで、自分には無理だと思っていた大学教員という仕事が、少し近くにやってくるような気がしている。参加させてもらったことを心から感謝しています。ありがとうございました。

▶ プログラムに参加するまでは、授業の内容が『理詰め』だったが、分かりやすい授業を心がけるようになった。自分は、ただの『研究者』でなく『教員』であるということを意識するようになった。

▶ 以前は小学校から高等学校の教員と大学の教員とを比較すると異なることが多いのだろうなと考えていましたが、それは違っていました。共通点が驚くほど多い。このことがこのプログラムを受講して最も深く感じたことでした。だから、大学教員たる者、大学だけではなく小学校、中学校、高等学校の現状も知っておく必要があるのだろうと感じました。ひとつ考えられることは、大学の授業だけではなく、小学校、中学校、高等学校の授業も見なければもっと考えが広がるのではないかと。

▶ 本プログラムを受講して、大学教員の役割や仕事をより深く理解することができました。また1)シラバスの設計2)講義時間の配分3)講義の進め方について大変良い勉強になりました。今後の講義に取り入れて応用したいと思います。

## 2016 年度 JFP フルコースアンケート結果

2016 年度 JFP フルコースアンケートでは、以下に示す 8 つのカテゴリからなる質問項目を設け、参加者からの回答を得た。回答者は 6 名であった。

- I. 各種セミナーについて
- II. リフレクティブジャーナルについて
- III. 先達教員について
- IV. 動画配信の利用について
- V. プログラム参加における情報提供について
- VI. 国内他大学訪問調査について
- VII. 海外他大学訪問調査について
- VIII. プログラムの運用について

### I. 各種セミナーについて

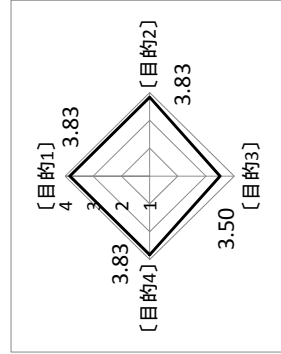
1. 以下に示す達成目標に対して、それぞれのセミナーはどの程度有益であったかについて 4 件法 (1. 全く有益ではなかった～4. とても有益だった) で評価を求めた。

#### 【NPP の達成目標】

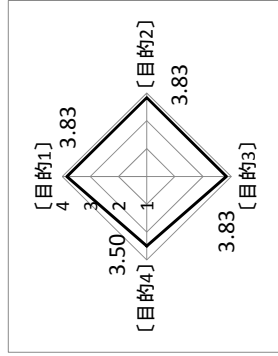
- 【目的 1】 生涯にわたり専門性を高めるために、効果的な省察ができるようになる
- 【目的 2】 大学教員の役割、仕事を理解し、展望を持ってキャリアを設計できる
- 【目的 3】 教育活動に関する基礎的知識を身に付け、自分なりの言葉で教育観を語るようになる
- 【目的 4】 異分野の研究や教育文化を知る

以下に各種セミナーに対する参加者からの評価結果を示す。図中の数値は全体の平均値である。

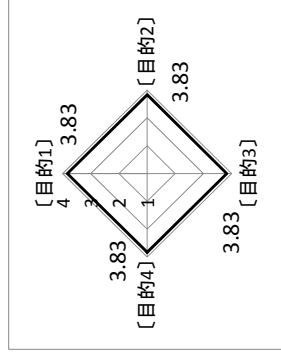
(A) オリエンテーション  
「大学教員の役割...」「比較の目を育てる」



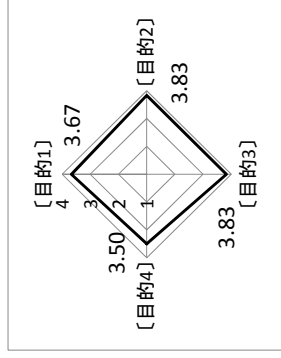
(B) 「授業デザインとシラバス作成」



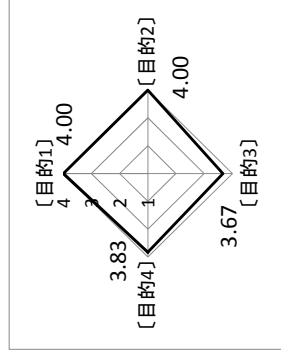
C) 「授業づくり：準備と運営」



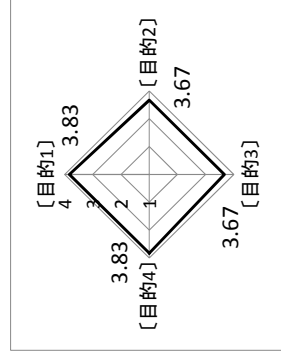
D) 「本当のかしこさ」とは何か」



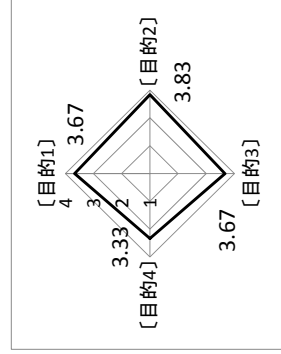
E) 「授業を見る聞く学ぶ」授業参観



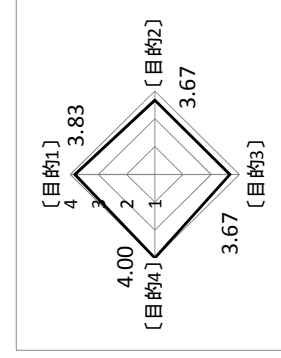
F) 「自分の授業をみつめる」マイクロティーチング



G) 「コーチング技能を活用した院生指導」



H) 「自分の授業をみつめる」模擬授業





## II. リフレクティブジャーナルについて

プログラム全体を通してのリフレクティブジャーナルの執筆について参加者からの評価を求めた。

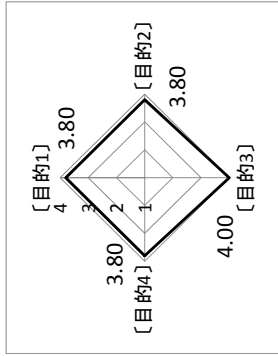
1. リフレクティブ・ジャーナル（以下ジャーナル）の作成についての評価を求めたところ、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ジャーナルの執筆方法について十分な説明・支援を受けた	0	0	0	6
(2) ジャーナルの執筆が学習内容の整理・記録に役立った	0	0	1	5
(3) ジャーナルの執筆は自身の思考を深めるのに役立った	0	0	1	5
(4) ジャーナルの執筆により新たな気づきを得られた	0	0	1	4
(5) ジャーナルの執筆は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	0	6
(6) ジャーナルの執筆は最終課題レポートの執筆に役立った	0	0	1	5
(7) ジャーナルに何を書いたらよいかわからないことがあった	3	2	0	1
(8) ジャーナルの提出締め切りは適切だった	0	0	2	4
(9) ジャーナルの執筆に取り組むことでリフレクシオンのやり方が身についた	0	0	3	3
(10) ジャーナルの執筆はこのプログラムに必要なと思った	0	0	0	6

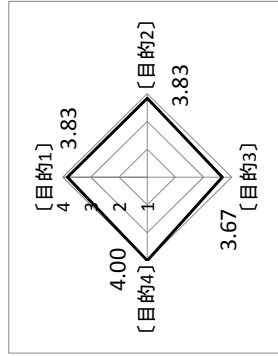
### 【自由記述より】

- プログラム全体を通して、自分のリフレクションが深まるきっかけになった出来事について
  - 自分のためのメモではなく、人に伝えるということを意識して言語化するということが役に立っていたように思います。ジャーナルを書くこともそうですが、セミナー後に他のメンバーと感想をシェアすることで、自分が感じたり深まったりしていたように感じました。また、ジャーナルでもディスカッションでも、伝えただけに、その内容に対してのフィードバックや他の人の感想が得られたことで、自分がうまく言語化できていなかった部分を明確にしてみてもいい、人と比べての自分のものの見方の個性を知ることができ、良かったと思います。加えて、プログラムが進行し、自分なりの考えがある程度深まってきた段階で、それ以前のセミナーあるいは以前に書いたジャーナルに立ち返ることで、新しい気づきを得られたり、見方が変わったりました。他人との比較だけではなく、以前の自分と現在の自分を比較すること、見えてくるものも多かったように思います。
  - 自分のリフレクションについて、スタッフからのレスポンスが充実しているため、自分の考えていることがどういふ風に第三者に受け止められるのかという点について発見できる付加価値が大きかった。

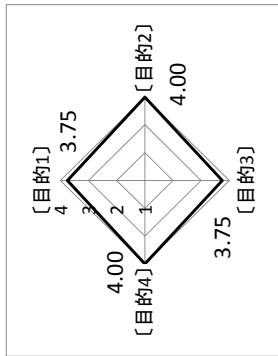
J) 「国内外大学訪問調査事前研修」



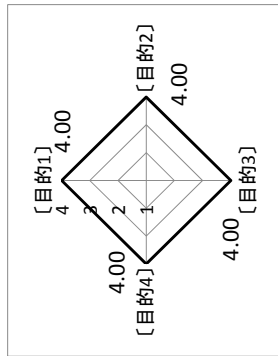
L) 「先達から学ぶ」先達コンサルテーション



I) 「国内他大学訪問調査」



K) 「国内外大学訪問調査」



2. 各種セミナーに関するその他の意見、要望、提案は以下の通りである。
  - 講師の先生方のご都合があまりむずかしいとは思いますが、授業期間に開催されるセミナーの曜日が偏ると、欠席が続いてしまったりするため、できれば曜日が分散しているとありがたいです。最初の面接時に、授業担当曜日をお願いしていた気がしますが、後期のスケジュールを正確に把握しておらず間違っただけのような記憶もあります。もし融通がきくようであれば、受講生が固定で参加できない曜日時間を、オリエンテーション時等に文書で提出させるなどしていただくと良いようにも思います。ただ、コーチング以外では ISTU でフォローかなりしつかりとできたので大変ありがたかったです。
  - 非常に多角的なプログラムで、広く知見を深めたいという私の目的に合致していた。特に授業参観や国内外研修は自力では難しい機会を得られるいい機会だった。
  - どのセミナーも大変有意義でした。今後はOBとして貢献できればと考えております。

- セミナーを振り返ることで、記憶が定着すると感じた。また、最後の最終報告のレポートは、今までの研修の資料を振り返ることができ、そのときに、新たな視点で研修資料を見ることができ、成長を感じることができた。

- ジャーナルの執筆、リフレクションの実践についての意見、要望、提案
  - ジャーナル提出の受領メールで、いろいろとコメントをいただけたのが、本当にありがたかったです。報告会で先輩の先生のコメントを伺って、先生方にとってはご負担...ということもよくわかりました。毎回自分のジャーナルと合わせていただいたメールを印刷してフィードバックしていただいていたが、今度整理するのはとても嬉しい機会となった。自由フォーマットのため自由に書きやすかったです
  - 今後ぜひ、継続してほしいと思います

### III. 先達教員について

- 1. プログラムにおける先達教員との交流についての評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 先達教員の存在によりプログラムの内容がより深く理解できた	0	0	2	4
(2) 先達教員との交流によりセミナーでの学習内容を現場の実態や教員の経験と結びつけて考えることができた	0	0	2	4
(3) 先達教員の存在は達成目標への到達に対して有益だった	0	0	2	4
(4) 先達教員の存在は自身の教育に対する考え方に影響を与えた	0	0	2	4

- 2. ジャーナルに対する先達教員からのコメントについての評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 先達教員からのコメントは自身の思考を深めるのに役立った	0	0	3	3
(2) 先達教員からのコメントにより新たな気づきを得られた	0	0	2	4
(3) 先達教員からのコメントは最終課題の執筆に役立った	0	0	2	4
(4) 先達教員からのコメントのフィードバックのタイミングは適切だった	0	0	2	4

- 3. 先達教員との交流、コメントについてのその他の意見、要望、提案は以下の通りである。

- オリエンテーションの際の昼食時、メンバー同士も初対面だったこともあり、メンバー間の会話は終始してしまいがちだった記憶があります。先輩の先生方と直接お話できる機会は限られていますが、そのことの貴重さを十分に理解できていなかったようにも思います。たぶんアナウンスしていただいていたと思うのですが、メンバー同士はいつでも話せるので今後はぜひ先達教員と交流を、と強く促していただけるとありがたいかもしれないです。授業参観、コンサートについては、かなりじっくりとお話を伺うことができ、大変満足でしたので、特に要望等はありません。
- 短い時間を有効活用するために事前に各先生の授業経験などを調べたうえで臨んだが、話をしてみるとそういう事前調べの中ではみえてこなかった高次連携への活動の経験が浮き彫りになり話もろがらあり等、予測不能な難しさも面白さがあった。私個人は教育のあらゆるフィールドに関心があるので、むしろ各々の先生がもつとも問題意識をもっているトピックを定めてそれについて議論するのもいいかなと思った。実際事前に用意した質問がその先生とマッチしなかったり、どういふトピックに対して深い知見があるかを深める時間がどうしてもかかってしまったところがあり、最初からテーマが決まっていた方がより深い議論にはやく到達できたと思う。
- 先達教員との個人面談は非常に有用でした。ぜひ、来年度も以降も継続してほしいと思います。できれば、面談時間は本年度同様20分程度あると良いと思います。

### IV. 動画配信の利用について

- 動画配信の利用について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

- 1. プログラム期間中を通して、ISTUを利用しましたか。

1. 利用した	6
2. 利用しなかった	0

- 2. 動画配信について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	未使用	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) ISTUの利用方法について十分な説明・支援を受けた	0	0	0	2	4
(2) ISTUによる動画配信は学習の役に立った	0	0	1	2	3

- 3. ISTUの利用についての意見、要望、提案は以下の通りである。
  - ISTUには本場にお世話になりました。欠席時のフォローという意味だけではなく、当日受

講したものの振り返りとしても大変役立ちました。ジャーナル執筆時だけでなく、数ヶ月後など時間を空けての復習という意味でもとても活用できました。復習としての使い方については先輩の知恵を参考にしたのですが、口頭で伝えていただけるといいかもしれません。(す)

➤ ISTU は欠席したときの代替手段というイメージが強く、あまり活用しませんでした。(すべての研修に参加したので) 自身がリフレクションを行う際にISTUをもっと利用すればよかったと思います。

#### V. プログラム参加における情報提供について

1. オリエンテーション時に配布した「先輩の知恵」について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 「先輩の知恵」を読んだ	0	0	4	2
(2) 「先輩の知恵」の内容が研修の参加に役立った	0	0	4	2

2. 「先輩の知恵」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- どの内容も、本当にそのとおりで、読んでおいてよかったと思います。
- 様々なイベントに対して「よく準備しておけb」という旨の記述があったため、それぞれに対して備える気持ちをもつことができました。

3. パークレー研修前にメールマガジンのかたちで送ったメール「パークレー研修に向けて」について、参加者から以下の回答を得た。

	全く読まなかった	ほとんど読まなかった	ある程度読んだ	かなり読んだ
(1) 「パークレー研修に向けて」を読んだ	1	0	1	4
(2) 「パークレー研修に向けて」の内容が研修の参加に役立った	0	0	1	4

4. 「パークレー研修に向けて」についての意見、要望、提案は以下の通りである。

- 最後の方に送っていたいただいた動画は、リスニングの練習にもパークレーの理解にもとても良かったです。教えていただいた YouTube からあれこれとってみた結果、パークレーの公式アカウントから実際の授業動画もたくさん公開されていることを知り、出発前数週間は仕事中はほぼずっと BGM として流していました。自分の専門の授業などは用語もわかかって聴きやすいので、おすすめしたいなと思います。事前研修を受けると授業 ID から誰向けの講義か、までわかかってさらに面白かったです。GSI セクションの動画もいくつかあって、なるほどこういうものなのかと、目で見ても初めて理解できたので、そういうものも事前に見ておけてよかったです。
- 事前に GSI プログラムについて事前研修はそこまでフォーカスしないため、ガイダンス動画やシラバスをみることで、その背景を理解して参加したのは大きかったです。
- 海外では日本と文化が異なることも考えられるので、しっかりと事前準備する必要があると思います。本年度は、事前研修があり、心構えなども勉強でき、よかったです。
- 「パークレー研修に向けて」を最初に読まなかったのが、個人的にも残念でした。時間がなかったということもあったが、「パークレー研修に向けて」についても、リフレクティブジャーナルを提出しないといけないという決まりがあったら、きつともっとはじめに取り組んでいたと思います(提出しなきゃ、というプレッシャーを感じただけではなく、与えられていた情報が、自分にとってどのような意味を持つか、パークレー研修で具体的にどのようなことをやりたいか・できるかについて、前もってもって考える機会にもなったのかもかもしれません)。

#### VI. 国内他大学調査訪問について

1. 国内他大学調査訪問について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 研修前に十分な情報・支援を受けることができた	0	0	0	4
(2) 引率教員と十分なコミュニケーションがとれた	0	0	0	4
(3) プログラムの内容は充実していた	0	0	0	4
(4) プログラムの内容・分量に対して負担を感じた	1	2	1	0
(5) プログラムに参加することで大学間の比較の視点を養うことができた	0	0	0	4

2. フィールドワークで実施した活動について、参加者の回答は以下の通りである。

- 関西の中でも同志社や立命館といった普段なじみのない大規模私立大学に触れることができたのが貴重な体験だった。この機会を通してほとんど知らなかったラーニングコンテンツについて俯瞰的に考えることができるようになった。

- 他大学との比較は非常に大事だと思えます。なかなか他大学の授業を参観できることは難しいので、ぜひ、来年度も継続してほしいと思います。
- 大変勉強になった。今回阪大の授業参観と施設見学もできて、とてもよかったです。

**VII. 海外他大学調査訪問について**

1. 海外他大学調査訪問について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 研修前に十分な情報・支援を受けることができた	0	0	0	5
(2) 引率教員と十分なコミュニケーションがとれた	0	0	0	5
(3) プログラムの内容は充実していた	0	0	0	5
(4) プログラムの内容・分量に対して負担を感じた	2	1	1	1
(5) プログラムに参加することで大学間の比較の視点を養うことができた	0	0	0	5

2. 海外他大学調査訪問におけるフィールドワークについて評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) 希望する研究者を訪問することができた	0	0	1	4
(2) フィールドワークの時間を有効に使うことができた	0	0	1	4
(3) フィールドワークの実施に対して負担を感じた	3	1	1	0
4(4) フィールドワークでの実践結果に満足した	0	0	1	4

3. フィールドワークで実施した活動

- 臨床心理学の Ph.D コースの責任者である教授、および Ph.D.コースの学内実習機関としての附属クリニックの責任者を訪問しました。前者には Ph.D.コースの学生に対する研究指導体制や、そこでの問題点、ラボとしての研究組織のつくり方や、それを通して学部生から院生までが学生同士で教える体制や環境の育て方などについて教えていただきました。同時に日本の研究指導の問題点について伝え、アメリカとの共通点について教えていただいた上で、解決策についてのディスカッションをしました。後者の方では、臨床実習の体制を詳しく教えていただいた上で、研究指導とのバランスの取り方についても教えていただきました。事前にアポイントを取っていたのは上記 2 名ですが、現地で Ph.D.の学生さんを紹介してい

ただき、学生の視点から見ただけで、限界点について話を聞かせてもらいました。加えて、その学生さんが担当している GSI セクションについて、資料や運営方法に関する話も伺うことができました。実際の GSI セクションの見学も提案されたのですが、空き時間がなかったものでそれは叶いませんでした。またクリニックの施設見学も、学生さんに案内してもらいました。

- ・ 自分に関連する研究を行っている研究所および研究室の訪問、装置の見学・LBNLにおける高次連携プログラムに関するディスカッション
- 引率教員のフォロー・サポートで大変有意義な海外研修となった。海外での授業を参観することは、比較の目を育てるのに必要なことだと思います。
- まず、私の専門分野の授業を 2 つ参観しました。そのうち 1 つの授業の担当の先生は、授業やご自身の teaching methods について話す時間もとってくださり、大変勉強になりました。また、問題関心の近い研究者 (1 名) との打ち合わせもし、研究の話もできました。大変充実したフィールド・ワークになったと思います。

**VIII. プログラムの運営について**

1. プログラムの運営について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) NFP の広報、募集の時期は適切だった	0	0	2	4
(2) NFP におけるセミナーの回数は適切だった	0	0	3	3

2. プログラム提供期間について評価を求め、参加者から以下の回答を得た。

	全くそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う
(1) プログラム提供期間 (7 月～3 月提供) は適切だった	0	0	4	2

(「全くそう思わない」「あまりそう思わない」を選択した回答者からの要望)

- ・ どうしよもない部分が大きいとは思いますが、2～3 月の負担が (普段の業務も増える分) 大きかった。おそらくマイクロラーニングを授業参観後にやりたいということだと思いが、マイクロラーニング、授業参観を少し早めることができれば負担は多少違うと感じた。

く取り入れたいと思うようになりました。来年度、ゼミ運営に関連していくつか試してみたいと考えています。1 点目はゼミ生と相談の上、来年度からゼミのオープン化をはかることにしました。今年度クロージングで開催していたゼミの集まりを、来年度他ゼミの院生に対して開放することにししました。発足したことで D 生がいないという大きな限界点があったのですが、他ゼミの D 生が参加を希望してくれたことで、学生同士が学び合う教え合うという体制が促されるのとともに、他ゼミの文化を背景とした指摺が開けるようになればと考えています。加えて、こちらも当初ゼミ行事として予定していた論文執筆合宿を、学内外職種専門年齢等を問わず公開（知人の範囲で）することにしました。論文を書くという共通項をもった上で、そこでの悩みや工夫などを、途中のワークショップや懇親会で異分野交流できればと思っています。できれば NFP 同期とのつながりが、そうした場で活かされればとも考えています。

- もともと教育に関心があったが、所属している部署が教育 duty がないところのため、自分の教育活動を行うのに非常にエネルギーが必要な状況だった。その中で定期的に参加者やスタッフからの刺激を受けることで 1 年間教育へのモチベーションを保ち続けることができたのが一番の収穫だった（おそらく関連分野でこれだけアウトリーチに気持ちを持っている人はいないんじゃないかというぐらい熱心に取り組むことができた）。またそれまで中等教育に比べて高等教育をそこまで意識していなかったが、結局この二つは連結されており、大学教員にとって高等教育も重要なミッションであると考えているようになった。
- 受講する前は、「大学教員の仕事とは何か」かなり漠然としていましたが、受講することによって、少しずつ自分が目指すべき大学教員像が明確になってきました。

3. プログラムの広報方法についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。

- 各研究科等の教授会でアナウンスしてもらったのが、効果的なのではないかという印象があります。ポストにパンフレットを投函されたみたいなのも教員はあまりと聞いていないように思います。プログラマがあるということさえ知れば、指導学生に教員志望の学生がいたら紹介しようという気になるように思いますし、新任教員側も、公式に認められている雰囲気になり参加を申し出やすいような気がします。
  - 現状のような新任教員研修でのリーフレット配布、事前説明会等の体制は本来に関心のある参加者にちよほど届くいい広報手段に感じている。
4. プログラム全体についての意見、要望、提案について自由記述で回答を求めた。
- すべての内容が自分のやっていることに直結していたので、参加してよかったですから思います。回数に限られている中で、プログラム全体がどちらかというと学部教育、授業というところに重点が置かれていて、多くの PFP/NFP 対象者が一番困る部分にフォーカスされていて有益だと思えました。そのような制限の中でも、コアニングのセッションが含まれるなど、大学院教育と個別指導が業務の 9 割型をしめるやや特殊な自分自身の現職にとって、一番知りたい部分もカバーされていてありがたかったです。パークレーでのフィールドワークや先達コンサルなど、プログラム全体とはややずれる自分個人の関心や問題について解決できる時間が確保されているのもありがたかったです。敢えてあげるとすると、パークレーで最終日に受けた倫理の WS で、自分を含め NFP メンバーの関心が高くなり高く、昼休みもそのまま盛り上がりつつあり、4.5 時間もデイスカッションできそうだったので、そのあたりの内容があれば面白いと個人的には思いました。実際、SNS の扱いや、夜遅い時間に異性の学生が研究室を訪ねてきたらどうするか、など身近な教員の中でも意見が割れることも多く、対応に悩む初年度だったので。ただ、当日の反応をみると PFPF メンバーとの間にわりとテンションのギャップがあったので、PFP/NFP のテーマではないのかも感じました。
  - 大変充実したプログラムだった。各大学でかなりプログラムの質も違うことが分かり、その個性も重要なポイントだと思うので、今後も独自のプログラム開発を期待している。

5. 本プログラムを受講して、ご自身のこれまでの教育観や価値観、行動について変化、明確化が図られた点について自由記述で回答を求めた。

- 教育観を育てるという大きな目的の手前で、「明日から使える」知識スキルを得ることも多かったのですが、担当している授業の講義の仕方、グループワークの仕方は、授業参観やマイクログ、模擬授業を経てリアルタイムで更新していくことができました。また、教育観価値観という意味で授業面が変化があったのは、大規模を相手とした講義で試す前に諦めていたことを、まずは試してみようと思ったことだったと思います。様々な工夫をこらした大規模授業を参観できたことは、学生だったときのことを含めても初めての経験で、非常に新鮮でハッとさせられました。プログラム全体を通して比較と他者との交流の重要性を毎回必ず感じており、それを自分の実践にも広



2016年度JFPフルコース海外他大調査訪問（パークレー研修）アンケート結果

2016年度パークレー研修アンケートでは、参加者6名からの回答を得た。

I. パークレー研修の各セッションについて

1. 以下に示すそれぞれのセッションがどの程度有益であったかについて4件法で評価を求めた。

- 0. 不参加
- 1. 全く有益ではなかった
- 2. あまり有益ではなかった
- 3. 有益だった
- 4. とても有益だった

	不参加	そうでもない	あまりでもない	まあまあ	とても面白い
<b>【1日目】</b>					
(1) Welcome and Introduction to the Program	0	0	0	2	4
(2) Teaching and Learning at Berkeley (Linda)	0	0	0	1	5
(3) The Basics of Teaching (Linda)	0	0	0	2	4
(4) Campus Tour	0	0	1	1	4
<b>【2日目】</b>					
(1) Observation: The Politics of Educational Inequality (Lecture)	1	0	0	1	4
(2) Workshop: Fostering Student Participation (Michel)	1	0	0	1	4
(3) Student Learning Center	1	0	0	2	3
(4) Observation: Brain, Mind, and Behavior (Lecture)	0	0	1	2	3
<b>【3日目】</b>					
(1) Observation: The Politics of Educational Inequality (GSI section)	0	0	0	0	6
(2) Observations of Sections: Biological Anthropology	0	0	1	2	4
<b>【4日目】</b>					
(1) Overview of the Day's Program: Debriefing of Day 3 (Linda)	0	0	0	0	6
(2) Lunch with GSI	2	0	0	2	2
<b>【5日目】</b>					
(1) Overview of the Day's Program (Linda)	0	0	0	1	5
(2) Professional Standards and Ethics (Linda)	0	0	0	1	5
(3) Presentations	0	0	1	1	4
(4) Closing Reception	0	0	0	2	4
<b>【期間中】</b>					
(1) Field work	0	0	0	0	6

2. 各セッションへの意見、要望、提案は以下の通りである。

- 授業にもっと出たい。
- それぞれの Workshop が大変有益だったと感じた。事例をもとにグループ等でディスカッションし、後教師からも指摘・助言をいただけるところがとて勉強になった。特に professional ethics のワークショップが、今まで全く受けたことがなかったの、大変勉強になった。毎日の debriefing も、振り返ってみれば、とても有益であった。前の日に気づいたこと、疑問に思ったことが、まだ頭に残っていた時点で、それを Linda に投げかけたりすることができて、頭の中も整理もでき、学んだこと・経験したことをすぐ忘れずにも済んだ。大変よかつた。
- 普段教育に焦点をあてて海外の大学に訪問できる機会を得られることはないのですが、その点1週間海外の教育現場を観るということに注ぐことができたのは有意義だった。特に Berkeley にとって特徴的な GSI の学生と FREE HOUSE 等で奇譚なく議論ができたのは刺激的で、本プログラムならではのものを得ることができたと感じている。これは、GSI center や引率教員の負担と大学のスケジュールにも依存するところではあるが、個人としてはプログラムがもうひと回り密でも十分それぞれのプログラムから吸収することができたかと感じている。また、ガチガチの理科系の授業や GSI session をせわつかなくなのでみたかったと感じており、このあたりは事前に field work として私がアレンジできればよかつたと反省している。
- 【プログラムについて】全体としては、どのプログラムもとても満足度が高く、充実していて、眠くなることもほとんどありませんでした。プログラムの量としても、ちょうどよかつたように思います。参観もワークショップも、デブリリーフィングも、全部「もっと時間がほしい」という気持ちは残りましたが、あれ以上増やしていたら今度は体力的にきつかつたかなと思います。体力が落ちると英語がきつくなると、多少余裕が残るぐらいの、今の量はとても適度という印象をもちました。あえて延ばすとしたら、個人的にはデブリリーフィングの時間をもう30分ずつでも延ばしてもらえればありがたかつたようにも思いますが、それは夕食会や最後のレセプション等の他の場でも補えるので。1つの講義に対して2つのGSIセッションがありましたが、本音をいえればどちらも見ても良かったです。ただこれは受け入れのキャパがあるので、むしろ、2つのセッションを終えて、お互いに報告しあう時間を正式に設けてもいいかなと思います。またまた夕食会の際に話を伺うことができ、とても勉強になりましたが、かなり面白い発見が多かつたので、全員がそれを知るチャンスを得られるとよかつただろうなと思います。また授業参観について、初日のレクチャーで少人数の講義も多いと同だったので、大規模の授業と少人数の授業を1つずつ見ることができれば、その切り口での比較もできておもしろかつたかなと思います。ただ、これも受け入れ側のご都合があると思うので、参考までに、程度の要望です。【ワークショップ等の席配置について】全体的に席の配置が結構重要なように感じました。特にペアワークをするワークショップと、長時間のフリートークになる夕食会（昼食会は参加していないのでわからず）では、特に大切のように感じました。ワークショップはコーディネーターがいるのでまだ良いのですが、夕食会は、たとえよく話せるかつ話したい人がどんどんしゃべってしまうと、英語が苦手な人がなかなか自分の聞きたいことを聞けなくなる、といったことが起こりうるのかなと感じました。今回は自然発生的に、お互い

にフオーワーしあえるような配置になっていたもので、比較的うまくまわっていたようにも思ったのですが、場合によってはつらい思いをする人が出てくるかもしれないと感じました。なので、初日からの様子をふまえて、ある程度席指定のようになかんにするのは感じないとも思いましたが、そのあたりは自己責任という気もするのです、そこまでプログラムとして手をかける必要はないかもしれません。あえて言うなら、程度の意見として受け取っていただければと思います。【ワールドワークについて】現地で追加になるかもしれないのである程度余裕をもって、というアドバイスは大変ありがたかったです。また、今回念のためにと余分なお土産を用意している時間があり、調整がしやすかったです。実際現地で追加になった際、複数提示していただけですが、それが結果的に役立ったので、そういう可能性もあると、事前に教えていただけると助かる人がいるかもしれません。最初にも書きましたが、全体として本当に充実した研修でした。プログラムの中身についてはもちろんですが、学びについてだけでなく、生活や体調、気持ちの面にまで、いつも先生方が気を配ってくださって、とても安心感がありました。ありがとうございました。

- 海外研修の前に海外の大学制度について学んで、海外研修に臨めたのは非常に良かったです。事前研修がなければ、海外との比較が難しかったと思います。キャンパスツアーでは、様々な施設を回ることでできて、良かったです。欲をいえば、GSI が使っている図書館の中を見たいなと思います。可能であれば、授業を受けている学生の話も聞けるセッションがあれば良いなと思いました。授業を受ける側の意見も聞いてみたいと思います。

### 2010年度 派遣先実地調査 + 試験的派遣

PFFPの試験的実施としてメルボルン大学（オーストラリア）およびUCバークレー（アメリカ）に院生13名を派遣  
バークレー研修は現地のTAオリエンテーションに参加するがたて1日間、メルボルンは現地の新任教員研修をカスタマイズして10日間を実施

【引率者】バークレー：佐藤万知，芳賀満，メルボルン：佐藤万知，関根勉，北原良夫，甲本剛（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

### 2011年度 NFPを試験的に開始，国内実施セミナーを開発

PFFP15名，NFP3名。若手教員からの要望に基づきNFP（海外研修の派遣先はメルボルン）を開始  
PFFPの海外研修の行先はメルボルンとバークレーの2グループ，国内で実施できるセミナーを開発し5件実施  
参加者に助言をフィードバックする先輩教員をリクルートし「メンター制度」を導入（5名）

【引率者】バークレー：佐藤万知，芳賀満，メルボルン：今野文子，Todd Enslin（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

### 2012年度 派遣先の切り分け，国内実施セミナーの拡充

PFFP6名，NFP6名。PFFPの海外研修はバークレー，NFPはメルボルンに切り分け，差別化，授業参観の試験的導入（学内3件）  
「メンター」に替え，先輩教員を「先達」（8名）と位置づけて個人コンサルテーション（NFP対象）を実施  
京大・京大と共催で研究会「大学教員を育てる：入職前と入職後の能力開発」を開催

【引率者】バークレー：Todd Enslin，メルボルン：今野文子，芳賀満（すべて東北大学 高等教育開発推進センター教員[当時]）

### 2013年度 NFP：蔵王合宿に切替，授業参観の拡充

PFFP9名，NFP2名。NFPのメルボルン研修を廃止，メルボルンからの講師招聘による蔵王合宿に（2泊3日）  
授業参観の拡充（学内10件），模擬授業を全参加者対象へ，先達コンサルをPFFPにも導入  
広大・京大・立命館・一橋・北大と共催で研究会「大学教員を目指す大学院生の全国交流会」を開催

【引率者】バークレー：今野文子，Todd Enslin，蔵王合宿：今野文子，川井一枝（2011年度修了生），佐俣紀仁（NFP2012修了生）

### 2014年度 教材（ガイド・冊子・動画）の拡充，OB/OG通信の配信開始

PFFP5名，NFP3名，先達教員を9名に拡充，パンフレット配布，CM作成など広報に力  
修了生の積極的参画を推進，バークレー研修前のメールマガジンによる情報提供を開始  
「先輩の知恵」推薦図書集「リアプレクシヨンの理論と実践（動画）」などの教材を拡充

【引率者】バークレー：今野文子，杉本知弘，蔵王合宿：今野文子，川井一枝（2011年度修了生），野地智法（2013年度修了生）

### 2015年度 ショートコース設立，海外研修をオプション化

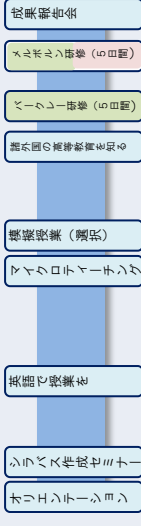
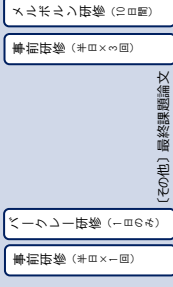
フルコースPFFP4名，NFP6名，ショートコース（\*）PFFP4名，NFP6名。7月から開始  
授業参観の拡充（学内14件，他大学3件），海外・国内他大学調査訪問をオプションとして設置  
院生指導セミナーの導入，全プログラムの全国公開（'13-'14まではNFP蔵王合宿のみ全国公開）

【引率者】海外他大学訪問調査：今野文子，川井一枝（PFFP2011修了生），国内他大学訪問調査：今野文子，津村耕司（NFP2014修了生）

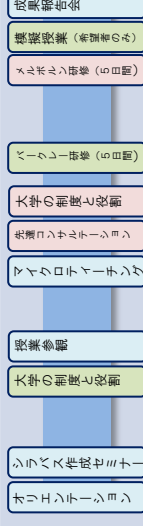
### 2016年度 ショートコースの拡充，修了生追跡調査の実施

フルコースPFFP3名，NFP3名，ショートコース（\*）PFFP4名，NFP18名 = 計28名  
授業参観の拡充（学内25件，他大学5件），修了生の授業を参観対象に  
ショートコースに院生指導セミナーとリアプレクティブジャーナルの執筆を導入

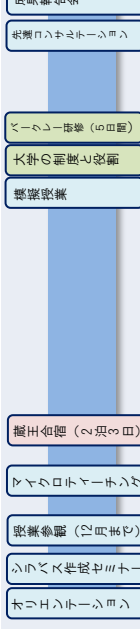
【引率者】海外他大学訪問調査：岡田有司，今野文子，国内他大学訪問調査：岡田有司，今野文子



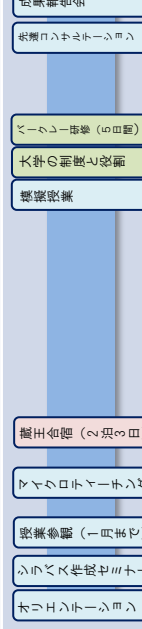
(その他) ポートフォリオの作成 (先達からのコメントフィードバック)，最終課題論文



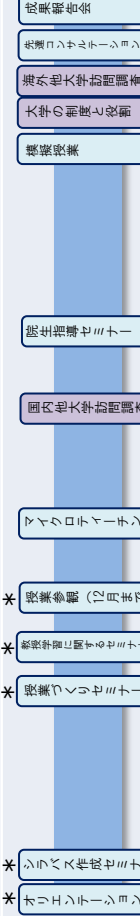
(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



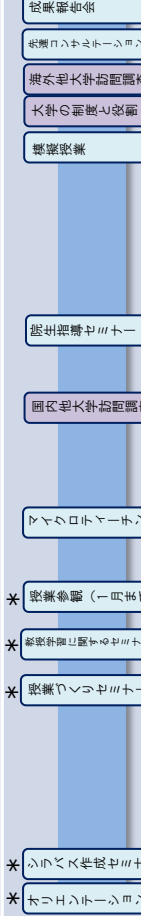
(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(その他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(フォローはその他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文



(フォローはその他) リアルティブジャーナルの作成，最終課題論文

執筆・編集担当者

第1部 第1～2章 今野文子

第1部 第3～4章 岡田有司

第2部（資料編） 岡田有司，今野文子，稲田ゆき乃，朱 嘉琪





教育関係共同利用拠点  
「知識基盤社会を担う専門教育指導力育成拠点  
—大学教員のキャリア成長を支える日本版 SoTL の開発」

## **2016年度報告書 東北大学ジュニアファカルティ・プログラム**

大学教員準備プログラム / 新任教員プログラム

Tohoku University Junior Faculty Program Annual Report 2016  
Preparing Future Faculty Program (PFFP) / New Faculty Program (NFP)

2017年6月15日 発行

編者  
発行所 東北大学高度教養教育・学生支援機構 大学教育支援センター

Center for Professional Development,  
Institute for Excellence in Higher Education,  
Tohoku University

〒980-8576 仙台市青葉区川内 41  
TEL : (022)-795-4471  
E-mail : cpd\_office@ihe.tohoku.ac.jp

印刷所 北日本印刷株式会社  
〒984-0064 仙台市若林区石垣町 35 番 6



ТОГОЛУ И. ЈУНИОР FACULTY PROGRAM

DEEP